

神楽舞

天海つづみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

駆け出しハンターの
馬鹿な相手との日常

目次

残念な	1
焼き鳥	17
向上心とかいうモノ	34
憧れ	52
絵本の英雄	70
百竜夜行	89
欠点	110
先輩後輩	127
悔しい	145
神楽舞	163
ヌシ	182
ベテラン	204

天ノ川	226
彦星	247
幅	266
日常、そして来訪者	285
信仰	310
囀	332
照	353
天国と地獄	373
体の使い方	396
何者？	416
価値観	437
閑話	456
指揮	475

サービス	成長?	鉄と型	ニシノの里	間合い	黄色	拾い物2	拾い物	生きて帰る	春	最善	犠牲	先達の背中
760	741	722	701	680	661	640	616	595	572	543	519	497

閑話2	合流	尾ひれ	二つの決着	フドウの春	雛鳥	カムラの価値観	見習う人	耳	ブランド	そっち?	家族	バカの優しさ
1017	999	980	957	934	911	891	873	854	835	818	796	777

脆さ

思い付きの利点と欠点

思いと賭け

兆候

織姫

織姫2

天音

カムラの里

11661144112511061089106710521032

残念な

「これがそうだな？」

ゼイゼイと肩で息をしながら問うカゲリ、

ボサボサ頭の17歳、身長は160と低め

「派手だねえこの荷車」

余裕のシグレ、カゲリとは13歳からの

付き合ひ、こっちは茶髪で片目が隠れたイイ男、

体格は同じくらい

二人は寒冷群島の大きな洞窟にいる、

凍った地面と冷たい風が吹き抜ける水辺

「寒いな、なんでこんな洞窟に

逃げ込んだんだ？」

舌打ちしながら太刀を研ぐ、

バギイという小型の跳竜の群れを片付けた、

20頭程が辺りに転がる

「そんなこと本人しか解らないさあ？」

帰ろうぜえ」

双剣を背負い震えるシグレ

依頼内容は行商人の荷車奪還、

モンスターに追われる内に迷って洞窟に

逃げ込み、体一つで逃げたらしい

団子屋の素材が届かず困っていた

………

「依頼完了したぞで？」

任務報告するカゲリ

カムラの里

湖の中にある島で、短い立派な橋と

大きな門で陸地と繋がる、規模は小さい

里ながらも良質な砂鉄が地域に多く、製鉄技術を独自に発展させた

その取り引きにより裕福であり、

その象徴の大きなタタラ場を構える

「ありがとーシグレさんーカゲリさんー」

びよんびよん跳ねる団子屋のヨモギ、

この里の団子屋の看板娘、

まだ12〜15歳位の子供だが、これでも

行商人やハンター相手に立派に仕事をしている、

誰に対しても愛想が良くて可愛いので

里の男の子に大人気

「あれえ、ヨモギ、髪飾り変えたあ?」

「えへへ、わかるう〜?」

∴真面目なカゲリにとつて内ムカつく

と同時に羨ましいシグレの特技、

女性の変化にすぐ気が付く事

そもそも同じ17歳、同じ男なのに

…この差はなんだ？

何でコイツは女と簡単に

コミュニケーション出来るんだろう

「シグレさんは今日もカッコいいよっ！」

オーバーアクションでヨモギが褒める…

いやシグレさん『は』って何？

シグレさん『も』じゃないのか？

俺は…蚊帳の外

シグレは俺と同じで背も低めなのに

顔が良いのだ…いつもニコニコして

可愛らしい顔（童顔？）をしている、

ジャニーズ要素があるくせに性格は

芸人寄りのキャラ、

ニヤケ顔でフザケた事ばかりするため、

『残念なイケメン』で通っている

俺は…普通…あんなに意味なく笑うものか？

「あら、そちらの依頼は終わりましたのね？」

「ヒノエ様?!」

ビツクリして振り返るカゲリ

「あーヒノエ姉さんだあ」

ニヘラと笑うシグレ

「では二人とも、里長の元へ参りますよ?」

この里の美人姉妹の姉の方、ヒノエ様、

美人な上に物腰が柔らかく仕草も色気がある、

里のクエスト管理を任せられ事務的な仕事を

するが、里の危機となれば弓を持ち前線にも

出る強者

里の男はヒノエ様派、妹のミノト様派、

両方派に大体分けられる

桜が舞う中に長い黒髪がなびく、

まるで一枚の絵のような立ち姿

「今日から貴方達は正式にハンターと

なりますからね?」

ニコツと笑うヒノエ

その笑顔にガチガチに固まるカゲリと

「ヒノエ姉さんは、いつも美人だねえ」

いつも通りのシグレ

里の中央、大きなタタラ場の前へ、

今日から正式に狩人、ハンターとなれる

「里長、お連れしましたわ」

……………

「やっぱりオサイズチが最初の獲物か」

翔虫で森の中を飛ぶ

大社跡と呼ばれる狩場、森と起伏に富んだ地形、崖、水辺、滝、迷路のような岩場、

そこに昔の大小様々な社がある

「フクズクって便利だなあ、位置が解るって」

同じく飛ぶシグレ

二人とも今日からハンターと認められ、

サポートのフクロウ的な鳥、

フクズクが付けられた

「なあカゲリイ、ヒノエ姉さんに惚れてるからってガチガチになる事ないぜえ？」

「なっ?!え?!うわあ!!」

タイムリングを誤り地面に着地したカゲリ

「やったな!シグレ!」

翔虫でぶら下がりながら

「お前は分かりやす過ぎるんだあw」

「ったく…」

太刀を抜く、ジャグラスという大きな

トカゲが辺りに5匹ほど居る

「少し肩慣らししておくか」

カゲリは踏み込み一頭目を大上段から

斬り伏せる、脇を見つつ囲まれないように

一撃入れる度に動き続ける

一頭のジャグラスが逃げようと反対側を向くと

「はい残念!」

シグレが双剣で斬りつける

困むつもりだったジャグラスは
逆に挟撃される形に

とりあえず全部倒して剥ぎ取る

「シグレ、お前が余計なこと言うから

余計な仕事が増えたぞ」

睨むと

「あ、ヒノエ姉さん！」

カゲリの後ろを指差すシグレ

「えっ!!!」

カゲリは振り返る、そこには森があるだけ…

「にやははは！」

「待て！シグレ!!」

コイツはいつもいつも！

………

「ほら居たぞオサイズチ」

「ああ…」

「いつまで怒ってんだよう?」

「むう…」

藪の中から覗くと5匹の部下を連れた

オサイズチが居る、人間の大人よりも大きく、

長い尻尾の先に大きな鉤爪（角?）が生えた

二足歩行のトカゲ、しかし体表は鱗ではなく

茶色と白の体毛の部分が多い

「んじやお先い!」

シグレは一直線に走り軽くオサイズチを踏むと

「食らええ!空舞!!」

ジャンプして連続して斬り付ける!

…はずだった

ベチャツ…

シグレは躓いて転んでいる

辺りの空気が数秒停止したような錯覚が：

オサイズチ達も突然目の前で転んだ人間に

『なんだコイツ？』的 な 空 気 …

「出来ないならやるなよ!!」

慌てて飛び出し斬り掛かるカゲリ、

オサイズチに一太刀入れる

「あつれー？出来そうな気がしたんだけどなあ」

イズチに斬り掛かる

「振り回し来るぞー！」

「あいよおー！」

前進しながら尻尾を三回振り回す、

空を斬りながら尻尾の鉤爪が弧を画く

二人は回避成功

「すげえ音だようー！」

ヒュンヒュンいつてる

「シグレ！叩きつけだ！」

オサイズチは少し溜めた後、空中で前転！

尻尾を叩き付ける！

「ほら隙だらけだあ！」

シグレは飛び掛かるが、オサイズチの部下の

イズチも同じ様に小さい尻尾を叩き付ける

「シグレ！」

「心配すんなよう、かすり傷だ」

二人ともアオアシラ一式、

雑魚のダメージは少ない

.....

「お前無謀だぞ、なんであそこで

飛び掛かるんだ？部下の攻撃解ってたろ？」

「チャンスにはキツチリ攻撃入れないとなく」

カゲリは出来るだけダメージを食らわない様にするタイプなのに対し、

シグレは食らうダメージを考慮しつつ

ゴリ押すタイプ

「大体お前が出来ない技出そうとするから!」

「技はマネから生まれるんだぜえ?」

お前だつて居合抜刀できねえよお?」

無事に狩ったオサイズチの前で言い合う二人

「フザケすぎなんだよ!」

「真面目すぎなんだよw」

カゲリが更に言おうとすると

「::おお?」

「なんだ?」

カゲリも見上げる

シグレのフクスク、丸目（まるめ）が空中で身を翻す

「何か来たみたいだな」

「新手か、見に行こうぜえ？」

それは狩場の一番奥、滝の上の水場に居た

「あれってたしかさあ…」

「フルフルだ」

塔の陰から覗く

「カゲリい、オカシイぜ？ココに来るっけ？」

白くブヨブヨした毛も鱗も無い表皮、

ついでに目も無い小型飛竜、辺りの匂いを

嗅ぎながら歩く

「とにかく逃げよう」

オサイズチで狩猟は終えている、長居は無用だ

「ええ？少し戦わねえ？」

口を尖らせる

「ダメだ、俺達はまだアオアシラ

狩れる程度だぞ？」

「お前慎重だなあ」

「標的狩り終わってんのに、

三落ちとか冗談じゃない」

「つまんねえのお」

.....

「はい、狩猟完了です」

里のタタラ場の向かい、

建物の軒下の縁台がヒノエ様の仕事場、

ここで里からの依頼（ほとんどお使い）を

取り纏め、主に駆け出し用のクエストとして

ハンターへ紹介する

「ヒノエ様、気になる事が」

緊張する

「なんですか？」

そんなに真っ直ぐ見られると…テレるカゲリ

「なんかさあフルフルが出たんだよう」

緊張感0のシグレ

「あら？フルフルって大社跡に…」

首を傾げるヒノエ、と、

「里長と集会所の方へ報告しておきますね？」

ニコリと笑う

この笑顔を間近で見られるだけで幸せなカゲリ

……………

「ふう、今日はもう帰ろう」

クエストも村の依頼も色々あるもんだ

「カゲリい、風呂貸して？」

ニヤニヤ

「自分の家に入れよ」

何で俺ん家で…

「えく水汲み面倒じゃんw」

ニヘラと笑う

「俺だつて面倒だ！ちゃんと

風呂掃除してないのかよ！」

「そんな意地悪言うかあ？」

「親友の為に風呂くらい…」

「お前が一番面倒臭いわ!!」

焼き鳥

「ゴコク殿……」

「うーむ……」

タタラ場、鉄鉱石や砂鉄から鉄を作り出す

巨大な建物、中には多くの職人と猫族が作業する

カムラの里の中心であり象徴的な場所

その前で何やら相談している里長とゴコク様

日に焼けた肌に白髪の老人ではあるが、

筋骨盛々の大きな体に鎖かたびら、

大太刀を持つ里長と

丸々太った背の低い、七福神の

恵比寿の様なゴコク様

まるで正反対の二人が何やら話しているのを

横目に見ながら歩く

ハンターになった、それは

『遠慮なくヒノエ様と話が出来る』とも言える

これからは毎朝が楽しみだ

「ヒノエ様、今日は何かありますか？」

クエストを聞くカゲリ

「あら？今日はシグレは？」

いつもの場所に座り見上げて来るヒノエ、

その上目遣いに：

「まーまだ寝てるみたいで：

今日は見えてません！」

うおお！いつも立ち話だったからこの目線は！

顔はキッチンと洗ったし変な所無いよな？

思いつきりキョドる

「しょうがない子ねえ」

クスクス笑う、分かっているのだ、

カゲリが自分に気がある事に

「ではクエストではありませんが…」

「キツチリ油さしておけ！」

「柵のロープ結び直しておけ！」

「昇降機！ 錆びも見とけよ！」

カムラの里は年に1〜4回程度

モンスターの群れが進行する通称

『百竜夜行』が起こる、それに備えて巨大な

砦を建設してある、

そして各設備は常日頃からメンテナンスが

大事だ、だから手が空いた者は大概

ココに来ている

里の人々は普段は農業、漁業、製鉄で

生計を立てているが、いざ百竜夜行となれば

全員が守人となり防衛戦となる

「バリスタの調子は俺が見るよ」

ヒノエに頼まれた、里から約2キロの砦、その設備のメンテナンス

「おお？カゲリ！狩人になったのに守人の

仕事までさせてスマンな」

里の加工屋、ハモンさんに声を掛けられる、

普段はタタラ場の前で剣などを研いで

仕上げたりしている人、歳は70位だろうか

シブい顔

「お前は視界が広くて上空の敵を見つけるのが

早いからな、

正直守人から狩人になるのは惜しい」

バリストタを撫でながら言うハモン

「ハンターだつて使うんだし

今までと変わりませんよ？」

最大仰角にしてみる、普段から整備して

あると変な引つ掛かりや軋みも少ない

「当たり前前に動くつてのが大事なんですよね」

今度は旋回してみる

「それが解るか…若いのにお前は出来た

ヤツだな、

テルを思い出すわい」

「……………」

「おっと、何か気に触ったならスマン、

バリスタの名手がせっかく調子を見に

来てくれたのになあ」

隣の昇降機が音をたてる、

鎖と歯車の軋む音とともに

「シグレ参上お!!!」

気のせいかスポットライトに照らされ、

残念なイケメンがせり上がる

「……………」

「……………」

「リアクションうつすw」

「…何やってんだ？」

目も合わせないカゲリ

「ハモンさん、ダメだよ、

カゲリにその話は」

このバカ…

「カゲリい、何で起こしてくれないんだ？」

「なぜ俺が起こすんだ？」

模擬弾を装填する

「お前しか起こす人がいないんだよう？」

「俺はお前の親かよ」

発射する、着弾点に照準を修正

「親なんていねえもん」

「俺も居ないわ！威張るな！」

「本当にお前達は仲がよいな」

珍しくハモンさんが笑う

「腐れ縁ってヤツですよ」

このバリスタのチエック終了：

えーと…次のバリスタ：

「親友だろお？あー、

ウツシさんが呼んでるんだったあ」

「バカ！それを先に言えー！」

………

ヒノエちゃんの笑顔は正に太陽だ、

あの笑顔と仕草に毎朝起こされるなら

団子を一日五十本食べる程度可愛いものだ、

しかし『注目』すべきなのは

ミノトちゃんの胸！

姉さんより大きくないか？

それにあの無表情も

姉さんとまた違った趣があつて…

「…」

「…」

「ウツシ教官！」

「うおつとお！影（カゲリ）じゃないか！」

焦る大先輩

「また声に出してたあ」

シグレがニヤニヤする

「時雨つ（シグレ）どっどの辺からっ？」

「団子の辺りからですよ？」

キチンと姿勢を良くすると

「ふ、二人とも、解っているとは思うが…」

冷や汗の大先輩

「言いませんよ、こんな事」

「どうしよっかなあ」

ニヘラと笑う時雨

船着き場の屋根の上で落ち合う、

行人人達が行き交うのを真上から見られる

この里の絶対的エース、トップの狩人

ウツシ教官、狩りの腕前はもちろんだが

その他にも諜報などで他の里にも飛び回る

姿勢も良く動きも早い為に勘違い

しやすいが、

俺が子供の頃から今の姿だし、

中年のハンター

にまで「愛弟子よ！」って言う

一度何歳なのか聞いてみたら

「永遠の17歳だよ！」

…教官、追い付いちやっただよ俺

「で？何をするんですか？」

「フクズクは与えて貰ったんだよね」

「昨日からねえ」

「じゃあ二人で寒冷群島へ行つて来て、

ヒノエちゃんから正式に受けるんだよ？」

………

「なんか変な仕事だな」

「偵察だつて仕事だぜえ？」

また二人でこの寒い狩場へ来るとは

依頼内容は

「寒冷群島の大型モンスターの把握」

「なんでそんな事するんだ？」

翔虫で飛ぶ

「里長とゴコク様が話してたぜえ？」

一緒に飛ぶ

「何を？」

「この前の荷車さあ」

身を切るような冷たい空気

雪と氷と水辺の世界を飛ぶ

着地して

「俺達がバギイ掃除したあれか？」

何か変だったか？

「あの数の群れなのに何でロスバギイが

いないんだって話して たんだあ」

「！」

そう言えばそうだ、

何でボスが居ないんだ？

それにあの数、

何で一ヶ所に固まってんだ？

あれじゃまるで…

「…避難してたっばいよねえ…」

影の顔を見る

「時雨…お前いつ気付いた？」

「バギイは肉食だよお？団子に混ぜる

薬草とかの荷車に用があるかあ？」

コイツ!!

しかし納得する、実は時雨はもつと早く

ハンターになれるはずだった、

しかしある事件を起こして3ヶ月遅くなった

ハンターとしての能力は影より高いのだ

フクズクが腕に留まる

「良い子だ『ヒヨコ』、大型は何頭だ？」

フクズクのヒヨコは三回影の腕をツツク

「よし行け！」

ヒヨコを飛ばす

「お前ネーミングセンスねえなあ」

時雨がニヤニヤ

「お前に言われたくないぞ？」

時雨が起こした事件、

それは晴れてハンターとなりフクズクを
与えられた時、

名前を『焼き鳥』と付けようとして

里長を激怒させた通称『焼き鳥事件』を
起こしたらしい、

そして練習生に戻された

昨日はキチンと名前を付けたが…

丸目ってそのまんまじゃないか

………

「あれって確かゴシヤハギだな」

初めて見た

「うわあ、おつかねえ顔だなあ」

10番と区切られた崖の上から見下ろす

アオアシラと同じタイプの熊型、

普段は四足だが戦う時は後ろ足で立ち、

その両手に氷の剣を造るらしい

コワイ顔に角

「その内アレとも戦うのか?」

デカイ、アオアシラと比べ物にならない

百竜夜行に来たことが無いモンスターだ

「そうなるさあ…おっ? あつちに

イクニミソネ…イクソソミネ?」

「イクソネミクニだ、名前くらい覚えろよ」

「なんか言いづらいんだよなあ」

なんだか楽しそうに泳ぐモンスター、

水辺に特化しているらしく

地上戦はやらないらしい

「さて、あと二頭は…」

上空のフクズクを見る、旋回していた

ヒヨコはコツチを見ると、キャンプの方へと

身を翻す

「ありや、入れ違いだったなあ」

丸目も同じ様に飛ぶ

どうやらキャンプの近くに移動したらしい

「また飛ばなきやな…」

翔虫を準備するが

「さみいよ、あつたかい防具欲しいなあ」

この寒さの中を飛ぶのは辛い

3番にそれは落ちていた

黒くて…紫っぽい鱗？

それに何だ？この足跡

「あれえ？何もいないぜえ？」

見上げる時雨

上空の丸目は旋回するだけ、

既に他の地域に行ってしまったらしい

「時雨、これ見たことあるか？」

多分鱗？を見せる

「んー、こんなの習ってないぜえ？」

時雨は足元を調べる

「四本足つぽいぜえ？」

「こんな足跡……」

二人ともウツシに習っているため、

ほぼ全てのモンスターの姿形は知っている、

百竜夜行でも確認している

「まさかラージャンン？」

一度夜行で見た、あの時は重症者が出た……

「ラージャンンは鱗じゃねえよう？」

そうだが、金と黒の体毛だったはず

「……よし、とにかく帰ろう」

「影い、気付いてるかあ？」

「？」

「ポポもバギイも姿消してたろお？」

「！」

「何だろうねえ」

辺りを見回す

やっぱり時雨は勘が良い

向上心とかいうモノ

「これは……まさか……」

鱗を手に取り恐い顔が更に怖くなる里長

いつものタタラ場の前で深刻な空気

「里長？」

「ウツシ、各狩場のモンスターの数と

種類の状況を把握せよ、分かる範囲でよい」

「直ちに！」

翔虫で飛んで行く

昨日 影と時雨が持ち帰った鱗を見つめる里長

……

朝の日差しの中で目覚める

古い畳と、すっかり弾力と言えるモノを

無くした布団の中でモゾモゾする

思い出す、俺は兄貴が好きだった

ハンターとして最強レベル、

里の困りゴトは何でも引き受け礼は求めない

その上ハキハキしていて元気良く笑う

愚痴を漏らさず文句も言わない里中の人気者

両親も自慢の兄貴、そんな兄貴に憧れた

いや、里の子供全員のヒーローだった

あれは俺が13 兄貴が18の時だった、

ヒノエ様とミノト様が朝早くに家に

入って来て兄貴を起こした

当時の俺には分からなかったけど今なら解る

誰にでも好かれ、

この里の二大美人にも好かれ、

欠点がない完璧な憧れの兄貴だった

俺も…あんな風に

ヒノエ様に起こされたらなあ

思春期の男にとつて

あれはなんとも羨ましい事だと理解できる
布団の中で身をよじる

「お目覚めですか？」

「！」

女の声！ヒノエ様?!?!ミノト様?!!

慌てて布団を跳ねのけると同時に

ヤバイ!!インナー一枚じゃん!!

布団を掴みまた被る！

「あばばばばー!!」

何で！何で!?!ヒノエ様が?!!

ついに俺にも?!!

頭だけ布団から出す

「ひっかかったあw」

!?!、時雨?!

布団をどけて起き上がると

「ひっぴノエ様はっ?!」

キヨロキヨロする

すると時雨が声マネをして

「影君、お風呂貸して下さい」

姿は見慣れた時雨、いつものニヤケ顔

「出てけえ!!」

「にやははは!!」

外でドボンと音がする、

どうやら勝手に入ったらしい

季節的に水風呂はまだ早いと思うが……
まあ寒かったら勝手に出て行くだろう、
俺の純粋な気持ちを何だと思ってるんだ

……

「ううつ、さつびい……」

鼻水をすする残念なイケメン

「まだ水風呂は早かったな」

内心ザマあと思ってる影

今日はアオアシラの狩猟

翔虫の練習がてら大社跡の一番高い所にある、

円形の広場に来てみた

翔虫、小さいながら人の体重を支えられる

強靱な羽を持ち、その糸もまた強く

大人一人を余裕で引つ張る、

カムラの里の狩人はこれを使って飛ぶ、

一定距離飛ぶと回復時間が必要だが

二匹連続して使えば数十メートルを

高速で移動できる

「！」

ガブラスという小型モンスターが

地面に落ちていて、と、そこにウツシが居た

「やあ、愛弟子達よ」

逆手に持った双剣を仕舞いながら

「あれ？どうしました教官？」

「何でいんのぉ？」

里長からの話をする

「二人ともアオアシラだけにしなさい、

他のモンスターが来たらずくに距離を

取るんだよ？」

「何がいんのぉ」

鼻水をすす

「タマミツネとリオレウスが来てる

…時雨、鼻水出てるけどどうしたんだい？」

「だって影が風呂沸かしてくれねえんだよう

恨めしそうに影を見る時雨

「勝手に人ん家の風呂入ってバカ言うな!!」

「手拭い一枚貸してくれねえしよう」

「え……じゃあ時雨はどうしたんだい？」

「濡れたまんま防具付けてキャンプの

焚き火に当たってたんだよ」

「…影、少し時雨に気を使って

あげたらどうだい？」

口元が隠れているが困り顔のウツシ

「え?!何でコイツに?!」

「そうだぜえ?善意は帰って来るんだぜえ?」

ニヤニヤ

「本当に君たちは仲が良いなあ」

笑う中年?

「じゃ、くれぐれも手出ししないようにね、

新手も手出ししないで直ぐに帰るんだよ？」

そう言うのと翔虫で飛んで行つた

.....

「食らええ！空舞！」

アオアシラの尻を軽く蹴りながら

ジャンプして一回斬る、と水飛沫を立てて着地

「もつと連続で斬るモノじゃないのか?！」

振り回すトゲの付いた腕を避けて

突きから斬り上げ

水辺の戦いはズブ濡れになる

アオアシラは普段は四足歩行で戦闘時は

後ろ足だけで立ち上がるモンスター、

前足を振り回すが

「あだあっ!!」

アオアシラは尻餅をつくように後ろも攻撃
「こおんのお!!」

懲りずにまた空舞をやってみる

ザシユツ!

「一回しか斬れないじゃないか!」

「ココは成長したなあつて褒める所だよう!」

背中側から回転しながら斬る

調子良く攻撃していると

「グオオオオー!!」

上空から襲い掛かる大きな存在

赤茶けた体に大きな翼、

トゲだらけの尻尾と牙が並ぶ口、

その口からは火の玉を吐き出す

20メートルを越える空の王者

「レウスだつ!一回逃げろぞ!」

「りよ!」

.....

「…なあ、りよ…って何だ？」

「了解って意味だよ」

迷路の様な細道、

ここならモンスターは入って来れない

「やっぱり怖いなりオレウス…」

夜行で見たけど近くは初めて、

なんだろう、体が震える…

「アイツにアオアシラ喰われちゃうんじゃない？」

双剣を研ぐ

「昔兄貴に良く聞いた、あれが狩れたら

誰からも一目置かれるってさ」

「珍しいなあ、

影が自分から照兄イの話するって」

珍しくキョトンとする時雨

「ああ……」

「自分で振つといて暗くなるなよう」

ニヘラと笑う

そう……俺は兄貴が好きだった

いつも完璧だった

「……なあ時雨、お前は兄貴をどう思う？」

「照兄イ？カツコ良かったなあ」

「今でも……そう思うか？」

「今……今なあ……変な事言つて良いかあ？」

時雨が立ち上がり真っ直ぐ影を見る、

こんな事は珍しい

「なんか……年取つたせいかなあ……現実味が……無い」

「……………そうか」

ずっと胸の中でモヤモヤしていた正体、

それが何なのか時雨の言葉で見えてきた

兄貴はヒーローだったんだ

…そう、ヒーローだからこそ…

「静かだし行ってみよう」

「りよー！」

……………

「グオオオオオー!!」

「ギユアアアアー!!」

遠くでリオレウスと恐らくタママミツネの

争う声が聞こえる

「今のうちだ！長居は無用だ！」

アオアシラを倒して剥ぎ取る、

むこうがケンカ中で助かった

「なあなあ、ちよつとだけ見ていかねえ？」

明らかにウキウキソワソワしている時雨

：時雨の勘の良さは凄い、たまには

言うこと聞いてみるか：

ウツシの指示には反するが

「：ちよつとだぞ？」

「そうこなくちやあなあ」

ニヘラと笑う

「いた：タママミツネ」

水辺をゆったり歩いているのを物陰から覗く

「何かキレイだなあ、なんつうか雰囲気か」

白と紫の体に赤い差し色、女性を思わせる

しなやかな動き、しかし大型で二人が

勝てるような相手ではない

レウスとケンカしたようだがそのキレイな

毛並みは乱れておらず、どこか妖艶な
空気を持つモンスター

「なあ影イ、あれの防具欲しいぜえ、
多分カツコいいよなあ」

二人ともアオアシラ一式

「俺達には無理だ」

百竜夜行で何度か見ている、

その強さは知ってる

アイツの水はバリスタの弾より強そうだ

「なあ影イ…お前は何で

強くなりたくないんだ？」

「?!…俺が…」

その言葉に思考が止まる

「なんかそう見えるぜえ？」

影は鬼刃斬りなど大振りな攻撃をせず、
スキの少ない弱い攻撃を多用する

「いや…俺はハンターに…」

いや、ハンターなら上を目指す…俺は…
俺は強く…

「練習生だった時に戦ったヤツしか
狩ってないだろお？」

「……………」

言われてみれば

「普通はよう、新しい技に挑戦するとか

知らないモンスター見ようとか

するもんだぜえ？」

俺は…どうしたい？

俺は兄貴に…

……………

里に帰ると何やら雰囲気が違う、

ヒノエが珍しくパタパタと草履を

鳴らして走って来る

「影君、時雨、直ぐに集会所へ行って下さい」

ヒノエに言われて行ってみると

何だか里中が集まっている

最後にヒノエが入ると

「うむ、全員揃ったか」

建物の中に大きな桜がある集会所、

別名ギルド、その奥の水辺に張り出した

一段高いテラス

腕組みする里長

その横にはウツシ教官、

そしてこの集会所、ギルドの管理者である

ゴコク様が並ぶ

ハンターだけではない、里の守人、

里守り達も全員いる

「皆聞け！最近のモンスターの変則的な

挙動について報告がある！」

ウツシが前へ出る

「ハンターの皆は最近の狩場の様子が

おかしいと感じていないかい？」

皆の顔を見渡すと

「その感覚は正しい、どうやらモンスターが

本来の生息地から移動しているようなんだ」

ゴコクが前に出る

「どうやら百竜夜行が近いかも知れないでゲコ」

ざわつくギルド

「任せな！毎度の事だ！」

「今回こそ活躍するぜえ！」

「報償金取ってやる！」

ベテラン達が盛り上がる

里長が黒い鱗を掲げる、するとハモン達

年配の里守り達が声を上げる

「里長っ！」

「あれはっ！まさかっ?!」

「これを知ってる者は年寄りばかりだろう、

が、これは昨日見つけたモノだ」

里長は懐からもう一枚の黒い鱗をとりだす

「これが『あの時』のものだ」

若手は何だか分からないが

「おいフゲン…それは…まさか…同じ…」

ハモンの目が見開かれる

「ヤツが現れたようだ、今度の百竜夜行は

ヤツも来るかも知れん」

里長は大声で叫ぶ

「備えよ！ 装備を整えよ！ 50年前のあの悲劇、

繰り返す訳にはいかん！」

憧れ

里長の話から十日ほど経った

あれからギルドの中では里長達の言う

『例のモンスター』が話題となっている

黒くて大きい、鋭い爪、紫の炎？尻尾が槍？

当時は知らない者達は楽観している

今は砦もあるし、設備もある、どうせ

思い出補正で大袈裟になっているだけだろう

そんな思いで日々を送っていた

「何でコイツがギルドに居るんだよー！」

大人の女性、春香（ハルカ）が影を指差す、

赤いシヨートヘアの長身で、女ではあるが

名の知れたカムラの強者

他に仲間を三人連れていているが、

全員この里のトップクラス

レウス一式で統一されている

「春香君、影だつてハンターになつたんだよ？

来るのは当然じゃないかい？」

ウツシが間に入る

「今さらハンターになりやがつて！

こんな根暗の半端なヤツが！」

美人の（ヒノエとミノトには遠く及ばない）

ハンターにガミガミ怒られる影

照（テル）と同年代で照に憧れてた為に

弟の影にも期待した

しかし弟はハンターにならず守人になつた、

そして今更ハンターに：

それが気に入らなかつたらしい

「姉御は影に厳しいなあ」

ニヘラと笑ういつもの時雨

「時雨！こんなヤツとツルんでると

お前も弱くなるぞ?!」

今度は時雨にも怒鳴る、

春香は大柄の為にほとんど真上から

「心配ないよう、影だつて強くなるよお？」

俺が強くなるよお？」

(はああ?)

影も含めたギルド中が心の中で突っ込む

「お前はずつとウツシ教官に付いてたのに

駆け出しなんだぞ?!」

唾まで飛ばす

時雨は13の時にこの里に居着いて

教官に弟子入りした、

それを考えると成長が遅いのだ

.....

「春香姉御相変わらずだなあ」

ニヤケる

「まったくだ、やっぱり本当だったのかな？」

兄貴が死んだ時からあの態度、もう慣れた

大社跡のキャンプで話す

「照兄イと付き合ってた噂かあ…」

俺達も解る歳になったんだなあ」

クナイをクルクルお手玉する時雨、

手に刺さりそう

「俺に兄貴みたいになつて欲しかった

んだらうな…：勝手すぎる…」

でも気持ちは解らなくはない、

照が死んだ時一番取り乱し、泣いていたのは

春香なのだ

当時13だった俺には仲間が死んで

泣いていると思っていた

俺に当たるからずつと避けていたけど、

何となく気持ちが理解できた

「でも…俺に期待すんなよなあ…」

兄貴は17の頃にはヤツカダキ?とか言う

蜘蛛の化け物まで倒していたという

俺は今日になつて傘鳥、アケノシルムと戦う

「照兄イは突然だったからなあ」

「あれ?お前理由聞いてんのか?」

「他の里に向かつてる途中で、転覆してた

船の人達助けたんだろい、有名だぜえ?」

「本当にヒーローらしい最後だったらしいや」

全員助けて自分は力尽きたらしい

道具類を確認する

「なあ、影は何で今更ハンターになつたんだあ?」

お手玉を止めて

「なんかよう、なりたいいけど」

なりたくないって感じだったぜえ？」

「最初は兄貴に憧れてなりたかったハズなんだ、
だけど兄貴が死んだ時には……」

うつ向く

「なんでい？」

「良くわかんね、何かやる気が無くなった、
でもよ、やりたくなつた」

ハンターはやっぱり里の花形だし

「ふーん、なんか適当だなあ」

「自分の気持ち……解らないんだ」

もう少し……何かが……約束だから……か？

「……行くかあ、火に気を付けるんだぜえ」

翔虫で飛ぶ

「知ってる、百竜夜行で見てるからな」

「こつちも飛ぶ」

……

「クコココッ」

一本足で動きを止め、キレイに直立すると
翼を後ろ側へ

「これなんだあ？」

「危ないぞ！」

二人ともガードが出来ない武器のため回避準備
傘鳥は翼をひと振りする

「バシィッ!!」

「痛ってえ！」

まるででつかいビンタ!

柔らかそうな翼のくせに硬い上にリーチもある

「大丈夫かあ？」

傘鳥の後ろから斬りかかる時雨、ところが

「クウオウ!!」

後ろに向けて足を蹴り上げる

「つぶねえよう!!」

紙一重で避ける時雨

「顔にキズでも付いたらどうすんだ鳥よう!」

斬り掛かる

ああ、

コイツ一応イケメンだつて自覚があつたのか…

変な事に感心しながら斬りかかる影

傘鳥は頭を低くして飾り羽を前に向けて

突進する、二人で追い掛けると

Uターン!!

「何いつ?!」

「そりやねえよう!」

二人で食らつて吹き飛ぶ

「くっそ! 動きが読めん!」

「俺らはガード出来ねえよ、

少しづつ削ろうぜえ」

一度距離を取り別のエリアへ、

奥の門の更に奥、廃墟の影に隠れる

「攻撃は出来てるしダメージは入ってるよな」

ボサボサ頭を後ろに撫で付ける、額に汗

「見たことねえ動きだよ」

片目が隠れ、うざったい髪が暑苦しい

二人は百竜夜行で見ているがアケノシルムは

上空からブレスを吐くばかりだった

それに二人は今まではバリスタの射手と

弾運び…接近戦は初めて

どうするか…ツイバミ、後ろに蹴り、突進、

ビンタ…スキは…

「ビンタの前に斬ろうぜえ？」

「！、お前知ってたのか？」

「さっき見ただろ？行こうやあ」

「ん、今度は倒す」

さつき見た？まさかもう覚えたのか？

.....

一本足で振りかぶる

「よいさあー！」

回転斬りで足元に滑り込む時雨

「せいっ！とうー！」

鬼刃斬り、影は普段は使わないが

思い切ってやってみる

あつさり傘鳥は倒れる

「そいじゃ鬼人化！」

乱舞で斬りまくる、両手の双剣の刃が

高速で欠けていく

今なら……いいか？

鬼刃斬りを連続で出し最後に大きく

斬り下ろし、斬り上げる！

刃の色が黄色く鋭さを増したように感じる！

傘鳥は立ち上がり上を向くと連続でブレスを

吐く、放物線を描いて周囲に着弾するが

「スキだらけえ！」

すかさず時雨が突っ込む

この刃の色、コイツなら！

更に鬼刃斬りをするが

「あ、あれ？」

途中で止まる影

「もう死んだみたいだぜえ？」

斬るのを止めてツツク時雨

せつかく刃の色が変わったのに

「影イ、色変えたなあ」

「ああ、スキが大きいと出来るな」

「もう一段あるの知ってるかあ？」

「赤くなるんだろ？次はやってみる」

「ふーん…」

ニヤニヤ

「なんだよ？」

キモいなコイツ

「何か強くなろうとし始めたかあ？」

「ハンターなんだから当然だろ？」

「十日前のお前なら言わなかったらうなあ」

「？、そうだったか？」

「気付いてねえの？お前突きと斬り下がり

ばっかりで、雑魚の攻撃まで全部避けてたろい」

「俺…」

なんだ？何か変化したか？

俺の中で

.....

何だ？あの落書きは：

ギルドに帰る、と、いつもの場所に座り、

何やら大きい紙を見ているミノト様、

顔の前で見てるせいで俺達に気が付かないし

こちらからは透けて絵が見える

「ミノト様？」

ガバツ！と動き、絵を隠すミノト

あれ？何かマズかったか？

「お疲れ様です」

一礼するヒノエ様の双子の妹、ミノト様

いつも冷静沈着、落ち着いた美人

ヒノエ様と良く似ているが、

少々目付きが鋭く（ヒノエがタレ目）

ほとんど笑わず（ヒノエは常にニコニコ）

言葉に抑揚も少ないために

コミュニケーションが取りづらい

しかし『そこが良い!!』という男は多い

無表情がたまらないらしい

「アケノシルムの討伐、成功しましたけど…?」

俺ミノト様はちよつと苦手なんだよなあ

「順調ですね、

次はヨツワミドウ辺りででしょうか?」

「ミノト姉さん、今の落書きなんだよう?」

ぼっ!!!と真っ赤になるミノト

?なんだろう、聞いちゃいけないのか?

「お、思いきって

フルフル辺りもよろしいかと…」

ミノト様が言葉に詰まったけど?

「そつ、そうですね百竜夜行で見てるし、や

「なあなあ今の落書きなんだよう?」

ズイツと寄る時雨

「おっお疲れ様でした！」

十分に体を休めて下さい！」

(裏声と冷や汗)

「なあなつぐもっ！」

時雨の口を塞ぎ

「か、加工屋行つて来ます」

時雨の襟首を掴み、引き摺つて外に出る

影は察した

何かヤバい、触れてはならない何かがある

「何すんだよう」

「何かヤバそうだろ？」

コイツはあのミノト様の動揺が

分からないのか？

「気になるぜえ？」

「お前なあ……」

触れて欲しく無い事であるだろ

通りを歩き団子屋のヨモギ、飴屋のコミツ、
ヒノ工様、里長達と軽く挨拶して

「おう、影、時雨」

「ああミハバ」

「修行は順調かあ？」

見よう見まねで金槌を振るうミハバ、

ハモンの弟子の一人

「まだまだだ、影、守人に戻る気はないのか？」

「とりあえずハンターになったんだ、

どうにかモノにしてみるよ」

「バリスタに戻りたかったら言ってくれよ？」

俺の下に付けてやるぜ？w」

「なんだよ、一からやり直しか？」

こっちも笑う

「当然だろ、時雨はまた弾運びだな」

「俺は楽が出来れば何でも良いやあw」

手を振り別れて

「じゃあな、時雨」

時雨はこの先の橋を渡った小島に住んでいる

「おう、明日なあ」

「ふう」

さて晩飯作るか…

「ただいまあ」

「……………」

「影イ、ココは『お帰り』だろい?」

「…何でお前が入って来るんだ?」

「なんだよう、お互い独り身なんだから

晩飯位一緒に食おうぜえ？」

「…ほう、ちなみに晩飯は誰が作るんだ？」

竈の前に立つ

「客が作るなんて聞いたことないぜえ？」

ニヘラと笑う

「おい時雨、殴られるのと蹴られるの、

どつちが好きだ？」

「じゃあ…」

「風呂も貸さん！」

絵本の英雄

鏡のようにゆったりと流れる夜の川、
河原の砂利、ススキの穂

でっかい犬…

朝日が入る部屋の明るさに目が覚める影、
恐い夢だった

親子四人で住んでいた頃はこんな朝を
当然のように迎えていた

「トントントントント…」

この朝御飯の香りと包丁の音の中で
起きると母親が…

は?…包丁の音?!

「……………なにつ!」

影は飛び起きる!

「おう起きたか影イ」

時雨がまな板の何かをポチャポチャと

鍋に入れている

隣の部屋の囲炉裏、その自在鍵に掛けた

鍋からは湯気が上がっている

その鍋の中身は夕べ影が作った雑炊、

朝も食べようと残しておいた

「何してんだお前?」

殺意って言葉の意味が良く解る気分の影

勝手に入り込んだだけでも腹立つのに

俺の朝飯に何か…

「見て解るだろお?朝飯つくってんだい」

鍋の中は米ばかりの雑炊だったはず、
今は刻んだ野菜が色々と入っている、
しかも全体の量も多い、時雨は食材を
足してくれたようだ

レベルアップした雑炊に

「お？おうん？あ、ありがとうな」

良い匂い

殺意？何それ？美味しいの？

煮えたようなので食ってみると美味い、

が、時雨は手を付けない

「何で時雨は食わねえの？」

ヤバイ、箸が止まらん！

「ん、あのなあ、味どうだ？」

じーつと影の顔を見る時雨

「美味しく出来てるぞ……っ!!」

「どうしたい？」

「お前…肉入れたか？」

細かい肉の感触が…

「入れたよお」

ニヘラと笑う

「何の肉だ？」

殺意…

「フクズクだぜえ？」

「冗談だろがい!!」

時雨は頭を撫でながら歩く、

思いつきり影に叩かれた

「何かありましたの？」

ヒノエ様に呼び止められる

さっきの話をする、肉の正体はファンゴ
だったが、焼き鳥事件を知っていると冗談
には聞こえない

「あらあら、そんな冗談言うなんて…時雨は
影君に構って欲しくてしようがないのね」

「それはちがうぜえ？お互い独り身で刺激が
無いだろい、俺がイジってやらないと

影は暗くなるんだぜい」

なぜか威張る

「俺は暗く無い、真面目なだけだ」

ムスツとする

いや暗いのか？

「それでは時雨は朝御飯を作ってあげたのに、
食べられなかったのでは？」

ヒノエ様に言われてドキツとする

「材料も持つて行っただんですよね？」

見つめられる…

え？俺が悪い感じか？

時雨がニヤニヤと見てくる

ムカつく、ムカつくが…

「う、うさ団子奢ってやる…」

ヨモギの団子屋の名物

「うをい！五本な！」

両手を上げる

「分かったよ…」

「あら、じゃ私も五本」

ヒノエ様が片手を広げる

「…冗談ですよね？」

「…冗談ですよ？」

この間はなんだ？

………

子供の頃の寝物語、

絵本にも出てきたヒーロー

笑顔を絶やさず文句も言わず、見知らぬ

人のために命を掛けて悪人やモンスターと

戦う完全無欠な人

「現実味がない」

時雨の言葉…そうなんだ、

そんなヤツは存在しない

…いや…存在してはいけない

子供の頃なら何も考えなかった

ハンターは報酬、守人は里を守り、
どちらも明日も生活出来るよう戦う、
それは『安定』という報酬がある
この里の人々は自分と家族の明日
のために戦う

結局は自分と自分の家族、

自分の周囲のために戦うものだ

そうでないなら命を掛けるに値する

報酬があつて然るべきだ

ではヒーローとは何か

世界の平和？

そんなもの…単に自己満足だ…

だから…

だから俺は兄貴が…

何だか分からない存在…

…そう

薄気味悪い人間に思える様になっていた
だから

強くなりたくない訳じゃない
兄貴になりたくなかった

俺は兄貴が好きだった…

と思い込むようにしてた

「影イ」

「ん、ああ？」

「ぼーっとしてんなあ」

「ああ、悪い」

ヨツワミドウの横で座り込む二人、

大社跡の廃墟で話す

「何かコイツは楽だったなあ」

背中の中を叩く時雨

「百竜夜行で見たまんまの動きしたからな」

攻撃するときイチイチ溜める様な動きをする

「体力も少なかったみたいだぜえ？」

時雨は指笛で丸目に合図を送ると

「んー？」

「どうした？」

「いや、メインキャンプの方に

何か居るみたいだぜえ？」

「帰り道にかよ？」

ガバツと立ち上がる

二人で飛んでいくと

「何でコイツが!!」

「あれって確かよう」

森の中から見ると川原のエリア、

石で出来た大きな鳥居の横に…大きな岩？

そうではない

バサルモス、まるで全身が岩で出来た飛竜

百竜夜行でも滅多に來ない

火山地帯のモンスター

体力は少ないが硬くて刃物が通じにくい、

その上毒ガスや熱風を体から吹き出す

明らかにここに居るべきではない

辺りの匂いを嗅ぐように鼻を

鳴らしながら歩いている

「なんかよう」

「どうした？」

「やな感じだぜえ？」

「…よし、全力で走るぞ!!」

………

夕方、里に帰ると誰も居ない

「おい……これって」

キョロキョロする、猫族も居ないし

タタラ場の音もしない

…これは

「夜行だぜい」

ヨモギもヒノエも里長も居ない、

タタラ場の前で篝火だけが燃えている

タイミング悪く出遅れた！

「時雨さん！影さん！」

イオリがガルクに乗って大門から
タタラ場前に走って来る

「ズザザッ!!」

ドリフトしながら止まると

「良かった!お二人で最後です!

皆砦へ集まっています!」

二人の前に付いてきた二頭のガルクが

止まる、とイオリを乗せたガルクは疾走!

大門をあつという間に抜けて行つた

ガルクは人より大きい犬で、群れを里の

外れの島、時雨も住んでる場所で飼っている

ハンターとしてある程度認められると

所有することも可能で、狩りの相棒と

する事も出来る

「ど、どうやって乗るんだ?」

もたもたする影、いつもは自分で砦に走る、

それに…そもそもガルク自体が恐い

「こうすんだぜい」

簡単にヒヨイツと跨がる時雨

「ま、待ってくれ！」

どうすんだよ！

恐いんだよガルクが！

「伏せ」

時雨が言うのと素直に聞くガルク、

恐る恐る跨がる…簡単に乗れたが

…コワイ…

「影イ！付いてきなあ！」

時雨のガルクが走る！

が、影のガルクは…動かない

大門の所で止まる時雨、

振り向くと

「おいで！」

「は？」

時雨のやつ、どっから声出してんだ？

ヒノエ様の声マネ…

突然疾走!!

「うわああああ!!!」

首に掴まり情けない声を上げる影

そうか! 時雨のねぐらはガルクの所!

あいつ普段から遊んでんのか!

「いくぞお!」

二頭は一緒に疾走! 大門を抜け走る!

大門から2キロ程先の峠道、

左右を崖に挟まれた場所に砦はある

「つつ…着いたか…」

ヨロケる影

「間に合って良かったぜえ」

ケロツとしている時雨

「おお！愛弟子よ、君たちで最後だ」

ウツシ教官に迎えられる

キャンプから覗くと、既に多くの

バリスタが見える

「お前ら!!」

気合い入れろ!!腹あ決めろ!!」

春香パーティーの前には若いハンター達

一番前の柵の所で号令を出している

「うわあ姉御、おつかねえ」

「行かないや…な」

行きたくねえなあ、文句言われて怒られる

二人がそこへ走ると

「遅い!!」

睨む春香

「お前ら二人はまだ狩人になって日が浅い！

しつかり付いてこい!!」

「は！はい！」

「ひゃい!!」

直立する二人

「ゴコク殿」

「何かね里長」

大きなレバーの前で話す、

これは必殺の大型設備、撃龍槍のスイッチ

「物見の報告では、どうやらいつもの

夜行程度のモンスターばかりのようだ」

「おかしいでゲコ、あの鱗があったからには

ヤツは近くに…いや、幸いと思うべきか」

「50年前のヤツが居た百竜夜行は、他の

モンスターも大型ばかりだったと記憶します」

「ううむ、とにかくこの夜行に集中しよう、

途中で何が出てきてもワシらは

焦らず対応するでゲコ」

「では全体指揮を、私は

駒の一つとなりましょう」

里長は振り返ると

「全員聞けい!!」

守人、狩人、運搬担当、全員が撃龍槍の

上の二人に注目する

「全体指揮はゴコク殿!」

「先陣は春香隊!」

「いよおし! やってやるぜ!」

「見てろよ!」

「ぶちかますぜえ!」

春香のパーティーが笑う

豪快な戦いを好む

「遊撃! ウツシ隊!」

「了解です!」

「成功させましょう」

「まあお手並み拝見」

「愛弟子達よ、いつも通りだ」

冷静で一撃離脱を得意とするパーティー

「設備は里守り部隊！ハモン！頼んだ!!」

「やるか…」

「師匠、任せて下さい！」

「バリスタなら任せろ！」

「臨機応変を心掛けよ！先達に習い守り抜け！」

里長が大太刀を抜き振り上げ叫ぶ

「気焰万丈!!」

岩に響くカムラの魂

「「「気焰万丈!!」」」

百竜夜行

砦、カムラへ続く谷間に建設された

モンスターを退ける設備

幅60メートル、長さ400メートル程の

真っ直ぐな地形

第1、第2、第3の柵があり、

そして最後の関門がある

道の左右には防衛設備のバリスタ、

大砲などを格納、内部で移動できる頑丈な

建屋があり、それが連なり

通称『岸』と呼ばれる、

地面から3メートル以上あり

小型モンスターの攻撃は届きにくい

また道の中央に作られた建屋を『島』と呼ぶ

建屋の中は通路になり地下道も通っている為、弾丸と人員の移動が安全に出来る、ついでに地面の地下格納庫から設備を出す事も可能。そして第2の柵の真横、左岸にはキャンプの出入口とゴコクが居る撃龍槍がある。この設備は強力な代わり、一度使うと放熱と充填の為、しばらく使用不能となる。

「ブオォー……」

物見の法螺貝の音

「よし、来たぜえ!!備えろ!!」

春香を中心としたハンター部隊が一斉に抜刀!と、第1の柵を飛び越えてくるモンスター!地響きを立て着地する

「ヨツワミドゥ二頭!アオアシラ二頭!」

「行くぞお前ら!」

「おおう!!」

晴香パーティーは左右に別れ

それぞれがヨツワミドウに

「よし、俺達も二手に別れるぞ！」

まだ若い中堅ハンターの指示に従い、

残りの七名はアオアシラへ

右側に走る影と時雨

いざ戦い始めると

「マジか!!俺の方に新人二人かよ!!」

イズチ装備の名前はハネナガ、大剣装備の男

「すーすいません！」

斬り掛かる影、

（しまった！つい時雨と一緒に！）

「やるぞお！」

的確に尻を斬る時雨

こちらは三人、しかも新人二人

「うん、春香のパーティーは

二人ずつでも余裕だね……」

第2の柵の上で見るウツシと部下3名

「右のアオアシラ、あれ時雨と影ですよね？」

「倒せはするでしょうけど……」

時間は掛かりそうですね？こちらに待機中の

ハンターにいかせますか？」

「私、行きましようか？」

部下のアヤメ

里長達が警戒するヤツに備えなきやならない

布陣は出来るだけ変えずに……

考えるウツシ

「うん、一人いつ……ちよつと待った！」

「ミハバ！」

アオアシラに攻撃しながら突然影が叫ぶ

「どうした?！」

右側の岸、バリスタの担当をしている

ハモンの弟子の一人

「コイツに榴弾撃つてくれ!!」

右岸のバリスタに指示を出す

目の前だから外す事も無く命中

アオアシラは気絶

「ハネナガさん!溜め斬りを!」

「お、おう!」

「よし、集中射撃!」

ミハバが指示する、右岸が一斉に撃とうとする

「待て!春香さんの所!通常弾総攻撃!」

「なんで?！」

「いいからっ!」

「分かった!」

唸りを上げてバリスタの鉄の矢が大量に

ヨツワミドウに刺さる

「なんだあ！援護がこんなに！」

見回す春香

「春香！こいつあ助かるぜ！」

大剣使いの春香の仲間

「余計な事しやがって！兜割りい!!」

左のヨツワミドウが逃げ出す

「分かったぜ影！次はこっちのヨツワ……」

「違う！次は向こうのアオアシラ！」

斬り下がり！

春香は隣のヨツワミドウへ向かう、

担当していたのは春香パーティー、

そして春香の性格上強いモンスターへ向かう

ほぼ同時に残りのヨツワミドウと、バリスタ

を受けた左のアオアシラが逃げ出す

残るは影達の所だが、

オサイズチが二頭柵を飛び越え着地

「つしやあ！次だ!!」

春香達が斬り掛かる

「ナカゴ！」

また影が叫ぶ

「どうしたあ?!」

左岸のハモンの弟子達の一人

「後退弾装填！撃て！」

影は真上を指差す、ナカゴは見上げると

リオレイアが降りて来る…

そして真下に影達が戦うアオアシラ…

だったら直ぐそばのミハバに…そうか！

真上は撃てないから！

「分かったぜ！」

後退弾を撃つと真下に墜落するレイア

「ハネナガさん！時雨！回避！」

「あ？ああ!!」

「あいよお！」

「ズダアアン!!!」

「ぶっおおっ!!」

押し潰され血を吐き絶命するアオアシラ、
その上でもがくりオレイア

「誰か里長を呼んでくれ、

大変なことだよこれは…」

ウツシの部下が飛ぶ

………

関門の前に立つ里長の元にアヤメが到着

「ウツシより伝令!!」

「うむ、良く守っているようだな、

まだ第2柵までも来ないと見える」

さすがゴコク殿

「里長！俺らの出番あるか？」

「俺達も前に行きとえぜ？」

最終関門を守るベテラン達

騒ぎ出すのを制するように

「緊急です !!前線までお越し下さい!!」

「何だと?！」

.....

「ゴコク殿！」

「おお里長！大変でゲコ！」

笑っているゴコク、撃龍槍さえ使っていない

「上空！アケノシルム！後退弾！」

レイアにぶつけるぞ!!」

「プケプケ！毒弾来る！春香さん避けて！」

「指図すんじやねえ根暗あ！」

笑いながら避ける春香

「影！次は!？」

「ナカゴ！ナルガ！頭に榴弾!!」

「何と…」

目を見張る里長

「ワシの出番無いゲコ」

「僕の隊もですよ」

ウツシも来た

影はバリスタの名手、的確に弾丸を選び

援護した…ハモンも認めた里守…ならば！

「影!!『島』に登れ!!」

里長の声

「えっ!!」

見上げる影、里長達が笑っている？

「聞けイ!!臨時で影が指揮を取る!!」

里長の号令に

「「了解!!」」

「ムカつくぜえ根暗あ!!指示よこせえ!!」

ビシュテンゴの首を斬り落とし止めを刺す春香

前線中央の島に登ると更に視界が広がる影

第1の柵の向こうが少し見える

「これなら!」

息を大きく吸うと

「ハネナガさん!時雨!落ちたプケプケに!」

「春香さん!ナルガへ!」

「ナカゴ!オサイズチ!榴弾!」

「右岸!レイアに集中!」

「バリスタ!上げてくれ!」

影の島にバリスタがせり上がる

「ほっほお!!凄いゲコ!」

「影にはこんな才能があったのか」

感心するウツシ

キャンプ地からハモンが出てくる

「どうなってる?!前にはかり弾丸補給が

片寄ってるぞ!」

時間的に全体が戦場になっているはずなのに

「ハモン、見ろ!次の世代が育っているぞ!!」

ガハハと犬歯を見せて大笑いする里長

「影!次の指示くれ!!」

「おい影!フルフルだ!」

「時雨!ナルガに行け!ナカゴ!

左岸でフルフルに一斉射撃!」

「ハネナガさん!援護!榴弾行きます!!」

ハンター11名とバリスタ7基で防いでいる

「影は立体で対応してるゲコ」

「我々は平面でしか理解できてませんなあ」

里長は腕組みして感心する

「モンスターをモンスターの上で撃墜!」

そんなこと思い付いても出来ませんよ…」
ウツシも一緒に

モンスター達が一齐に引いて行く
終わったか？

だが柵の向こうに新手が見える

影が叫ぶ

「バサルモスだ!!」

「んだとお?!」

春香の太刀では相性が悪い

「中間部のガンナー達を呼ぶゲコ!!」

それを聞いた影は

「バリスタ!榴弾と後退弾!狙え!!」

バサルモス二頭が第1柵を破壊、入って来る

「撃て撃て撃てえ!!」

右岸のミハバ達

「向こうが撃ち切ったらこっちの出番だ!!」

装填!!」

左岸のナカゴ

足止めに集中する

「ナルガクルガ!!でかいのが来た!!」

ハンター達は見る、明らかにサイズがおかしい

「大物だ!!」

里長が叫ぶ

「コイツが大将かあ? 影イ!!」

「こっちは任せなあ!!」

春香が叫ぶと

「やっぱり大物狙いよ!!」

「だから勝負はやめられねえ!」

「あんな岩よりオモシレエ!!」

春香パーティーが走る

バサルモスはガンナーの水冷弾によるけ

ながらも、第2の柵へ近づくと、ハンターにも

バリスタにも目もくれずに歩く

「切れ味が持たねえよお!!」

「時雨！下がれ！射線開けろ！」

「これは出番が来たゲコ…だが…」

ゴコクの前で第2柵を壊し始めたバサルモス、
撃龍槍で仕留めるのは簡単だが、

たった一頭で使うには…

もう一頭は射程外

それに…

「ゴコク殿、戦力は十分残っている、

判断は任せます」

里長も分かっている、本当はヤツに温存したい

「影はどうするゲコ…影?!」

影は島を降りて、ゴコクの前にいる

バサルモスの後ろに立つ

「ナカゴ!!あつちのバサル!右足に榴弾!

春香隊以外は岸に登れ!!」

「お、おう!」

「なにする気だ!!」

ナカゴは指示通りに撃つ、榴弾は右足で

弾けるとバサルは体勢を崩し、よろけながら
こちらのバサルにぶつかる

「これなら二頭いけるでゲコ!!」

スイッチに手を掛ける

が!!

「まだ!!」

影が叫ぶ!と!

大物ナルガが影を狙って飛び込んでくる!!

匣を自らやっていた!

「かげりーっ!!」

誰かが叫ぶ声

「ゴアアアッ!!」

バサルとナルガ、三頭が団子に

「今!!」

叫ぶと同時にバサルの下から這い出る影!

「ゲコーッ!!」

「ズドオオオオオン!!!」

.....

「皆！今回の百竜夜行、ご苦労だった！」

里長の声、明け方のギルド

結局 警戒していたモンスターは現れなかった

「今回は全員無事！損傷も最小限で済んだゲコ！」

では功労賞を発表するでゲコ！」

静かになる

「春香パーティー！」

ゴコクが呼ぶ

「うおっしやーっ!!」

ガッツポーズの春香達

大きな革の袋を受け取る

「討伐、撃退数は1でダントツでゲコ」

「うむ、ご苦労だった…そして今回特別に

もう一つ、少しばかりの報償を用意した」

里長の言葉で影に注目が集まる…が、

全部が好意的ではない

一番下の駆け出しが立場もわきまえずに

指図したのだ…

プライドを傷付けられたと思う者も多数居る

配置により出番が無くなった者もいる

「我々五名の連名により、例外ではあるが

影に功労賞を与える!!」

「ちよつと待った!!五名って誰です?」

ベテランハンターの一人、ハンマーを担ぐ

明らかに不機嫌な顔で

「うむ、ゴコク殿、ウツシ、ハモン、そして

里長であるワシと…」

「アタシだあ!!」

春香が叫ぶ

「文句ねえだろ?!アタシが認める!!」

前線にいた若手が頷く

「今回の夜行、25頭全部に影の指示が

関係しているでゲコ」

「影!!前へ!!」

里長の前へ行くと小さな革の袋を貰う

…ずっしり重い

「やったなあ影イ!!」

「時雨、皆のおかげだよ、

里長、これで砦の修理…」

「バカヤロ!!お前がそんな事したら

アタシだって何かしなきゃいけねえだろ?!

貰っとけ!!」

バシツ!と頭に手を乗せると、

グリグリ春香に撫でられる

「それでは里の勝利を祝おう!!乾杯!!」

笑う里長

「乾杯!!」

.....

すっかり夜が明けた、ギルドの喧騒が

無くなり朝日がさすテラス席

ゴコクと里長

「まさか一石三鳥とは驚いたゲコ」

「うむ、照と違う意味で天才かもしれないなあ」

「じゃが…ちよつとでしやばり過ぎたゲコ」

「照もそんな所がありました、

暫く風当たりは強いでしょうな」

「今までとは違う強者の出現ですわね」

ヒノエとミノトが団子とお茶を持って来た

「影に指揮する才能があるとは驚いたゲコ」

「大いに祝いたい所ではあるが…」

「警戒は解けないゲコ」

「所でヒノエ、そろそろ限界だろう、

影にバラさないのか？」

ニヤリと笑う里長

「姉様はまだ楽しみたいようです」

少し困った顔でヒノエを見るミノト

「あら、影君の反応は面白いんですよ？」

クスクス笑うヒノエ

欠点

昼

「私も弾運びしたんだよ？」

「俺もだぞ!!」

飴屋のコミツ、オニギリ屋のセイハク

「俺も最初はそうだけ？、13才で

バリスタやったから、お前らもあと少しだ」

団子屋で子供と話す影、昨夜の活躍は

里中に広がり、子供達は羨望の目で見てきた

そこでバリスタの話をしたところ

『バリスタが撃てるのは自分達だ』

弾の運搬をするからだ』

と主張してマウントを取ろうとしてくる

当時の俺は…こんなに生意気だったか？

数年前の自分達を思い出す

「!、そっこだ!」

立ち上がる

「なんだよ、影さん逃げんなよ」

「もっとお話して」

「悪いな、用事があつたんだ」

これ以上居たら何言われるか…

子供って気遣いってモノがないな

「なあセイハク、水鉄砲持つてるか?」

13の頃を思い出した、そしていつも時雨に

イジられている、たまには普段は近付かない

時雨の所へ行つて…やり返そうw

自宅を通り過ぎ吊り橋を渡るとガルクを

飼っている島へ入る

大きな木の森だが中央が開けて明るい

「あ、影さん」

「お、おう……い、イオリ……」

ガルクの世話をしているイオリ、ハモンさんの孫、ハモンさんは強い男になつてほしい様だが、イオリ自身は心根が優しくてハンターには向いていないらしい。つつか時雨とイオリは髪型も同じだし兄弟に見える、ガルクの棲み家に居るとこうなるのか？

この島には30頭を越えるガルクがいて、正直俺は……ココが怖い

早速寄つてきて影の匂いを嗅ぐガルク達

「い……イオリ、アイツ居るか？」

うわあ……ガルクだらけ……何で寄つてくるんだよ
敵じゃない、俺は敵じゃないよ？

悪い事をした訳じゃないのに

両手を上げて歩く影

イオリは五頭のガルクに囲まれる様に……

立っている…何で恐くないんだ？

「え…ええと時雨さんですよね…」

なんで動揺する？

「見てないですよ？」

木の陰を指差す

犬の石像と慰霊碑の後ろに家と言うより

大きな木箱、その前に大小の釜が転がっている

このでっかい木箱が時雨の家、元々時雨は

移住してきた為に家がないのだ

大きい釜は風呂にしてるはず

…ってどうか目の前が水辺なんだから

水汲み楽だろうに…

数年振りだが変わっていない風景…さて…

フツフツフ、まだ寝ているようだな？

日頃の恨み！

「時雨っ！起きろ！」

仕切り布を捲り水鉄砲発射!!

「うわあ!!」

後ろに飛び退き、よろけてへたり込む影箱の中からガルクが二頭、ノソつと

出て来てブルブルする、影の匂いを嗅ぐと、

「ドロボー」

後ろに時雨が来ていた

「時雨っ！おっ！起きてたのか！」

ガルクに顔をベロベロ舐められる影

「ひ、ひいっ!!」

恐い恐い恐い！

「おー？恐がってるぞおw？」

面白がっている時雨

「しっ！時雨っ！やめさせてくれ！」

ムリムリムリデカイコワイ！

「イオリい」

ニヤケる

「は、はい！」

イオリが呼ぶと二頭が離れて行く

「はあ…はあ…」

顔のヨダレを手甲で拭く

すげえ怖い

「まだガルクコワイかあ？」

「こー！恐くねえし！」

「なんだあ？驚いてたろお？」

ニヤニヤ

「驚いたただけだし！恐くねえし！」

「ふーん…」

ガルクに向く時雨

「おいで！」

「やめろおおお!!」

………

「俺に寝起きドツキリしようとしたなあ？」

ニヤニヤ見てくる

やるんじやなかった

「おつ?!影、どうした?青い顔して?」

影の家の前で待っているハンター

「ハネナガさん…」

ガルクのよだれで顔中ベタベタ

「逆ドツキリで泣いてんだあ」

「泣いてねえし!!」

「お前ら仲良いなあ、ゴコク様が呼んでるぞ?」

ギルドへ行ってみる、いつもは騒がしい

所なのに影が入ると喧騒が止まる

空気が変わったのが良く解る、

好意と敵意が入り交じっている

視線が集まっている中、

ゴコクに呼ばれ奥のテラス席に

「おお、呼び出してスマンなあ影」

「あの、何でしようか？」

居心地悪い…

テーブルには何やら書いてある大きな紙

「これが何か…解るゲコ？」

「これは…砦ですね？」

「上から見た地図だなあ」

横から時雨が覗きこむ

「さて影よ、少しワシと遊ぶゲコ」

「はい？」

………

「ほお、たとえば墜落した傘鳥は…」

「はい、ダウン中に攻撃してるハンターに

向かう確率が高いですから…」

モンスターに見立てた黒い石を動かす

「たとえば春香がダウン中に攻撃したなら」

顎に手をやり考えるゴコク

「起き上がる前に春香さんを他のモンスター

へ向かわせます、そうすれば」

白い石を動かす

「なるほど傘鳥は春香を

追いかける様に飛ぶ…と」

「その通過点のモンスター、または春香さんの

頭上で後退弾を撃つと」

「効率よく落下で攻撃か

…これは思い付かなかったゲコ」

置いてある黒い石の上に、手に持った黒い石を

落とす、カチツと音がして転がる

「ほお…俺達はこうやって動かされた訳か」

春香パーティーのフドウ、

サブリーダーの30才位で大剣使い、

ちよつと小太り

「俺達にやあ出来ねえな」

ベテランのヤクシ

ハンマー使いでティガー一式

40才位?の荒っぽい感じ

「新しい戦法だな…」

こちらもベテランのゲンジ、

ライトボウガンを担当40代、

ナズチ一式で達人的な雰囲気

「バリスタの経験が長いからこそその戦法ね」

ウツシパーティーのアヤメ、

ナルガー一式、割と美人

いつの間にか10人程に囲まれている

「ふむ、影よ、いくつか聞きたい事があるゲコ」
姿勢を正す影

「お前の戦法は見事だ、だが幾つか欠点が

あるゲコ、それはどこかの？」

「はい…まず俺のやり方はバリスタと

空を飛ぶモンスターが居ないと出来ません」

周囲から「なるほど」と声が上がる

「それと俺自身が動きを見たことがある

モンスターじゃないと、予測が出来ません」

「その通りゲコ、ついでに言うなら あの

バサルモスとナルガクルガの違いは何だ？」

「バサルモスは真つ直ぐ突破しようとしたのに、

ナルガクルガはハンターを

排除しようとしました」

頷くゴコク

「そうゲコ、最初の段階でどのタイプか

見極める事が重要ゲコ」
地凶を畳むと

「さしあたり一番自分に足りないモノは何だ？」

「経験だあ!!」

いつの間にか春香が来ていた

「いいか？アタシも照も最初は嫌味とか

文句言われたもんだ」

ギルドを見渡すと

「だけどな、実力付けて黙らせたんだ、

フドウなんか最初はヒドかったぞ？」

「そりや礼儀も態度も出来てない馬鹿女が

好き勝手やったんだ、当たり前前だろ！」

笑うフドウ

「ハンターは実力が全てだ！お前の事を

面白く思っていないヤツには、ソイツ以上の

モンスター狩ってこい！」

握りこぶしを掲げ笑う春香

「うむ、その通りゲコ、お前の駒になっても

良いハンターが必要じゃからな、ミノト!」

カウンターの方を向くとミノトが

クエスト帳を持つてくる

「これから指定するモンスターを狩って来るゲコ」

「こちらになります」

事務的で抑揚のないミノトが紙を見せる

「…フルフルですか…」

ヤバい、出来るか?

「もう一枚あるゲコ」

「えっ!!」

もう一枚には…リオレイア!

「ゴコク様!無理だ!コイツ死ぬぞ!」

春香達が意見する

「ソロで…と言いたい所だが

時雨と一緒にいいゲコ」

「俺…」

できるか？

「俺がいるぞお？」

笑う時雨

「やってみます…」

同時狩猟クエスト…無理だよ…

………

「里長、予定通りゲコ」

「勝とうとするでしょうなあ」

ギルドの二階、座敷の部屋

「まあ勝てなくても問題無いゲコ、リオレイアに

挑んだ事実だけで中堅達の見方が変わるゲコ」

「時雨も居ますし、

最悪死ぬ事は無いでしょうが…」

「死んでは困るが…強くなって貰わねば

困るゲコ、ハンターとしては素人だが、夜行に

関しては影は既に立派な戦力ゲコ…

して…ヤツは？」

「ウツシ」

「はっ！」

天井から現れる、畳に降りると

「周辺の里にも出現した話はありません、

しかし小型モンスターへの怯え方を見る限り

細かく移動しているようです」

「まるで予測がつきませんな」

苦い顔の里長

「今の内に若手を鍛えなければなりませんね」

ミノトが茶を盆に載せて来た

(ミノトちゃん！僕のお茶は？)

泣きそうなウツシ

「ウツシ、一応誰か影に付けろ、死なせるな」

「ではアヤメを」

天井に消えるウツシ

「砦の修理はどうゲコ？」

「軽微でしたから今日中に」

「早く決着させたいゲコ、

心労で痩せてしまうわい」

腹を撫でる

「この大太刀を振るうのは辛くなつて

きましてな、私も戦場に立てるのは

後数回でしょう」

一階

「なあフドウ」

「何だ？」

団子を齧りながら振り返る小太り

「アタシが影にしてやれる事って何だ？」

少し照れる春香、頭を掻く

「どうした？照の弟だから可愛いつてか？」

笑うフドウ

「いや、アタシは照に借りがあるからさ、

何かしてやりてえ」

先輩後輩

俺はこの狩り場が好きではない、高低差が

大きく崖と泥水だらけ、しかも戦うエリアに

谷間があり木の根っこで繋がってたりする

…だから

「うわあああああー…」

落下する影

「戻って来いよおーwww」

半笑いで見送る時雨

フルフルの電気纏いを回避したら自分から

谷間に落ちた、そう、

嫌いな地形なんだ、だから滅多に来ない、

だから覚ええない

ぜいぜい言いながらさっきの場所まで戻ると、

時雨はケルビに草を喰わせ遊んでいる

「ふっ、フルフルは……」

疲れた

何でこんな場所が狩場になってんだ

「飛んで行つたぜえ？」

「くっそお……」

戦い辛い

急いで別エリアに向かう

段差を登り翔虫で飛ぶ

「こんな時ガルクに乗れば早いぜえ？」

「……………イヤだ……」

「なんでそんなにイヤなんだあ？」

立ち止まると

「10才位の頃にな」

「ふんふん」

兄貴に憧れてハンターに成りたかつた頃だ、ある夜家族が寝静まった後、俺は家を抜け

出した、アニキが使わなくなった片手剣を持って
俺は舟漕げるからな、大社跡に向かった

「あぶねえなあw」

「なんつーか…そんな時つてあるだろ？」

キャンプから鳶を降りてな、わくわくしてた、

これが狩場！

両手で片手剣振つて気分はヒーローだった、

剣を振り回してイメージした悪人や

モンスターを斬りまくったし

「子供は近付くな」と言われた場所に

入り込んだ『俺最強！』つて思ってた

「チュウニビヨウw」

「まあそうだな」

川原の石、ススキの穂、ゆったり流れる

川には星空が写ってた

気付いたら対岸に何かが居た

目が光ってな、川を渡ってきた

「モンスターだと思ってるな、ビビったぜ？」

「それがガルクかあ？」

目の前にまで来たら俺よりずっと

でっかいだろ、恐くて逃げ出したかったけど

腰抜かしてな…

「それが原因…かあ…」

「で、その後な」

ニヤける

「なんだあ？」

「出会いがあつたんだ…」

遠くを見る

「お？誰だあ？」

「…いや、いい」

ソツポを向く

「なんだよお、話せよお」

口を尖らす時雨

「フルフル追うぞ」

.....

地図で11番と呼ばれる場所、開けた所で戦う

「くそっ！また電気か！」

電気を纏うフルフル

「コイツめんどくせえ！」

クナイを投げる時雨

だけど大したダメージ無さそう

二人ともガードも出来ない武器だから手が

出せない、こんな時ガンナーならどんなに楽か

「ギユアアアアア!!」

「うるせえ!!」

耳を塞ぐ影

「でもなんかよう！」

電気纏いの終了と同時に鬼人化

「ああ！咆哮と電気以外は噛み付きだけだ！」

二人で斬り掛かる

鬼刃斬りは二回で止める

「そんなに強くねえよう！」

やってみるか…

影は納刀してフルフルを見る、

しやがむフルフル、

放電するその刹那を見極める…

居合抜刀……集中！

「ちええい!!」

？

普通に斬った？

そして

バチバチバチツ!!

「いつてえ!!」

電撃で弾け飛ぶ影

「ち、ちええい…：w w w」

笑いながら斬る時雨

「わ、笑うな!!」

「ちええいw」

欲張らなければ効率が良い事に気付く、
単発でチマチマ攻撃する

それを高台から見下ろすアヤメ

ふうん…ハンターとしての勝ち方には

気付いたか、リスク回避は基本だもの

だけど夜行の場合は一頭に時間掛けられ

ないから、これじゃダメよね

同時多頭より時間制限クエストやらせた方が

良いんじゃないかしら?

.....

「お前らー!もう二頭同時やらされたってな!」

ハンマー使いのヤクシ

二人の背中を叩く

「ずいぶん早いな！」

「まあ無理だわな！」

ベテランハンター達に声を掛けられる

結果はフルフルは討伐出来たが

レイアはダメだった

「道具が無くなっちゃいましたよ……」

アオアシラ装備の端々が少しコゲている

「現地調査してもダメだったあ……」

ボロボロの二人、テーブルに突っ伏す

だが駆け出しでチャレンジした心意気だけは

評価されたようだ

「まあ身の丈を知るんだな」

バシツと背中を叩かれる影

なるほど、こういう事ね

アヤメは納得した

影に対する敵意が弱まった

「一頭だけとは情けないゲコ」

ゴコクが紙を持って来る

クエスト用紙？

「次はこれゲコ」

皆注目する

ベリオロス！

「明日行くゲコ」

ギルド中が静まる…

若手は勿論ベテランさえも…

…本気だ

…本気でこの二人を鍛えるつもりだ

「道具が足りないなら今から採取に行くゲコ」

ザワツとするギルド

「えっ?」

マジで?

固まる二人

「そりゃ無理つてもんだろゴコク様!」

大人しく聞いていた春香が横槍を入れる

「強くしてえのは解るけどさ!」

天才と呼ばれるタイプにも課せた事が無い

ペース、春香も経験したことがない

「…行つて来ます…」

「ツライなあ…」

もう夕方だが影と時雨は出て行く

「駆け出しだろうが何だろうが強くなって

貰わねばならんゲコ」

その真剣な顔と空気に中堅達も気合いが入る

(あいつらが追い付いてくる…)

いや、俺達も鍛えないと)

(流石はゴコク様、人心を誘導していますね)
感心するヒノエ

影君耐えられるかしら？

時雨がいるし引き際は間違えないと思うけど

……

「ベリオロスって毒無いよな？」

「無いはずさあ、だけど早いつて聞くなあ……」

はつきり言つてへろへろの二人、

薬草を初めとする素材を大社跡で

片っ端から拾う

「鉄鉞石も……」

「売れるしなあ……」

換金出来る物は売つて道具を買う

今日中に準備しなければ

「なあ影イ……」

とぼとぼ歩く

「何だ？」

翔虫を使う気力もない

「晩飯作る気力あるかあ……？」

「……めんどくせえな……」

「……こんがり肉食おうやあ」

「ああ」

キャンプに戻り肉を焼く二人

テントの中で焚き火を囲む

「なあなあ！ 出会って何だあ？」

妙に元気な顔

「ん？ ああその話か」

ガルクが目の前に来たらな、

背中に女の子が乗ってたんだ

「え……やべえな、

この話って影の恋話なのかよw」

ニヤツとする

「あ、あー？ そうなのか？」

やべ、冷やかされる

だけどガルクが嫌いな話と繋がってる

「で？ で？ どうなったんだあ？」

ニヤニヤ

「あー、確かお前は知らない娘なんだよ」

「なんで？」

「両親が百竜夜行で亡くなってるな、

親戚に引き取られて里から出たんだ」

焚き火に薪を放ると

「お前がカムラに来る前に居なくなってたんだ」

「どんな娘？ 美人？」

ごころつと横になる

「出会った時は10才だった」

病弱で親がほとんど家から出してくれなかったらしいが、夜中にこっそり抜け出してたんだ、両親が使ってたガルクで里の周辺を散歩してた

「ふんふん」

で、元気になってから団子屋の看板娘やつてな、丁度ヨモギの先代になるんだな、

ヒノエ様とミノト様にも可愛がられてた

「なあ、影イ、大事な事言つてねえよ？」

にじり寄つてくる時雨

「何だそれ？」

「その娘好きだったのかあ？」

好きと言えば冷やかされる

何でもないといえれば「つまんねえ」となる

…ならば

「俺はヒノエ様が好きだしな」

「…つまんねえヤツ」

転がって向こうを向く

なんだよ結局こうかよ

「その娘の名前は覚えてるかあ？」

「ああ、アマネだ」

「ふーん、覚えてんだw」

「なあ、お前の居た里には

…アマネ行つてないか？」

「聞いたこと無いぜえ？」

「そうか…」

「もしかして、

ハンターになつたのつてよお…」

「…んー、確かな、俺がハンターになつたら

仲間にしてやるつて言つた様な気がする」

「その娘に会いてえから？w」

「……どうだろうな…」

「多分会いたいんだろうな…」

……

すっかり夜になってからギルドに戻って来た

「お？二人ともこっち来い」

手招きする小太り

「フドウさん」

「なあにいい？」

春香が

「デケエ声出すな」

テラスの方へ

「お前ら道具はどうだ？」

ハッキリ言って足りない

「だろうと思っただぜ」

「ほら、コレやる」

出してきたのはハチミツ、

正直嬉しいが

「え…これって…」

「いいのかあ？」

ゴコク様に何か言われそうだけど…

「気にすんな、お前の指揮で報償金貰った
様なモンだしよ」

コソコソ話す春香

「アイテム貰っちゃあダメとは

言われて無いだろう」

フドウも

「他に必要な物あつたら言えよ?」

「余ってる道具なら何でもいいぞ?」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとう」

こつちも小声で

帰り道、夜中になってしまった

「なあ影イ」

星を見ながら歩く

「何だ?」

「嬉しいなあ」

「ああ、すげえ嬉しい」

誰も居ないタタラ場前を歩く

「姉御が認めてくれてんだなあ」

「もつと頑張ればもつと認めて貰えるか？」

「やってみようやあ」

「頑張ってみるか！」

「初めて頑張るなんて言ったなあw」

「そうか？」

「…ちええいw」

「笑うな!!」

あらあ青春してるじゃない、

さして私も帰りましよ

タタラ場の屋根から飛ぶアヤメ

悔しい

「ベリオロスの攻撃はな」

「それなら先ずは体当たりだ、

体が長くて範囲が広い」

「ああ尻尾が厄介だ、これも範囲が広い」

「あの単純な飛び掛かりだな」

「あ？簡単だろうって？」

「距離は無いが、溜めが無い上にほぼ

ノーモーションで来るぞ？」

.....

「なんかよう」

「ん？何だ？」

「俺達に対する態度がよう」

「ああ、皆優しくしてくれるよな」

寒冷群島を翔虫で飛ぶ

着地すると

「特に姉御のパーティーは色々教えてくれたなあ」

「痺れ罨まで貰っちゃったな」

何だか前とは真逆だ

「姉御、お前に気があるんじゃないかね？」

ニヘラと笑う

「冗談だろ」

五歳も年上、身長もガタイも声も態度も

大きい春香…ありえない

「お前じゃないのか？」

俺が言うのもなんだが少年っぽくて中性的、

男っぽさは全然無い美形、

歳上から可愛がられるだろう…

「姉御？ないない」

「いや、お前は無くてもな、

相手がそういう趣味があるかもしれないだろ？」

確かシヨタとか言うヤツが

………

見付けた、高台から伏せて見る、

雪が冷たい、風はもつと冷たい

白銀の世界の中に真つ白いベリオロス

「迫力あるな」

デケエ……強そう、いや強いよな

「何か骸骨みてえだあ」

何だか余裕の時雨

「なあ時雨、恐くねえの？」

デカいし速いんだし

「んー？危なかったらリタイヤすれば

「良いだけだぜい？」

「いやそうだけどき」

骨格はナルガクルガと同系統、なるほど聞いた

通り、だから飛び掛かるタイプか、

前足が発達してる、体の割には小さい

翼のために飛行は短時間

言われた事を思い出し情報を整理する

武器も鉋石系統だがハモンさんが強化して

くれたし、防具の傷んだ所も直して貰えた

皆に支えられてる

「俺達つてよ、色んな人に支えられてるよな？」

「俺も支えてやってるぜえ？」

ニヘラと笑う

「逆じゃね？俺が支えてるだろ？」

時雨の顔で何だか肩の力が抜けた

飛び降りる

影は罫を設置、時雨はベリオオスの視界に

入る様に動く

「ほれほれ、こつち来い」

咆哮！そして時雨に向かつて来ると

罨に掛かるベリオロス

「よし、翼に集中!!」

「鬼人化あ!!」

翼のトゲを斬りまくる

春香達に攻略聞いたから行動に迷いが無いわね、

だからって時雨はともかく影には無理だけど

「アヤメ」

「ちよつと師匠、突然来ないでよ」

いつの間にか後ろに立っているウツシ

「あの二人、どんな結果でも見届けたら

直ぐに戻れ」

「え？それって…」

「夜行が近いかもしれない」

険しい顔

「まさか！まだ2日ですよ?!」

普通は数ヶ月に一度だ

「前例は無いけどね、ディアブロス、

ジンオウガ、ティガレックス辺りが

変な行動してる」

「モンスターのレベルが…」

明らかに高い

「うん、次は総力戦になるかも知れない」

「時雨には本気でやらせないんですか？」

「アヤメ、誰にも言っちゃだろかね？」

「言いませんよ、けど昨日のフルフル戦、

ソロで戦ってましたよ？」

「あの子普通に中堅クラスですよ？」

影が落ちた後

プレス!! 空中高く飛ばされ落ちる影
「ぐっはあっ!」

雪の上でも痛い、衝撃で一瞬呼吸が止まる
追い討ちに飛び掛かり!

大ダメージ!

「影イ! 立てるかあ!?!」

閃光を投げて引き起こす

「スマン時雨、強えなコイツ」

本来戦うレベルじゃないモンスター、

鬼刃斬りなんて狙えない、動きが早い

回復薬を飲む

ベリオロスは飛び上がりホバリング

「プレスだあ!!」

「おう!」

難なく避けられたが飛び掛かってくる!

雪煙を舞い上げ、地面を削りながら回転して

着地、しかし横に転ぶベリオロス

「トゲ壊すところなるのか!」

「飛び掛かりで止まれないんだぜい!」

あのトゲはブレーキか!

斬りまくり、が、切れ味が持たない

「一回退くぞ!」

「あいよお!」

隣のエリアで回復と研ぎ

「影イ、飛ばされた時な」

「解つてはいるんだけどな」

吹き飛ばされた時は翔虫を使って離れれば

追い討ちを避けられる、

説明は受けたがまだ出来ない影

「ガード出来る武器のが良いか?」

速くて追い付けない、迎え撃つ方が良いか?

「俺無理だあ、出来ても片手剣だなあ」

「お前って案外筋力無いのな」

フツ、勝ったな

「大剣なんか使ったらマツチヨになるぜえ？」

モテそうにねえよw」

「え…もしかしてお前って、モテる為に

努力とかしてるの？好きなヤツ居るのか？」

初めから顔が良いヤツが努力すんなよ、

俺が追い付けないだろ

「え？…え、えと…」

時雨が動揺？…チャンス！

時雨の弱み!!

「誰だよ？俺はヒノエ様、お前は？」

ニヤニヤする影

「あ、あのなあ…」

しどろもどろ…

「お前は知ってるんだぜ？不公平だろ？」

さあ言え！冷やかしてやる！

「あ、えーと…あの…」

「言えよう」

時雨の口調をマネする影

「よ……ヨモギ……」

ソツポを向く

「……………ろ……ロリコ……」

「コミツよりはマシだろい!!」

……………

今度は水辺、足首程度の水がある、
やはり身を切るほど冷たい

「食らええ！空舞!!」

頭を軽く蹴ると

「ガリガリガリガリ!!」

四連斬り!!

「すげえぞ時雨!」

「成長したろい!」

難なく着地

影の正面のベリオ、予備動作無しに

一歩前へ飛び掛かる

居合抜刀を!

「ぐはっ!!」

まともにブツかる

冷たい水に浸かると体が辛い

「大丈夫かあ?」

「ああ!ダメージは少ねえ!」

でもなんだよコレ!全然対応できないぞ!

「んぎゃっ!!」

時雨も食らう

「めんどくせえよー!」

これに注意された攻撃か!

とてもじゃないが連続で斬れない!

スキが分からない!

ベリオロスは飛び上がりブレス、

影は空中高く飛ばされる

落ち着け!翔虫を!!

慌ててベリオロスに向かって

飛んでしまう!

急降下!

まともに衝突!!

「影イツ!!」

.....

「.....ん?」

気が付くとキャンプに居る影

「どうやら力尽きたらしい」

「お代はギルドから頂くニヤ」

「毎度ニヤ」

二匹のアイルーが満足気に去って行く、

「この二匹に運ばれたようだ」

「くっそー、あ…やべえ」

アイテムを調べると回復薬グレートがもう無い

また道具が足りない

「リタイアするかあ？」

時雨も到着

「くそっ…」

「お？悔しいかあ？」

「当たり前だろ？」

「ふーん…悔しいと思える様になったんだなあ？」

ジト目で見てくる時雨

「？」

「いつものお前なら、勝てるレベルじゃ」

無いとか言ってたろい」

「そうか？」

……………

ギルドに帰ると

「お疲れ様です」

ミノトは居るがゴコク様が居ない

「お伝えしておく事があります」

ミノトからの指示は

『狩りに出るな』だった、

そして百竜夜行に備えろとのこと

ゴコク様は近隣の里と何やら交渉するため

出掛けたそうだ

今度の百竜夜行は大きいモノになるようだ

次の日

「起きろ影！」

「え？あぁ」

時雨に起こされた、いたずら無しで起こされると
逆に変な感じ

眠い目を擦りながら顔を洗う

「ちよつと来な」

いつもの時雨じゃない

「どこ行くんだ？」

「俺ん家」

なんでガルクの所に

「強くなりたいたら？練習するぞ」

外に出ると里の雰囲気が違う

軒先に商品が無くなり閉店した様な店、

一心不乱に武器防具の修理をする

ハモンさんとミハバ、コミツもセイハクも

見えないしヒノエ様も居ない

その代わり

「オラ！打ち込み軽いぞ！」

「春香！いつもの威勢はどうした！」

「くっそー！レウスよりやりずれえ！」

何人かのハンターが稽古している

備えている、里全体が

「次の百竜夜行が近いから採取だけにしろってさ」

先を歩く時雨

「呼び戻すのに時間掛かるからか…」

ヤバい、俺だけ気い抜いてた

島に入ると

「あ、時雨さん、影さん！」

イオリと

「あ、おーい!!」

ヨモギもいる

「あ、あれ？ど、どうしてヨモギも？」

恐くない、恐くない

また両手を上げて歩く影
　　なんで皆平気なんだ：

「私達だつて戦う練習したいんだ」

ヨモギの足元には、よりよつて
ヘビーボウガンがある

「じいちゃんに貸してつて言つたら

喜んで貸してくれたんです」

イオリの足元には、これまた重い
チャージアックス

「お、重くないのか？」

「背負つて歩くのも辛いです」

二人とも苦笑い

だらうな

「影イ！始めるぞ！」

木の棒を持つ時雨

「教官の授業以来か」

影も

「俺の攻撃に合わせて居合抜刀してみろい!!」

鋭い打ち込み!

「ぐあっ!!」

やっぱり出来ずに叩かれる

防具着てるから平気だけど

「時雨、本気だな?」

真剣になる

「マジだぜい」

ニヘラと笑うと

「食らええ!空舞!」

「ちよつとまで!それ人にやるのか!」

「問答無用お!!」

神樂舞

あれから数日

「カンカンカン！カンカンカン！」

夕刻、里に鐘の音が響く

全住人が全ての作業を止めてタタラ場

前に走る、用意してあつた篝火が灯される

日が落ちると幻想的な柔らかな光になる

皆集まり固唾を飲む、

この時が来た：最近の里の様子から今度の

夜行は大きいモノになる：

里長がいつもの場所から

「たつた今文が届いた！今より砦へ遠征する！」

宣言すると前の通りへ

そして里長を含めた全員がタタラ場に
向かい片膝を着く

…手を合わせ祈る

「ゴゴ…ン」

タタラ場は火が落とされ扉が閉められる、と
ヒノエとミノトが扉の前へ

手には鈴と扇子、榊の枝と弊紙、髪は纏めて
金色の飾り、そして蝶の様に舞い始める
笛、太鼓が合わせ、ゆったりとした動き

「シャン！」

鈴が鳴る

「シャン！」

篝火に照らされ静かに、厳かに

五穀豊穰、平穩無事、そして勝利、
願いを込めて舞う二人

このタタラ場は里にとつての象徴、鉄という
収入を生み出す場所、カムラの里の命
ここは神聖な場所であり建物自体が御神体、
つまりは社

そしてヒノエ、ミノトは社であるタタラ場に
仕える巫女、そのために普段の身なりも

巫女衣装に近い

禍の群れる場所、禍群と呼ばれたこの
土地名を、同じカムラで意味を変える

そのためにこの神楽を作り
里の名前になつたのだろう

「シャン!!」

鈴が鋭い音を立て始め渦の様に廻る、
篝火の火の粉が弾ける

舞いは段々と激しいモノとなり、

ヒノエは弓を、ミノトは十字槍を持ち踊る
反閃を踏み四方を祓う、地を衝くと最後に
力強く足を踏み鳴らしミノトは天を衝く！
と、ヒノエは天に向かい弓を鳴らす！

「どおおおーん!!」

大きな太鼓が鳴らされると二人はこちらに
向かい一礼する

「参りましょう!!」

「行くぞおおおーん!!」

里長が太刀を振り上げ号令を掛ける
里長を先頭に老若男女、里のほぼ全員、
全戦力で砦へ向かう

……

「なんだよコレ!!」

春香が愚痴を漏らす、片足で地団駄を踏む様に配置がこの前とは逆なのだ

里長とベテランが先頭に立ち、若い者は関門、つまり第3の柵より後ろに配置された

「フドウ達も前だしよ!!」

パーティーも無くして年齢で分けられた

「春香、落ち着け」

若手のハンター神部（カンベ）

片手剣にラングロ装備

顔が見えない

「だけどよお!」

神部に食って掛かる

「分かるだろ?この配置の意味」

「分かってるよ、でもよ…」

4年前の百竜夜行でもこの配置はあつた

その時は死人が出るほどの襲来だった

この配置の意味は

『若い者を守り避難を考慮』したモノ

「アタシだって強くなつたんだぞ！」

ちくしょう！」

守られる立場でいる自分が許せない

柵を拳で殴る

「里の明日を考えての配置だ、従うしか

ないだろう…それに一番の大物は多分…

又シだろうしな」

装備のせいで顔は見えないが

落ち着いている神部

「又シっ?!」

「マジか!？」

他のハンターがうろたえる

「最近の里長達考えたら当然かもな…」

「じゃあ先に来るモンスターも

普通じゃないよな…」

不安になるハネナガ、数年前もそうだった

「影……大丈夫かなあ？」

時雨が柵越しに見える、

影の背中は遠くに見える

影は第2柵と第3柵の間、中間エリアの

『島』に居る、最初のエリアの島と違い、

大きく、また昇降機が4つある

影に出された指示は先頭エリアの警戒と援護

「飛ぶヤツ来てくれよ……」

祈る影

地上型だけでは通常の援護しか出来ない

「ブオオーツ！」

物見の法螺貝！来る！

第1柵を飛び越えるモンスター

「いきなりコレかよ……」

影は声を上げる

飛び越え着地したのはディアブロスと

ティガレックス!!

明らかにこの前とレベルが違う!

やばい!空のモンスターが居ない!...けど!

バリスタを撃つ!

俺は狙える距離!

「セイハク!弾だ!」

階下に叫ぶ

「ギヤアアアアカカカツ!!」

「やかましいわ!」

「おらあつ!!」

ベテランのヤクシパーティーがディアに

殴り掛かる

「なんだあ?!二匹だけかあ?!」

「後続はどおした?!」

「上も見とけ!」

見回す

「目の前に集中するゲコ!!」

「援護は影だ!上は気にするな!!」

里長の指揮で戦うベテランの剣士とガンナー
約50人、そしてバリスタ7基と影の1基

「来たっ!」

思わず独り言を言う影、

狙いを定めて

「落ちろ!!」

「ビダアーーーーーン!!!」

テイガの上に落ちるレウス

「いよっしや来たあ!!」

「やっちまえ!!」

群がるベテラン、恐ろしく高い士気で戦う

このレベルのモンスターは落下やその激突

程度では大したダメージにならない

平然と起き上がるティガが咆哮！

「ガアアアアーツ!!!」

立ち上がるレウス、尻尾を振り回す

後方、若い春香達

「おい、今の咆哮…」

「やべえつて、ティガだろ今の…」

「いきなりレベルが違い過ぎだろ…」

「さっきはディアブロスだしよ…」

「なんだあ？ソロで両方狩れるの

アタシだけかあ？」

キヨロキヨロする、春香は22才でもトツプ

クラス、春香が強すぎるだけ

「僕も…何とか…なるかなー…」

神部は冷や汗、素顔が見えなくて良かった

ベテランが前に居る安心感、しかし

裏を返せば、ベテランが突破されたら

終わりでもある

「ジンオウガ！」

「おいバリスタ連中！気を付けなあ！！」

「ガンナー！！頭狙え！！」

「任せろ！！」

ゲンジが貫通弾を速射する

「何かやりづらいな……」

影は援護するがミハバとナカゴは前に居る
連携が取れない

昇降機の音、隣にハモンが上がる

「ハモンさん?!補給の指示は?!」

「今はヒノエとミノトでたりている！

ワシだけ遊んでる訳には行かん!!」

.....

「あ、影の隣にハモンさんが上がって来た」

時雨が柵に登る

「マジかよ、あの人まで出るのかよ…」

ハネナガは落ち着かない

「なあ、ウツシ教官はドコに居るんだ？」

「先頭だろ？もちろん」

「何か索敵に出てるって話だぜ？」

「まだ第2柵は無事なんだろ？」

「まだ無事だぜい」

3柵の上から見る時雨

………

キャンプ

「疲れたら無理せずに休んで下さいね」

弾丸を数十発纏めて紐で縛ったモノを渡す

ヒノエ、両手で抱える、結構重い

「任せるニャー！カムラの

お陰で食べて行けるニャー！」

頭に乗せて弾丸を運ぶ猫族のセンリ達、

地下道を走る

「セイハク、コミツ、先頭エリアは他の人に

任せて、あなた達は何よりも安全を考えてね」

ミノトも同じように

「影のあんちゃんがバカバカ撃つから

他行けねえよ！」

受け取り走る

「ハモンお爺ちゃんまでいるんだもん！」

「オロミドロ！しかも二匹だあ！！」

「めんどくせえ！」

「またティガ来やがった！」

ゲンジ達ベテランパーティーでも3頭に

挟まれると動き辛い

オロミドロの体当たり!

「おい!バリストヤられたぞ!」

右岸の2基がほぼ同時にバラバラに

「ミハバあ!!」

ハモンが叫ぶ、と、

「師匠!大丈夫です!!」

建屋の中を通り中間エリアの右岸へ来たミハバ

「セイハク!!右岸にミハバが来た!

向こうも弾送れ!」

「子供使いが荒いよ影あんちゃん!!」

「タママミツネ!!」

「水に気を付けろ!」

「オロミドロが逃げたぞ!!」

「よしタママミツネに集中!!」

ヤクシ達が殴りに行く

「おらあバリスタ!! 足止めしろ!!」

「テイガ! 咆哮来るぞ!」

「ガード!!」

「またジンオウガだあ!」

「ビダアアン!!」

「うおおっ!! レウス降ってきたぜ!!」

「ぶち殺せえ!!」

「影が居るからプレスが降って

来なくて楽だぜ!」

ふむ、順調ゲコ…

「里長!! 休みなされい!!」

しかし

「ドガアアン!!」

音の方へ全員が向く、第1の柵を破壊して

現れた大物

「またディアアブロスだ!!」

「デケエー!」

「大物だ!!」

尻尾を振り回す、攻撃範囲が段違い

「いつてえなコラア!!」

「じゃまだ!デカブツ!!」「アツブねえ!」

「ガード出来る者はディアアブロスに行くゲコ!」

「ガンナーは貫通弾で狙え!!」

里長はタマミツネに斬り着けながら叫ぶ

「タマミツネも体が長くて面倒くせえのに!」

「やべえ!疲れてきた!」

「くそつ!水食らっちゃまった!!」

ディアアブ羅斯は突進!巨大な二本の角で

ベテラン達を攻撃、島に衝突!

「止まったあ!」

「今だあ!!」

一斉に斬りかかる

が

信じられない光景を見る

「メキメキ…ドガアアン!!」

振り上げる角で島を破壊!

碎けるバリスタ!

「建屋ごとかよ!!」

「おい! 射手は無事か?!」

運搬のアイルーと射手の里守りは走って

逃げる! 何とか無事だった!

建屋部分は木材と鉄板を組み合わせ、

関門に次ぐ強度を誇る、

並みのモンスターでは破壊出来ないはず

出来るのはヌシと呼ばれる一部の

モンスターくらいなのに

「いかん！中間部の連中を！」

里長の声に

「中間部！前方へ来るゲコ！」

「出番だぜ!!」

「任せな!!」

フドウ達約30人も前方へ

「若え連中はさがつてろ!!」

ゲンジやヤクシ達に怒鳴られるが

「先輩達は少し休んで下さいよ！」

参加する30代

バリスト3基と…柵一枚…それ位はいつもの

事だが、建屋を破壊するとは

…コイツは出番が来たゲコ

「ゴコク殿！出し惜しみは…」

「あのディアブロスに使うゲコ!!」

.....

「マガイマガドとやらは居ない様だね…」

ウツシは夜行の最後尾を観察する、

大きな木の天辺

「あのヌシだけのようで」

ニンジャソードとカムラ一式の部下、トウジ

「我々も砦へ急ぎましょう」

こちらもカムラ一式で女性のヒナミ

「師匠！」

アヤメが飛んで来る

「一頭じゃありません!!」

「何だって?!」

ヌシ

大物ディアアブロスが第2柵に衝突！

「ガスツ！メキメキメキ…」

柵を下から持ち上げる様に壊し始める！

「食らうゲコお！」

「ドガアアアアアン！」

撃龍槍が命中！！

「グウオオオン…」

角を折られ、流石に怯み逃げ出す大物

「いよっしや！」

「当たったあ！！」

「急いで次の用意するゲコ！！」

里守達に指示する

「追い返すだけで十分だぜ！」

「てめえも帰れやあ!!」

「ドガン!!」

ヤクシがティガの頭を殴る

「くそつ! 持ち弾が少ねえ!!」

「もう少しだ!」

「キャンプで補給しろ!」

ヤクシ達ガンナーは全体を攻撃し続ける

ウツシ達が飛んで来る

「里長!!」

「どうした! ウツシ!」

滝の様な汗を流す里長

タマミツネとリオレウスも逃げ出しモンスター

が居なくなった、束の間の休息

「最後尾にヌシ・アオアシラです!!」

「そうか!」

心配した程ではなかった、笑顔が出る里長、

正直なところ限界

「だったらイケるぜ！」

「もう少しだ！」

「もう一踏ん張りだな！」

ベテラン達からも笑顔が出るが

「いえ！少なくとも2頭確認しました！！

それとラーズジャンが見えました！」

「何だと?!」

経験上ヌシは1頭、それが当たり前だった、

それにヌシは滅多に現れるモンスターでは無い、

誰も経験した事の無い領域に入る事になる

「ゴコク殿!!」

「うむ、前方は捨てるゲコ!!」

全員中間エリアに入れ!!大砲準備!!」

里守達も移動、ナカゴ隊は左岸にバリスタ4、

ミハバ隊は右岸にバリスタ4

そして影のいる島の編成が変わる

「影、ワシらは後ろに下がるぞ」

ハモンの指示で一列下がる、

そして前列のバリスタは下降する、と、

「大砲上げろ!!」

ハモンの声で大砲が現れる

「姿を見せた瞬間から砲撃するゲコ!!」

地下、階下の里守達も移動完了…

静寂の中、何かを引き摺る様な音が近付いてくる

「来た! ヤツカダキ2頭!」

「砲撃開始ゲコオ!!」

「ドン! ドン! ドン! ドン!!」

切れ間なく撃ち続ける

「バリスタ! 狙え!!」

休む事なく撃つ大砲、

これなら味方に当たる心配が無い

「撃龍槍はどうゲコ!?」

「まだ準備出来ません!!」

全く怯むことも無く前進して来る

「ハモンさん、あれは!」

「この前のバサルのタイプだ!」

「じゃあ…」

榴弾を準備する影

「さて、お前は後退弾を用意しておけ、

まだ来る筈だ」

第2冊を破壊し中間エリアに入るヤツカダキ

「俺達の出番だぜ!」

「先輩達は休んでくれよ!」

「好き勝手に暴れるぜえ!!」

フドウ達が暴れだす

「お前ら若いヤツは下がってる!!」

ゲンジは貫通弾を撃つ、しかし弾道がブレブレ
「先輩！足に来てるぜ！俺らに任せろって！」

ヤツカダキに斬り掛かるフドウ

さすがにベテランは疲れている

と、

「ズダアン!!」

落ちて来るリオレウス

「良くやった影！後は任せろ!!」

まだまだ余裕がある30代

しかし

空から突然降ってくる黒い塊

「ドオオン!!」

「ら…ラージャンだあ!!」

「2頭かよ!!」

スピードが速すぎて砲弾が当たらない、

あつと言う間に中間エリアへ、

ベテラン達に襲いかかる

「救護班！怪我人回収いそげ！！」

猫族と里守が走る

ヤバイヤバイヤバイ！！

まだ蜘蛛2頭も倒せてない！

その上レウスにラージャン2頭！！

空中の敵が少ないと俺の居る意味が…

「影、ワシは補給の指示に戻る、

なあに、出番は必ず来る」

ハモンが降りる

次々に倒れて行くベテラン、

俺がここに居る意味は？

何の為に俺が居るんだ？

猫族がヤクシを運んで行くのを

焦燥と共に見送る、が

ラージャンが飛び上がる…

「……これか！！」

後退弾発射!!

「ズダァン!!」

「これで墜ちるのか!!」

と、

「疾風迅雷!!」

ウツシがドリルの様に突っ込む

「こっちの1頭は僕の隊で引き受けた!!」

それなら

「ミハバ! そっちのラージャン全力で足止め!」

「ナカゴ! 集中射撃! 蜘蛛はベテランに!」

「フドウさん! レウスよろしく!」

「任せろお!!」

フドウが返事をする

キャンプ

「イオリ! 包帯と回復薬を!」

「ヨモギ! 添え木と何か固定するモノを!」

手当てするヒノエとミノト

キャンプには十人を越えるケガ人、

次々に運ばれて来る

「二人ともご苦労だった！」

「ハモンさん！申し訳ありません！」

「補給まで手が回らなくなつてしまい」

「補給はワシが引き継ぐ！それより二人とも

覚悟は良いか？」

ヒノエとミノトは頷く

「大丈夫、後は任せなさいニヤ」

猫族でありながら医者であるゼンチ、頼りになる

「イオリ、圧迫止血！」

「ヨモギ、粘着草と包帯で固定！」

言いながら秘薬の調合を始める

最後尾

左右に岸はあるが昇降機が合わせて

4 機しかない

里長が岸から全体を見る

「里長あ！アタシも前に行きとてえよ！

フドウ達と戦つてんだ!!」

春香と落ち着かない

「良く見ておけ!!お前達は学ぶのだ！

この先何を見ても動じぬ覚悟をしておけ!!」

腕組みしたまま全体を見るが、

呼吸と落ち着いてくれない、

老いとは確実に力を奪い去つていく

「メキメキメキ…ドシヤツ！」

右岸のバリスタ2基と崩れ落ちる、

ラージャンの攻撃をまともに受けた

「ミハバ!!」

「俺は大丈夫だ！お前は空狙え!!」

建屋に引つ込む

ヤツカダキ1頭は逃げ出したが、

もう1頭が第3柵へ

「ドオン！」

「ひいっ！」

「来たあ！」

ガリガリと柵を攻撃する

「里長！アタシはソロでコイツに勝てる！！

やらせろ！」

春香が岸に登ろうとするが

「まだだ！」

里長に睨まれる

柵一枚向こうの巨大な蜘蛛

その圧倒的な存在感と不気味な姿、感情の

無い目と虫特有のギチギチ言う音

若手は恐怖して震える

こんなバケモノと戦うのか？

(逃げたい、全力で逃げたい)

「ヒノエとミノトを出すゲコお!!」

ゴコクの号令で影の隣から二人がせり上がる
「我ら姉妹加勢致します! 災禍を…払う!!」

ヒノエは弓を射ち、ミノトは盾を構える

しかしこの二人は中堅クラスの力しかない

ではなぜ前線に立つのか

二人の真価はその戦闘能力ではない

カムラの象徴を前線に出してしまった

巫女を戦場に立たせてしまった

里の人間はそれを恥と考える

「くっそお! 情けねえ!」

「走るぞ!」

「まだまだあ!!」

疲れきった体を引き摺り走るベテラン

「あの二人の前で、無様な姿は見せられねえ!」

「カッコいいとこ見せなきゃな!」

張り切る中堅

「ヒノエさんとミノトさんだー！」

「あの人達まで！」

自分達の実力不足を痛感する若手

ヒノエとミノトは戦場に立つだけで鼓舞となる

そして一番効果があるのはこの男

「ヒノエちゃんとミノトちゃんは僕が守る!!」

疾風迅雷!!」

ウツシの大暴れ、

双剣でラージャンの角を叩き折る！

ぜえぜえ言いながらベテラン数人が

ヤツカダキに斬り掛かる、柵の隙間から若者が

見るその前で

「いい加減に……」

「死ねやあ!!」

よろけて武器を引き摺りながら斬り掛かる

潰れるように動きが止まるヤツカダキ、

遂に逃げ出す、第3柵は守られた

「よし！ラージャンが一匹逃げたぞ！！」

「まだまだあ！！」

ウツシが2頭目を攻撃、ジャンプするたびに影に落とされるラージャン、その背中には

ヒノエの矢も次々に刺さる

「くっそまた飛んだー！」

「影っー！」

「ズダアン！！」

落下するレウス

「セイハク！後退弾持つて来い！！」

休む間もなく撃つ影、レウスとラージャンが

飛び上がる度にバリスタを旋回させる

「ミノト、守ってね？」

「姉様は私が守りますー！」

レウスのブレスを確実にガードするミノトと

弓を撃つヒノエ

その時

「ガロオオオオ!!」

砦に響く咆哮!!

「ヌシゲコお!!」

全員がその姿を捉える、

常のアオアシラより大きく色が黒い、

しかし一番の違いはその迫力!

明らかにアオアシラとは呼べない別種

「砲撃ゲコ!!休むなあ!!」

大砲は前のヌシ・アオアシラへ集中攻撃

「撃龍槍はどうゲコ?!」

「準備……出来ました!!」

「ドガアアーン!!」

撃龍槍が間に合った!

流石にヨロけるヌシ、

しかし立ち直り真っ直ぐ走って来る

「どおらあっ!!」

ベテランが斬り掛かるが流石は又シ、
全く怯まない、ベテラン達を風ぎ祓う

「ナカゴ!!榴弾!!」

「撃つてる!!なんで怯みもしないんだ!!」

目の前にいるから一発も外してないのに!

ヒノエの矢も毛が硬い様で深く刺さらない

又シは飛び上がると勢い良く落下

「ドオオオン!!」

尻から落ちる

「ベキベキ…ガラガラガラ…」

「ナカゴお!!」

左岸のバリスタが2基、建屋ごと破壊される

又シは立ち上がるとベテラン達を狙い

腕を振り回す、一回、二、三、四回、

そして最後に両手で挟み込むように

「あぶねえ!」

何とか避けたが最後の一撃が島の左前方、
大砲の近くへ

「バガアン！メリメリメリ……………」

島の一部が…崩れた…

「うおおっ！マジかよ！」

射手が逃げ出す

影の正面、大砲が自重で傾き沈み落ちると、

「かあちやあああん!!」

「!、セイハク?!何だ!!」

影が覗き込むと島の左側、大砲の辺りに

瓦礫に挟まれ動けない八百屋のワカナ、

セイハクの母親で運搬担当

「セイハク！逃げて！」

「いやだあああ!!」

助け出そうと手を引つ張っているセイハク
目の前にはヌシが居る

「ゼヒュー…ゼヒュー…」

「やべえ…」

「キツイぜえ…」

ベテラン達は既に限界

「俺達に任せろ!!」

30代が走って来てベテランを下げるが、

間に合うか…

「くそっ!」

ヤバイヤバイヤバイ!!

弾が無い、運搬が止まった…ならば!

「おおおお!!」

恐怖を掻き消すように雄叫びを上げ

飛び降りる影

「セイハク!どけえ!」

瓦礫に太刀を差し込みテコにする

「ぐうっ!!」

重い

ヌシが振りかぶる! マズイ!!

「ドガツ!」

フドウ達がガードで守る

「影! 急げ!」

「は、はい!」

一人じゃむりか?!

「!」

しまった! レウスには今誰が?!

「空舞!!」

レウスの頭から尻尾まで十回程の連撃

「時雨っ!?!」

何で!?! アイツ一人で?! 何で!?!

「影イ! 指示だせえ!!」

笑顔でレウスと戦う

「影!!」

春香走って来て太刀を差し込む

「一緒にやるぞ! そうらっ!!」

何とかワカナを引き摺り出したが

歩ける状態ではない

後ろを見ると若手が里長の横を抜けて皆出てくる

「何をしている! 出るな!」

お前達は生き残るのだ!!」

そんな里長の制止を振り切り

「俺達にだって意地がある!」

「そうだぜ! 気焰万丈!!」

「ラージヤンは教官達に任せて

時雨を手伝うぞ!」

ハネナガ達が走る

「よし、僕達は怪我人をキャンプへ」

神部はベテラン達を助けに走る

それなら

「左岸！レウスに後退弾！」

レウスが落ちると若手が袋叩きにする

「次！右岸！ラージヤンに榴弾！」

ラージヤンが気絶、ウツシ隊と中堅が斬りつける

ほとんど同時にレウスとラージヤンは逃げ出した

ワカナをセイハクに背負わせる

「セイハク！男なら母ちゃん守れ！！」

春香の激に

「分かってらあ！！」

ヨロケながらも背負って逃げる

「後はコイツだけだ！やるぜ春香！！」

「おうよ！ここまで我慢してイライラしてんだ！

ヌシい！その首もらうぜえ！！」

春香パーティーが暴れ出す

が

「グロオアアア！！」

砦に響く咆哮

「来たか……」

大太刀を抜く里長

ベテラン

2 頭目のヌシは何の障害も無く中間部へ、
春香達の前へ来る

「やべえっ!!」

「春香!下がれ!」

「冗談じゃねえ!!」

2 頭のヌシが並び立ち上がる

「おお!やる気じゃねえかよ!」

体の奥底からせり上がる震えを押し殺す

「おらあっ!!」

春香が斬り掛かる、が、

突然ヌシは興味を失ったかのように奥を向く

「は?」

「なんだあ?」

2頭は第3柵に向かって突進!

「ドガアアツ!!……メキメキメキ……」

柵が倒れた……

「やべえっ!!」

「あとは関門しかねえぞ!!」

「何でいきなり!!」

しかしその奥で待ち構えていた里長、

落ち着いて太刀を振りかぶり

「百竜夜行なにするものぞ!!」

ぬうりやあああっ!!!」

一閃! 大太刀による強力な斬撃!!

倒れてもがく2頭のヌシ

「すげえ!!」

「さすが里長!!」

「ヌシが倒れるのかよ!!」

里長は片膝を着く

「ゼヒュー……ゼヒュー……」

(ぬう、体が言うことを聞かぬ)

「今ゲコお!!総攻撃!!」

ゴコクは左岸を走りながら

「先の方は若手が行け!無理はイカンゲコ!」

そのまま里長の所へ、助け起こし避難する

「今来た方は…」

「アタシが殺る!!」

「引き受けたぜ!」

笑いながら斬り掛かる春香パーティーと30代

「ウツシ隊!」

里長の声に集まる

「少し休め、この戦力なら問題無い、

それより…」

「はい…」

休憩後、再び例のモンスターを探さねば

ラージヤン2頭は流石に疲れた

「くそっ！援護を！」

影は戻りバリスタを旋回するが

「ガコン…」

「あ、あれっ?!」

後ろを向けず途中で止まる、

前のダメージがこつちまで！

「影っ！アレを出すぞ!!」

ハモンが一番奥の左岸から呼ぶ

「ヨモギを!!一緒!!」

影も飛び降りヌシに向かう

飛び上がるヌシ

「下がれ春香!!」

「ドオオン!!」

ヌシのヒップスタンプ、

余りの威力に地面が揺れる

「やっぱり強ええな！」

「丁寧に！一発も喰らうなよ！」

キャンプ

「ヨモギ！影から何か聞いてるか?！」

水桶や包帯を持つヨモギ

「影さんが呼んでるの?!すぐ行く!!」

「空舞!!」

ヌシの背中を数回斬る

「時雨っ！ヨモギが出る！」

コイツ引き付けるぞ!!」

影も斬り着ける、しかし通常個体と明らかに

違う感触、毛が硬すぎる、しかも咆哮も

デカくて此方を止める

「影!!榴弾行くぞ!!」

奥部手前の左右からミハバとナカゴがせり上がる

「援護来るぞ!!」

榴弾が当たるのが怯まない

「グロオア!!」

地面を抉り岩まで飛ばす!

「ぐあっ!!」

「いてえ!」

数人が食らってしまった、

里守や猫族が運んで行く

「此方を気にもしませんね」

「姉様、私達は救護に」

「こんな時に…ミノト、悔しいです」

「私達の出来る事をやりましょう」

少し溜めを作ってから豪腕を振るヌシ

「ブオン!!」

「どわあっ!!」

「うそだろお!!」

空中高く飛ばされる若手と

「ぐあ、めんどくせえよう!」

「風圧だけでこれかよ!!」

動けない時雨と影

「落ち着いて回復するゲコお!!」

「一撃貫ったヤツは下がれ!!」

「連続で攻撃すんな!!」

「常に回復続けろ!」

「慌てんなよ!」

「ああ、いやだいやだ、何で

こんな強いモンスターが」

神部も戻り走り込み斬り着ける

その時

「さあさあさあ! やつちやうよーっ!!!」

場違いな声と共にヨモギがせり上がる

場所は一番奥の左岸、見慣れない設備と一緒に

「なんでヨモギが!？」

「どういう事ゲコ?!」

「影っ!!本当にこれでいいのか?!」

ハモンが叫ぶ

「大丈夫です!!」

ハモンが作っていた新しい迎撃設備の

速射砲、威力は低いけど連射速度が凄まじい

「うりやうりやうりやああ!!」

「ドドドドドツ!!」

奇声を上げて1頭目のヌシに撃つ

「何だあ!!一発も外さねえぞ!!」

「何でこんなに上手いんだあ?!」

ミハバとナカゴを始め、全員が驚く

どんなにヌシが動いてもハズレない

的確にヌシに当て続ける

「どうなってるゲコ!?」

「ヨモギは飛び道具の天才です!!」

「すげえんだよう!!」

ヌシがジャンプする、ヒップスタンプ!

が、

「ドドドドドツ!!」

「うりやうりやうりやああ!!」

空中でも的確に顔を撃たれ墜落!

「すげえ!」

「正確だぜえ!!」

「やるぞ!!」

もがくヌシに若手が一斉に攻撃

「カラカラカラカラ……」

「あ、あれ? ハモンさん!

弾が無くなっちゃった!!」

引つ込むヨモギ、しかし効果はあった、

まさかヌシを空中で怯ませるとは

「影イ！疲れたよう！」

肩で息をする時雨

「連続して斬れないしな…」

一発の威力が桁違い、若手が20人掛かり
でもまだ倒れない

「おい！」

「まただ!!」

2頭が関門に向く、一緒に走り出すと

「ドオオオン！」

関門に体当たり

「何なんだコイツら!!」

「タイミング合わせるみてえに!!」

まだ関門はなんともないが

「おい、これは」

「やべえ！」

2頭はハンターに見向きもせず

関門を攻撃し始める

「こつち見もしねえ!」

「俺達の攻撃どころじゃねえってか!」

「なめんなあ!!」

背中を全員で攻撃する

「時雨!今なら!」

「イオリイ!」

又シの真後ろ、滅多に使わない地面の

昇降機からイオリがせり上がる!

「なっ?!イオリ?!」

「何でガキが出てくんだあ?!」

「イオリ!なぜだ!」

ハモンが怒鳴るが

「超高出力…開放…ええい!!」

爆発しながら2頭に当たるチャージアックス、

2頭を怯ませた

「うわあっ!!」

武器に振り回され、よろけて転ぶイオリ

「すげえぞ！イオリ！」

「大成功だあ！」

助け起こす二人

「や、役に立てました？」

「ああ！」

「凄かったよう！」

「後は任せろ！」

溜め斬りするハネナガ

「いい加減に…倒れてくれよ！」

怖いんだよ！

神部の盾殴り

「ゴフ…グロオオ…」

1 頭目が遂に倒れた

「ガキ共が先にやつちまった！」

「負けられねえぜ春香!!」

「へっ！もう覚えたぜ！兜割い！」

「若造共が！」

ヨモギと一緒に速射砲の昇降機からゲンジが出る、上からヌシを狙撃する

「ヨモギ、弾装填しろ」

ゲンジの右腕がブラブラしている

「あの…折れてるんじゃない…」

泣きそうなヨモギ

「だから弾詰めろって言うてんだ！急げ！」

「バキィィン！！」

「なっ!？」

春香の太刀が大きく欠けた

「春香！下がれ！」

「ちくしょう！ここまで来て！」

「ドン!!」

ティガのハンマーが降ってきた

「何だ?!」

「使え!!」

全身に包帯を巻いたヤクシが上から投げた

「ヤクシさん! 動いちゃいけません!!」

ミノトに止められるが

「お前なら腕力だけでやれるだろ!」

「ガシッ!」

ハンマーを掴む春香

「有難う御座います!」

力を溜めながら走る春香

「潰れろ! バケモン!!」

ヌシの後ろ足、爪先を潰す、たまらず倒れるヌシ

「その首貰ったあ!」

溜め斬りするフドウ

「ガロオ…オ…」

.....

ギルド

何とか全員で里へ帰還、子供達は帰り

ハンターと主要な里守だけ、夜明けが近い

「貴様ら勝手な行動をとりおつて!!」

里長に激怒される若手

「でも全員無事だしよ……」

春香は反論するが

「馬鹿者！お前達若者を死なせて誰が喜ぶか！」

怒りが収まりそうにない

「あー、いやあ、俺が春香に命令……」

言いかけたフドウの肩を引っ張り

「自分が命令しました」

ゲンジが前に出る

「俺もです」

ヤクシも

「ちよ、先輩！」

フドウが慌てるが

「お前達が命令した、間違いないな？」

里長が睨む

「間違いありません」

里長は溜め息を吐くと

「お前達は謹慎しろ」

「はっ!!」

里長は二階へ行ってしまった

「……………」

静かになってしまったギルド

「そうだ影、時雨、イオリとヨモギは

どういうことだ？」

ハモンが聞いてくる

「おお！そうゲコ！」

「そうだぜー！」

「どういうことだ?!」

全員が聞いてくる

「あれは……」

……

数日前 ガルクの島

「何でこんなに重い武器を？」

影だつて扱う自信が無い

「だって強い方が良いんでしょ？」

ヘビーボウガンを展開するがヨロけるヨモギ、

通常弾を撃つと

「うわわっ！」

反動で尻餅をつく、体格も筋力も全部足りない

良く素人が陥る状態、武器の威力しか見ていない

扱えないから当たるはずもなく、

狙った枝には平然と小鳥が囀ずる

「もつと軽い武器の方が良くないか？」

「えー？ 当たるんだよ？」

どこがだよ？

ヨモギはボウガンの三脚を立てて寝そべると

「ほい！ ほい！ ほい！」

「！」

一瞬何をしているのか解らなかった、しかし

良く見ると落ちて来る木の葉を撃っている！

「ヨモギ！ なんて当たるんだよ！」

「えー？ 団子を串で当てるより楽だよ？」

空中に放った団子を手裏剣の様に串で狙うあれ！

あのいつもの芸か！！

じゃあ… 反動さえなければヨモギは…

「イオリイ、振り回せないだろい」

「一応振り方と技は全部勉強しました」

よろけるイオリ

「けどなあ、モンスターは動くんだぜえ？」

「ですから罾とかで動けない様にすれば……」

凄く良い笑顔で言うが

「そんな都合の良い場面……！」

「？」

「イオリイ！大技の練習しとけ！」

……………

「なるほどゲコ……」

「そうだったのか」

ギルド中が感心する

「数年後が楽しみゲコ！なあハモン！」

「イオリも戦える様になるのか！」

笑顔が出る

奥のテラス席、すっかり朝になっている
「いでで…」

座るゲンジとヤクシ

「あの、先輩」

フドウが頭を下げる

「すみませんでした！」

「何で謝ってるんだ？」

首を傾げるゲンジ

「え？春香達庇つた上に謹慎処分ですよ？」

「馬鹿か、コレ見ろ」

「ひと月は狩りできねえだろ？」

ゲンジは骨折、ヤクシは全身打撲と脱臼

「えっ、ええと…」

戸惑うフドウ

「お前え幾つになつた？」

ヤクシに睨まれる

「30になりました…けど？」

「なら分かれや、

里長が怒つてた様に見えるか？」

ヤクシが里長のいる二階を見る

「え…怒つてないんすか？」

二人は溜め息を吐く

「まだ坊っちゃんかテメエは？」

「物事にはな、落とし所つてのが必要なんだ」

ゲンジは見下すように

「え…じゃあ…」

「四年前の夜行で何人死んだ？アレ並みの

夜行だったのに一人も死んでねえだろ」

「里長だつて嬉しいんだ、ただ立場上」

締める所は締めなきやならない」

「だつたら少し位……」

「皆が不安な時は笑い飛ばし、

笑いたい時は怒って見せる、

上に立つつてのは並じやあ務まらないぜ？」

ゲンジがニヤリと笑う

「それが解らねえ様なら……いつまでも若造だ」

ヤクシも笑う

天ノ川

「疲れたあ…」

「もう帰って寝よう」

ギルドを出る、朝日が少し高い

「まぶしいよい」

「徹夜明けには辛いな…」

頭がフラフラする

徹夜明けって言うより夜行明け

「あ、ヒノエ姉さん」

「ヒノエ様」

「あら、お早うございます」

いつもの笑顔

「お早うございます…って、

ほとんど寝てないですよね？」

「何だか気分が昂って寝られないんです」

何だかウキウキしてるヒノエ

いつもなら嬉しくなる影だが、流石に疲れた

「ミノト姉さんはあ?」

「帰って直ぐに寝ちやつたのよ」

そのままギルドへ入って行くヒノエ、

なぜか足取りが軽い

少し歩きタタラ場の前

「お前…リオレウスに向かって行ったよな?」

「あー…あれはなあ…あ?」

「ごまかすなよ、どういう…」

「……!」

「…ん?」

「何か聞こえたなあ?」

「おのれえ!!」

「なんだっ!!?」

「傘屋のヒナミさんだよ!」

里の入り口を見る、橋の上に

「グロオアアア!!」

「何だあアレ?!」

「こつち来るぞ!!」

構える二人

黒い大きな四足の体、ジンオウガ並みの
スピードでタタラ場前へ走って来る!!

紫の炎が揺れる、鋭い眼光、

尻尾を振り上げ威嚇する

構える影、カタカタと太刀が震える…

ベリオロスだってココまで恐くなかった

「しっ!時雨っ!コイツは…」

「わっ、わっかんねえ!」

時雨も震える、明らかにただのモンスター

ではない空気!

「影!時雨!下がってな!」

追いかけて来るヒナミ

一足飛びで斬り掛かれる距離の影!

しかし睨まれただけで体が動かない！

「どうしたあ!!」

「何だ!?!今の咆哮!!」

「モンスターか!?!」

ハンター達が一齐に飛び出してくる

ヒュンヒュンと尻尾を振り回し

「影イツ!」

「えっ!?!」

時雨に突き飛ばされた!?

「ぎゃうっ!!」

「ドカツ!」

尻尾で突かれタタラ場の石段に

叩き付けられた時雨

「時雨えっ!!」

助け起こそうとすると、アシラの胴防具が

紫の炎で焼かれている

「時雨!時雨っ!!」

手で叩いて何とか消す

「てえんめえ！良い度胸だコラア!!」

「この里に入って無傷で出られると思うなよ！」

周りをハンターに囲まれるモンスター

「こやつゲコオ！」

「あの時の恨み！忘れはせんぞお！」

里長も来て大太刀を抜く

コイツが警戒していたモンスターか!!

モンスターはグルリと見回すと

「グルルル……」

なぜか大門の方を見て唸る、と、

突然ジャンプ!!

「なっ!!」

「飛べるのか?!!」

空中に爆発を起こし、その反動でタタラ場を

越えて飛んで行ってしまった

「やろお！逃げんな!!」

「追え!!」

「待て！今は守りを固めるゲコ!!」

「ウツシを呼び戻せ!!」

「時雨！目え開けろ！時雨！」

.....

「おい！時雨は大丈夫なのかよ?!」

「ゼンチ呼ぶか？」

ギルドの二階、座敷に寝かせられた時雨

階段の所で道を塞ぐミノト

「姉様が診ています」

誰が来てもそれを繰り返しているが

「影君、いますか？」

「…はい」

「来なさい、他の方は降りて下さい」

いつもの事務的な声

洩々皆が引き上げる

「…時雨は…」

座敷には衝立があり、横を抜けて入ると

ヒノエが見上げる

「影君…」

「時雨は…」

布団で寝ている

枕元には焦げた防具一式

「命に別状はありません、しかしこれから

普通に生活出来るかは…」

「そんな！」

「そ…まで…」

「影君、分かっているとは思いますが、

時雨は貴方の為に命を掛けました、これは

大きな借りを作りましたよ?」

「はい……」

布団の傍らに正座する影

「どうします?」

反対側に正座するヒノエに真つ直ぐ見られる

「どうしますって……」

どうしたら良いんだ……

「貴方が一生支えて行くのですか?」

「……………」

ミノトも来てヒノエの横で正座する

「……………」

ミノトは溜め息を吐くと

「もしも時雨が女だったら添い遂げる

位の覚悟はありますか？」

「これから一生面倒見ないと…ダメですか？」

一生…まだそんなの分らないよ、

俺17だよ？

「貴方は命を助けられた、その借りを返す、

覚悟を見せなさいと言っているのです」

ミノトにも真つ直ぐ見据えられる

どうする、どうすれば良い？

ハンターしながら時雨を支えてやるしか…

「…時雨は…俺が支えます」

「…良かったわね…時雨…」

二人ともうつ向き横を向く、

口元を抑え泣く

影もうつ向く

?

時雨が少し…動いてる？

ヒノエとミノトを見ると肩が震えて…

泣いて……ない?!

笑ってる?!

「クスクス…」

「ちょー!」

「アハハハハハ!!」

「ベシツ!」

笑った時雨の頭をひっぱたく!

「いったあ!影がぶった!」

「本気で心配したんだぞ!!」

変な声で笑いやがって!!」

「変な声って!他に言い方無いの!?!」

布団から上体を起こす

「その女みてえな声だ!!」

「鈍い!」

「え…?」

ミノトの鋭い言葉

「影君…わw…分かりませんか？w」
笑いを堪えながらヒノエが指差す

布団から起き上がった時雨、その首の辺りには
さつきの火傷と包帯…

気付く？何の事だ？

…目線を下に

何だコレ？

確か女性ハンターのインナー…

「はああああっ?!」

後退る

「おま！お前っ！女っ?!」

「私は失礼します、ゴコク様達の

お手伝いがありますので」

ミノトは出て行く

口元を抑え珍しく笑っている

「この娘が誰か…分かりますね？」

「まさか……天音……」

頷く時雨、いや、アマネ

「何で……」

「やっぱり忘れてる」

ジト目の天音

「ちよつと昔話をしましうか」

大社跡のキャンプの崖下、広く浅い川、

流れが遅く鏡の様な水面には満天の星

川辺には夢中で剣を振る少年

それを対岸からずっと見ていた少女が一人、

ガルクに乗って川を渡る
天の川に波紋を残し渡ると、少年は
驚いて座り込んだ

ガルクが更に近づくと

「カササギ、待って、恐がってる」

少女はガルクを降りる

少女は少年と色々な話をしました

少年はこう言いました

「俺は兄ちゃんみたいな凄いハンターになる！」

「お前仲間にしてやっても良いぞ？」

「でも女じゃなあ」

こう言われた少女は悔しかった、体が弱かった
けど少しづつ外に出て団子屋で働いた
しかし両親が戦死して一人で生きて

行かないとならない

13 になっていた少女は男になって

ハンターを指した

「ちよ！ちよつと待つて下さい!!」

「どうしました?」

首を傾げるヒノエ

「じゃあウツシ教官は?!」

「知つてますよ? もちろん」

「ええっ!」

もちろんウツシさんは反対しました、

でも女の子は男のハンターになりました

そこで私とミノトも一緒にお願ひしたら

二つ返事で了承してくれました

「:..でしようね」

この人に頼まれたら断れない

その後少女はガツカリする事となる、

少年は狩人ではなく守人になってしまった

「春香さん以上にガツカリしたんだからね！」

睨む

「お、おう、何かゴメン」

声に慣れない

「私が天音から聞いた話はこのあたりです」

「あの、天音の事知ってる人は…」

「里長とゴコク様は当然、

あとはウツシさんとハモンさんになりますね」

「ハモンさん知ってたのかよ！」

「当然でしょ、防具の見た目、

男用にしてるんだし」

防具を見る

「はあ…」

溜め息を吐く影

「あ、あとイオリも」

「イオリ?!あいつが?!」

「ほら、あそこ一応私が住んでる事にしてるし」

「住んでる事？」

「顔中に？が浮かぶ影

「やっぱり鈍いなあ影は」

「まさかアレを…」

「ヒノエも首を振る

「え？何の事だ？」

「私の家思い出して」

「ガルクの島の…でつかい木箱…釜が何個か…

「どう見ても犬小屋でしょ！」

「あつ!!そうか!!じゃ時雨、

「じゃない天音はどこに住んでんだ？」

「私達の家と一緒に居たんです」

「毎日大変だったんだから、島に帰る

「ふりして、翔虫で屋根伝いに戻ったり、朝は

「誰にも見られない様に島に行くし」

「はあ、なんか…」

「疲れた影

「さすがに隠し通せるモノでもないですからね、良い機会ですから」

「声変わりしないから変な話し方にして

誤魔化してただけだね」

「全然気付かなかった…」

ピンときた影

「お前！朝起こした時の声は！」

「地声」

「あの『おいで！』もか…化かされた気分だ…」

「見てて楽しかったですが終わりにしましょう、

目の前の織姫に何年も気が付かない彦星が…

もうなんだか…」

クスクス笑う

「それって七夕の…？」

不思議そうな天音

「だってそうでしょ？天の川をカササギで

渡って会う男女って、まるで織姫と彦星なもの」

「四年もか…ヒノエ様、ずっと見て

笑ってたんですか？」

ヤバイ、俺変な事してないよな

「初めて手料理作ったら、まさか叩くとは

思いませんでした」

クスクス笑う

「あ、あー…」

やべえ…

「一生言ってやる」

ジト目の天音

「あらあら、凄い事聞いちゃった」

ヒノエは上を見ると

「お疲れ様ですウツシさん、

里長なら一階ですよ？」

「どういう意味なの？ヒノエちゃん」

天井からウツシ隊が降りてくる

「なっ?!」

「教官?!」

布団の周りに四人が降りると

「俺も分からないんだけど?」

トウジも首を傾げる

「男ってダメねえ」

「師匠もトウジもモテない訳だわ」

ヒナミとアヤメ

「姉さん、私何か言っちゃった?」

「俺も何の事だか…」

天音と影も分からない

「あああ、天音も案外鈍かったのね」

笑うヒノエ

.....

「時雨が女あ?!」

「マジか?!」

「いや、確かに顔は良いけど男か女か分からねえ」

「いつつも笑ってるから素の顔知らねえかも…」

ウツシ達に伝えられたハンター達

「僕の隊を休ませてもよろしいですか？」

「うむ、連日の索敵と戦闘、ご苦労だった」

「十分に休むゲコ」

「なあ里長、ゴコク様、偵察に出ても良いか？」

春香と仲間が聞くが

「皆徹夜明けだ、申し出は助かるが…」

「問題ねえぜ、先輩達を休ませてくれ」

「里の周りを見てくるだけだ」

「うむ、戦闘はするな、無事に帰る事を

優先するゲコ」

彦星

夕方春香達は戻った、あるものを持って

「この傷…食いちぎられているゲコ」

持ち込んだのは砦に残っていたヌシの首

「もう一体にも喰われた跡があったぜ？」

「タタラ場の足跡と同じ足跡あったぞ」

「ゴコク様、あのマガイマガドってやつが

夜行起こしてんのか？」

春香が腕組みする

「うむ、明日の朝全員が揃ったら話すゲコ、

今日はもう休め、ウツシが起きたら索敵に

行かせるゲコ」

………

「……………」

目が覚める影、徹夜明けで昼に寝た為に起きてしまった、今何時だろう

戸を開けて空を見る、

明け方までも時間がありそうだ

外に出てみる

「ふう……」

夜風が気持ち良い、いつもの喧騒も無く、

タタラ場も閉まっているために無音

色々ありすぎた……

天音は俺が言つた事を……ずっと……

ペタラッ！ペタラッ！ペタラッ！……

タシタシタシ…（ガルクの足音）…

「あ…影…」

ガルクに乗った天音、水色の浴衣に赤い帯、

いつもの髪型

暫し見詰め合おうと

「なんだよ、また夜の散歩か？」

やっべ…可愛い見える…

うわ！俺インナー一枚じゃん！

「良いじゃない」

プイと横を向く

「…」

「…」

お互いに言葉が続かない

「あ、あ…」

「あのさ、大社跡行ってみない？」

天音は影を待たせると島からガルクを連れてくる

「ほら、自分で乗って」

「俺こんな格好だぜ？」

ガルク怖ええ

「いつも朝はその格好でしょ？見慣れてる」

時雨はいつも防具全部着てた、

その姿しか知らなかった

.....

「早いんだな、着くの」

いつもは船で来ていた

「こっちは距離があるけど、

ガルクに乗れば船より早いだよ」

森の中を抜けて来た

二人で河原へ座る

「あの辺に影がいてさ」

指差す

「なあ、あの時どんな話してたんだ俺？」

「八割はお兄さんの自慢かな」

二人で笑う

あの頃は兄貴が世界の全てだったかもしれない

「毎日色々やってくれたな」

「だって全然気が付かないのも癪だしね」

「ヒノエ様も冗談キツいな、結局軽傷なのに」

「姉さんにはお世話になってるし、

恩があるからさ、逆らえないもん」

「あ、あの雑炊は旨かった：です」

「当然！ミノト姉さんに料理は教わったからね」

威張る

「なあ天音：俺んちの風呂に入りたがったのは

何でだ？」

顔を見れない

「あ、あれはヒノエ姉さんが」

うつつ向き顔を赤くする

「恥ずかしいよ姉さん！」

「あら、影君なら覗きはしないでしよう」

「多分しないけど…男だと思ってるし」

「ならいいじゃない、ギリギリまで攻めて

みなさい、天音だって本当は影君に気付いて

欲しいでしょ？」

「本当に面白がつてたのかw…っ！」

「そうなんだよw…っ！」

突然二人は固まる、顔が近い！

いや…それにこれは！

「ねえアヤメ、見つめあってるのアレ？」

キャンプから見下ろす

「何か変ね？凝視してるとって感じだわ」

「ヒナミ、アヤメ、索敵の途中だよ？」

言いながら見るウツシ

「師匠、あの二人どう思います？」

「…まさか今さらデートしてるとって

気が付いたんじゃ…」

トウジも腕組みして見る

「まさかあ！」

「だとしたら」

「相当なポンコツだね…」

四人の予想通り

あれ？ヤバくね？二人つきりで？夜中に？

里の外で話してる？これはまさか…

噂に聞く『でえと』と言うやつじゃ…

ちよっと待って、夜中に二人つきりだよ？

しかも誘ったの私だよ？これは

『私がデートに誘った』事になるのでは？

「ふ、…ふふふふ…」

「あ、…あははは…」

視線をそらし距離を離す、

気まずい！めっちゃ気まずい！

「ポンコツだね」

頷く部下達

どうしよう！ここからどうすれば正解なんだ！

時雨、じゃない天音はどうする気なんだ？！

影はインナー一枚だし、私浴衣だよ？！

なのにデートに誘ったの？！

これってどう思われるの？！

『いつそモンスターでも出て来てくれ!!』

二人が思うと

「ぎっ…ぎっ…」

足音に振り返る

「対よ…対よ…我が対は…いずこか…」

「ヒノエ様?!」

「ヒノエ姉さん?!」

そんな二人に気が付かない様にヒノエは歩く、

目が金色に光っている

「何でヒノエちゃんが…」

「ドドドドドッ!」

森の方からモンスターが一斉に飛び出して来る!

イズチ、オサイズチをはじめアオアシラや

フアンゴ、まるでこの狩場全体の

モンスター全部

「ヒノエ様!」

「姉さん!」

駆け寄り肩を揺さぶると

「あ、あら?」

目の色が戻る

「……は？」

「逃げますよ！」

「こつちへ！」

ガルク2頭と一緒に川を渡ると

「早く登れ！」

「教官?!」

ウツシたちがキャンプから飛び降り、

守る様に並び構える

「ガロロア！」

「あれは！例のモンスター!!」

「あれに追われてるのか!!」

部下達は動揺するが

「マガイマガド、やるしかないね…」

双剣を構えるウツシ

マガイマガドはオサイズチに飛びかかると、

喉笛に噛みつき食い破る

他のモンスターは足を止める事もなく

こちらへ来るが、ウツシ達の目の前で左右に分かれていく

「オサイズチー頭で満足してくれよ…」

ウツシが呟く…と

マガイマガドは空を見上げ

「グルルル…」

唸るとオサイズチを唾えたまま左奥の方へ走って行った

こつちに注意を払わない、

他のモンスターも…なぜ？

一陣の風、突風が吹いたと思うと

「ゴアアアアー!!!」

!!!

予想外の方向からの咆哮!!

全員が真上を向く

「何だあれは!!」

雲の切れ間から身をくねらせる龍らしき姿!

金色に光る目!

その咆哮と気配に逃げ回るモンスター達!

「師匠、まさかこれは!」

「あの龍が…」

「あのマガイマガドとか言うヤツは…」

「大変だよ!直ぐに報告しなくちゃ!」

……………

朝

「大体揃ったな」

里長が腕組みする、いつものギルド、

一段高いテラス席

「皆、コレを見るゲコ」

広げた紙にはゴコクの絵

昔の装束の人々が弓や剣を持ちモンスター
の群れに向かう姿、猫族やガルク、フクズクも
描かれている

そしてモンスターの群れの一番奥に禍々しく

描かれた1頭は…例のモンスター

「これは50年前の百竜夜行を

ワシが描いた物ゲコ」

ざわつくギルド

「この絵を見ての通り、我らが怨虎竜、

マガイマガドと名付けたモンスターが

百竜夜行を起こす…と思っていた」

「そうなんだろう？ヌシにも喰われた

跡があつたぜ？」

春香の言葉にまたざわつく

「コイツに喰われるから逃げてんのか！」

「昨日も結局は最後に来たよな……」

「間違つてないよな」

「ところが今日未明にウツシが新たな

存在を確認した！」

里長の言葉に全員が固まる

「新たな……存在？」

「新種か？」

「大社跡の全モンスターが

逃げ惑っていたそうだ！」

「全部って……」

「そんな化け物が？」

「まさか……それで夜行が起こるのか？」

「どうやらマガイマガドは逃げ惑う

モンスターを、横から狙ってエサにする……

そういうタイプのモンスターゲコ」

「昨日の様子を思い出して貰いたい…

ヒナミ、影、ヤツは大門の方から来た、

間違いないな？」

「躊躇無く大門を抜けて…面目ありません」

「見た時にはもう橋の上にいました」

「そして空に向かい唸り、

逆方向に飛んだ…つまり」

里長の顔が一層恐くなる

「あやつ自身も逃げている可能性が高いゲコ」

………

二階の座敷

「里長、歴代の長の記録にそれらしき

モノはないゲコ？」

「あるにはあるが、何しろ名称と特徴だけ

ですからなあ」

「絵に残っていない事には…難しいゲコ」

「ヒノエの件もありますし、ウツシ」

「はっ」

天井から現れるウツシ

「コレを読んでみよ」

渡されたのは古い巻物、特徴が書かれている

いくつか読むと

「このイブシマキヒコになるかと…」

「どのあたりゲコ？」

「夜なのでハッキリとは言えませんが、

色は青に近いかと、そして強い風、それに

加えて飛ぶ姿はまるで上下を関係なく…

逆さでも平気な様でした」

「さしあたり砦の復旧ですな」

腕を組む

「この前の大破…痛い所ゲコ」

予算も大きいし日数も必要

「ヒノエの様子はどうか？」

「今のところは何もありません、

あの一つよろしいですか？」

「何かあるゲゴ？」

「ヒノエちゃんはどうかやらイブシマキヒコと

何らかの繋がり…と呼べるモノがあるかと」

今朝のヒノエを説明する

「うむ、つまりヒノエの様子に注意をすれば」

「イブシマキヒコの接近を知れる…

という事ゲゴ」

………

「とんでもないヤツが出て来たんだな」

「夜行が連続したのもそのせいかな」

「大丈夫なのか？」

不安が広がっているギルド

「ゴコク様、大丈夫ですか？」

ミノトに聞かれる、

不安な顔をしていたんだらう

「ヒノエの様子はどうゲコ？」

「今朝がた帰って来たと思ったら、

そのまま寝てしまいました」

「…うむ」

（それなら今は…心配無いゲコ）

「あの、ミノト様」

「何ですか？影君」

「あの、えーと…」

「ふふっ…天音なら心配しなくても

家に居ますよ？姉様を見ています」

笑うミノト

幅

「お早うございませす影君」

ミノト様が笑う様になった

あれから数日、ヒノエ様の様子は

変化しないらしい

俺は暫くソロで狩りに出て居た、ヒノエ様が

寝ている間天音が徹夜で様子を見て、

昼は寝ているからだ

「ミノト様、天音は…」

「姉様の様子に変化が見られませんから

そろそろ来ても良いかも知れませんが…」

「お、時雨…じゃなかった、

アマネ？の話しか？」

ハネナガが寄って来る

「僕達も見たいぞ？アマネ？に戻った時雨」

神部も来る、表情は分からないが

実は独身の男にとってワクワクが止まらない

のだ、転校生が女子だと知った馬鹿男子状態

「天音って確か、ヨモギの前の娘だよな」

フドウ達まで

「今日もフルフルですか？」

「今日こそ勝ちたいです」

話していると

「姉さん！恥ずかしい！」

「大丈夫よ、似合ってるわ」

外から声が聞こえる

ヒノエがギルドに入ろうとするが

「やっぱりムリ！」

「大丈夫よw」

ヒノエが腕を引つ張っている

「ほら、影君居るわよ…そーれっ!!」

引つ張られた反動でギルドに飛び込む天音
「……………え?…」

静まり返るギルド

現れたのはヒノエ、ミノトと同じ巫女装備、
髪はツースサイドアップの時雨…いや天音

……………え? コレが時雨?!

「あ…」

硬直したまま真つ赤になる二人、

あのデート以来だし…

「何だよ! 可愛いじゃねえか!」

「こんな娘が近くに居たのかよ!」

「影! どういう事だ?!」

「影! 一回殴らせろ!」

「あらあら、やっぱり良い反応w」

「姉様、私達の御古ですね?」

「ちよつと丈詰めたら丁度良かったのよw」

「影君、何か言うことは？」

「す、すっげえ可愛いで…」

「あ、ありがと…」

二人とも真っ赤で下を向く

「ベシッ」

ハネナガが影を叩く

「ゴスッ」

神部は脇腹を小突く

「影、お前駆け出しのくせに！」

胸ぐらを掴む

「何で？何でお前がモテんのさ？」

脇腹をグリグリ

「二人とも何か言うこと無いの？」

夜のデートまでしてテレる事無いでしょうw

クスクス笑うヒノエ

!!!

「ガシッ!!」

「おう影、ちよつと来いやw」

フドウに頭を掴まれる

.....

フドウがパーティーに参加して

三人で大社跡へ

「疲れた……」

皆に小突かれへろへろの影

独身ハンター達に絡まれた

「大丈夫？」

小首を傾げる天音

その仕草だけでドキドキしてしまう、

この巫女衣装は特別なのだ……

「ねえ、何か言つてよ」

「……………」

「言えよう」時雨口調

「ぶふあつ W! お前ソレ反則 W!!」

「もう! やつと笑った!」

仕方ないだろ、照れてんだよ

「天音、少し縮んだか?」

なんだか身長が

「踵を高くしてたからね、

ホントは影より低いよ?」

草履?

大社跡の一番奥、

滝の近くでフルフルを見つける

「天音、お前手え出すな」

「何で?」

「お前…ずっと弱いフリしてたろ?

俺に合わせて」

「……うん」

百竜夜行の時、平気でレウスに攻撃してた
空舞なんて完璧に出来ている

「ソロでどこまでやれるんだ？」

「レイア……」

「……そうか」

「もしかして……怒ってる？」

「いいや……自分が情けない」

ずっと守られてた、支えられてた、嬉しいと

同時に情けない!!俺は男だ!!

「早くお前に追い付かないとな」

「お?言うねえ、じゃ一人でやって見ろ、

骨は拾ってやる」

ニヤケる小太りで無精髭

「フドウさん!オサイズチは？」

「あ?そんなもん終わったぜ？」

通りすがりで狩ったのか!

「何が乱入して来ても俺が狩ってやる、

安心して戦え、天音……だったな、キャンプで

寝てても良いんだぞ？」

「ありがとうございます、でも

影の狩り見たいので」

ニコツと笑う

影の野郎、この娘不幸にしたらブン殴る！

……………

キャンプ

「結局居合抜刀は何回成功したんだ？」

フドウが影に聞く

「二回です……」

ついにフルフルを倒したが納得出来ない

「少ねえな、次はもっと増やせ」

「あの、聞いていいですか？」

天音がフドウに

「何で今回一緒に…」

「お前達がイチャイチャしないように監視だ」

睨む

「「えっ?!」」

そんな二人を見ると

「冗談だ！」

笑う

「実はな、ゴコク様に頼まれてな」

「ゴコク様に？」

「なんでだろ？」

二人で首を傾げる

「天音の実力聞いてな、その力に影が頼って

甘ったれる様なら…

性根を叩き直してやれってな」

肉を齧ると

「その心配は無さそうだな、影は前よりも強くなろうとしてる」

「ふう、何か…全部先回りされてる感じだ」

「期待されてるからじゃない？」

「はっはあ！その通りだ！春香なんかは逆で

頼らな過ぎて危なっかしいし」

「あの、フドウさん、一度聞きたかった事が

あるんですが」

姿勢を正す影

「あ？…何だ？」

「春香さんって…その…態度とか…」

「ああ、それな」

春香は感情で強さが変化しちまう、調子に

乗ってる時は強いが、気落ちすると明らかに

実力が下がる、だから調子に乗らせておく

必要があるんだ

それで俺のパーティーに入れたんだ

「え？春香さんがリーダーじゃ…」

「その方が実力出るからなw」

「あの…私も不思議な事があるんですが…」

「何だ？」

「その、ハンターとしての強さの他に…」

上手く言えないんですが…」

「ああ、俺も上手く言えねえが、

人としての『大きさ』の話しか？」

「何か違う価値観…年功序列とも違う…」

みたいなモノがある気が…」

「ほう、天音は賢いな、その通りだ」

例えばハンターとしての強さなら俺と春香、

ヤクシさん辺りは同じ位だ

二人は頷く

ただ先輩達は居るだけで人間関係を良くするし

問題が起こっても直ぐに解決する

???

「解らねえよな？ 里の運営を円滑にするように

確実に行動出来る…そこが一番違うんだ、春香はそんな事考えてるように見えないだろう？」

「なんだか春香さんは自分の強さしか

見てないよな」

あれ？ 兄貴もそんな気が…

「そうだ、それが若さなんだがな、自分の

仕事さえ出来てれば良いなんて跳ねっ返ってる

内は半人前なんだ」

「人としての大ききさ…『幅』かなあ？」

「良い表現だな天音、大体がよ、

俺から見ると春香は半人前だがな？

ヤクシさんから見たら俺もヒヨッコだぜw」

「じゃあ俺なんかは…」

「卵だなw、だけどな？ 百竜夜行に限っては

お前は俺より上だぜ？」

「影が認めて貰えたのって、その辺ですか？」

「ああ、全体指揮できる能力持つてるヤツは
なかなかないぜ?」

「じゃあ影が守人やったのは」

明るくなる天音

「無駄じゃない、影は狩人と守人の両方を

理解してるんだろ」

立ち上がると

「引き上げようや、影、百竜夜行の時は

遠慮なく俺達を使い、お前の駒なら喜んで

やってやる」

.....

「ゴコク様、影は心配無い、天音より弱い事を

恥じてるぜ」

小声で

「うむ、杞憂だったか、助かったゲコ」

「ミノト様、フルフル終わりました」

「では次は…」

「おい影！俺もパーティー入れろ！」

「僕も入りたいんだが」

ハネナガと神部

「天音、どうする？」

「良いんじゃない？」

影に笑い掛ける、

その笑顔だけで若手は腹が立つ

「じゃあ明日クエスト選んで行くとして…」

神部を見る影

「あの、顔が…その…」

神部の素顔を知らない影と天音

「ああ神部、俺も全然顔見て無いぜ？」

たまには兜脱げよ」

「仕方ない……が、引くなよ?」

兜を取る

現れたのは痩せた真つ白い顔、長髪に

目の下の隈が濃い、まるで病人

「おー、久しぶりに見たぜ」

笑うハネナガ

日焼けしたハネナガとはまるで正反対

「どこか具合悪いんですか?」

口を抑えて天音が聞くが

「だから見せたくないんだ、これで普通なんだ」

またラングロ装備を被る

「天音」

「何? ミノト姉さん」

ミノトはいつもの場所から出てくると

「ほら、顔に砂が付いてる」

天音の顔を拭く

「ち、ちよつと姉さん、自分でやるから」

「ようやく女の子に戻れたんです、
身形に気を使いなさい」

まるで母親の様、感情や表情が乏しいが
その優しさは現れている

「ああ、僕はミノトさんの為なら

怖い狩りにも行ける」

何度も頷く神部

「あれ？お前ミノトさん派かよ？」

「ハネナガさんはヒノエ様派ですか？」

「俺か？俺は今日から天音派になろうかなw」

ニヤニヤ

「僕も転向しようかな」

「ちよ！それは！」

語気を強めるが

「冗談だ冗談！」

.....

翌朝

「おはよう」

「ん、ああ…おはよう…:…:…:はああ?!」

「何ビツクリしてんのw?」

天音にとつてはいつもの行動、

土間に立っているだけ

しかし影にとつては違う

いつも一緒に腐れ縁が突然女になり、

しかも可愛い、そんな娘が朝起こしに来る…

これは…

これは伝説の…

夢に見るが絶対に起こらないと言われる…

『隣に住んでる幼馴染みの美人が

毎朝起こしてくれる』パターンでわ?

なにこのシチュ、幸せすぎじゃね?

だが気になる事がある

俺は家の鍵に無頓着だから空いてる事もある、

だけど鍵を掛けても時雨…じゃない天音は

入り込んでいる

「なあ、いつもどこから入って来るんだ？」

装備を着ける

「…え!？」

ビックリしている

「…へー、知らないんだあ♪」

「ちよっ!待て!」

「先に行くよ〜」

慌てて身仕度して出る

「おっ?二人で仲良く狩りかよ?」

「おう、ミハバおはよう」

「……………チツ」

え？今舌打ちした？

「おはよう、ミハバ」

「おはよう時雨、じゃない天音」

良い笑顔で

「なあ、俺、嫌われてるのか？」

「羨ましいからじゃない？」

「また皆に小突かれるのか…」

「仕方ないでしょ？」

「こんな可愛い彼女が出来ればw」

「自分で言うかよw」

日常、そして来訪者

「二回で回避―！」

横に転がる神部

「そらあつ―！」

ハネナガの抜刀斬り

怯むレイア

「空舞―！」

頭から尻尾の先まで斬る天音

「ちええい―！」

ブレスに合わせて居合抜刀！

レイアが更に怯む

「影！尻尾行け―！」

「はい―！」

「神部さんも一緒に―！」

「いやだ!!」

神部は足を横から斬る

.....

キャンプ

リオレイア討伐成功

水没林も慣れて来たし、四人で組んで毎日のようにフルフルやレイアを狩っている

「神部さんって……」

天音は少し呆れ気味、自己中って言うか……

「コイツはコレがあるんだよw」

ハネナガは理解しているらしい

「僕はね、リスクを極力減らすんだ」

片手剣を研ぐ

「それも一つの方法…ですか？」

少し感心している影

「皆よ、最初は神部の事を根性無しとか

男らしく無いとか笑うんだぜ？」

「慎重な感じですよね？」

「へえ、影は解るかい？だから僕は支給品

だけでほとんど成功するんだ」

「お金使いたく無いとかですか？」

首を傾げる天音

「うん、それもあるけどね、失敗すると

消耗が一番大きいだろ？それを無くしてるんだ」

ラングロ装備で顔は見えないが、

得意になって話してるっぽい

「春香なんかは最初バカにしてたけどなw」

すっごいリアルに想像できる、

文句言う春香さん

「今は理解したようだよ」

「あの、もしかしてソロの成功率で

言ったら…高いですか？」

慎重に聞く影、表情が分からないから何で

機嫌を悪くするのか分からない

「良く分かったね！僕は春香を除くと

若手の中で唯一9割こえてるよ？」

「勝てるモンスターばかりだからなw」

「だって怖いだろう？…影は良く見てるな、

僕のやっている事」

男で臆病って…

ああ、影もガルク恐がるしなあ…

トラウマ作ったの私だけど

………

「四人パーティーも馴れた様ですね」

ミノトがスタンプを押す

「じゃあ次は…」

「おう影、今日は居合抜刀何回成功した？」

春香が聞いてくる

「5回…あれ？もつとだ」

「よし、太刀を使うなら回数覚えてる

ようじやだめだ、全部居合抜刀で対応出来る

位じゃないとな」

ニコツと笑う、春香さんってデカイから

笑顔も威圧感がある

「おし、フドウ！蜘蛛殺しに行こうぜー！」

態度も相変わらずデカイ

「春香は相変わらずだなあ」

ため息の神部

「では影君、いよいよソロでリオレイアは

いかがですか？」

自信無い

「じゃあその間は俺と二人で行こうぜ天音」

「いや、僕と一緒に……」

ギルド中の男ハンターに俺も俺もと誘われる、

もちろん下心あり

「え、え……」

困る天音、影を見るが……挙動不審

（もう影！男ならハッキリ嫌だつて

言いなさいよね!!）

（二人とも困ってるわねえ、姉様なら

楽しむ所だけど、助けてあげましょうか）

「天音は舞の稽古をしましょう」

「え？ミノト姉さん達の神楽？」

「奉納の舞いを天音に伝えるために姉様は

着せたんですから」

（嘘だけどね、鍛える事にもなるし姉様も

納得する、この場も収まるでしょう）

「影！」

「ナカゴ? どうした?」

二階から首だけ出している

「師匠がお前に来て欲しいってさ」

「岩か」

.....

「はい、これ持って」

ヒノエは軽々とミノトの十字槍を渡して来る

「おつもお! ミノト姉さん

コレ持って踊ってるの?」

タタラ場前の道で舞の練習を始める二人

「足さばきが出来ないわねえ」

「難しいよコレ!」

ミノト姉さんて力強い

「うむ、次は天音も踊れるかもしれない!」

笑顔で頷く里長

「あ、天音！砦行つてくるよ」

「ちよつと待つて影！」

天音は走つて来ると小声でコソコソ話す

「あのさ、言いたい事はハッキリ言いなよ？」

「何の事だ？」

「…もう！あんまりいい加減だと私他の

パーティー行つちやうからね！」

「あ、…それは何か…」

腹立つ

「イヤでしょ?!」

「あらあ、影君は天音に気持ち伝えて

ないんですか？」

ヒノエの顔が直ぐ後ろに！

「自分の気持ち？」

「天音は言つたのにねえ」

クスクス笑う

「ヒノエ姉さん、この前からソレが

分からないんだけど？」

『一生言つてやる』なんて

『一生離れない』つて言つたのと同じよ？」

ウフフと笑うと道の中央へ戻つて行く

真つ赤になる天音

(うそ、そう取られるの？)

勢いで言つただけなのに)

「あ、あー、天音？」

「早く行きなさいよ！」

.....

夕方里に帰ると

「違うわ、ここで左足を軸に……」

「姉さん！もうムリ！」

へタリ込む天音

「まだやってんですか？」

「影聞いてよ、姉さん厳しいんだよ？」

助けを求め

「腕なんかもうパンパン！…ん？」

「…！」

大門から声がする、見るとガルクに乗った

見掛けない三人

「あら、誰かしら？」

「他の里の人よね？」

「知らない顔だな」

影達の前まで走って来ると

「おお？デカイな！

これがカムラのタタラ場か!!」

アケノシルム装備の男

「へえ、噂に名高い双子の美人かよ

…似てねえな」

こちらはプケプケ、上から下まで見てくる

「ちよつと、初対面で失礼じゃない？」

天音が前に出る

「お前ら下がれ！」

ガルクを降りてレイア装備の男が兜を脱ぐ
「連れが失礼したな、俺はトガシの里から

来たセキエン」

二十歳位の若者だが見下しているのが解る
眼力が強めで丸顔、全体が太く色白で髪は
オールバックだが似合っていない、太刀を
背負うが全体的に…お坊ちゃん？

後ろで二人が小声で聞こえるように

「見ろよアシラ装備だ」

「なるほどな、こつちに保護頼む訳だぜ」

「この里レベル低っ」

笑っている

「やめろ二人とも…ふうん、美人だな」

天音に近付くと

「今夜の宿を案内してくれないか？」

手を伸ばす

「止めろ」

影が立ち塞がる

（まあっ！熱い展開！）

ワクワクするヒノエ

（影がちゃんと守ってくれてる!!）

嬉しい天音

（しまった！勢いでやっちゃまった！

こっからどうする?!）

内心ビクビクの影

「何だお前？俺が誰か分かってんのか？」

トガシの次期里長だぜ？」

（だから…なに？）

三人の心中は同じ

影の背中に隠れ、しがみつく天音

その様子を見ると

「…そうか、その女はお前の…」

セキエンは太刀を影に向けると

「その女を賭けて俺と勝負しろ!!」

え？馬鹿なの？

一瞬そう思ったが

(言いたい事はハッキリとって天音は言った

…なら！)

「ああ、受けてやる」

「ちよつと影!!姉さん止めて!!」

振り返るとヒノエは目をキラキラさせて

「一人の女を取り合う二人の男の勝負、

なんて熱いのかしら…」

まるで照れてるように

「ね…姉さん？」

「女に生まれても、こんなこと一生に一度

あるか無いかよ?」

天音の肩を掴み力説する

「何でそんなに楽しそうなのよ?」

……

二人に木刀が渡される

「影君頑張ってえーw」

ヒノエに励まされるが

「姉様、どうしてこうなっただんですか?」

ミノトは冷やややか

「ヒノエ姉さん、私の意思は何処にあるの?」

天音もジト目、

ナニコノ流れ、ナニコノ展開

タタラ場前には影とセキエン、

両雄が向かい合う、そして囲む様に里の人々

「勝った方が天音と付き合うんだってよ！」

「何だよ、俺も参加したいぜ？」

「影!!俺も入りてえ」

ハネナガ

「僕には参加の権利は?!」

神部

ナニコレ? 私は物か?!

腹が立ってきた天音

「始めっ!!」

篝火の焚かれた道、ミノトの声が始まる

「そらあっ!」

セキエンの縦斬り!

「カンッ!」

影は難なく止め鐔競り合いになる

(重い、体重はありそうだけど力は無いな…)

一旦離れる

「せいっ！」

「カンッ！」

今度は弾く

「セキエン！コイツ手が出せねえぜ！」

「弱いぞ!!」

連れは言うが

…？手を抜いてるのか？

対人で天音の双剣を相手にしていた影に

とつて、セキエンの振りは遅すぎる

やってみるか…

「おおりゃあー！」

大上段から斬り掛かるが

「ちええい!!」

一瞬！

見事に居合抜刀が決まる

「おおーっ！」

ギャララーから歓声

「げはあつ！」

転がるセキエン、しかし木刀でレイア装備では
ダメージは少ない、吹き飛ばされても

立ち上がる

「まだまだあつ！」

「ちええい!!」

また倒れるセキエン

何度も立ち上がるがその度に居合抜刀を食らう

流石に連れも気付いた様で

「セキエン！もう止めろ！」

「勝てる相手じゃない！」

「コイツは手練れだ！」

「うるせえ！この女は俺のモノだ！」

ヨロケながら立ち上がる、その根性は

認めるが周りも段々シラケてくる、

ここまで差があると思わなかった

影にとっては居合抜刀の練習にはなった、

しかし天音を『この女』と呼ぶセキエンに
段々腹が立つ

「おらあつ！」

袈裟斬りに来るセキエンを体捌きだけで
避けて足を掛ける

倒れたセキエンに向かい

ヒノエ様には自分の気持ちを伝えろと言われた

天音にはハッキリ言えと言われた

なら！

「天音は俺のモノだ!!」

その場の全員に宣言するように

「ひゅー!!」

ギャラリーが一斉に冷やかす

「まあ！影君凄いで度胸！」

ヒノエの周りにハートが飛ぶ

「正直見直しました」

ミノトも珍しく驚いた様子

皆が天音を見ると…頬を赤らめ照れている

はずだよ？

天音の額に怒りのマーク

「ガシッ」

セキエンの落とした木刀を拾うと

影に向かい合う

「天音、どうした？」

「いってえ、…何だ？」

セキエンも起き上がる

「どいつもこいつも人をモノみたいに!!」

「バキイツ!!」

地面に振り下ろし木刀を折ると両手に持つ

「あ、天音?」

「なんだあ女!」

「食らえっ!空舞!」

飛び掛かる天音

.....

ギャラリーが囲む中心、

腕組みした天音の前には正座した二人

「2度と私をモノなんて言わない?」

「言いません」

頭にコブが出来た二人

「あんたは自分の里に帰りなよ?」

睨む天音

セキエンは連れの二人とヒソヒソ

「多分この女がそうだったんだぜ？」

「若手の中でも最強ってヤツか、

マズイヤツに当たっちまったな…」

「聞いてたのとずいぶん違うな、

もつとデカイと思ってた」

「あれ？もしかして春香さんの事？」

首を傾げる天音

「なっ?!別にいるのか?!」

「お前でもそんなに強いのに?!」

そこへガルクに乗った春香達が帰って来た

「何の騒ぎだ?!」

「あ、春香さん、この人達春香さんに

用があるみたい」

「なんの用だ？」

セキエンの前に出る春香

コソコソ話す

「レウス装備だぜ？」

「でけえ…やべえよ、この里レベル高えよ」

「いや、ナメられる訳に行くか！」

セキエンが前に出るが

「春香さん、なんですか？その荷物」

影がガルクを指差す、背中に大きな何か

「コレ持つて帰るって聞かなくてな、

狩りが長引いたぜ」

フドウが呆れている

「ヤツカダキの頭だ、どっからが頭か

わかんねえから適当にぶった斬ってきたw」

春香は笑いながら大きな袋を開け、

ズリりと引き摺り出すと頭を担ぐ

「なんてもん持つてくんだよ！」

「普通女ならやらねえぞw」

「ひゃひゃひゃ！春香らしいや！」

「やべえ、やべえよ、普通じゃねえよ…」

どこの蛮族だよ

「俺達がどうこう出来るヤツらじゃないぞ」

特にこの女はやべえ

「どうやってきり抜ける…」

首狩り族かよ

ガクブルの三人

「んで？アタシに用か？」

肩に巨大な蜘蛛の頭を担ぐ大女

セキエン達は直立すると

「噂に名高いカムラの里！」

その力を体験したく参りました！」

「おお！いいぜ?!やろうや!!」

笑顔で太刀を振り上げる春香

「!!、いえ！もう十分に

堪能致しました！今日は帰ります！」

恐れよ！

「そうなのか？また来いよ！」

「はっ!!」

三人整列して深く一礼する

.....

ガルクで走るセキエン達

「あんなバケモンだらけなのかよ……」

「なんであんなに強えのに保護頼んでくんだよ」

「俺はカムラに行くぞ」

「何でだよセキエン！」

「俺も強くなりてえ！」

.....

「姉さん、

影が負けてたら私はどうなったの？」

小声で

「影君が負けたからって何も

変わらないでしよう?」

「どういう事?」

「あんな馬鹿な勝負意味無いわよ?」

「私は無意味な勝負の賞品だった訳?」

「面白ければ良いのよw」

信仰

翌朝

「はっはっは！それは良い機会になったな！」

セキエンの経緯を聞いた里長は大笑い

「実はトガシの里長から手紙が来ていたゲコ」

ギルドで二人の話を聞く

トガシの里長、カイエンの手紙によれば息子の

セキエンがハンターとして成長した、それは

良いが天狗になってしまい『俺って強くな？』

のチュウニビョウ状態に、もしもそちらに

行ったら灸を据えてやってくれ、とのこと

「何でアタシらがナメられんだあ？」

春香が不機嫌

「大きな夜行の前には周辺の里に避難民の

受け入れを要請するゲコ、だからたまに
こんな輩が現れるゲコ」

一同納得する

「失礼します…」

セキエン達が頭を下げながらギルドに入つて来た

「てめえ！いい度胸だなあコリア!!」

春香が人を押し退けズカズカ近付く

「ひいひいっ!!」

後退る三人

「春香！止めるゲコ!!」

怯えるセキエン達に

「何用ゲコ？」

「はい、今日からここで鍛えて

いただきたいと…」

頭を下げる、すっかり態度が変わっている

「あ？お？おおう、そう言う事なら良いぜ！」

笑う春香、セキエンの頭をポンポン

「お早うございます」

「あれ？昨日の…セキエンさんだったわね」

影と天音が入って来ると

「昨日はすまなかった」

二人に歩み寄り謝るセキエン、太りぎみで

身長の割りに大きく見える

「強いな、中堅くらいか？」

影に聞くとギルド中が爆笑する

「コイツ駆け出しだぜえ!!」

「一番下っぱだ！」

「まだまだひよっ子だあ!!」

ゲラゲラ笑う

「え？そんな事無いよな？」

焦りながら聞くセキエン

「ハンターになって一年位か？」

「2ヶ月位だ…けど…？」

状況が飲み込めない影

「!!」

その三人の表情に、また爆笑するギルド

.....

「客人の登録は済んだゲコ？」

「はい、滞りなく」

「して?どこ行ったゲコ？」

「ヤツらなら団子屋で固まってたぜw？」

「ヨモギの芸は初見だとなあw」

「うむ、して影は？」

「ソロでリオレイアをやる気です、

天音も付いて行きました」

.....

「何で来んだよ?」

「何よ悪いの?」

久しぶりの二人きり、まだ照れがある影と

元々遠慮の無い天音

「なあ…今つて…化粧してるか?」

顔を見れない

「!、気付いたんだあ!ミノト姉さんに

してもらったんだよ?」

視界に入るように回り込む

「何?照れちゃった?今どんな気持ちw?」

笑いながら

「お、俺が狩ってる間は何やるんだ?」

照れて真上を見る

「ちよつと色々調べて見たいのよ、

じゃあ別行動で」

天音は翔虫で飛ぶ

この大社跡は名前の通り鳥居があり、
様々な小さい社が至るところにある、

明らかに人の住んでいた形跡も残っている

(この前のイブ…ヒコ　?とやらを、

もしかしたら昔の人は崇めたのかなあ)

いくつかの小さい社を見ながら登る

(もう調べ尽くされてるよね)

高い場所にある家に着く、

なぜかこの家だけは損傷も少なくて綺麗

なのでウツシ達を利用している、

大きな山門の向かいにある

縁側に座り考える

カムラの里にとってはタタラ場が神様、

でもここに居た人々は別の何かか神様…?

それがナントカヒコ?

「誰かいるのかい?」

障子を開けるウツシ

「教官?! いたんですか?!」

ここはウツシ達課報の休憩所、ほとんどの

人間は知らないがウツシの下働きをしていた

天音は掃除を担当していた

「ちゃんと掃除してますね…」

中はもちろん和室

「天音もハンターになったから交代で

掃除してるよ」

天音は考えていたことを話す、八畳の部屋

「天音、その辺りに興味があるなら一度

竜宮砦に行つて見ると良いよ?」

「竜宮…? 初めて聞きますが?」

「そもそもバリスタや撃龍槍は竜宮砦にあった

モノを真似して作つたんだよ」

「そうだったんだ!」

ハモンさんの考えたモノかと」

「天音…僕の言いたい意味を」

理解出来てないね？」

笑っている

「？」

首を傾げる

「それだけの『兵器』を『備えた』理由は？」

「あ…：そうか、それほどの何かが来る場所…」

イブヒコ？

「恐らくその通り、地面に大砲やバリスタが

埋まっていたり、登れないほど高い場所に

大きな大砲があるよ？」

「もしかしたらイブヒコを退治するため…」

大きな門を見ながら

「それは分からないけどね、

まあイブシマキヒコはともかく、僕はこの

大社跡と言われる場所全部が社、つまり

神域じゃないかと思ってる」

.....

「くそっ！」

足場が悪い！足元が水では戦いにくい

「グウオア！」

尻尾の旋回！四人なら居合抜刀出来たのに、

ソロだとコレほど出来ないとは

「おちつけ……焦るな……」

自分に言い聞かせる

コイツをソロで倒せば天音に並ぶ、

大事にやろう

三連ブレス、を読んで横から頭に一撃入れる

.....

「こんなの見たことあるかい？」

ウツシは錆びた剣の様なモノを見せる

「何ですかソレ？」

「色々な地域と場所にあつてね、ここの縁側

にも一本刺さつてたんだ、昔の人の手掛かりになりそうなモノだよ」

「すごい！コレからイブヒコの手掛かりとかも

解りますか？」

受け取るとマジマジと見る、

経年劣化した剣に古い字が書いてある

「これだけでは断片的で何も分からないから、

もっと見つけれたら良いんだけどね」

相変わらずモンスターの名前を覚えぬ娘だ：

「皆で探せば早そうですね？」

「なぜか見付かり難い所にあるんだ」

苦笑い

「高い木の枝に刺さつてたのは誰かの

悪意を感じたよw」

「師匠」

アヤメが飛んでくる

「あら天音、いらつしやい」

「あ、お邪魔してます」

正座したまま頭を下げる

「天音のこと私達にまで秘密にする事

無いのにねえ、時雨と付き合い長いのにさ」

二人で笑う

「ヒノエちゃんとミノトちゃんとの

約束だからね」

「師匠お？天音連れ込むなんて

影に殴られますよお？w」

「何を言ってるんだい？僕はヒノエちゃんと

ミノトちゃん一筋だよ？」

「それは一筋とは言いません」

.....

サマーソルトで飛び上がるレイア、
地面には紫の毒

(アブねえ…)

これだけは食らっちゃだめだ

突進を避けて後ろから斬り掛かる

こつちを向くとブレス！

(あつー今の居合抜刀出来たじゃん！勿体ねえ！)

以前と違い恐いとは思わない、体も動く、

俺はやれると自分に言い聞かせる

高台から天音が見下ろす

「影はやつぱり鈍いなあ」

あれだけ神部の戦い方を見たはずなのに

「しょうがない…ヒント位なら…」

廃墟の陰で研ぐ影、と、

「影」

天音が崖から降りて来る

「天音、どうした？」

「苦戦してる？」

「まだ道具もあるし心配無いぞ？それにな、

さっき気付いたんだ」

「何に？」

「神部さんのマネすればリスクが減る」

「ふうん…じゃ私は行くね♪」

ちやんと気付いた♪

倒すだけなら大技なんて使わなくてもイイ♪

「何か嬉しそうだな？」

「そお？」

影が追い付く♪

認めて貰える♪

.....

「はい、リオレイア完了です」

ミノトがスタンプを押す

「良くやったゲコ、これに慢心せずに

精進するゲコ」

ゴコクも笑う

「レイアをソロか…」

「どうした？セキエン？」

「それだけの腕があるのに、

何でアシラ装備なんだ？」

連れも頷く

「そろそろ防具作っても良いんじゃない？」

天音が肩の毛の部分に触る、

たしかにボロボロだ

「ゴコク様、私竜宮砦へ行ってみたいんですが」

「そうか、ハモン達も行くから付いて

行くと良いゲコ」

「じゃあ…」

「影は残って強くなるのよ？」

「私より強くないとカツコつかないでしょ？」

「…え？」

俺は一緒に行かないのか？腹立つ、

心配してんのに

「なあにい？他の男に取られないか心配い？w」

ニヤニヤ

「安心しなさいよー」

いたずらっぽく笑う

その様子にギルド中の独身男がムカついている

(美人で性格良くて笑顔が可愛く…)

そんな彼女に何年も一筋に思われて…

こんなベタな展開…羨ましい…)

全員同じ考えになる

『影をシゴくー！』

次の日

「お早う」

「…ああおは…！」

「ビツクリした？」

土間にニヤニヤした時雨がいる

「逆に驚くわ！どうしてその格好なんだ?!」

「私目立つからさ、用心しろってハモンさんが」

「そうか…」

「何？安心した？安心したの？w

今どんな気持ち？w」

コイツ俺が照れてるの解っててやってるよな

「ギルドいくぞ」

「うわ、もつとリアクションあっても良くない？」

「……………」

「何とか言えようw」

「ブハッ!!」

.....

「ひいっ！」

「バカ！そつちに逃げるな！」

神部に怒鳴られるセキエンに

飛び掛かるナルガクルガ

「おらっ！行け影！」

「は！はい！」

ハネナガに怒鳴られる影

ゴコクに「セキエンと組んで見ろ」と言われ、

出発しようとしたら二人に

「お前強くなれって天音に言われたよなあ？」

ニヤニヤ

「だったら僕達と行ってみないか？」

兜の下で笑う

と半ば強制的に連れて来られた

隣のエリアで回復と研ぎ

今日はナルガクルガ討伐

「お前ソロでどこまでヤレんだ？」

ハネナガがセキエンに聞く

「…フルフルです…」

申し訳なさそうに

「レイアはソロで狩ってないのか？」

なのにその装備？

「いや…仲間と狩っただけで…」

他の里に行くからナメられないように…」

見栄を張ったのか、チュウニビヨウめ…

「二人とも勘弁してやれ、

調子に乗ってただけだろう」

表情が分からない神部

「あのう、春香って人は何歳であの強さを？」

遠慮がちに聞くセキエン、あの出会いが衝撃

だったようでスツカリ大人しくなった

…気持ちは分かる

「あいつはたしか今22だ、

いよいよラージヤンをソロでヤル気らしいぜ？」

齒に挟まった肉の筋を取りながら答える

「全然満足しない女だからな、

ヤツカダキの頭で弱点の研究する位だ」

兜をずらしながら器用に食べる

「そのために？ 春香さんは確かソロで

普通に狩れますよね？」

「だからよ、そこで終わらねえんだ」

「更に短時間で狩るための研究をするんだ、

僕達も見習わなければ」

「カムラって…満足しないって言うか

立ち止まらないって言うか…」

頷く影

「ソロで狩れる様になっても夜行では…ダメか」

「乱戦で役に立つには更に強さが必要だからな、

休憩終わり！ 続きだ！」

「僕達はサポートだけだ、

二人で何とかしてみろ」

.....

ギルドに帰って来たへろへろの影とセキエン

二人が限界でクエストリタイア

「セキエン大丈夫か？」

「防具が傷だらけだぞ？」

「だめだ、俺もレイアのソロをやらないと」

仲間に迎えられるセキエン

「いててて……」

影はギルドストアで道具を見ていると

「おう影、まだ元気だな？クエスト付き合えやw」

ニヤニヤ笑うフドウ達に両肩を組まれ

連れて行かれる

「ちよっ！フドウさん！」

足をバタバタ

「おおwやつぱり元気だわw」

笑いながら出て行くのをギルド中が

ニヤニヤ見送る

「マジかよ…」

セキエンは血の気が引く、

影って1日に何回クエスト行くんだ？

「うむ、良い傾向ゲコ」

「影君大丈夫でしょうか…」

ストレス発散のオモチャにされている気が…

二日後

「ただいまあ」

時雨の姿と声

「おお天音！帰って来たか！」

ギルド中が迎える、姿は時雨だが

「アマネ？お前は時雨じゃなかったのか？」

スラリと背が高い色黒の男、

切れ長の鋭い目に…首にマフラー？

トビカガチの装備

見慣れない連中だが…

「あれ？君は…」

「ウツシ先生、今日からここで

御厄介になります」

化

「ギルド行きたくねえ…」

暗い顔の影

「聞いたぜ！wシゴかれてんだってな！w」

「竜宮…砦？とかいうのはどうだったんだ？」

「いつもは設備の勉強だけだな、天音がいた

お陰でな！wソレだけで気分が違ったぜ！w」

「何で楽しそうなんだミハバ？」

微妙な表情だ…笑ってるような怒ってるような

「お前が辛そうなのがな！w」

リアジユウバクハツシロ！w」

「…何語だソレ？」

「気にするなw」

少し歩き

「ハモンさんお帰りなさい、あの…」

ミハバの様子が…」

「ん、それはな…」

竜宮砦のキャンプで天音が料理を作つてな、

影より先に手料理食つたと自慢しようと

思つた様だが

「ん？料理？影はもう食べたよ？」

当たり前じゃん、影に食べさせるために

教わつたんだよ？」

と言われてからあの状態だ

「うわあ…」

「…そつとしておいてやれ…」

「俺はヒノエ様一筋だチクシヨー!!」

「カンカンカンカン!!」

金槌の音が聞こえる、

うん、放つて置こう

ギルドに行くよ

「あ、影、ただいま」

時雨の姿の天音と

「君がそうか…」

誰だ？見慣れない四人

カムラシリーズに似た装備を着た三人と、

リーダーっぽいカガチ装備の男

「天音、この人は？」

「ニシノの里の風月（フウゲツ）さん」

カガチ装備の男を見る

竜宮砦の帰りの時に隣を並走する舟があり、

一緒に来たとのこと

「改めて礼を言いたい」

影に頭を下げる

「え？なにが？」

天音が男連れて帰ってきた、

それで頭が一杯だった

「ほら、影のお兄ちゃんが助けた舟の…」

「その時助けられた中に俺の父親がいたんだ、

この時雨が教えてくれた、弟がいたとはな…

それにしても…」

「？」

「君がカムラの新たな力か」

連れもヒソヒソと話している

ニシノの風月、歳は19で180を越える細身、

色黒で長髪を一本に纏めている、たまに

任務で来るウツシに憧れ諜報の真似事を

するらしいが…

顔が…カッコイイ…腹立つ…

「先生と呼ぶのはどうかな？」

ウツシは困り顔

「いえ、先生と呼ばせて頂きます」

なぜウツシに憧れたのかと言えば

『なんかカッコ良いから』

要するに子供で『残念』なヤツらしい

「なぜこの里に？」

腕組みすると

「最近の襲撃でヌシとかいう化け物を2頭も

退けたと聞く、しかも若い男が

指揮を取ったとも」

行商人によつて噂は広がる

「その男に是非とも会つて見たかった」

.....

「お前は風月じゃないか！」

「誰かと思えばトガシのボンボンか」

「うるせえ！顔だけで残念なヤツが！」

「顔も悪いより良いだろう?」

セキエンとフウゲツは旧知の仲だったらしい

「おまたせ」

巫女衣装に戻った天音が来た

ギルドに花が咲いた様

「ん、じゃあ今日は…」

どのクエスト…

「誰だ?この美人は?」

説明すると風月が天音に寄る

「なぜ男のフリを?カムラに来た途端に

しゃべり方まで変わったぞ?」

「遠出だから用心のためだよ?」

親しげに会話する風月に腹が立つ影、

ハッキリいえば美男美女でお似合いなのだ

「しかも美しいとは…」

更に寄ろうとすると、天音はひよいつと

後ろに下がり

「残念だけど私は…」

影の後ろに

「フン、恩人の身内だがコレは話が別だ！

貴様に決闘を…」

「やめとけ！」

セキエンに止められる風月

「離せセキエン！」

「おうコラア、黙って聞いてりやあ…

うちの影にケンカ売ってんのか？」

春香が来る

「すいません姐さん！コイツ何も分かってなくて！」

セキエンが直立で詫びるが

「ほう、春香…

確かカムラの若手最強の女だな、俺は

ニシノの若手でも少しは名が知れている、

手合わせ願おうか」

「バカ！止めろって！」

「フン、外に出ようか」

.....

ヨモギの団子屋

「えーと風月はソロで狩れるモンスターは？」

影は苦笑いしながら、

年上だけど呼び捨てで良いや

「レイアだ……」

顔の右半分が不細工になった風月

「クエスト……無理そうね」

天音も苦笑い

ゴコクに四人で採取に行くように言われた

「バカだな、春香姐さんに挑むとはよ」

セキエンは呆れる

「セキエン、知ってたなら止め」

「止めただろ!!」

「春香さんに挑むなんて勇氣あるねえ！」

団子を持つて来たヨモギ

「はい！うちのお団子食べればすぐに治るよ？」

（ヨモギ、いくらなんでも言い過ぎだろ）

（ヨモギつて商売上手よね）

（うお！この子供、腕もスゲエが口もスゲエ）

「おお！それは是非とも頂こう！」

遠慮なく食べる風月

なるほど残念だ

風月の連れに話を聞くと

『ニシノの若手では強い方だが人に騙され

安く、一人にすると何をするか分からない』

タイプらしい、

要するに連れの三人は『監視役』

「ほう、影はレイアをソロか、

俺と同じくらいか」

風月の顔から腫れが引いている、バカつて凄い

「あの女はどの位強いんだ？」

「カムラでも最強クラスだぞ？」

「ベテランと比べてもトップクラスよ？」

「俺なんか見ただけで心が折れたぞ……」

ため息のセキエン

「どういう事だ？」

「ヤツカダキの頭千切って持って来たぞ……」

セキエンの言葉に青くなる風月と三人、

確か火を吐く蜘蛛の化け物じゃ……

「ほ、ほう、な、中々やるではないか」

……………

ニンジャソードで確実にアオアシラを

斬りつける風月、なるほど言うだけある、

踏み込みが素早く一撃離脱する、早さだけ

なら天音に匹敵するかもしれない、

盾を持たないのはスピード重視だろう

「攻撃と離脱を同時に出来ねば食らうぞ」

「うるせえ！お前の攻撃は軽すぎんだ！」

「風月さん！セキエンさん！」

足が止まってる！」

「二人とも動け！」

珍しく影が怒鳴るが仲良く尻餅に巻き込まれる

天音は考える、二人とも決して腕が悪い訳

ではない、集中力が無いようだ

その点だけなら影の方が上ではある

影も思う、セキエンはそもそも足が遅い、

ガード出来る武器の方が合ってるだろう

.....

ギルドへ帰ると

「どうだった？風月」

風月の連れ達が話している

「まだ駆け出しと言う割には影は確かに強い、

やはりカムラは全体のレベルが高いぞ、

団子屋の子供でさえ……」

なるほど、連れの三人はカムラの戦力を

計っていたようだ

（風月ってバカなフリしてるだけか？）

（なるほどカムラの内偵してたのか）

（こりや弱味なんか見せられねえ）

ギルド中が聞き耳を立てる

「しかも団子の回復力と来たら……」

（あれ？……やっぱりバカだ）

「ああ、やっと帰って来た！」

ヒノエに出迎えられる

「ヒノエ様、どうしました？」

「んー、やっぱりねえ…」

少し困った顔で

「せっかく他の里の若手が来たのは

良いけど…影君って一番影が薄いのよ」

笑顔でスゴイ刺さる事を言う

影は見る

巫女装備で可愛い髪型、美人の天音

髪こそオールバックにしているが丸顔で太い、

全体的にお坊ちゃんなセキエン、そして

次期里長で多分金持ち

見た目だけなら達人の雰囲気風月、

しかもカツコイイ

皆濃いキャラクター

俺だけ無個性か？

「天音、影君の髪どう思う？」

「正直…ちよつとは揃えたほうが…」

ボサボサ頭を触る

「そうなのか？じゃあ…」

一緒に髪を触る影

「という事で切ってあげましょうw」

「ヒノエ姉さん止めて！だったら私がやる！」

「出来るのか？天音？」

料理が出来るから器用？

「姉さんに任せたら面白くされちゃう!!」

外に走って行く

(面白くってなんだ?)

「あらあら、残念w」

ヒノエ様は俺の髪型どうする気だったんだろう…

とりあえず髪型を考える、

中途半端に長さはあるから…

「影、ハサミ持って来たけど…」

「ああ、ありが！」

「天音に聞いたぜえ？」

「春香さん!!？」

.....

「だっひやっひやっひや!!」

「ぶふわあっ!!」

「.....」

「やっぱりこうじゃねえとなあ!」

春香は気に入ってるようだがギルドで

笑われる影

短髪で真つ赤、つまり春香とおそろいにされた

「春香!お...弟できたなあ!」

爆笑のフドウ

「こーコレくらいの方が目立って良いかもな!」

「春香にオモチャにされたか!」

ハネナガと神部も笑いを堪えている

「ほっほお、良い色になったゲコ、

影、天音、二階に来るゲコ」

座敷には里長、ヒノエ、ゴコクがいる、さつきまでの空気と違い緊張感がある

「さて、影はまだ若いを知つて貰いたい事があるゲコ」

ただ事ではない雰囲気に緊張する二人

「影君、天音、突然セキエンさんと

風月さんが来た事、どう思つてるかしら？」

「どう……？」

「どう思う……やっぱり何か調べに来てるの？」

「うむ、天音、その通りだ」

眉間にシワが寄る里長

「何を調べているか解るゲコ？」

二人で首を傾げる

「まずは各里の力関係を教えておこう」

里長が説明する

カムラは良い鉄に恵まれ裕福ではある、

しかし輸送の手段は少ない、陸路で行けば

トガシの里、水路で行けばニシノの里がある、

極端な話をすれば関所でも造られたら

鉄の輸送手段が無い

「このカムラ自体が辺境だから立場的には

決して強くはないのよ」

「それに大きな弱点を抱えているゲコ」

「弱点？」

不思議そうな影

「百竜夜行が起こることゲコ」

「うむ、このカムラが弱れば支配しようと

考える者が出てくるだろう」

「そんな…」

あの二人に裏がある…？

「今の所は良好な関係ゲコ、問題はその

良好な関係を維持している、この里の

重要人物ゲコ」

「重要人物？」

誰？

「ウツシさんの隊よ？ 周辺の里に

諜報に行くでしょ？」

「セキエンまでは良かったが風月はウツシを慕っているからな、放っておくとウツシに

張り付いて動向が筒抜けになってしまう」

過去にニシノの里へ行つた時、風月に

張り付かれたそうだと

「そこでお前の存在ゲコ」

影に笑いかけるゴコク

「俺？」

「うむ、まず各里が知りたがっているのは

百竜夜行におけるお前の力だ、夜行という

驚異を防ぐ力は衰えて来ていた」

「ワシも里長も歳ゲコ、いつまで

指揮出来るか分からんゲコ」

「そこに全体指揮が出来る若者が出て来た訳だ」

影に顔を向ける里長

風月が言った『新たな力』

「その次はカムラを継ぐ者、

つまり最有力なウツシゲコ」

「だけどウツシさんは探られたく無いのよ？」

「そこで影君を目立つ様にしたの」

笑うヒノエ

「そうか、私達は囀になるんだ」

天音が納得する

「その通りゲコ、影よ、セキエンと風月を

常にパーティーに入れるゲコ」

「そうすれば監視している『連れ』の目が

分散して、カムラの内情を知られにくい」

「そのために目立つ様にしたのよ？」

「居なくなったら髪を戻しましょうか」

クスクス笑う

「本来なら春香に組ませる所だが、

すっかり春香に怯えてしまったゲコW」

「セキエンと風月は深い考えなんて

無いですよね？」

そんな感じはしない

「…そうか！あの二人も囧…」

ピンときた天音

頷く三人

「恐らくそのために目立つ行動を取ったゲコ

…いや、取らされたゲコ？」

天井から顔を出すウツシ

「僕の見た限りでは風月は普段通りです、

天然でトラブルを起こす人材ですから

目眩ましには最適です」

引っ込む

「何だか化かし合いですね」

ため息の天音

「このカムラを活かす、それを考えれば良い」

「お前達は普通にしていれば良いゲコ、
後はワシらの仕事ゲコ」

照

水没林

「セキエン！どうだ?!」

「うおおお！重いいい！」

大剣を使つてみるセキエン、振り回される

「フン、情けないヤツめ」

「お前は振れるのかよ！」

風月だつて多分振れない、

二人で仲良く尻尾ビターンされる

「二人とも！ちゃんとナルガ見て！」

何でこの二人は！

「ガキン！」

「もう切れ味落ちた！」

「翼硬いぞー！」

「ぬうつー！強い！」

「三人とも！だらしないわよ！」

ナルガの背中を連続で斬る

隣のエリアで回復と研ぎ、

幸い泥水の無い場所で戦いやすい

「大剣の方が合っていないか？」

「いや、やっぱり重てえ」

体格的にも合ってるが

「所詮お坊ちゃんだからな、鍛え方が

足らんのだ」

「もう！何で二人は仲悪いのよ！」

「コイツ偉そうに喋るんだ」

「フン！不自由なく育ってるだけのヤツが」

なぜか今は息ピッタリ

「？、本当は仲良いとか？」

「そんなわけあるか!!」

.....

ギルド

何とか成功したが天音の力に頼ってしまった

「とにかく翼が硬い、武器を強化しよう」

もう一度ナルガに

「ああ、俺も溜め斬り出来るように

しないとな」

「ふっ、未熟だな」

「風月さん、一番攻撃してないよ?」

四人で組んで数日、あまり成長しないが

良いパーティーになっている

「とにかく天音一人に頼っちゃダメだ」

二階から顔を出して聞くゴコク

(ほっほお、影はリーダーやってる様ゲコ、

良い傾向ゲコ)

座敷に行く

「残りの連中はどうゲコ?」

「トガシの二人は何も調べようとしませんね、

諦めた様です」

報告するヒナミ

「ニシノの三人は行商人の出入り、鉄の

生産量を探っている感があります」

「よし、全員の目が里長から離れたゲコ」

「あの異人との取引ですね?」

「あっちの島はガルクしか居ない…

と思わせたゲコ」

「新たな販路が確立すれば」

「カムラは更に強くなるゲコ」

.....

「風月はなぜハンターになったんだ？」

外の団子屋

「うむ、俺は子供の時にウツシ先生が屋根を

飛び回るのを見掛けてな、聞けば本業は

ハンターだった」

食べ終わった串を投げると盆に刺さる

「それから鍛えて、特に走る、跳ぶは

ニシノでも一番になった」

教官って何歳なんだろ？

「得意な事は？」

「狩りだ、見たら解るだろう？」

だが連れの三人は首を振る、

明らかに違うようだ

「本当は何なの？」

天音が連れに聞くと

「投網だ、漁師の方が向いてる」

「コイツの足腰は舟で鍛えられたんだ」

「それが憧れだけでハンターになったんだ」

「フン、俺はウツシ先生になりたいんだ」

良くも悪くも真つ直ぐなヤツらしい、

自信過剰だが

「セキエンは？」

「俺か？俺は里長の長男つて事以外は何の

取り柄も才能も無くてな」

「自分からそう言えるつて凄い事よ？」

欠点を人前で、しかも平然と言える

「おだてるなよ」

茶を啜る

「子供の頃から何をやっても誉められて、

おだてられて勘違いしてたんだ」

串を投げると盆にさえ当たらない

「誉めて伸ばばそうとしたんだらうけど…」

この里に来て気が付いた、ハンターやっても人並み以下だ」

「でも続けるのは…」

三本目の団子に取り掛かる影

「子供の頃からオヤジが大嫌いだよ、

憎んでさえいた」

影と天音は複雑、憎む家族さえ居ない

「お前は何をやらせてもダメだって言われて

育った、周りは里長の子供だから誉めてた

だけだ…

親父だけだったんだな…本当の事言って

叱ってたのは」

もう一度串を投げる、刺さらずに落ちる

「親父は元ハンターでもある、越えて少しは

親父に認めてもらいたい」

食べ終わり

「それで？影は？」

「決まっているだろう、影は照殿の弟だぞ？」

「…いや、兄貴になりたいわけじゃ…」

「違うのか？あの照殿に憧れないのか？」

「身近に優秀なヤツが居ると色々あるんだろ」

「色々とは何だセキエン？」

「色々だよ」

「また始まった」

呆れる天音

「コラア!!こんなに散らかして!!」

ヨモギが二人の前に

「お客様でもマナーがあるでしょ！」

片付けなさい！」

素直に片付けるセキエンと風月、

ヨモギって愛想良いのに怒らせると怖い

「天音がハンターになった理由は？」

「うむ、興味があるぞ」

「……一人で食べて行くためと……」

影を見る

「そんなの聞くだけ野暮でしょ！早くして！」

ヨモギって…何歳だ？

………

「良く見て！あれは構えよ！」

指示だけする天音、影から手を出さずに

見ていてくれ、と言われた

ナルガクルガへ走り込む三人は止まり、影と

風月は横へ跳ぶ、セキエンはガード

「ガキーン!!」

「そうか！隙じゃないのか！」

思い出した！夜行で見てる！

飛び掛かりの予備動作だ！

「ガードしてたら攻撃できねえ！」

「素早く動けば良いのだ！」

「とにかく動きを見るの！」

影は視界が広いが動きを忘れてる

セキエンは大剣を使えていないし全体に遅い

風月は弱点を理解していない

…理解出来ない？

………

クエストリタイア

天音が参加しなければ、ココが自分達の

立ち位置

「俺やっぱり太刀に戻った方が

良いかもしれない」

痩せそうなセキエン

「軽さこそ正義ぞ」

ふんぞり反る

「風月さん、翼じゃなく頭とか斬れない？」

何で行かないの？」

「正面は危ないだろう？」

「とにかく明日もナルガクルガだね影…影？」

「あ、ああ」

「何ボーツとしてんの？」

「ちよつとな、今日は終わりにしよう」

影は見回すと

(春香さんは聞きづらいから…)

「フドウさん、ちよつとお聞きしたい事が」

「あ？」

不精髭の小太り

「セキエンに大剣教えろってんじゃねえよな？」

「影、私は？」

「天音も一緒に来てくれ」

ギルドの二階

「何だ？話は？」

座敷に腰掛ける、影の真剣な表情に察して

「気になるのか？」

「……………はい」

溜め息を吐くフドウ

「お前はまだ若い、染料が合わなくても

まだ十代だ、取り返せる」

「？」

「先ずはしっかり睡眠を取る事だ、そして兜の

中がムレないよう頭皮を常に清潔にしてだな」

「あ！そうじゃありません」

「フドウさんつてもしかしてw」

「バ！天音！俺まだ30だぞ！

気になるわけあるかよ！」

レウスの兜を手で抑える

気になってんだな

「…あの、兄貴ってどんな人でした？」

じつと影の顔を見るフドウ

「…そうか、お前もガキじゃなくなったか…」

「ガキ？」

首を傾げる天音

「なるほどな、春香が居ちや聞けない

内容だわな」

ニヤリとする

「最近違和感があったんです、

やっぱり兄貴は何か…」

「あー！それって私が現実味が無いって

言ったヤツ？」

「ちよつと待ってろ、ゴコク様の方が俺より

上手く話せる」

フドウは降りて行くとゴコクが来る

「ほう、照の話ゲコ？」

「はい、憧れてたはずなんですけど…」

その存在の薄気味悪さを話す

「ふむ、死者を家族の前で悪く言うのは

気が引けるゲコ」

「悪く？ やっぱり何か？」

照の才能は確かに天才レベルじゃろう、

しかし余計な事に目立つヤツゲコ

「目立つ？」

その何処が悪いんだ？

「目立つ天才、じゃから子供にとっては

ヒーローゲコ、子供には憧れの存在ゲコ」

春香なんぞは中身が子供ゲコ、

じゃから今でも照はヒーローゲコ

「あ、それでか…」

なんとなく春香さんには聞きづらかった

「しかしワシを始め、大人から見ると

全く別の人間ゲコ」

「別？ですか？」

「影、お前も薄々感じている事ゲコ」

照の考え方を一言で言えば

『俺を見ろ！』ゲコ

「何か子供っぽいなあ」

クスツと笑う天音

照の行動全部がそうゲコ、

里のお使いを進んでやる、クエストを

頑張り強くなる、そこまでは良かったゲコ

「何かあったんですか？」

先ずは無謀で派手な攻撃が多くなり、大技を

使い回復は仲間任せになって来た

それに百竜夜行では指示を聞かず大物や強い

モンスターへ向かう様になって行った

「…その辺なんだ」

説明されて理解出来た

自分の勝てる見込みの無いモンスターに

立ち向かうその

『無謀な行動』

味方に支えて貰うのが当たり前

『常に中心に居ようとする存在』

子供にとってはカッコイイかもしれない

だけど大人から見れば

『子供のまま大きくなったヤツ』なんだろう

「そしてあの舟の事故ゲコ、影、

照の死の際は聞いているゲコ？」

「?何かあったんですか？」

「一人助ける度に、俺はカムラの照だ、

と言ってたそうだ」

「う…」

なんだよそれ、すっげえキモい

「俺を誉めろ俺を認めろ…」

常にそんな気持ちでいるヤツゲコ」

「もしかして、転覆してた舟助けたのって…」

「おそらく称賛を浴びたいだけ…ゲコ」

「……」

「……」

「影よ、お前は成長して心が大人になった、

だから照に違和感を覚えたゲコ」

「私も感じてたのそれかぁ」

「何でそんなに誉められたいんだろう」

「人に認められたい、その気持ちは

当然ゲコ、しかし度が過ぎたり方向を

間違えれば迷惑な子供でしかないゲコ」

立ち上がると

「影、お前は違うゲコ、お前は

『自分が勝つ』事より

『里を守る』事を優先してるゲコ」

腰を伸ばしながら

「百竜夜行を見れば解るゲコ、お前の指示には自己顕示欲が無い、最小限の力で効率が良いのが解る、フドウ達もその辺りに気が付いたからお前の指示に従ったゲコ」

「影、大丈夫？」

「ああ、ちよつとショックだった」

ゴコク様は降りて行つた

「聞いてたぜ」

「ナカゴ」

「確かに夜行で勝手な事されちゃあ

迷惑だったろうな」

「皆を危険な目にさせたんだらうね」

「でもよ？他の里を助けてカムラの株を

上げたのも事実だろ？」

礼を言つて来た風月

「そこは認めてやれよ？影」

自己満足のためだけの人助け

それでも結果的には命が助かった人がいる

「はあ…何で悩まなくちゃならないんだ…」

「でもはつきりしたんじゃない？」

「何が？」

「影つてさ、ハンターとして強くなるのは

『兄貴になる』とか思つてたんじゃない？」

グサツ！と刺さる、何だよ勤が良すぎるぞ天音

「照さんが不気味に見えたつて事はさ、

影が大人になつたつて事でしょ？」

「実感ないな…」

「影と照さんは違うつて

ハッキリ解つたじゃないw」

強くなるのを躊躇わなくなる

天国と地獄

「ん？」

目覚めた影

朝飯…どうしようか…な…

暫し布団の中でモゾモゾする

天音はまだ来ない

まだ時雨だった時に恋話をしてしまった

事を思い出す、名前を覚えてるか聞いてきた

あいつ試してたんだな…

もう一度会いたいって…本人の前で…

本人の前であんな話！

恥ずかしい！めっちゃ恥ずかしい！

「うぐおがぁーっ!!」

布団を巻き込みゴロゴロ転がる思春期

黒歴史じゃねえか!!…ん？

そういえば天音はどうやって入って来るんだ？
鍵は掛けていないが…関係無く入るよな…

「よっ…と」

布団から立ち上がり見回す、

窓には格子、入り口には引き戸に

つつかえ棒（今は掛けていない）

まさか天井？

見上げる、何もなさそうだ

「…ゴソ…ザリ…」

「ん？」

考えていると家の裏から何やら音がする、

音を辿ると床の間の辺りからだ

「？」

誰だ？タタラ場の壁と家の壁の間だろう

掛け軸の前に立つと

「ギイイツ…」

何?!

壁が回転扉の様にゆっくり回ると…

「あ!」

天音…

目が合う…

手には草履…

間

「
…
…
…
…」

「ギイイツ…」

天音は目を逸らすと回転扉を回す

「ガシツ!!」

「天音! どういう事だ?!」

閉まる直前、扉の縁に指を掛ける

「何で気付くのよおっ!」

往生際悪く扉を閉めようとする天音

「お前! ここから来てたのか!」

両手で引っ張る

「ちよつと! しつこい!」

バレたのになんだよこの態度!

「ここ俺の家だぞ!」

「うぎいいいっ!!」

本気で抵抗する天音

「こおんのおお!」

全力で力を込める影

「もおっ! しつこいってばあ!」

「もうバレただろ！お前こそしつこい！！」

「おらあつ！」

「きやあつ！」

全力で引つ張ると反動で

「ドカツ！！」

「いってえ……」

鼻が……コレ鼻血出てない？

「いったあ……」

額に何かがぶつかった

「！！」

固まる二人、気が付けば倒れた影の上に

天音が覆い被さる形に

「ガラッ！」

「えっ?!」

入り口に立つハモン

「……」

「……」

「……」

暫し影と天音を交互に見る、と表情を変えずに

「……………邪魔したな……」

ピシヤツと戸を閉めて行く

「ハモンさん!、違うんです!」

「ちよつと!動かないですよ影!」

「ハモンさん!あれは違うんです!」

「そう！事故です事故！」

ハモンの工房で必死に弁明する二人

「あのな、お前達は親もおらんだろう？」

同棲しようが誰も文句あるまい？」

「……チツ」

どこからか舌打ちも聞こえる

「だからハモンさん違うんですって！」

「あれは偶然……」

「向こうまで聞こえてるわよ？」

ヒノエ様！

「ハモンさん、お風呂の件ですが」

「その話をしに行ったらな、影と天音が……」

「だから違うんですって！」

「そう事故よ事故！」

……

団子屋で風月、セキエンと合流して

「どうかしたのか？」

「うむ、影はともかく天音が暗いのはイカン」

「朝から疲れる事があつてな…」

「どうやって誤解を…」

「お前のせいだぞ？」

「影がしつこいからだよ！」

「大体お前があんな！」

「夫婦喧嘩しな—い!!」

ヨモギが笑いながら呼び掛けてくる

「…チツ」

「…チツ」

「…チツ」

なんか舌打ちがそこら中から聞こえるぞ？

ギルドでクエストを選んでいると

「ミノト！ティガあるか!？」

影達の後ろからデカイ声

ティガ一式にティガのハンマー

「ヤクシさん！お怪我はもう

よろしいんですか？」

「おお！ヤクシさん復帰かよ!！」

「もつと休んでも良いんだぜ？」

謹慎だろ先輩!！」

「ヤクシさん!！」

春香が走って来る

「夜行の時はありがとうございます!！」

深々と頭を下げる

小声で

「おい影、姐さんが頭下げてるぞ?！」

「あの御仁は何者だ?！」

「ベテランのヤクシさんだ、

「百竜夜行で怪我したんだ」

「脱臼ってのは厄介だな！

骨折より痛みが長えし、可動範囲が狭くなつたぜ！」

肩を回すヤクシ

「リハビリにティガやるぞ！」

笑っているが

え？今何て？

リハビリとは?!

「ヤクシ！ちょうど良いゲコ！影達を

見てやってくれんか？」

「冗談だろゴコ様？またガキの

お守りしろってかあ？」

「お前の目で一度見てやって欲しいゲコ、

皆影に優しいからなあ」

「ウツシさんの仕事じゃねえかよ」

「ウツシは得意を伸ばすが…」

欠点をハッキリ言えない質ゲコ」

「五人以上は縁起悪いぜ？」

「リハビリならよかろ？」

………

拝啓 親父殿

トガシは変わらないでしょうか

カムラに来てから早半月になります

俺は今砂原でカムラのベテランの

リハビリに付き合っています

リハビリとは病人が復帰するための

準備だったと思ってました

思ってたのと違う!!

倒れているティガレックスを呆然と眺める四人

「あんだよ、無事な牙少ねえな…」

力尽きたティガレックスの血塗れの

口を開けるヤクシ

「おっ?この辺無事だな」

「ガチャン!!」

ガチャンっ?!

ガラスが割れるような音を立てて四人の

足元に血だらけの牙が数本転がる

ヤクシがハンマーで叩いたのだ

「欲しかったら持つてけ!」

剥ぎ取りとは?!

凄い早さで首を振る四人

ティガが瀕死になってから影パーティーに

任された、しかし何も出来なかつた

危うくクエスト失敗しそうになって

ヤクシに助けられた

四人掛かりでヤクシ一人に及ばない、

ヤクシ一人なら10分と掛からなかつたろう

「ダメだなお前らー！」

テイガの前足に座るヤクシの前に立たされた四人

兜を取ると日に焼けた顔に白髪混じりの短髪、

里長と同じタイプの迫力がある

「テイガに勝てねえ事じゃねえぞ？」

まるで基本が成ってねえ！」

こんがり肉を齧る

いやテイガレックスだよ？初めてだよ？

仕方ないじゃん？本来行かせて貰えないよ？

「おいゴボウ!!（多分風月）」

「はい…」

「テメエは足の速さだけだ、

体捌きが出来てねえ、武器が使えてねえのを

足でカバーしてるだけだ！」

「そんでダイコン！（セキエン）」

「はい……」

「テメエは自分が何を出来るか分かってねえ！

足が遅エー！」

「ではどうしたら……」

「簡単だ！走り込め！」

「で影……ニンジンかテメエは？」

立ち上がり赤い頭をワシワシ掴む

「双剣と練習したせいか上半身の動きは

出来てる、だが全身の連動が出来てねえ！」

「はい……」

「そんで……天音？だっけか？」

「はい、元時雨です……」

（何度言っても覚ええない人だわ）

「お前だけは全部出来てる、お前はガルクを

連れて行っても良い、

後は全員走れ！虫も禁止だ！」

「何で私だけ？」

「研ぐ回数がどうしても多いからな、

話は終わりだ！」

キャンプに向かう

うしろを付いて歩きながら小声で

「体の連動って何だ天音？」

「私に解る訳ないじゃない」

「走り込み…苦手だ」

「武器が使えていない…とは何なのだ？」

ギルド

「どうゲコ？あの四人は？」

「天音は問題無いしトガシの倅は何とかなる、

だが影とニシノのバカは教わる才能が無え」

「どのへんゲコ？」

「素直にハイハイ言うだけで、何で言われて

何をするべきか分かってねえよ」

「やれやれ、もう少し詳しく」

教えてやれんゲコ？お前には引退したら…

教官の資質があるんだが」

「面倒クセエよ…教官なんざ…」

………

午後 大社跡 採取

「準備出来たな？あ？」

結局ゴコクに押しきられ、一回だけ

指導する事になった

恐い顔で睨むヤクシ

「はい…」

マジか？

三人はアイアンハンマーを持たされた、

まさかハンマーやらされるのか？重すぎる…

「よし、外周5回走れ」

一瞬思考が停止する

は？冗談じゃ…外周？凄い距離だよ？

崖とか滝もあるよ？

翔虫も禁止で?!

「ズルすんなよ？俺のフクズクが見てるぜ？

もしも手エ抜いたら…」

拳を握り

「一般的な殴る蹴るの暴行を加えるぜ？」

「あの、私は何を？」

「天音は俺とケンカだ」

「えっ?!」

影が動揺するが

「おら行け！」

.....

「待っててくれい!!」

外周を走り始めると予想外の事が起きる、
遅れ始めたのは風月

「な…何で風月が…」

「喋るな影…疲れるぞ…」

体型的にもセキエンが遅れそうだが

影と同じ様に走る

森を駆け崖を登り、滝を飛び降り川を走る

ハンマー捨てたい!

防具脱ぎたい!

「(っ)…5周…」

川原に倒れる影、ハンマーが重いしジヤマ、

もう走ると言うより歩くのもやつとの状態

「ぐおお、脇腹と腰が…」

2位は風月、走る度にハンマーを留めた

ベルトが食い込んで痛かった様だ

「オロロロ…」

歩きながら吐いているセキエンが到着、

川辺に倒れる

「自分に足りねえモンが見えたか？」

ヤクシが降りてきて聞くがそれどころではない

「影、大丈夫？」

倒れている影に駆け寄る天音

俺達の心配は?!

セキエンと風月

「やれやれ、天音はよくお前らと組んでるぜ、

全然レベルが違うぜ？」

倒れた三人の前で岩に座ると

「ゴボウ、何を思った？」

「…も、…もしかしたら…」

自分は足が遅いのでは…」

ぜえぜえ言いながら答える

「そうだ、体一つならお前は早い、だが重い

武器装備した途端に並み以下だ、それがどこかで解ってるから軽い武器しか選べねえ」

「ダイコン、お前は？」

「…風月と…逆に…装備…を付けても動ける…

けど…スタミナが…」

もう吐くものは残ってないのに気持ち悪い

「解ってるな、それが弱点だ」

「影、お前は？」

「…ええと…」

「ダメだ鈍いな…」

お前らに足りないのは装備の練度だ、

武器防具を装備した状態での動きだ

「大体がよ、こんな重てえモン持って

同じ走り方で良いはず無えだろ」

ハンマーを持ち上げる

「あとな、全身の筋肉を連動させなきゃ

上手く動かねえ」

「私はそれが出来てるんですか？」

天音は自分でも分からない

「単純だが一番アカイ差がある、天音、

お前今までイブチ何匹殺してきた？」

「解りませんけど……1000匹位かな？」

教官の下働き四年もやったし」

「!!」

三人の表情が変わる

「お前らボンクラでもちったあ理解したか？」

同じレイア狩れるから同じ強さじゃねえんだよ、

弱いモンスターでも数多く狩ってりや体力、

対応力、武器の操作、体捌き、先読み、

全部が段違いになるんだ」

立ち上がると

「影、雑魚で良い、数をこなせ」

後は自分で考えろ、そう言うのと帰ってしまった

.....

ギルドに帰って来たがへろへろの三人

「おお！良い感じに仕上がってるゲコ」

「ゴコク様……」

もう喋るのもイヤな影

「ヤクシに言われた事を愚直にやれるゲコ？」

「愚直に……とにかく何でもいいから数を……」

「うむ、……俺はハンマーを持って走るか……」

「俺も吐かない位にならないとな……」

「じゃ私は何しよ？」

「天音は舞の練習よ？」

「またあの槍持つの?!」

体の使い方

数日後

「竜宮砦の話、聞いてなかったな」

「雰囲気が凄い不思議でさ」

撃竜槍やデカイ大砲、立派な廃墟が見えた

話をする

「何で行こうと思ったんだ？」

それが不思議なんだが

「大社跡ってさ、何を奉ってたのか…」

もしかしたらイブヒコなんじゃない？でね、

イブヒコが行くから竜宮砦には兵器が

あるんじゃないかって」

そういう考えもあるか

「…で…何で俺ん家のアレ（回転扉）お前が

知ってたんだ？」

俺は知らなかったのに

「そんなの一人しか居ないでしょ？」

ヒノエの方を見る

あの人は本当に底が見えない

団子屋で話していると

「影、行こうぜ」

ハンマーを持つセキエンと

「歩くだけでも重心を変えねば……」

ブツブツ言いながら歩く風月、

こちらもハンマー

……

「見たかよ？」

ハネナガが神部に聞く

「何を？」

「影達がヤクシさんの指導受けたらしいぜ？」

「だからハンマー持って行ったのか…」

まさか言われた事を本気でやってるのか?!

「あの指導を本気で守られたらよ…」

「僕達より強くなってしまう…」

……………

「ズ、5周…」

川原に倒れる

「むう、影に勝てんか…」

腰を抑える風月

「オロロロ…」

三人とも川原で休む

「影よ、あの御仁が大怪我するとは思えん、

何があつたのだ？」

「そう言えばそうだ、ティガを狩るって

言うより破壊してたぞ?」

影は話す、ヌシとラージヤンの大乱戦

「なるほど…カムラの強さとは夜行を退ける

事によるものか…」

「俺…何秒立ってられるかな…」

そうか、百竜夜行はカムラの弱点、

災害と言えるけど…

鍛えられてるって見方もあるか

呼吸が落ち着いた

「セキエン、やれるか?」

ヨロヨロ立つ影

「ああ、もう慣れた」

ペツと唾を吐く、口の中が酸っぱい

「ハンマー…使い慣れんな…」

「仕方ない、ヤクシさんの命令だし」

ハンマーを引きずる様に歩き出す

三人ともフラフラで森の中へ入ると

「くそお！当たらない！」

全部振り遅れる影

「ダメだ！力溜めながらじゃ息が切れる！」

「先読みせねば！」

振り下ろす風月、しかしハズレ、

今度は持ち上げようとするが

「ぬううおお！上がらん!!」

疲れて動けない

「腕だけじゃ無理だ！膝も使え！」

影が叫ぶが

「うおっ！」

振り回したハンマーに振り回される

「影！考え無しに振ると腰ヤルぞ！」

ぜえぜえ言うセキエン

イズチ5頭に翻弄される三人

.....

「なるほどなあ、知ってるわけだけだぜ…」

ヤクシが話し掛ける

タタラ場前、舞の練習をしている天音と

指導しているヒノエ

「?」

天音は分からない

「なんの事でしょう?」

笑顔のヒノエ

「天音と素手で少し組手してみたがよ、

片足軸に最小限で動きやがった、中堅でも

中々身に付かねえだろ?」

「武道の動きの話ですね?」

笑顔のまま

「考えてみりゃ奉納の舞の後半は弓と槍の

型でもあるからなあ」

頭を搔くと

「さらに重い鉄槍で負荷掛けてる訳だ、

足捌きが素人じゃねえハズだぜ」

見た目もタイプも全く違うが同じ

スパルタ型の二人

「はっはっは!!お前達の指導を素直に

続ければ強者になれるからな」

里長が笑う

「お前って…俺に叩き込んだの

アンタだろ里長」

苦笑い

「私って鍛えられてたんですか?!」

十字槍と盾を普通に持つ天音、交互に

ヒノエとヤクシを見る

「今頃気付いたのか?!最近それ持って

半日踊ってたろ?頭は三馬鹿並みなのかよ…」

「双剣が強くなってる気がしないんですか?」

「ああ、それならクエスト行ってみろや」

.....

「何か久しぶりに四人だな」

「セキエンさん、吐かなくなつた？」

「フン、毎日吐いているぞ？」

「言うなよ恥ずかしい！」

今日はレイアを狩りに来た、

武器はハンマーではない

「なっ！何だこれは！」

「何?!風月さん！」

「抜刀斬りをしてみる！」

言われて皆でレイアに斬り掛かる

「何だこれ?!」

体が軽い、一瞬で尻尾の旋回範囲の内側へ

斬り込む影

「凄い！剣が無いみたいに軽い！」

紙一重で避けながら斬りつける天音

「ぬおっ！またか！」

片手剣で抜刀斬りすると速い上に、

いつもより一步奥まで余裕で飛べる

「おらあっ！」

頭に抜刀斬りを当てた後

「ふんりゃあっ！」

苦もなく斬り上げ

「大剣が軽いぜ!!」

明らかに速度が上がったセキエン

「レイアとはこんなに遅かったか?！」

「違う風月！俺達が早くなってるんだ！」

「影！居合抜刀出来るんじゃない?!」

「そうか！」

「ちええい！」

簡単にタイミングが計れる

横倒しになったレイア

「乱舞も早くなってる！」

尻尾を斬り落とす

「なんだかよ！」

笑うセキエン

「うむ！弱いぞ！」

風月も笑う

「前より隙だらけに見えるよ！」

空舞する天音

「俺達が強くなったんだ！」

.....

10分程で狩り終えギルドに帰還

「ヤクシ殿に指導された事を数日繰り返し

返しただけで」

「こんなに強くなるんだな」

自分の手をマジマジ見るセキエン

「もつと続けよう、天音もやるか？」
「ハンマー…どうだろ？」

聞き耳を立てるハネナガ達

『ヤバい!!』

若手が皆ハンマーを持ってクエストへ

「ゴコク様、何企んでんだ？」

「フドウ、懐かしいと思わんゲコ？」

「吐きながら1ヶ月はやったなあw」

無精髭を掻く

「春香なんぞはw」

笑うゴコク

「泣きながら走ってたw」

「じゃがそれを持ち越えたお前達は、

ベテランにも引けを取らんゲコ」

「確かななあ、けどよ、ヤクシさんは教える

才能って言うとな」

「ヤクシはアメと鞭で言えば、鞭しかないゲコ」

「みんな脱落してっからな」

「お前達と春香はアメかw?」

「バレてんのかよw」

ベリオロスの時に道具を渡した事だ

「だけど良いのかよ?」

「何がゲコ?」

「他の里のヤツ鍛えちまって」

険しい顔になる

「うむ、そこはヒノエとミノトから一言あつてな」

.....

「それはトガシとニシノのハンターを

強くする、つまりは他の里の戦力を上げると

言えるゲコ」

蠟燭の光の中、ギルドの二階

「僕も反対です、優位を失う危険があります、バランスを考えましょう」

ウツシも反対する

「ヒノエ、ミノト、

考え無しには言わんだろう？何をもって

そのような考えになった？」

腕組みして聞く里長

「先ずはヤクシさんの鍛え方で成功しようが

失敗しようが」

「カムラの強さ、逞しき、恐ろしさを伝える

語り部になりましたよう」

「つまりは威嚇、威圧、更なる優位を保つ、

そう言いたいのだな？」

「はい、それが次期里長となればトガシには

効果絶大かと」

ニコツと笑うヒノエ

「それにあの二人には影君と天音に

仲間意識が来ています」

ミノトは澄ました顔で

「うむ、その関係性が長く続けば……」

「将来的に里の争いにはなりにくいですね」

「試す価値はありそうゲコ」

………

「つて事ゲコ」

「へっ、若いつてのは羨ましいねえ、

裏切りなんて考えもしねえ……」

「いや、考えられるタイプじゃねえからか！」

「馬鹿は馬鹿で良いゲコ、

真っ直ぐ強くなれば良いゲコ」

.....

「いっちばーん!!」

ハンマーを背負ってるのに天音が早かった、
しかも笑顔が出る余裕がある

「な……なんで……」

倒れる影、ショックだ、天音に勝てない

まだ全然天音に追い付いてない

「我らも……いつもより……速いだろうに」

同じく倒れる風月

「き……今日は……吐かなかったぞ……」

オロロロロ……」

だいぶ遅れてセキエンが倒れる

「天音、何で速いんだ?」

「んーと……私なりの考えなんだけどね」

重い物持つてる時って両足で立ってる方が

安定するよね？

三人とも頷く

走る時はどうしても片足なの、だから不安定
また頷く

ただでさえ片足なのに、泥とか砂利の上で
普通に走ると負担が大きいの

「だから歩幅を抑えて回転を速くした方が

良いと思うの、遅くても疲れが少ないし」

小さい歩幅で砂利の上を走る、って言うか
滑る様に動く天音

「モンスターに追い付いても疲れて戦えない、
なんて事になったら意味無いでしょ？」

「むう、泥の中など全力で蹴って歩幅を
大きくしているが」

「装備無しならそれで良いと思うよ？」

「そうか！それが装備の練度か！

そのためにヤクシさんやらせたんだ！」

「あの人全部教えてくれれば早いものになあ」

立ち上がれないセキエン

「影、セキエン、試してみたい事があるのだが」

「ふははは！やはり俺は早いのだ！」

色黒のガリマツチヨが疾走する

「すげえ早いな風月！」

ちよつと背の低い筋肉質

「うおー！待ってくれー！」

色白のちよいポチャ

インナー一枚で競争すると圧倒的に風月が早い

砂利も泥も気にならない、装備が無いと

足が埋まらない

しかし絵面的には屋外で、パンツ一枚で

笑いながら走る三人の高校生？

「何で男って馬鹿な事始めるのよ…」

.....

「裸で走るのは止めよう」

「む？なぜだ、影」

「ああ、俺解るぞ？せっかく鍛えたのに

鈍る気がするよな」

「あのさ、その前にさ、私の前で装備脱ぐの

止めて貰える？」

睨む、しかもあの流れだと天音もインナーで

走る感じだった

「あれ、お前見慣れてるって」

「影はいいのよ！セキエンさんと

風月さんの話！他の人は見たくないもん！」

ギルドで話しているが

え？それはどういう意味？

影は見慣れてる？

実は全員聞き耳を立てている

「天音…」

困った顔のミノト

「なに？ミノト姉さん？」

「口の利き方に気を付けなさい」

「私何か言った？」

「いえ…解らないなら…良いです…」

首を振る

『おのれ影イ!!』

闘魂を込めた目で見ているハネナガと神部、

ハンマーを持ってクエストへ

「ふむ、良い傾向ゲコ」

「こちらは上手く行ってるようだな」

「おお里長、全体のレベルが上がり始めたゲコ」

「一番下が走り始めれば、追い付かれまいと全体が走りますからなあ」

「影自身は天音に追い付きたいと必死ゲコ、

ヒノエはここまでタイミングを計って

天音の事をばらしたゲコ？」

「解りませんなあ、ヒノエの考えは

誰も読めません」

笑う

「期を見て潮を見る…」

「習い覚えたモノではなく…感覚でしような」

何者？

「あれ？」

クエストから帰って風呂掃除をしよう、
と思ったたら風呂場が暖簾ではなく引き戸に
なっている

「なんで壁があるんだ？」

「影」

「ハモンさん？」

影の留守中に風呂を工事したらしい

「何ですか？」

「ヒノエから聞いてないのか？」

「ちよつと何？姉さん！」

「ほら、ちよつと良かった」

天音の腕を引つ張るヒノエ
「ヒノエ様、どうしました？」

家の中

「同棲?!」

二人でハモる

「何か問題でも?」

ニッコニコのヒノエ

「そ、その、まだ早いつて言うか…」

「ね、姉さん、あの、心の準備的な…」

しどろもどろの二人

「天音、貴女は立派にハンターになり影君と

…つまり目的は成し遂げましたよ? 一人前の

女性をウチに置いておく理由がありませんよ?」

「だけど姉さん…私17…」

「ここに住むでしようから覗かれないように

お風呂の工事をしてもらいました」

頷くハモン

「姉さん……」

「今日から姉さんと呼ぶのも禁止しますね？」

「それは厳しいのではないかヒノエ？」

「あら、何故でしょう？」

「他家に嫁いでも親姉妹の呼び方は

変わらんだらう？」

「そうですねえ……」

上を向き顎に人差し指を付ける

「あーあのー！」

デカイ声で影が制する

「なぜに！なぜに同棲する運びに

既になっているのかとー！」

混乱気味

「そーそうよー！どこでどのようになどどのような

こつちも

二人とも真つ赤で目がグルグル

「だつて両思いでしょう?」

「反対する親がおらんだらう?」

「あ、あの!聞いてください!」

二人の前で土下座する

「お、俺はまだ自信がありません!そ、

その天音を養つていけるか、ハンターとして

食つていけるか…」

「あら?今更そんな事言われても困りますよ?」

「へ?」

顔を上げる

「何で姉さん?」

「天音?一緒に影君に言わせたでしょ?」

『一生支える』つて」

笑うヒノエ

天音の頭に衝撃が走る!

ヒノエと一緒に影をいじっているつもり
だった、悪ふざけで告白させたつもりだった、
あの時…もしかしたら…いや、もっと前から
ヒノエ姉さんは…

「こういう悪企みは誰も勝てんなあ」

苦い顔のハモン

「あら悪企みなんて人間き悪いですよ？」

そうか…そういう人だ、そういう人だつて
解っていたはずなのに、そうよ、姉さんは
いつでも自分が楽しむ方向に皆を巻き込む

『ただの愉快犯』だった!!

………

二人きり

土間に向かい並んで正座する

どうしたら良いんだ?!

何だコノみなぎる緊張感!

目線さえ動かす事を躊躇う

息苦しい

「ななな、なあ天音っ!」(裏声)

「なっなひやあに?!、影!」

ビクビクする二人

どうしよう…

「ガラッ!!」

「うわあっ!」

「ひゃあっ!」

なに?!何事?!

「むう?邪魔してしまったか?」

「里長っ！」

「な、なんでしようかつ?!」

……………

「はあああー…」

深いため息の影と天音

「残念です里長」

ヒノエが珍しく口を尖らせる

とりあえず同棲は無くなった、理由は

若手の男ハンター達が悔しさとヒガミを

募らせ呑んだくれてしまったらしい

「このままではギルドの運営に支障を来すゲコ」

「うむ、延いては里の運営、夜行時の連携にも

影響しよう、幸いにもやることはある、延期だ」

里長は見回すと

「梁や柱は問題ない、しかし粉挽きの水車小屋

でもあるからな、ハモン」

里長は畳の新調、襖や建具の指示をして
帰って行った

「そうだな…」

ハモンは土間を見回し

「何とかしてみよう」

帰って行く

「明日のギルドが楽しみゲコ」

「仕方ないわ、天音、行きましょう」

一人になった…でも…なんだろう？

この『外堀が勝手に埋まっていく』感じは…
俺…追い詰められてね？

ヒノエ、ミノトの家

追い詰められる、それは天音も同じで

「ヒノエ姉さん、本当にこれで良いのかな…」

和室で正座で向かい合う

「あらあ、不安？」

「天音、四年前の天音の意思を姉様は

叶えたんです、今になってどうしました？」

「あのね？」

私は嫁ぐ流れなの？

いや本心を言えば影が好きだよ？だから影の

望むまま男になって仲間になったんだよ、

影のそばに居たいから

だって初めて『病弱な娘』じゃなく

普通の『女の子』として話してくれたもん

だけだよ

支えるって言ってもらったのは

男の仲間の『時雨』じゃん

私はずっと時雨だったじゃん

私は…何も言ってもらってない…影の本心…

「全くこの娘は…」

首を振るヒノエ

「天音…影君はハツキリ『天音』に

言ったでしょう？」

真っ直ぐ見詰めるミノト

「何を？」

「『天音は俺のモノだ!!』、って里中に

宣言したでしょ？」

頸を傾げるミノト

「あーあー…あれか…」

今更真っ赤になる

「告白されたのに空舞で斬り掛かるんだもの

本当に見てて飽きないわよ貴女達w」

口を抑えて笑う双子

.....

翌朝

「うわ……」

「臭いよ……」

影と天音は唾然とする、ギルドの床や

テーブルに数人の若手が寝ていて凄い酒臭い

「まったたく……情けねえヤツらだ」

春香が頭を引っ叩いて起こしていく

「うぐおおお……影のやろお……」

「天音え……何で影と……」

ハネナガと神部も転がって寝言を言っ

ている、この短期間で天音のファンが

増えていたのだ

確かにヒノエとミノトは美人ではあるが、

この里の象徴的な部分があり

近付き難い所がある、

ところがある日そこに身近な美人が現れた

駆け出しの彼女ではあるがチャンスはあつた

しかし今回の同棲騒ぎ

もう『許嫁』と里長達が正式に認めてしまい

手が届かない存在になったのだ

「おう影、なんか同棲中止だつてなあ」

春香が来る、

笑顔なのに何で迫力があるんだろう

昨夜の話をすると

「里長達も急ぎすぎたんだよなあ…」

顎を掻く

「急ぐ？何かあるんですか？」

「春香さん教えて下さい」

「天音、いつも通り姉御で良いぜ？影、

要するにお前の自覚の問題だ」

影の額に指を当てる

「自覚……？」

「まあ……まだ解らねえよなあ」

奥のテラス席へ行くと座って寝ている若手を
掴み、乱暴に床に放り投げる

「ゲフツ！」

「うぐおつ！」

呻きながら転がる酔っ払い

「ほら、まあ座れ」テーブルをバンバン叩く

「は、はい」

席を作ったのか……乱暴だな……

春香の話を要約すると

『影の帰る場所』を作るために始まったらしい

「帰る場所？」

何の事だ？俺ん家あるし……

「お前家族も居ねえだろ？他に行くつもりに

なればいつでもカムラを出られる」

二人で『?』となる

「だけどな? 影は夜行で居て欲しい人間だ、

里長達は他の里とかに取られたくないんだ」

「取られる? 俺が?」

「カムラの力を削ぐならお前を

引き抜こうとするぜ?」

「だから結婚って…」

「私は…」

「全体指揮出来るんだぜ? これからのカムラ

を支えて欲しいんだよ」

「俺はこの里出る気なんて無いですよ?」

「いや、お前の成長のためには他の里とか

もつと遠くに行かせたいんだ」

椅子にもたれて伸びをする春香、

椅子が軋んでいる

「だけどな、その時に他を気に入って

移住されちゃ困るわけだ」

「そうか…それで…」

「でも…どうしたら…」

「アタシにもそれはわからねえな! 影、

お前は誰だ?」

指を指す

「え?…え? 影ですが?」

「そこだ!」

頭を掴む

「お前には『カメラの影』で居て欲しいわけだ」

「姉御、その話からすると私は里から

出られないとか?」

出る気ないけど

「そうだ、お前が影の首輪なんだよ」

指をさす

「首輪つ?!」

首輪が付けられた影を想像する二人、

ナニコノ趣味?!

「あー…いや、縄か?」

首を傾げる

「縄っ?!」

影の首輪に付けられたリードを持つ天音、
を想像する二人

ナニコノ新世界?

新たな境地に開眼しちゃう

「春香…お前に説明は無理だ」

いつの間にか居たフドウが頭を抱える

「フドウ説明してくれ、アタシ苦手だw」

「簡単な話だ、天音がカムラに居れば影は

どこに行っても帰って来る、

まあ浮気しなければって注意は必要だがな」

「浮気い？」

睨む天音

「しないしないしない!!」

首を振る影

「な？春香、大丈夫だろ？」

お互いに独占欲がある」

「なんだよ、苦手な説明なんかするんじや

なかったぜ」

.....

「同棲か…それよりも」

なんと風月はこの手の話題に食い付かない

「ヤクシ殿と同等のハンターである

ゲンジ殿の狩りを見たいのだが」

「ゲンジさんは確か骨折したよな？」

「うん、確かそうだった」

「お前ら公認なのかよ…」

セキエンが食い付く、これが普通だ

「何でゲンジさんの事を？」

「うむ、仲間がな」

風月の説明によると、せっかくヤクシさん

の力が解ったのなら、カムラのベテランも

調べようと言うことらしい

「ベテランを調べる？」

里長達の言った通りだ、連れの三人は

カムラを調べてる

ベテラン『も』って事は…？

「この里の力を知りたいって事ね？」

何で私達に言うんだろ？

「何でもそれがニシノにとつて必要らしいのだ」

うわ、風月って馬鹿正直に何でも喋る…

苦笑いの影

風月さんって逆に利用出来そう…

天音も

ニシノってバカしか居ないのか？

連れの奴ら風月の馬鹿さ加減を甘く見てる…

「風月、それ人に言つて良いつて言われたか？」

ニシノは探りに来てんのか…

もしかして俺達トガシもか?!

「む？何か言われたか？覚えておらん」

三人は思う

扱いやすつ!!

「聞いておつたぞ？ゲンジに話して見るゲコ」

「え？だつて骨折してるんじゃ？」

「部下達に狩らせて指揮をしとるゲコ」

「おいおい、ゲンジの狩り見せるつてかあ？」

「あ、ヤクシさん、お早うございます！」

四人並んで普通に直立する

「俺だつて理解出来ねえし、マネ出来ねえぞ？」

「そんなに強いんですか？」

ヤクシさんと同等のはずじや

「なんつーかな、タイプが全然違うんだ」

頭を搔く

.....

「始まるぞ……」

水没林の開けたエリア、四人は高台から

見下ろす、ゲンジに

「見たいならそこに居ろ、決して動くな」

と言われたからだ

「ナルガだな、ガンナー四人でどう戦うか……」

段差の上の藪の中、音を立てないように動く影

「たのしみ」

ワクワク見る天音

「ゲンジ殿は指揮と言っていたな」

「ガンナー三人だよな？そのゲンジさんは
戦わないだろ？」

ゲンジパーティーが到着、閃光玉を投げた

…それで終わりだった

価値観

呆然とした顔で帰って来た四人

「では各自、残弾数を報告しろ」

ゲンジ達は反省点を出し合い会議を始める
「反省？」

「どこに反省点があるの？」

「何を見せられたのだ？我らは？」

「5分掛かってないよな……」

「おう、お前から理解出来たか？」

ニヤツと笑うヤクシに話し掛けられる、と
四人で首を振る

「だろうな、ガンナーでも相当なレベルだぜ？」
笑うと奥へ行ってしまった

団子屋で話し合う

最初に閃光玉を投げた、そこからは翼、牙を順番に壊し怯ませ、頭に榴弾で気絶させ

斬裂弾で尻尾を斬り、回復したと思ったらまた気絶、最後は罨を使い捕獲した

そこまでは四人共に理解出来た、

しかし狩りのやり方が解らない

ゲンジは指揮とは言っても何も指示して

いないし、お互いに合図も出した様子が無い

なのに各自が自分の役割を確実に遂行して、ナルガに何もさせていないから回復なんて

必要なく、

攻撃が来ても予想の範囲らしく、

回避も位置取りのためだけ

どうやってんだ？

ヤクシの狩りが『ガチンコの殴り合い』なら

ゲンジの狩りは『一方的な蹂躪』

「何だ？お前ら暗いな、どうした？」

「フドウさん……」

ゲンジの話をするとフドウも見学させて貰った事があるそうだ

「あのパーティーは間違いなくこの辺り

一帯で最強だ、けど何の参考にも

ならねえからなあ」

一人一人が熟練者のガンナーである上、同じ

クエストを何度も繰り返し徹底的にムダを省いた

言い方を変えれば

ソロでも狩りのムダを徹底的に削ぎ落とした

ガンナーが集まり、パーティーの狩りも

突き詰めた

「一発外したり装填のタイミング間違えた

だけで反省会だぜ？」

「組みたくない……ですね」

苦い顔の影

「俺だって組みたくねえよ、ヤクシさんなら
理解出来るけどゲンジさんはな」

団子を齧る

「素人だからミスするって当然の話だろ？」

それすら認めねえし、狩りを『訓練』とか
『練兵』とか言うからな、誰も組まねえよ」

「俺達はヤクシさんの方向で鍛えよう」

あれは多分ハンターの一つの到達点だ、

今の俺達じゃ無理だ

「うん、今更ガンナー出来ないしね」

真似しようにも理解なんて無理

「うむ、仲間にどうやって説明したものか……」

「狩りって色んな方法があるんだなあ」

「ところで……なあ？、いつまで翔虫は

禁止だと思おう？」

久しぶりにソロがやりたくなった影

この三人に要領良く……などと言う考えは無く

馬鹿正直にヤクシの教えを守っている

「む？ヤクシ殿が許可するまでだろう？」

「吐かなくなつたし俺もレイアのソロやらないとな」

「あのさ、一回自分の強さ確認してみない？」

……………

ヤクシに許可を貰いソロへ行こうとしたが

「うむ、それでは近いと？」

「はい、弱いモンスターばかりですが……」

ウツシが報告している

「もしかして百竜夜行ですか？」

ウツシは一瞬『しまった！』という顔をしたが

「うん、どうやら近いみたいだよ」

セキエンと風月に聞かれたくなかつた様だ

「セキエン、風月よ、これはカムラの問題ゲコ、

お主らは里へ帰るゲコ」

あくまでも笑顔のゴコク

確かに二人には関係ないが

「ちよつと待つて下さい」

「うむ、仲間に聞いて来よう」

二人は連れの方へ

「何かマズイ感じですか？」

小声で聞く影

「うん、君の百竜夜行の力を見に来てる訳だし」

「見せたくないんですね？」

連れと話す二人を見る天音

「まあ見せない方が何かと都合が良いかな」

「確実に参加してくるゲコ、事によれば影を

引き抜こうとするだろうしのお、

それに問題はケガでもされたら今後の関係に

ヒビが入るゲコ」

「責任回避のために説明しないといけない

ですね、僕はトガシとニシノへ

自己責任の確認を…」

「我等も是非、後学のために参加させて下さい」

セキエンの仲間が来た

「我々は若の護衛です、危険になったら退避します」

しゃべり方が全然違う、やっぱり何か

指示を受けてる

皆を守る責任は無いからいつでも逃げる訳か

「我らニシノも参加する」

「ぜひ風月を使って下さい」

「我らも危険と思えば撤退します」

「…だそうだ」

言ってる内容を理解出来るか風月？

「うむ、しかしいつ避難するか分からない者

では任せられないゲコ、隅の方に居て貰う

事になるゲコ」

「構いません」

「ニシノもそれで」

「解ったゲコ、しかし里へは一報するゲコ」

その時

「ヤツが出た!!」

「大社跡にいたぞ!!」

ハネナガと神部がギルドに飛び込む

「何だ?どうした?」

「何慌ててんだ?」

お茶を飲ませると落ち着いた

「あのマガ?とか言うヤツが大社跡に居やがった!」

!!!

カムラのハンター全員の顔色が変わる、

恐怖ではない、里への侵入を許してしまった

事は恥であり復讐の対象なのだ

「ゴコク様！」

「どうする?!」

「俺にやらせてくれ！」

「俺がやる!!」

「うむ、戦力がわからんゲコ、つまり戦力を

計れる者…フドウ、どうゲコ？」

「願ってもねえ…ありがとうございます」

一礼するフドウ、影は見たことがない、

フドウのこんなに怖い顔

「しかし先輩方を差し置いて俺が出るのは…」

「ゲンジやヤクシでは一方的に

殺しかねんゲコ、あくまでも『強さ』を測る

対応するゲコ、出来るだけ攻撃の手数を出させ

覚えて来るゲコ」

「解りました、春香！今日はガード出来る

武器にしろ！」

「お、おうー！」

素直に言うこと聞くんのだ…

イブシマキヒコの出現、

マガイマガドも出た…ならば

「全員準備待機ゲコ！」

………

「ほらほら！遅いよ！」

「ぐっ！早いな天音は！」

天音の攻撃を捌けないセキエン

「どうした影！そんなものか！」

「盾持てよ風月！」

「木刀に盾はあるまい！」

風月に翻弄される影

タタラ場前で訓練、石段で休憩する

「影、天音、お前らって恵まれてるな」

セキエンの言葉に二人で？となる

「この年で結婚相手がい」

「そうじゃない」

風月の言葉を遮るセキエン

恵まれてる？お互いに13で親を無くして

自立するしかなかった

比べてセキエンは里長の長男で裕福だった

らしいのに？

「セキエンさんてお金持ちじゃないの？」

「俺達は13から里の手伝いで食い繋いで来たんだぜ？」

「解って無いな、俺は本音で言ってくれる

人が親父だけだった」

「ボンボンだからな、皆本気で怒れは

しなかったのだろう」

「お前らを強くするために周りは導いてるだろ？」

「そう…だね、普段の生活からして

鍛えられてるわね」

「あれ？そうだったのか？」

イジメられてる気分だったが

「皆本音でブツかってくれてるのが羨ましい

って言ってるんだ」

下を向く

「む？俺は本音で言ってるぞ？」

「お前のは悪意がある！」

「考えた事無かったな、毎日色々やらされて」

「私なんて教官の下で素材集めばかりで」

「だからよ？悩んでる暇無かったろ？」

「いや、あるぞ？里守になったり」

「そう言えばミハバとナカゴも里守に

なつたよね、何で？」

「四年前の夜行、何人も死んだからな…」

影と天音の両親も亡くなったあの戦いで、

萎縮した者は里守に、そうでない者は

ハンターになった

「そうなのか、でも周りはお前らを強くしてるだろ？」

「考えてみれば……」

皆助言してくれるし聞けば全部説明してくれる……ハモンさんと里長は謎かけみたいな所があるな……ヤクシさんは……説明してくれる？

「恵まれてるだろ？」

「私は姉さん達に保護されて」

家事をやりながら下働きして……

ヒノエ姉さんのイタズラに……

二人で首をかしげる

恵まれてる？けど……素直に喜ぶべきか？

「うむ、セキエンの意見とは違うが俺も

思う所がある」

？

「カムラの里には気分で適当な事を言う人間や

嘘を言う者が居ない、この里は常に臨戦体制に

あるからだろう」

腕組みする見た目だけならキレ者

「そうなのか？」

「普通だよね？」

「常に皆本音で話してるぞ？俺はそれが

羨ましいって言ってるんだ、本気で怒って

叱ってくれる人が居ないと前の俺

(チュウニビョウ) みたいになるぞ？」

二人でヒノエを見る、いつもの場所で

ニコニコ手を振って来る

本音…気分…この人だけは読めないが…

騙されても結局自分のためになってる…か？

……………

「帰ったぜ！」

「おおフドウ! どうだったよ!」

「首尾はどうゲコ?」

ギルドに帰ったフドウパーティー

「ヤツは?!」

春香が首を担ぐ

「多分慣れたら大した事ねえな!」

防具に焦げ跡がある春香

「リオレウス程度だ! ラージャンには及ばねえ!」

豪快に笑う大女

「また持って来たのかよw!」

「角と牙すげえなw」

「空中で方向変えたりするぜ?」

「力でゴリ押すタイププじゃねえ」

「トリツキーなタイプだったぜ!」

「フドウ! 動きの注意点を報告するゲコ」

皆がワイワイ騒ぐ中

「なあ、姐さんはどうして首狩って来るんだ?」

「そう言えば夜行の時にビシュテンゴの首
斬ってたような…」

「セキエンさん聞いて来れば？」

「やだよ、おつかねえ…」

「うむ、心が折れる訳だな」

イスに立つと

「爆発すんだ！」

それを空中で利用して飛びやがる！」

春香は笑いながら話す…

ギルドが盛り上がってて聞ける雰囲気ではない

影達はタタラ場前のヒノエの所へ

聞いてみると

「うーん、春香はねえ、自分のルールを

作るのよ、そして固執しちゃうのよね」

四人で？となる

「つまり」

一度自分と戦いになったら最後、絶対に

自分からは退かないし敵にも退く事を認めない、
どちらかが死ぬまで諦めない

「それは危険過ぎますよね」

「ハンターとは違うんじゃない？」

「姐さんの恐さはそれか？」

「むう、素手でも強い訳だな」

「だから夜行でもモンスターが退くのが

気に入らないから、逃げ遅れたモンスターは

止めを刺すの」

「なんでそんなに…」

「春香さんの性格かな？」

「姐さんは凄え覚悟で戦ってたんだな」

「自分より強いモンスターだったらどうなるのだ」

「影君のお兄さん、照さんに憧れてた、

でも亡くなったから必死で代わりに

なろうとしたのよ？」

「……………」

「だからソロは危険すぎてフドウさん達と

組ませたの、フドウさんは無理だと分かれば

即撤退、つまりハンターとしての正解を

選択出来る人だから」

「うむ、セキエンの言うことも納得出来る話だ」

「？」

「やはり若手を強くするため導いている」

「あら、風月さん鋭いわね」

ニコニコ笑う

「見ての通り百竜夜行に対応しなきゃ

ならないからよ？」

この里には他人の足を引っ張るような人は

居ないわ、それは里の危機、更には自分の

危機になることを子供の内から理解するからね」

「この里は即一丸となって戦える…」

考えるセキエン

「やはり常に臨戦体制、カムラの力は個人は

もちろん、全体の力も強い訳だな」
腕組みする風月

天音だけが気付く、

普段の柔らかい話し方ではない

ヒノエは会話一つでさえこの二人に隙を

見せないし、圧力を掛けている

要約すれば

『カムラは仲間を絶対裏切らない、

やるとなれば全員が戦士になる』

と脅している…

これが大人の世界か

閑話

「ねえ影、あれ買つて？」

「ん？ああ」

夕刻、日暮れのカムラ

影の家の前で焼き栗が跳ねている

「あちあちあち……」

素手で何とか持つ、小刀で割れた鬼皮に

切れ目を入れ、手で半分に割ると香ばしい

香りが広がる

割つても拳ほどの大きさがある

「ほらよ」

「ねえ、普通は大きい方私に寄越さない？」

ジト目

見た目は同じだが？

「お前食い意地凄いな」

「うわ！女にそれ言う？普通だよ？」

見た目は立派にデートだが本人達には自覚が無い

「なあ、お前体が弱かったよな？教官の

下働きつて大変じゃなかったか？」

「素材集めより男に化けるためにさ、

最初は全身に防具着けて歩く所からだったよ？

すっごい重かった」

ハフハフ言いながら湯気の出る栗を食べ歩く

想像する、団子屋で働いていた天音

ヨモギに比べてヒョロヒョロで声も小さい、

陰が薄い娘

それがアシラ装備か…

「お前…苦労したんだな…」

俺の言った事で

「その分今返して貰うよw」

指差す、次は団子らしいが…

「私は影のために努力したんだよ？」

影も私のために努力して？」

奢ることは努力なのか？

「お前…俺の稼ぎ全部食う気か？」

「小さいなあw」

笑いながら歩く

「…太るぞ…」

「うぐっ！」

ポロつと栗の欠片が落ちる

自覚はあるらしい

「運動すれば良いんだもん！」

「晩飯前に食いすぎだろ？」

「じゃあ晩御飯ガマンする！」

「間食が太るんだぞ？」

「別腹だもん！」

「別腹なんて存在するかよ！」

「あるもん！」

「ウチのお団子は太らないよー!!」

「だよねーっ！」

笑顔で手を取り合う天音とヨモギ：

ヨモギ：…アキンド根性凄いな

天音：…騙されてるぞ

「そういえばヨモギ、時雨の正体が天音って

知ってたのか？驚かなかったよな？」

「え？うん、あんまり」

団子を持って来てテーブルを拭く

「何でだ？」

「だって全然男っぽく無かったもんw

あーそっかーって感じw」

そういうモノか？

「そういえばさ、ングッ、春香さんも普通

だったよね？」

いつの間に食い始めたんだ天音

「春香さんは強さ以外は見てなさそうだしな」

「2才だけど男に興味無さそう…って言うか

目指しているものが違う感じか？

「あら、晩御飯にお団子ですか？」

「ミノト姉さん、仕事終わり？」

「ええ、姉様に晩御飯作らないと」

「私がやるからいいってば」

「良いのよ？今までの分イツパイ影君に

甘えておきなさい」

ニコツと笑う

赤くなる二人

「ヨモギ、頼んでおいた…」

「出来てますよ！はい！うき団子10本！」

包みを受け取り帰るミノト

「いつもありがとう、では」

微笑むと帰って行く

「何か集まりでもあるのか？」

見送る影

「あれヒノエ姉さんのオヤツだよ？」

…は？オヤツ？

「晩御飯作るって…」

言ったよな?!

「違うの、ヒノエ姉さんは信じられない

くらい食べるの」

「ちよつとまで、10本一人で食べるのか？」

こんなデカイ団子

「1日に50本食べて三食普通に食べるのよ？」

マジ？

「だから見るたびに団子食べてる訳か」

「ヒノエさんはウチのお得意様なんだよー？」

でしようね

「よく太らないな…」

「本当、どこに入るんだか」

「あれ？こんな目立つ所でデートか？」

道具箱を担いだナカゴ

「でで！デートじゃねえし！」

「ち！違うよ！団子食べてるだけだもん！」

ナカゴとヨモギは『はいはいメンドクサッ！』

といった顔

「なあ天音、防具作る気は無いのか？」

ナカゴが指差す

「私はコレ貰っちゃったからね…」

自分の巫女装備を見る

「んー、こういう事は女性には言い難いなあ」

ナカゴは天音の装備を見回す

「何かあるのか？」

「これで今は十分だよ？」

「それ袴だからね、ベルトと違って色々

気が付き難いんだ」

ピタッと天音の手が止まる

「私…太った？」

無表情

「この仕事してるとハンターの体型見る癖が
付いてるんだ」

ナカゴは笑っているが

「……」

無表情で冷や汗の天音

「……」

何を言っても地雷を踏みそうな影、

固まっている

「いらっしやいませー！（汗）」

空気を読んで逃げたヨモギ

……

ヒノエ、ミノトの家

「ヒノエ姉さん」

「なあに？」

繕い物をしながら

「痩せ方を教えて下さい！」

正座で手をつく

きよとんとして手を止める

「痩せ方？」

団子の話をすると

「私は痩せようなんて思った事ないわよ？」

「ヒノエ姉さん何で太らないの？」

「体質…なのかしらねえ」

「私…痩せたい…」

その体質が欲しい

「あら、ダメよ？」

「何で？」

ナカゴとの経緯を聞くと

「男の人って表現のしかたが下手って

いうのかしらねえ」

上を向く

「？」

「それとも気を使ったのかしら？」

「どういふこと？」

「天音、貴女まだ成長期なのよ？背が伸びてる

のに体重同じじや前みたいに痩せちゃうわよ？」

病気がちだった頃を思い出す、あの痩せ方…

「何か痩せるの意味が違うような…」

キレイに痩せる？とは違うよなあ

「そうよ？天音は今女性らしい体型になって

行ってるだけよ？」

「でも太ってるって言われてない？…」

「まだ若い男性は勘違いするのよねえ」

「？」

「天音、皆が天音の胸見てるって知らないでしょ」

「えっ?!」

やだ怖っ!!

「ウツシさん見れば解るでしょ？」

男性なんてそんなモノなのよ？」

クスクス笑う

「呆れた、太ってるんじゃないんだ…」

ムスツとする

「影君の前で胸やお尻が大きくなってる

なんて言えないでしょ？まあ影君に

聞いてみたら良いんじゃない？」

「？」

「影君にタイプの女性を聞けば良いでしょ？」

それがヒノエ姉さんだから困ってるのに…

だから聞けないんだよ

ヒノエも勿論影の好みが自分であつた事は

知っている、

しかしある時からヒノエの前で影が緊張しなくなった、

天音はその理由を解っていない

………

集会所 テラス席

「あのさ、太ってる娘と痩せてる娘、

どっちが好き？」

「どうした？突然」

「うわ鈍いなあ影、お前の好きなタイプになりたいてって事だぞ？」

なぜかセキエンは得意顔、

付き合った事など無いくせに

「え？」

セキエンの意見に固まる影とうつつ向く天音

「セキエン、我々は少し離れよう」

なんと風月に『気を効かす』なんて発想があるとは

二人はミノトの方へ

ヤバイな：昨日の事引き摺ってるのか：

地雷踏まない様に：

「特にどつちとか無いぜ？」

「ホントにいい？」

睨む

「ヒノエ姉さん好きじゃん」

「俺はヒノエ様の性格って言うか

空気が好きなんだぞ？」

もちろん顔とかもだが、言ったら怒りそう：

「あの性格が好きなの？」

「あの人の周りは：何て言うか、穏やかか？

な感じするだろ？」

そうか、一緒に暮らしたことないから

分からないんだ、

人の心理の裏まで見てる鋭い所とか

「ふーん…私が太つても嫌わない?」

「あ、ああ、勿論」

慎重に…

少し離れた位置から背中越しに聞くアヤメ

(ブフツ!初々しいわねえ、ちよっかい出す

ヒノエ様の気持ち解るわw)

「じゃあ太つても良いね?」

「それは…あの…」

限度つてもものが

「何よ?違うの?」

「あー、…あの」

何て言ったら…

影が何を言っても天音は離れないだろうにねえ、

対岸の火事 我が世の春よ…ってね

「アヤメ、楽しんでるだろw」

小声のウツシ

「師匠もでしょ？天音って一途ねえw」

「思い込みの激しい娘ではあるんだよ」

「この世に男は影だけって感じ？」

「じゃなかったら男に四年も化けないさ、

下手をすればストーカーにも成りかねないし…

そろそろ助けてやるか」

ウツシが近付く

「天音、影は天音が太ろうが関係ないだろう？」

「そうなの？」

影を見ると目をそらす

やましい事があるから目をそらす、

と思ってる天音

単純に照れてる影、天音は解っていないが、

見ようによってはイチヤついていると

思われるのだ

「一途に自分を思ってくれてるのが影は

嬉しいんだよ？」

「じゃあ誰かが影を好きになつたら影はその娘を好きになつちやうの？」

「そうじゃなくて……」

困るウツシ

師匠……恋愛のイザコザは貴方には無理よw

「あんな……天音……その……」

うつ向く影

「ずっと会いたかった娘に……デートに……」

誘われたんだぞ？」

「今は私の見た目の話だよ？」

首を傾げる

「だからソコまでしてもらつたら

見た目なんてどうでも……」

男の意見ではある

「でも見た目気にしないなら何でハッキリ

そういえないのよ？」

所持持ちのハンターは感慨深く頷く、理解
出来るからだ

女はこうやって追及してくるのだ

「何だか面白そうね」

「ヒノエ姉さん？何で？」

「ミノトに呼ばれたのよ？影君が困ってるって」

「何かさ、影がハッキリしないんだもん」

「気付いてないのねえ」

「何に？」

「以前の影君なら私が近付いたらどうなった？」

前は落ち着き無く…緊張して…

影を見ると落ち着いている

「あれ？何で？」

挙動不審になってない

「分かる？天音」

「？」

「私はもう影君のタイプじゃ無くなってるのよw」

これで天音も気が付いただろう、集会所が『やれやれ』といった空気になる

これで二人をイジれなくなる一抹の寂しさは残るが

「じゃあ…」

立ち上がる天音

「？」

「じゃあ…」

「今度は誰よ!!」

「だからあ!!」

その場の全員がハモる

「肝心な所で鈍いわね…」

指揮

ギルドの二階、座敷に独りで座る里長

大社跡から見つかった過去の痕跡と

里の記録を読んでいく

イブシマキヒコ：風：強い風：

『ひゆるりと』：

もしもこれが風ならば：

「里長」

「フゲン」

ゴコクとハモンが来た

「む、揃ったな…」

里長は座り直すと

「フドウの話がな…」

苦い顔の里長

二人とも頷くと

「分かるゲコ」

「どうやらワシらは長い間、勘違いを

していたようだなあ」

頷く里長

「50年前の里の惨状…

あれは爆発によるものではない」

「まるで嵐の跡だったゲコ」

「フゲン、我等も覚悟を決めねばなるまい」

………

初めてカムラの砦を見たトガシとニシノの若者達

「凄い砦だな…トガシには造る財力は…」

「無理だ…ここだけでもカムラの力が分かるな」

キョロキョロする

「……ここでは前が見えないな」

「どうする？勝手に動いたらマズイよな」

「何だよお前ら、カムラ調べに来てたのかよ？」

砦の関門前、右岸で話すトガシの三人

「影の力を見てこいって里長に言われてるんだ」

「やっぱり親父か……」

「隣の里の力を知っておくのは当然だろ？」

「俺には『嫁探して来い』って言ったくせに……」

反対側の左岸

「アイツは前の位置か？」

「ここでは見えないぞ？」

「かと言って勝手な行動は取れんな」

「うむ、心配ない、影なら大丈夫だろう」

ふんぞり返る風月

「風月、お前は目的を理解出来てるか？」

そんな様子を関門に背をつけて見る里長と、

第三柵の上から盗み見るウツシ隊

里長は思う

今までは自分とゴコクから各パーティーの

リーダー、里守への指示をしていたが、

影の出現によつて指示出来る者が増えた

だからこそ間者（スパイ）の監視まで出来る、

中間組頭を置く事で不測の事態に対応出来る、

新たな組織編成が見えてきた

………

物見の法螺貝が鳴る

「第一波来たぞー！」

影の声

前方エリア、真ん中の島

「ハネナガ隊！神部隊！前へ！」

「春香隊は後方で待機してください！」

影が指示を飛ばす

「僕達先陣かよー！」

「いようし！やつてやるぜ！」

天音も含む8人がリオレイアとオサイツチに斬り掛かる

「何でアタシらは待機なんだあ？」

「影は今回の夜行に違和感があるんだらうぜ？」

マガドがいたからな」

撃竜槍の上にいるゴコク

「ふむ、問題は無いゲコ」

また前方だけでカタがつきそうだ…が…

不安はあるゲコ

墜落するリオレイアがオサイツチを潰す

「あ…：俺らの出番は無さそうだなあ」

中間エリアで退屈そうに欠伸をするヤクシと

「俺達は後進の指導になるべきかもな」

腕組みして笑うゲンジ

「上が引退しねえ限り現役だらうぜ？」

笑いながら後を見る、ウツシと里長の事だ

「俺はヨモギを育てたいんだがな」

後ろを見上げる

中間エリアの島、四機の昇降機にはハモン、ヨモギ、イオリ、そしてハンター見習いのタイシが準備している

「いいか？バリストは放物線で飛ぶ、

距離がある場合の落下を予測して撃つんだ」

ハモンは三人に操作を見せる

「射撃しながら体で覚えろ、それと影の

指示通りに弾丸の種類を変えろ」

「うん！やるよおーっ!!」

「じいちゃん任せて！」

「えーと、通常弾に榴弾に……」

ハモンは昇降機で下がりながら

「この一機は影のために空けておけ！」

.....

後ろから見るトガシの三人

「あの緑の着物は団子屋の……」

「本当に戦うんだな……」

「影の話だと射撃の天才だって話だ」

話すセキエン達

「地下は女子供まで走っているぞ」

「弾丸の運搬か」

「我らニシノはここまで団結出来るだろうか……」

「うむ、強い訳だな！」

「ヤツカダキ！春香隊！前へ！」

榴弾を頭に撃つ影

「おうよ！出番だあ！」

「待ちくたびれたぜえ！」

先頭へ駆け出す春香隊

「神部隊！ハネナガ隊！後退！ナルガへ！」

「ミハバ！ナカゴ！通常弾で

ヤツカダキ総攻撃！」

ほっほお、モンスター**の**強さとハンターの強さを合わせて交代させるとは…

影は全員のリスクを分散させとるゲコ

じゃが失敗した時どうするか…だなあ

関門前

「未だに第二柵までも到達しません」

ウツシ隊の部下のトウジ、伝令で動く

「むう、以前より采配が

上手くなっているようだな」

満足気な里長

「はい、神部、ハネナガも技量が上がり、

余裕がある様です」

さて…何事も無ければ良いが

「セイハク！ミハバとナカゴに偏りなく弾運べ！」

「やってるよ！」

「春香隊！下がって！」

「何だよ！まだ暴れ足りねえ！」

あつさりヤツカダキを撃退したが

そうか、春香さんの性格ならこの言い方だと

反発する

「次の大型に備えて下さい！」

「ちっ！」

渋々下がる春香

フドウがこっちに笑う、

これで合っていたようだ

「フルフル二頭！」

「僕達の出番だな！」

「俺が功労賞とってやる！」

再び神部とハネナガ隊が前へ

「中間部！ガンナー！前へお願いします！」

???

影の言葉に全員が違和感を持つ

「ガンナー！前へ来るゲコ！」

戦力は余裕…影、なぜゲコ？

「射撃でフルフルをお願いします！」

「ミハバ！後退弾！」

上を指差す

言われた通りに撃つミハバ、

大物リオレイアが落下

「神部隊！ハネナガ隊！春香隊！全員で！」

「射撃出来る人は全員でフルフルを！」

「ミハバ！ナカゴ！フルフルに総攻撃！」

柵に向かい直進するフルフルに次々

バリスタの弾が刺さり、

ガンナー達に蜂の巣にされる

リオレイアはサマーソルトの度に影に墜落

させられ、剣士に集中攻撃

いつもの落下ダメージを狙わない…なぜ？

皆が違和感を持つ

逃げて行くフルフルとレイア、それは良いが…

撃退したから正解…なのか？

砦が静かになる、終わったのか？

「全員回復と研ぎ、調合してください！」

「回復ってたってなあ」

「ダメージらしいダメージ無いぜ？」

「影っ！レイアでフルフル狙わなかったの

解ったよ！」

嬉しそうな天音

「私達を放電から守るためね！」

「あ！そういう事か！」

「なんだよ神部、俺分からねえ」

フルフル二頭にレイアを落下させるのは良いが、その後団子状態になればフルフルの範囲攻撃が避け難い

影はそこまで考えている

「はぁー、指揮するってのは難しいんだなぁ…」

ハネナガは呆れる様に

なるほど、影は更に成長したゲコ、

各ハンターのダメージを最小限にしたゲコ…

だが若すぎるゲコ…だから経験させねばなあ

関門前

「終わった様だぞ?」

「困ったな、何て報告する?」

「本当に影の指揮なのか? アイツ凄いな」

「どうする? 引き揚げるか?」

「せっかく参加したのに…」

「これでは何もなあ……」

「む？ 全員無事で良いのではないか？」

里長の口角が上がる

これなら何も報告出来まい、影の活躍も見えないしウツシも動いていない……

このまましばらく待とう………

待つ？

待つだと？

ワシ自身も『これで終わりではない』と感じているのか？

「おい影！いつまでこうしてんだ?!」

「もう引き揚げて良いんじゃないか？」

「終わったろ?どうした影?!」

皆から声上がる

動揺する影、里長かゴコク様の撤退の合図で

いつもは終わる、けど……………

俺が出して良いのか?……………

それに…………この前マガドが来たし…

ゴコクの方を見る

ほっほお助けを求めてきたな、

だが指揮官たるもの人の意見で簡単に

揺らいではイカンゲコ

乗り越えろ影、上に立つ者の責務は重いゲコ

「ドンと構えろ影い!」

フドウが怒鳴る

「不安になるな!」

フドウさんが解ってくれた！

「もう少し体制を維持して下さい！」

「大物で終わりだろ？」

「又シでも来るってか？」

「誰か索敵行ったら良くないか？」

ざわつく

「うるせえ!!影が言ってるんだ！従え！」

春香の一喝で全員黙る

才能はあるが経験と実績不足は否めんゲコ

ちよつとした事で動揺する…

一つのミスで崩れかねん

「ドドツドドツドドツ！」

その音に全員が振り返り正面を見る

「グロオアアアツ!!」

咆哮する黒い巨体

「ホントに来やがった！」

「やっべえ！影！」

「マガドだあ!!」

予想が当たった!

「春香隊前へ!」

「バリスタ!榴弾と後退弾!」

「フドウさん!指揮して下さい!」

「おっ!?!おっ!」

そうか、経験あるのは俺達だけだ!

「炎を食らったヤツは転がれ!

消さねえと爆発する!」

うむ、これが影の良さであり悪さでもあるゲコ、

フドウに指揮を預けるのは当然の様だが、

責任放棄とも言える

ヒュンヒュンと尻尾が鳴る

「ガード!」

フドウの声に

「?」

「なんで?この距離で?」

若手が戸惑う

次の瞬間尻尾が槍のように伸びる！

「うおっ！」

「届くのかよ！」

「あつぶねえ！」

「これ私が食らったヤツ!!」

天音は舞う様に避けた

「見た目に騙されんな！今までの四足

モンスターとは違うぞ!!」

春香も声を上げる

見たままならジンオウガより上半身が

発達したパワー型、

力押しするモンスターに見えるが

「フドウさん！頭相手なら

混乱が起きません！閃光投げます！」

このために数個持っていた

「そうか、影！お前に任せた！」

普段の夜行では閃光を使わない、

連携を止めてしまうからだ

「投げます!」

.....

「申し上げます! マガイマガド出現!」

「やはり出たか!」

苦い顔になる里長、

セキエンと風月達を見たあと小声になる

「ヒノエの様子は?」

.....

キャンプ

「何だかヒマになってきたわねえ?」

団子を食べるヒノエ

「姉様、まだ1頭例のモンスターが居るそうです」

「援護もほとんどいらぬニヤ、

しかしヒマだニヤア」

ゼンチはゴロゴロする、怪我人が一人も居ない

………

「変化は見られませんでした」

トウジも小声に

「うむ、それなら心配ない」

マガイマガドで終われば良い

「ウツシー・ワシも前に行く！……ここを頼む！」

マガイマガド……ヤツを見ねば……

それと……

……イブシマキヒコ……来てくれるな……

………

「ぎゃあつー！」

転がったマガドにハネナガが引つ搔かれた

「ハネナガさん！大丈夫!？」

天音が助け起こす

「ダウンじゃねえのか！」

「フェイントかよ！」

ほう！知能も高いゲコ！

やられたフリまでするか！

追い詰められたモンスターを横から狙う…

楽に狩る…

大物に追い立てられ混乱した獲物を…

問題は…その大物…

二回連続サマーソルトの様に空中で身を翻すと

「ガード!!」

春香の怒鳴り声

一瞬空中で動きを止めた後、尻尾を振り下ろす！

「ズダアアン！」

「アブねえ！」

「初見殺しかよ！」

「何なんだよ！コイツの尻尾！」

「アタシも何度か食らったぜ！動きを見ろ！！」

「怪我した人は回復を！」

動きが速くて当たり難いし、

タイミングが解らず後退弾も使えない

マガドは後ろ脚で立つ、すると青い炎が周りに

「爆発するぞ！避ける！」

「ドドドン！」

谷間に反響する

「何種類攻撃持ってたんだ！」

「くっそ！隙が解らねえ！」

「私達は何も出来ないね……」

ただ見ることにしか出来ないヨモギ達

「せっかく参加してるのに……」

「おれ弾運び卒業したいのになあ」

三人共に悔しい

「お前ら！ 頂垂れんな！ 顔あげろ！」

ヤクシが下から怒鳴る

「出番が無えって事は余裕があるって事だ！」

指を指すと

「前を見ろ！ あれが未来のお前らだ！ 学べ！」

「ヤクシの言う通りだ」

「里長っ!？」

「お前達も数年であそこに立つのだ、

先輩のやり方を良く見るのだ」

ニコリと笑う

先達の背中

「尻尾の攻撃多いな！」

「なるほど！見慣れて来た！」

フドウ達の指示で回避やガードが出来る

ために余裕がある

立派な爪、角、牙、背中を覆う鱗に青い炎

その姿に最初は驚いた、しかしこの人数だと

恐怖も薄れる

「よし！次は僕達でやってみよう！」

神部達と天音が斬り掛かる、

いつの間にか訓練の様になって来た

前足を振り上げ

「ドン！！」

「うおおー！お手』もやるぞー！

ジンオウガと同じだ！」

「2連続?! 3回はないのか?!」

ゆつくり横に歩くと火の玉が飛んで来る!

「ブレス…じゃねえ!!」

「あの炎は何なんだよ!」

「体から出てる…のか?」

「ありや身体中から出てるのか?」

「似た技見たことないな」

「まさか古龍とかな」

「解らねえな」

ベテラン達は柵越しに見て分析する

「怪我したら下がって!」

閃光玉も無くなりヤル事が無い影、

里守達も眺めるだけ

「セイハク、光虫ってキャンプにあるか?」

「ないよ？夜行で使わないし」

首を出し、セイハクもマガドを見る

「みんなヒマになっちゃったよ」

マガドの纏う青い炎が紫になり赤みを増す

「注意しろ！大技来るぞ！」

「全員ガード！方向間違えるな！」

「ガード無いヤツは飛び退け！」

爆発と同時に飛び掛かり！

普通の軌道ではなく低空で飛行するように

往復すると、今度は空中から飛び込む！

「ドオオオン！」

炎を纏いながら爆発！

「ぎゃあっ！」

「あっじいっ!!」

「ガード失敗した！」

「食らったヤツは回復しろ！」

フドウ達のお陰で大怪我した者は居ない

様だが、この技はハンターが密集していると
事故になりそうだ

「セイハク、応急薬10個位持って来てくれ」

「あいよ」

マガドの炎が消えて…小さく見える

「よし、もう良いだろ！止め刺そうぜ！」

春香達が前へ出る

通常の四人パーティーなら苦戦しただろう、

しかし迎撃設備が整った砦に12人のハンター、

最低でも又シレベルでないと無理な場所だ

あっけなく袋叩きにされ逃げ出す

「逃げんなコラア!!」

「追うな春香！」

「今までに無かったタイプだったな」

「似た骨格は…シンオウガか？」

中間部の中堅とベテラン達からは不満の声

「あんだよ、逃げちまったぜ？」

「俺達出番無しかあ？」

「俺もやりたかったぜw」

「まあ若手に経験を積ませたって所だな」

ゲンジが顎を擦る

「少し面白えモンも見れたしな」

腕組みするヤクシ

「何だ？」

「フドウだ、あの野郎剣士だけなら

指揮できそうだw」

「ほお……っ」

大きな溜め息を吐くゴコク

知能が高い分、勝てないと解れば即逃げるか……

50年前……砦も無かった頃は大勢の死人も

出した……その苦勞が今報われたゲコ

「撃退した！」

「勝った?!」

「終わった?!」

ヨモギ達が騒ぎだす

「うむ、よくやってくれた…」

ワシとハモン、そしてゴコク殿、

同年代で砦に立つ者は…

いつの間にか三人まで減ってしまった…

砦さえ無かったこの場所、防具も無しで

マガドと戦い多くの仲間を失った

ようやく英霊達の墓前に報告出来る

『カムラは勝った』と

里長は数歩進む、一步一步踏み締める様に

中央の島の前方へ、大きく息を吸い込み

「ハツハツハア！皆！…苦勞だった！」

長年のカムラの宿敵に引導を渡した！

この勝利の意味は大きい！」

全員が島の周りに集まり注目する

イオリとヨモギの間に立ち拳を突き上げる

「また明日からカムラの繁栄のために働き

戦うぞ！ 気焰万丈！！」

「気焰万丈！！」

全員で武器を拳を突き上げる

先代、先先代、カムラ歴代の里長よ、

見ておられるか？

一つの時代が終わり、新しい時代が来た

これでワシも…引退出来る…

「里長あつ！！」

ミノトがキャンプから飛び出す！

「姉様が！ 姉様の様子が！」

.....

「対よ……対よ……我が……」

フラフラと歩くヒノエ

「ヒノエ！しつかりするニヤ！」

ゼンチが揺さぶるが効果が無い、

目が金色に光っている

「来た……か？」

ハモンはキャンプの道具箱を空け、

埃だらけの袋から武器を取り出す

「久しぶりにコイツの出番だな……ゼンチ！

座らせて足を縛れ！」

.....

「なんだと!？」

辺りを見回す里長

「まさか!」

ウツシは飛び降り前方へ走る!

監視などしている場合ではない!

「天音!まさかアレか?!」

「わかんないけど…」

あの夜の…

「影!備えるゲコ!」

「ゴアアアアーツ!!!」

谷間に爆音が響く

「何っ!?!」

「まだなんか来るのか?!」

「全員配置に戻るゲコオ!!」

「マジか!終わってねえのかよ!」

「走れ！」

「聞いた事無い咆哮だぞ！」

関門前

「まだ何かあるみたいだぞ？」

「何だ今のデカイ咆哮？」

「影達は大丈夫なのかよ」

「避難しても良いのではないか？」

「いや、この慌て様は未知のモンスターを

知る機会かも知れないぞ？」

「これでは影の力も知れないし、手ぶらで

帰る訳には行かないが…危険でもある」

「うむ、ウツシ先生が行ってしまった！」

「一緒に前に行こう！」

「風月！動くな！」

……………

影が島に登る…と、

前から弱い風が吹く、少し強くなったかと
思うと奇妙なモノが来る

影からは見えた、金色の目、鋭さの無い

丸みを帯びたトゲ、何より飛行姿勢と

言うものが存在しないかの様に空中を泳ぐ姿

「影！イブヒコ!？」

「あれだ！ミハバ隊！ナカゴ隊！

見えたら総攻撃！」

「ヨモギ！イオリ！タイシ！

そつちも通常弾準備！」

「ベキベキベキ……」

第一柵を破ると瓦礫が真上に巻き上げられる

「でけえ！つてか長え！」

「初めて見るぜ！」

「何か不気味なヤツだな！」

「何だコイツ！浮いてんぞ！」

「周りの浮いてる岩は何だ!？」

「撃てえ!!!」

次々に唸りを上げて刺さるバリスタ、
岩に阻まれる弾もある

「どこ斬れば良いんだ!?!」

「逆立ち?!何だコイツ!」

「なんだよコイツ!フラフラして

狙いが定まんねえ!」

「関係ねえっ!」

春香が走り込み抜刀斬り

「何処でも良いから斬っちまええ!」

このモンスターはなぜココに来たゲコ?

理由は?

いや、今は考える時ではない!

「影!こつちに誘導出来るゲコ?!」

撃龍槍で…

「解りません!」

どうしたら良いんだ?!

対応が解らない！

誰も正解を知らない！

マキヒコが前足を振り下ろす！

明らかにハンターを狙う！

「ドオン！」

「アツブねえ！」

「距離長え！」

皆避ける…が

「どわあっ！」

「なんだあ!？」

一瞬遅れて足の周囲に竜巻が起こり、

数人が吹き飛ばされた！

「うわあああっ！」

「なんだコレえ！」

「避けてもアブねえってかあっ?!」

翔虫を使い空中で体勢を立て直す

「ゲフツ！」

「ぐあつ！」

出来ない者は背中から落ちダメージ

射撃の方が安全…誘導なんて無理だ！

「ガンナー全員で総攻撃！」

剣士は下がつてください！」

「ゲンジ！前へ来るゲコオ！！」

「ミハバ！ナカゴ！ヨモギ！通常弾のみ！」

影は試しに榴弾と後退弾を撃ってみるが

怯みもしない

頭を下にしたマキヒコの口から赤い稲妻を纏う

…塊？

「これ…ブレス？…ブレスだあ！」

「皆避けろお！」

ハンター達は事前に回避、

しかし影に真つ直ぐ向かって来る！

「ドオン！」

建屋にブツかり弾ける

「ぐうっ！」

バリスタにしがみついて耐えた

と同時に

「え？え？うわあああああつ！」

真上に吹き飛ばされる影、

そしてバラバラになったバリスタと建屋

「影いっ!!」

影はこの回避が下手！

天音は翔虫で影を追いかけ掴む！が、

ヤバツ！勢いでやつちやった！

どうやって着地を！

「まったく世話の掛かる愛弟子だよ！」

ウツシ隊が抱き止め翔虫の糸で降りる

「アヤメ、ヒナミ、トウジ、怪我人の救護だ！」

「了解！」

又シ以上の攻撃ゲコ！建屋も一撃だし

恐らく柵も意味無いゲコ…

どうしたら良いゲコ…

「ウツシ!!」

里長の声

「お前は里を継ぐのだ！生き残れ!!」

振り返るゴコク

そうじゃな里長…

ワシらが後の者にしてやれる事は…

里長は後ろを向くと

「客人達よ！もしもの時はカムラの者を頼む！」

大声で叫ぶと大太刀を抜き鞘を捨て

「お前達は自分の命を優先しろ、

何があっても生き残れ」

ヨモギ達に言うとうと島を降りて前へ行く

「里長っ?!」

「どうすんだよ?!」

ヤクシ達に止められるが

「皆!ワシが生き残ったのは今日!

恐らく今日のためだったのだ!」

まるで楽しい場所に向かうように笑顔で歩く里長

「やれやれ…あいつが行くなら…」

ハモンが昇降機から上がる

「じいちゃん?」

「イオリ、カムラはこうやって繋いで

来たんだ、良く覚えておけ」

ナルガのライトボウガンを持って飛び降りる

「これだけ浴びてなぜ怯みもしないんだ!」

ゲンジ達ガンナーは攻撃するだけ、

岸に攻撃が来ないからだ

撃ち放題なのに…

「まるで効いてる気がしねえ！」

「弾かれてるのか?！」

里守り達も撃ち放題

マキヒコは地上のハンター達へ攻撃している

「攻撃パターンは多くはねえな！」

回避しながらフドウが叫ぶ

「けど一発食らったらヤベエぞコレ!!」

春香も転がる

「大きく回避しろ！追加の竜巻は食らうなよ！」

弾丸を弾いている様子は無い、

考えられるのは…異常な体力ゲコ

「ハモン、懐かしいな」

「50年前…先達は笑っていた」

「あの頃はろくな武器防具も無く…」

悔しかったなあ」

「あの悔しきは忘れん、だから今日まで

鉄を鍛えてきた」

二人で笑いながら歩く

「我らには後を継ぐものが大勢いる、

ここでワシらが死んでも何も変わらん」

「ナカゴは一人前になったが、ミハバは

半端にしちまった、それが心残りだ」

「行くぞ」

「ああ…」

「楽しいなw」

「楽しいなあw」

マキヒコの前に立つと

「配置転換！」

振り返り指示だけすると

「おおりゃああつ！」

斬り掛かる

「若い者は後ろへ行け！」

「ミハバ！ナカゴ！後退戦だ！」

それだけ言うとハモンも最前列で貫通弾を

撃ち始める

「前方ベテラン！若手は後退！」

「えっ!？」

その声に皆が振り返る、慣れない指示の声

ウツシが中央の島から指示を飛ばすが：皆戸惑う

「皆急げ！里長の意思をムダにするな!!」

「影！里守りへ指示を出してくれ！」

「は、はい！」

影は中央のエリアの島、ウツシの隣に登ると

「ヨモギ！イオリ！タイシ！奥へ行け！」

影は関門前を指差す、

セキエンや風月達がいる場所

「私はい？」

「そう！速射砲だ！」

「里長！こつちに誘導出来るゲコ?!」

「ぬうっ！分からぬ！」

一人で斬っている里長

「俺が囷やってやる！」

ヤクシが撃龍槍の横に立つ

「ヤクシ！止めるゲコ！お前は下を育てるゲコ！」

下に怒鳴る

「心配ない、危なきや逃げるぜ？それにな」

里長を見ると

「師匠の戦い見届けるのは弟子の務めだぜ？」

腕組みして仁王立ち

「言えてるな」

「ゲンジ！」

「俺にガンナー叩き込んだのは

ハモンさんだからな」

「こちらも仁王立ち

「お前達は剣士とガンナーのトップゲコ！

育てるのも仕事ゲコ！」

「ほらゴコク様よ、しっかり見てねえと」
「チャンス逃しますよ？」

犠牲

「よおし……こつち来い……」

「里長……こつちに回避を……」

撃龍槍の前に立つヤクシ隊と射撃するゲンジ隊

里長は撃龍槍に向かい走る

「付いて来い……」

振り返りながら叫ぶ

「そのまま真っ直ぐ来るゲ……」

悠然と空中を泳ぎ左岸へ近付く

表情の無い金色でまん丸の目、

大きく太いが鋭さの無い奇妙な角、

発達した上半身、太い前足、なのに下半身は

魚のようで後ろ足は鰭になっている、

そして何より常に浮いている

似たモンスターがまったく居ない、

どんな進化をしたのだろうか

ギリギリ射程の外で止まったイブシマキヒコ

「ちいっ！」

「読まれたか?!」

「おのれい！」

里長が振り返ると

マキヒコは身を翻す、サマーソルトの様に尻尾を

「バレてるゲコオツ?!」

「バカな！そこまでの知能が!？」

「ぬうりゃああああっ!!」

咄嗟に里長が一閃!!

「ズダァン!!」

さすがに地響きを立てて地面に落下したマキヒコ

「さすが里長！」

「やっってくれるぜ！」

「頭は俺達でヤルぜ!!」

ヤクシ隊が走る

「貫通弾!!」

ゲンジ達は射撃

「よおし! 通常弾一斉射撃!!」

岩が一緒に落ちた!

影から里守りへ指示が飛ぶ

雨のように弾丸を浴びるマキヒコ

「フゲン! 立てるか?!」

ハモンが走り寄る

「老いとは恐ろしいな…」

ぜえぜえ座り込む里長

「もうワシには…扱えんか…」

大太刀を見る

「一回でも風ぎ払えれば十分だ、

そっちがまだあるだろう?」

助け起こす

「ああ、退いてたまるか！」

大太刀を地面に刺すと背中中の双剣を抜く

マキヒコは起き上がると逆立ちで浮遊する…

「ええい！思い通りに誘導出来ん！」

乱舞する里長

「ならば…ゲンジ！来い！」

ハモンが撃龍槍の方へ走る

「もう一度こちらに注意を向けさせる！」

撃龍槍の間近で射撃するハモンとゲンジ達

「こつち来い化け物!!」

それを見る影、意図を読むと

「右岸！攻撃中止！左岸！一機で攻撃！」

「了解だ！」

ナカゴは手を挙げるとゴコクに近い

バリスタ以外は攻撃を止めた

「さあ来るゲコ…」

もう少し…と、

マキヒコは一瞬で距離を詰め右手を振り下ろす
「ドオン!!」

最初に見た攻撃、追い討ちに竜巻が来る！
じゃが好機!!

「食らうゲゴオ!!」

「ドガアアアン!!」

撃龍槍命中！再びダウンするマキヒコ

「いよっしゃあ！当たったあ！」

「これでイけるぜ！」

大歓声！

と同時に飛ばされる建屋と撃龍槍、

そしてゴコクとナカゴ隊

「うわあああつ!!」

「ぬうっ！」

見上げるハモン

「ワシより里守りを助けるゲゴオ!!」

飛ばされながら叫ぶゴコク

「俺達が助ける！攻撃を!!」

トウジ達がナカゴ隊を受け止める

「い、ふうっ!!」

地面に背中から落ちたゴコク

中間部

「あの落ち方ヤバくねえか?!

「虫持っていないのかよ!」

「ゴコク様!生きてるよな!」

「おいフドウ!どうするよ?!」

フドウはウツシを見上げるが、ウツシは

首を振る、そして

「40才以上の者!前へ!」

影の隣で叫ぶ

総掛かりは簡単に判断出来る、しかし

若い者を失えば里が老い滅びる

だから若手を優先で逃がす、
こうしてカムラは生きてきた

里の存続のため

理屈は正しい

だが感情が邪魔する

見てるだけか？

俺は見てるだけか？

これで後悔しないか？

拳を握るフドウ

「くそっ！」

バリスタを叩く影、ゴコクとナカゴを

守れなかった！

誰もケガさせず完璧に守りたかった！

その様子を運ばれながら見るゴコク
これで良い…

影は指揮するには欠点がある

それは

『捨て駒』と言う考えが無い

それも含めて全体指揮なのだ

指揮官は勝利のために犠牲も出す冷徹な

思考が必要なのだ

イブシマキヒコ…このモンスターに

犠牲無しで対応は無理だ

ワシら三人は影の両親を含め多くの犠牲の

上に居る

…次は我等の番で良いゲコ

…学べ影

「くそっ！またここかよ！」

こつちも地団駄を踏む春香

「仕方ないだろう？」

神部がなだめる

「影…ケガしなきや良いけど…」

春香達は更に後ろ、第三柵まで下がっている

「姐さん達がこつちまで下がったな…」

「退避…するか？」

「どうするか…」

「天音！我等はどうすれば良い？」

「バカか風月」

「まだ何も得られてないだろう？」

「まだ逃げる訳に行くかよ」

マキヒコが溜めをする、と、竜巻が数本起こる

そして、

「ブオオオオオッ！！」

左から右へ横風ぎに広範囲のプレス!!

中央部もハンターごと巻き上げられる!!

「柵が!!」

「何っ!？」

「ぎゃあっ!」

「ガード!」

「間に合わねえっ!」

.....

「.....いつてえなあ.....」

よろけながら立ち上がるフドウ、

辺りには瓦礫、砂埃が立ち込める

前方エリアは壊滅、第二柵も飛ばされ

中間部もダメージ

「……………ぐうつ…」

立ち上がれない里長、薄目で瓦礫と埃の

一帯を見る

そうか、これだ、間違いない

50年前我等がこの場所でマガドと戦った時、

里へはイブシマキヒコが行って壊滅させたのだ

「…ゲホッ！」

立ち上がる数人のハンター

「皆無事か?!」

「生きてるか?!」

「武器がどっか行っちゃった！」

「影っ！返事して！影いつ！」

「天音か?!後ろへ下がれ！ウツシさん！

里長！どこだ！」

視界が利かない中でフドウが怒鳴る

「ゲホッ!…ん?あれ?」

起き上がる影

「影っ!?!」

「天音っ!?!ここだ!」

瓦礫と埃の中で手を取り抱き合う

「影!良かったあ!」

「天音、イブシマキヒコは?」

「解んない、爆発みたいに皆が吹っ飛んだ

のが見えて…」

「……………あああつ……………!」

???

叫び声?それの上からパラパラと何か…

「やあああああつ!!」

「ドドドドドツ!!」

速射砲が火を吹く

二人とも真上を向く、埃で視界は利かない
が岩を纏って浮く巨体のシルエツト

.....

関門前

「ちくしょう! 皆殺られちゃったのかよ!」

中間部に大量の埃、その上に

イブシマキヒコが浮いている

「春香! これは避難だ!」

神部に引つ張られる

「中間部の設備もダメかも知れねえぞ!」

「天音が走って行っちゃまった！」

「野郎こつち向いてるぞ！」

「みんな！避難して！」

ヨモギは叫ぶと

「やあああああつ！！」

速射砲を撃つ

「そこから入って！」

イオリは地面の扉を指差すと

バリスタを撃つ

「お前らが先に逃げろ！」

「アレもう一発撃たれたら終わりだぞ！」

「何もしないで逃げるなんて出来ない！」

「じいちゃんに会わせる顔がありません！」

「セキエン！逃げるぞ！」

「影と天音が！」

「お前は次期里長だろ！」

肩を捕まれ連れられていかれる

「ウツシ先生が見えないのだ！」

「馬鹿者！」

「お前はニシノの人間だ！」

「大人しくしろ！」

引き摺られていく風月

「ドオン!!」

突然関門が音を立てる

「何だ?!」

「おい!あれだ!」

イブシマキヒコの周囲に浮いた岩や瓦礫が

次々に飛んで来る!

明らかに邪魔なものと認識している

第三柵を簡単に貫通して関門にぶつかる

「あぶねえ!」

「他の通路だ!」

「建屋の中通れ!」

砦が…終わる…里が…

.....

「…今の…音は…?」

「ゴコク様! 気が付きましたか!」

水桶を持ったミノトの声

ゴコクは頭を起こすと唾然とする

「コミツ! 秘薬の素材が足りないニヤ!」

「もう使い切っちゃって応急薬しかないよ!」

まるで戦場のキャンプ、ウツシ達

運び込んだ里守とハンター達

このケガ人の数は…

「ちくしょう!」

「暴れるな!」

神部に引つ張られ、春香達が地下から出てきた

「あんなもんだうしたら良いんだよ!」

ハネナガが地面を叩く

避難……やはりさっきの音は関門が攻撃されて……

「こうしては……おれんゲコ……」

「ゴコク様！まだ休んでいないと！」

多分あばら骨が！」

「ミノト！槍を貸すゲコ！」

ウツシも影も見当たらない、フドウも居ない、

これからの里を守る者が戦っている……

ようやく埃が晴れて来ると

「ヨモギだ！」

「凄い！岩を撃ち落としてる！」

飛んで行く岩を迎撃、

しかし弾切れも早い速射砲

「影！天音！お前らは使える設備探せ！」

フドウの姿が見えた

「疾風迅雷!!」

尻尾に攻撃するウツシ

「ウツシさん!」

生きてたか!

「フドウ! 注意を逸らすよ!」

瓦礫の中にハンターが埋まつてるかも

知れない、しかし今は…やるしかない!

「ウツシ!」

「里長!」

「ワシが時間を稼ぐ!」

額から血が滲む里長

「アンタ一人じゃ無理だぜ!」

「おおヤクシ! 無事だったか!」

「あつちこつちガタガタだけどな!」

べっ!と血の塊を吐き出す

「こつちを向け!」

前方部から狙撃するゲンジ

「おお！ゲンジさんも無事かよ！」

「無事じゃない！弾丸が少ないんだ！」

「残ったのは十人程か？」

里長は見回すと

「影と天音も居るけどな、使えるバリスタ

探しに行かせたぜ？」

ニヤリとするフドウ

「良く避難させたな」

笑う里長

「解って来たじゃねえかよ」

同じくヤクシ

「さて……ここが引き際だ、

ワシとしてはウツシ、フドウ、

お前達には逃げて欲しいが……」

「どこへ逃げます？」

「逃げ場なんざありませんぜ？」

笑う二人

「こうなったら成るようにしか成らねえ！」

笑いながら突っ込んで行くヤクシ！

「このデカブツ道連れだ！」

一斉に斬りかかるベテラン達

「天音！そっちは?!」

「ダメ！旋回しない！」

中間部の使える設備を探す

「天音！奥へ行くぞ！」

ヨモギ達が使った場所だけはまだ無傷

「おおお!!」

雄叫びを上げながら戦う里長達、横目に見ながら

皆が戦ってるんだ…早く援護しないと！

「よし使える！天音！操作覚えてるか!?!」

左岸に影

「バカにしないで！」

右岸に天音

バリスタで援護する

「セイハク！誰か！弾だ！」

地下道に響く声がキャンプに伝わる

「影あんちゃんだ！」

「影はまだ戦ってんのかよ！」

「避難させねえと！」

「セイハク！アンタは逃げな、

ここからは母ちゃん達でやるからね」

セイハクを抱くと

「里に残ってるのは身重な人ばかりだ、

頼んだよ！」

それを聞く春香

アタシは何をしている？

何で守られてる？

これはアタシか？

コレがアタシか？

「があああーっ!!」

突然雄叫びを上げる春香

「グダグダ面倒くせえ!!」

「まて春香!!」

神部達を振り切り地下へ飛び降りる！

「なるほど！攻撃が正確だ！」

「その分避けやすい！」

マキヒコは一瞬で前へ一回転、尻尾を叩き付ける！

「ドオオン!!」

と同時にブレスの様なモノまで

「ぐわっ！」

「だあっ！」

「しくじった!!」

数人吹き飛ばされたが助け起こす暇はない

「どうするよ?!」

見回すフドウ

「僕の隊が救護する!」

構わず突っ込むウツシ

「ゲンジ!」

瓦礫に埋まったのだから、

全身傷だらけのハモン

「ハモンさん!生きてたか!」

「弾丸全部置いて避難しろ!」

並んで射撃を始める

「バカ言うな!アンタが避難しろ!」

「お前は下を育てるんだ!」

「俺はガンナーしか出来ない!」

「?」

「アンタが居なきや砦は直せない!

武器防具の面倒も見られない!」

振り返ると

「そのヤツ！この人頼む！」

「承知した！」

突然現れた風月

最善

「よせ風月！」

「貴様自分で何を言ってるか解ってるのか！」

砦のキャンプから出た森、多数のガルクが待機している

仲間の前でふんぞり返り

「だからお前達だけで帰れと言っている！」

それを見るセキエン達、

風月は残るのか？

「お前はニシノで期待の…」

「ここで逃げては俺の中で大事な

何かが折れる！」

語彙力が惜しいが

「そうだよな…」

「セキエン！」

「お前は次期……」

「団子屋の娘でさえ自分の出来る事を

やったんだ、ここでタダ逃げたら……」

俺の中でも何かが……

うつ向く

「ちよつと！どいて！」

キャンプから出る子供達

「セイハク！僕の後ろに乗って！」

「待ってくれ！俺も！」

ヨモギ、イオリ、タイシ、セイハクが

ガルクに乗る

「避難するの……か？」

セキエンの声に

「避難『させに』行くの！」

「今里には妊婦さんと足を悪くした人しか

居ないんです！」

「俺達が助けないと！」

走って行く

「……………」

焦燥と共に見送るセキエン

「風月！確かにカムラはお前の父を助けた！」

しかし「……」でお前が……」

「なぜ分からんのだ!!」

風月の一喝でその場が固まる

「……」が落とされたら化け物はどこへ行く？

カムラだけか？」

その言葉で全員の顔色が変わる

「ニシノへ行かないと言い切れるか？」

セキエンは振り返る、俺が出来る事は

「お前ら急げ！避難民の受け入れ準備！」

同時にトガシ全体の避難準備だ」

「セキエンお前は?!」

「俺は出来る事をやる！」

「よし！行くぞセキエン！」

「風月っ!!」

ニシノの仲間には掴まれるが振りほどき

「ここでカムラに尽力する事はニシノの為に
にもなるだろう！」

「カツコ悪い自分に戻りたくねえ！」

二人ともキャンプへ飛び込むと、ちようど

春香が地下へ降りた

「神部さん！姐さんはどこへ?!」

「影の所だ！」

「それなら！」

セキエンも飛び込む

「場所空けて！ゼンチ！急患よ！」

アヤメがハンターを背負って来た、

砂埃だらけ

「アヤメ殿！俺もウツシ隊の」

風月が言い終わらない内に

「前方部の地下道！そつちに向かつて！

人手が足りない！」

「承知！」

地下道へ飛び込む

.....

「天音！影！」

「春香さん!？」

「春香！良い所へ来たゲコ！」

影の方を頼むゲコ！」

右岸 天音のバリスタの前で盾を構える

ゴコク、それを見ると春香は察する

「大剣持つて来て正解だったぜ！」

影の前でガード姿勢

「来るゲコ！」

岩が次々飛んで来る！

(やっべえなあ、ランスの盾ならともかく

大剣じゃあ…)

「姐さん！」

セキエンが隣に並ぶ

「お前…」

驚く春香

「影！俺が守る！撃て！」

飛んで来る岩をひたすら防ぐ

「ゴガン！ガン！ガキン！」

「腕イテエー！」

早くも泣き言のセキエン

「テメエしつかり踏ん張れ！」

……

「ハモン殿！」

風月に地下道へ引つ張り込まれた
「離せ！ゲンジを死なせる訳には！」

前方部 地面の昇降機の地下

「……！！」

「む？何か」

「……聞こえたな……」

「師匠！」

地下道を這っているミハバ

「ミハバ！無事だったか！」

「足をやっっちゃって……」

まだ俺の隊が三人向こうに」

「ハモン殿、キャンプへ運びましょう」

「しかし……ゲンジ……」

上を見る

「「こちらも弟子では？」」

.....

「里長あ！回復薬あるか?!」

ヤクシが怒鳴る

「ワシは持っておらん！」

「誰か砥石持ってるかい？」

「ほらよ！ウツシさん」

フドウが投げる

四人共に限界が近い、肩で息をする

「隊長！ほぼ収容しました！」

ウツシ隊の三人

「良くやった、里長！」

「うむ、潮時だ、我等も……」

マキヒコの周囲に数本の竜巻……

「これは！」

「やべえっ！」

あのブレスだ！

「ブオオオオーツ!!!」

回転しながらブレスを風ぎ払う！

.....

「くっそ！またあのブレスか！」

目の前を手でバタバタ扇ぐ春香、

視界が利かない

「ゲホッ！砂埃凄いな！」

こつちまで来なくて少し安心のセキエン

「これじゃ撃てない、天音!!見えるか?！」

「全然ダメ！」

何も出来ないが関門から音もしない、

岩は飛んで来ていないようだが

「気をつけ……るゲコ……」

そのまま潰れる様に倒れるゴコク

「ゴコク様？大丈夫？影！ゴコク様が！」

そう言われてもこの視界では

「ちいっ！邪魔な砂埃だな！」

「春香さん！」

「姐さん?!」

春香は手探りで建屋を降りると

右岸に向かつて歩く

（あの太った体運べるヤツ、

アタシしか居ねえじゃねえかよ）

「グニッ」

「ん？」

春香は何か踏んだ、足元を良く見ると…

「フドウ?!」

引き起こす

「おい！フドウ！」

揺さぶるが意識が無い

「ちいっ！」

フドウを背負い天音の方へ手探りで歩く

「春香さん！フドウさんが居るんですか?!」

「意識が無えっ！お前ら！あの化け物探せ！」

砂埃が晴れて来る

「春香さん！ゴコク様の意識が！」

泣き声の天音

「ちっ！影！トガシの！」

どっちかこっち来て手伝え！」

無音

「おいつ！返事っ……！」

振り返った春香は青ざめる

まるい……何の感情も込もっていない金色の目

それが影とセキエンを見ている

逆立ちで浮遊している

フドウに気を取られ上を見ていなかった

二人とも声が出ない

いや、声を出したら……どうなる

カタカタと震える

絶望的な生物としての差がある

この状況を……無事に……脱出……

動けない……

「影！」

天音がバリスタを旋回

ヤバイ！撃ったら…

「天音…やめろーっ!!!」

影が叫ぶと同時に

「ゴアアアアアアアアーツ!!」

まずい！認識されてる！

敵として見られてる！

ゆっくりと高度を下げる

「お前ら！二人担いで逃げろ！アタシが…」

「姐さん！姐さんだったら一人で運べる！」

走って来ると春香とマキヒコの間

立つセキエン

「バカ野郎！お前らじゃ…」

「ソロよりはマシです！」

太ったゴコクと小太りのフドウ、

影とセキエンでは運ぶのも難しい

「影！避難出来るように！」

天音が呼ぶ

「お、おう！」

二人は関門とは逆側、中間部側に降りると

「…怖いね…」

「ああ」

「何とかしないとね」

震える天音

「時間稼ぐか…」

本当は震えている影、

自分を落ち着かせるために脚を叩く

「…ふうっ！」

一度限界まで息を吐き、今度は吸い込む

「行くぞ天音え！」

「はい！」

「こつち向けえっ！」

尻尾を斬ると振り返り逆立ち

「恐いけど…行くよ！」

天音が逆立ちの頭に斬りかかると腕を振り下ろす

「ドオン！」

「影！左右に竜巻！」

「分かった！」

天音は攻撃を覚えるのが早い、助かる

しかし居合い斬りなんて合わせる自信が無い…

攻撃を食らわない様にチマチマ攻撃

………

「よし、良く生き残ったなミハバ」

キャンプにミハバ達を避難させ、

立ち上がるハモン

「ハモン殿、どこへ？」

風月が聞く

「決まっている」

ハモンはガンナー達のポーチから弾丸を集める

「ゲンジ殿は言っていた、ハモン殿が

居なければ砦の再建は出来ない」と

キャンプの人々が注目する

「武器も防具も面倒見られないと」

振り返ると

「しかしな、ここからは年寄りの仕事……」

「御免っ！」

風月が鳩尾を突く、気絶するハモン

「風月！お前何する気だ?！」

怪我人の処置をして台車に乗せる神部達の問いに

「?、俺は自分のやりたい事を

やっているだけだが？」

地下道へ降りると

「まだ怪我人がいるかもしれない！見てくる！」

.....

「よし、姐さん降りたぞ！」

「セキエン！お前も避難しろ！」

「お前から置いて行けるかよ！」

「二人とも！関門から離さないと！」

三人は中間部へ移動しながら攻撃する

「だめだ！攻撃に行けない！」

「納刀だセキエン！」

「回避だけでも良いよ！隙が出来る！」

何とか少し中間部に来たが：

里長もウツシ教官も姿が見えない：

「ここからどうする……」

マキヒコが両手を地面に着く

「？」

と、次々に小さな竜巻が2列に

「影！横回避！」

「おう！」

巻き上げられる建屋の瓦礫も降って来る
今度は一瞬で尻尾を上から叩き付ける！

「ドオオン！！」

「ひいっ！」

なぜか上手い事逃がっているセキエン
攻撃は少なくとも誘導は出来ている…
少しでも離せば…

「？」

影は気づく、マキヒコの右腕の袋みたいなの
モノが破れている

左腕は…なんともない…もしかしたら

「天音！マキヒコの左腕！」

「分かってる！でも…」

狙えるか

尻尾を尻ぎ払う

ヤバイ！初めて見る！

「影！上！」

虫で飛び上がる天音

ダメだ！間に合わない！

瓦礫を巻き込みながら尻尾が広範囲に！

咄嗟に身を低くして太刀を盾に

「かげりーっ!!」

「だ！大丈夫だ！」

立ち上がる、不思議なほどダメージが無い

しかし

「あああつ?!」

太刀が折れてる！

どうする?!どうすれば!!

その様子を前方部から見る風月

助太刀に入れば足手纏いになると

二の足を踏んでいた

今戦えるのは天音、影は太刀が折れ、

セキエンは逃げ回る

(奇跡的に陽動はできている) だけ

最善

今俺に出来る最善は何だ？

「うむう…なんと情けない…」

何か、何かないか…

見回すと瓦礫に混じり、太刀が一本立っている

「む！これだ！」

引き抜くと

「ぬおっ！何だコレは?!」

太刀のはずなのに大剣並に重い！

これを影に…しかし重い！

…ならば！

「影！もう無理！避難しないと！」

「分かってる！」

何とか攻撃を避けるが武器も無しで何も

できない、避難したいがマキヒコは

俺達を追っている

どう逃げる…せめて天音だけでも…

「天音！お前は逃げろ！」

「武器も無しでどうするのよ！」

「お前に何かあったら俺は後悔する！」

「私だつて後悔するよ！」

「影ー!!」

その声に振り返る

「風月?!」

インナー一枚で走つて来る

「武器だ！」

「ドスン！」

投げて来るが太刀とは思えない重い音

助かった、これなら天音を先に避難させられる

重さに驚きながら持ち上げると

「?、風月!防具は?!」

「む?脱がねば走れなくてな！」

片手剣(盾無し)を抜く

「私逃げないからね！」

「お、俺もに、逃げないぞ！」

逃げ回つてるが

「影よ、どうする?俺はお前に付いていく」

「…各自無理せず時間稼ぎだ！前方部へ誘導…！」

マキヒコの周囲に瓦礫と岩が浮く

そして関門の方へ向く

（くそっ！せつかくここまで離れたのに！）

瓦礫を駆け上がり

「やあっ!!」

「ガリガリガリガリ…！」

空舞を仕掛ける天音

そうか！今ならスキだらけ！

「お！俺だつて！」

抜刀斬りするセキエン

「うむ、遅い！」

相変わらず素早いが軽い一撃の風月

「重いぞコレえ！」

この太刀って何で出来てんだ！

無謀な相手に立ち向かう…

兄貴がやってた事…

今の俺は同じ立場か？

勝てばヒーロー、負ければタダのバカ

そんなのは勝負じゃない！

何でこんな時に兄貴のこと思い出すんだよ!!

「ガキン！」

！

矢が降って来た

奥のバリスタが攻撃している?!

「テメエ！しつかり狙え！」

「春香さん！俺右脚折れてんだぜ!？」

支えられてるミハバ

「あの程度で気を失うとは情け無かった」

ほぼ無傷のナカゴ

「いいかお前ら！しつかり踏ん張れ！

バリスタ守れ！」

「恐いぞこれえ!!」

「やってやらあ!!」

ガードする神部、ハネナガ達

そうだ！俺は守るために戦ってたんだ！

「今ならスキだらけだ！左腕狙え！」

「おお!!」

「ガン！ゴゴン！ドオン!!」

次々関門に当たる岩と瓦礫

「テメエ！撃ち落とせ！」

「無茶だよ春香さん!!」

「ビキッ！」

その音に春香達は振り返る

ヒビだ…

隙間から星が見える…

これだけ鉄板で固めてあるのに…

ここを抜けたら里まで直線！

「弾だ弾あ!!」

「抜かせねえぞ!!」

「撃て撃てえ！」

「影！関門が!!」

泣き声の天音

くそっ！どうする?!

この左腕さえ破壊出来れば…

突然瓦礫が動く

「良くやったね!!」

その声と共に瓦礫の中から

「疾風迅雷!!」

ドリルの様に突つ込む血まみれのウツシ

「ガシッ!」

「えっ?!」

影が持つ太刀を後ろから持つ里長、

瓦礫に埋まったのだろう、血と埃だらけ

「よくぞ守った」

全身傷だらけで笑う里長

影は太刀を離す、と、

「ぬうりやああああ!!」

里長の一閃!

左腕も破壊されダウンしたマキヒコ

「天音!セキエン!風月!」

「おう!」

一斉に頭に斬りかかる

「さて…僕も…」

ウツシも満身創痍で乱舞

「里長…」

肩を貸す影

「これで…ダメなら…逃げろ」

胸を抑える里長

マキヒコが起き上がる、次々に
バリスタの矢が当たっているが

「逃げろお前達！」

構える里長

しかし

???

浮いて…あれ？

「なんかさ…」

「どうした天音？」

「イブヒコ…上に…」

高度を上げて行くイブシマキヒコ

「オラあ！しつかり狙え！」

「もう無理だつて！最大仰角だよ！」

バリスタも狙えない高さへ

終わった…のか？

春

あれから2日、

どうやら撃退は成功した様で里は無事

しかし砦はバリスタ3、速射砲1、

それらの建屋を残し全壊

修復したくても里はケガ人だらけになり、

2日かけて何とか全員を里まで運び終えた

「影！持って来たぞ！」

「ありがとうセキエン！助かる！」

セキエンが米俵をガルクから降ろす

「早く砦再建しなきゃな」

「ハモンさんのケガが治らないとなあ」

ナカゴも武器防具の修復だけで手一杯だし

「影——！」

「おう！風月！」

「よお！風月！」

魚の干物や山菜を担いでいる

「里から持つて来たぞ！」

「助かるよ」

「ウツシ先生達は どうしている？」

「ウツシさんなら屋根の上だし、里長は…ホラ」

屋根の上に全身包帯で見張りをするウツシ、

そしてタタラ場の横、左奥で全身包帯

だらけで素振りする里長

どうやら回復力も並外れてるらしい

「うむ、凄いな…あのケガで素振りとは…」

しかもあの重い太刀、冷や汗の風月

「鍛え直すって言ってた」

三人でタタラ場に入ると多くの人が

寝かされている

「ちようど良かった、三人で包帯作って、

終わったらゴハン炊いてね」

普段着で看護をしている天音に言われ布を裂く

うん、普段着の地味な着物姿も悪くない

「天音、一応二人は客だぞ?」

「良いんだ影、ココ広いな」

「うむ、手伝わせてくれ」

カムラの女衆の雰囲気が変わる

あの時の二人の行動を聞いたからだ

二人ともカムラの間人ではないのに

カムラを助けた

風月は怪我人を助け、防具を捨ててまで

影の為に太刀を届けた、

しかもカツコイイ

セキエンはバリスタを守る為に盾となり、

イブシマキヒコと戦った（実際は逃げ回ったが）

しかもトガシの里の跡取り

現在二人の株は爆上がり中で女達は
チラチラ盗み見る、と

「だから治ったって言ってるんだろ！」

「骨折が2日で治る訳ないでしょ!!」

立ち上がろうとするヤクシをヨモギが止める

「へっ、情けねえ、俺が春香に

運ばれるとはなあ」

「フドウ、どうでもいいけど少し痩せろよ、

重てえよ」

フドウの頭の包帯を巻き直す春香

「中年の脂肪は落ちねえんだよ」

「俺としたことが、情けない……」

全身包帯で寝ているゲンジ

「アンタだってミスする事はあるんだよ」

奥さんに言われている

奇跡的に死人は出ななかったが、骨折、脱臼、

裂傷、瓦礫に埋まったり破片が刺さった人

まるで野戦病院

だが悲壮感どころか活気がある

「セキエン、風月、食料持つて来て

大丈夫なのか？」

「ん、まあ少しゴタゴタしたけどな」

「うむ、説得したぞ」

.....

「なるほど、カムラに貸しを作る良い機会だな」

座敷の奥に座るトガシの里長 カイエ

大柄な体に着物、キセルを咥え、

顎を擦りながら考える

そして里の役職が並ぶ

「父上、今ならカムラを我がモノに

できそうですが？」

意見する少年、セキエンの弟で切れ者

同調する役職も居る

「セキエンよ、お前の目から見て今のトガシと

手負いのカムラ、どちらに軍配が上がる？」

間髪入れず

「カムラの圧勝です」

連れの二人も頷くと役職達が眉をひそめる

「兄上、それほどまでに差があるか？」

弟に同調する役職も頷く

「親父殿、トガシでの俺の強さは

知っていますよね？」

「うむ、若手では中の上……と言った所だったな」

そして調子に乗った

「その俺がカムラでは駆け出し以下です」

その言葉に役職達も動揺する

「しかもカムラの若手は全員無傷、若手最強

と言われる者はラージャンにソロで挑める

レベルです」

「ああ、確かそいつの名は…」

ニシノの里

「ラージャンだと?!」

ニシノの長老で里長 慈海

白髪の長髪で痩せた老人

「間違いないのか?」

役職達も風月の言葉では信じられずに連れに聞く

「は!間違ありません!」

「速さは風月以上、その上力も並外れて…」

「体格、そして何より気迫が並みではなく…」

ラージャンンといえばニシノならトップの

ベテランが『パーティー』で対応するレベル

「その者の歳と名は？」

「うむ、歳は22、名は春香殿です」

風月は平然と答えるが

「にっ…22だと?!」

「まさか…女かつ?!」

「一人で戦えるだと?!」

「やはりな…行商人から聞いた事がある、

その他の若手も無傷なのだな？」

慈海は思案する

役職の一人が意見する

「一つ可能性があるなら…」

「あるなら？」

「トガシと同盟を組んで…」

「ニシノと同盟をしたところで無意味です」

「…なるほど、兄上の言う通りですね…」

「うむ、カムラに手出しは無用だな」

カイエンの言葉で全員黙る

戦争となれば双方に多大な損害が出る、

そこまでしてカムラの支配を望んだ所で…

「我々では百竜夜行に対応出来ん」

慈海の言葉に納得するニシノの者達

「今やるべきはカムラへの援助か…しかし

正式に援助の連絡があつた訳ではないからな」

「ふむ、ではどうします?」

「風月、お前が仲間の為に持つて行くなら

面目が立つ」

「つまり自分で用意出来る範囲…」

「って事ですネ？親父殿」

「そうだ、『トガシから』ではなくお前

個人で持って行け」

………

「それってカムラに貸し作りたいのか？」

「分からないか影？俺達が持って来たモノ

は結局『呼び水』だ」

「うむ、正式に物資援助の依頼をカムラの

里長に出させたいのだ」

そして正式に『貸し』を作りたい、

少しでも優位に立ちたい

弱味につけこむ、これも里同士の政治か…

「で？お前らはカムラ支配したいか？w」

そんな気は無いことを分かっているが、

冗談混じりで聞く

「確かに鉄が取れる土地だけだなw

俺はココに移住する勇氣無いぞw」

「禍群の名は伊達ではないなw」

「大体この前のイブシ…マキヒコ？の話したらな」

「うむ、カムラの支配どころではなくなつた」

………

「ゴコク様、お粥です」

「すまん…ミノト…」

ギルドの二階の座敷

「まったく情けない…こんな生き恥を晒すとは」

寝たまま動けないゴコク、背骨まで

ダメージを負ってしまった

「また元気になって貰わないとギルドの

運営と里の運営が滞りますよ？」

ニコつと笑う

「イブシマキヒコの方はどうゲコ？」

「今は何も…ウツシ隊の軽傷だった

トウジさんが砦に残って見張りをしています」

「…あれからヒノエはどうしておる？」

「何だかウキウキしてましたが

落ち着きました…今は…」

顔が暗くなる

「どうした？」

「あの一大事に役に立てなかった事を

影の家で米を炊く

「誉めても俺からは何も返せないぞ？」

馴れた手付きで米を研ぐ影

.....

「影！ゴハン炊けた?!」

「ああ！良い頃だ」

釜を開けると

「あー、ゴハン硬いじゃん！

だから今の季節は水の…」

（おお！もう尻に敷かれてるw）

ニヤケる二人

「手伝いに来たよっ！」

「へえ、結構広いんだねえ」

「天音と二人でも余りそうだね」

「家より広いじゃないか！」

「ホラ！男衆！邪魔だよ！」

「ここなら炊事場に良いわ！」

「え？何で？あの…」

戸惑う

「影、外に出てて」

天音に押し出される

ヨモギや春香を始め女達に追い出された、

なぜか影の家が食事を作る場所になったからだ

タタラ場の隣で炊事場に丁度良いらしい

外に出る

「何で自分の家から追い出されるんだよ…」

「何でってそりゃあお前w」

「うむ、既に実権は天音に有るようだなw」

ニヤニヤする二人

「おい！」

春香さんが何か持って出てきた

ムカついている様な顔で…

なぜかセキエンの前で止まる

「……………」

え？なに？なにこの間

「お、お前腹減ったら食え…帰るんだろ…」

横を向きながら差し出す…

照れている…のか…

横を向いて…

あの春香さんが恥ずかしそうに…

セキエンに大きくて歪な…

オニギリらしきモノの包み

固まる三人、家からはヨモギとワカナさんがニヤニヤと見ている

これは…まさか…

みなぎる緊張感…

春香さん…まさか…まさかセキエンを…

セキエンはカタカタ震えながら影に

アイコンタクトで

(え？…コレナニ？…ナニコレ？…マサカ？)

影は

(し、知らない、俺知らない！)

「おい！いらねえのかよ?!」

怖い顔で

(ヒイツ！…タスケテ……タスケテ)

(無理無理無理無理!!)

「貰っておけば良かろう」

(風月！お前は黙れ!!)

………

「ではまたな」

そう言うと船に飛び乗る風月

「干物ありがとうな」

「助かったよ風月さん！」

「また来る！」

舟を漕ぐと早い、やはり本職は漁師

「じゃ…俺も帰るわ…」

肩を落とし青い顔でトボトボ歩く

セキエン、ガルクに乗る

結局受け取ってしまったのだ

「セキエン、その…あの…なあ！」

本来なら冷やかす所だろう、イジる所だろう、

しかし…

「……………またね！（汗）」

かける言葉が見付からない天音

本来なら祝福するべきだろう、

しかし相手があの春香

走って行くのを見送りながら

「ねえ、セキエンさんどうするのかな？」

「まさか春香さんがセキエンになあ」

「明日には里中のウワサになるよね…」

「セキエン…もう来なくなったりしないよな？」

「そうなったら…それに…」

「どうした？」

「ヒノエ姉さん、こういうの大好物なのに

出て来なかつたね」

「……顔出してみよう」

タタラ場の前まで来ると扉に手を掛けた

ままのヒノエがいる

「あ、ヒノエ様、入り辛いのか？」

「姉さん！」

二人で駆け寄る

「天音、影君…」

影は初めて見る、ヒノエの暗い顔を

「…みんな待ってるよ姉さん」

天音がヒノエの腕を引つ張る

「天音、私は…」

「そういうのいいから」

前とは立場が逆転して天音が引つ張り込む
と、タタラ場の中で歓声上がる

「おお?!ヒノエ様!」

「今まで寝てたのか?!」

「ヒノエ様!俺のキズ診てくれ!」

「ヒノエ様!お粥喰わせて!」

「春香が巻いた包帯キツくてよ!

巻き直してくれ!」

「ヒノエ様!膝枕!」

「誰だ!?!ドサクサに紛れて!」

誰もヒノエを責めたりしない

「…っ!」

涙を浮かべ顔を抑える

「ほら姉さん、仕事あるよ?」

顔を拭くと

「そうね、皆しようがないわね！」

世話を始めるヒノエ

「やはりヒノエは笑っていないとな」

「里長」

後ろに立っていた

「ヒノエ様ってやっぱり太陽みたいな

存在だな……」

「ちよつと！影イ？」

ジト目

「あ、う？え？何でもない」

「ハツハツハア！もう尻に敷かれてるのか！」

生きて帰る

「なんだよ…アイツ来ねえな…」

イライラしている春香

あれから数日、ギルドが何とか稼働を

始め若手のパーティーが数組で動いている

里に接近し過ぎたモンスターだけ集中的に狩る

「なあ?!セキエンはよ!?!」

影と天音、そして春香がテラス席にいる、

ドン!とテーブルを叩く春香、眉間にシワが…

「れ!連絡ないし分かりません!」

冷や汗でこう答えるしかない影、

自分だったら恐くて来れないよなあ

「フクズク飛ばして貰ったらどうですか?」

苦笑いの天音

「春香、イライラしねえで仕事しろ」

まだ狩りには出られないフドウが諫める

「ちっ！……こつちからトガシに乗り込むしか……」

「やめろ春香！大問題になる！」

ブレーキ役がフドウさんしか居ない

ゴコク様はまだ立てない、まだまだ掛かる様だ

「失礼する」

一礼しながら入る風月

「風月！そのカツコは？」

立ち上がる影

風月が装備をつけているって事は

「うむ、また一緒に狩りをしたいし、

ウツシ先生にも会いたいしな」

「そっかあ！じゃあ……ミノト姉さん！

何かある？」

春香の不機嫌から逃げる口実が出来た二人

……

大社跡 キャンプ 採取

「実は狩りに来た訳ではないのだ、

二人に話をしたくてな」

「え? どうしたんだ?」

風月が話?

「風月さんが相談?」

そんな事出来るんだw

「うむ、実はセキエンがニシノに来てな、

俺の家に居るのだ」

「え?! なぜ?」

「セキエンの話によるとだな」

.....

トガシ 里長の屋敷

「親父殿…ただいま戻りました」

暗いセキエン

「おうセキエン、カムラの反応は

どうだった？もつと米は必要そうか？」

「食糧の備蓄もしている様で緊急性は

無いようです」

「そうか…まあ急ぐ事もあるまい…？」

まるで幽霊の様なセキエンに違和感

襖を開けると弟が出て来る

「兄上、その包みはなんですか？」

……………

「と言うことでオニギリの話となり…」

「風月…順番に話すのは助かるんだけどな」

苦笑い

「だから…何でニシノに行ったの？」

こつちも苦笑い

話を要約出来ないだろうか

「うむ、つまりな」

風月の話を要約すると

里に帰ったセキエンはオニギリの事を

聞かれ、春香さんに手渡された事を告げた、カムラの若手最強であり、いずれは最強の

ベテランになって行くだろう春香さん

トガシの里長は考えた、春香さんを嫁に

貰えばカムラの弱体化とトガシの強化、

一挙両得 一石二鳥

セキエンに春香さんを『連れて来い』と

里から送り出した

セキエンは知つての通り春香が恐い

カムラにも来られずトガシにも戻れず

ニシノへ行つた

「あまり長く居られると邪魔だなw」

要するにセキエンを匿つてるとニシノの立場が悪くなるのだろう

「かといつて当人同士の問題だよなあ」

俺に出来る事なんて

「違うよ影、カムラとトガシ間の問題になるよ？」

「里長の耳には入れとくか…」

「あとゴコク様ね」

「よろしく頼む」

………

「うむ、春香が嫁に行くのは喜ばしいw」

「むしろ貰い手が見付かって良かったゲコw」

まだ付き合うかどうかの段階なのに

嬉しそうな二人

ギルドの二階、すんなりと話が進む

「あの、春香さんはカムラの大事な戦力では？」

クスクス笑いながらヒノエが

「春香を過大評価し過ぎよ？確かに

個人的な力はあるけどね」

「そうだ、お前も居るし」

「他の連中も成長してるゲコ」

「セキエンさん自身恐がってるし…

どうなるんだろ？」

天音は思い出す、二人のファーストコンタクト、

ヤツカダキの頭を担いだ大女

「うむ、そこはセキエン次第だな」

「断る勇気があるとは…思えんゲコ」

「面白くなりそうねえ」

両手を頬に当てて明らかに楽しんでるヒノエ

この感じ…外堀が勝手に埋まって行く感じ…

俺は天音だったから良かったが…

セキエン…

なんだろう…

この『友を戦場へ送り出す』感じは

そして友を心配するのと同時に

面白がっている自分も居るw

.....

次の日

「失礼します……」

まるで元気が無いセキエンが来た

「うおお！主役の登場だぜええ！」

「良く来た！お前は男だぜええ！」

ハネナガや神部、フドウ達

がバシバシ肩や背中を叩く

「うむ、敬意を持つべき男だ」

後から風月も入って来た、何とか連れて

来た様だ

ギルド中が囃し立てる中、

もう一人の主役が近付く

「よ、良く来たな、

ちよつとあつちで待つててくれ」

春香が横を向きながらテラス席を指差す

やはり照れている

皆に促され座ると春香は二階へ、

何かを持つて来るのか？

「なあ…影…俺どうしたら…」

青い顔を向けるセキエン、

ぼつちやりがゲツソリに見える

「断るならハッキリ言つたほうが…」

コソコソ耳打ちする影、

カムラの里長まで乗り気なんて言つたら…

「まあ恐いよな？ だつたら自信を持つて言えよ？」

フドウ達にも察してもらえた

「それしか無い…よな…」

恐い…けど…

今までモテた事が無かった、だけど遂に

到来した『モテ期』

体型もあつてトガシでもモテなかった俺に、
空想の産物と思つていたモテ期が来たんだ

姐さんは嫌だ！

言うぞ！断るんだ！

俺は昨日の俺を越える！

断つて強い男になる！！

「トン」

階段から音がする

「トン」

全員が見上げる

「トン」

その余りの迫力に絶句する一同

春香はレウス装備からミツネ装備に変えて来た

そう、まるで花嫁衣装のアレである

「トン」

角隠しを被る春香、そもそも春香は顔は

普通レベルである、

しかし体が：筋骨隆々でゴコクとフドウを

同時に担げる程、

ただでさえデカいのに頭の装備で2メートル近い

「トン」

纏う空気が里長とか、どこぞの鬼○隊の

岩の人とか、『お前』を『うぬ』とか言う

北斗○拳のソレ

そんな体格に更に白を基調とした膨張色

花嫁衣装とは清廉と純潔、慎ましさの

表れであるはず、

決して恐怖を助長するものではない

ないと思っていた

暗黒面に落ちた、どこぞの真つ黒な
ジェ○イの騎士のテーマが流れそう

こっつ、恐ええっ!!

(一同)

全員が無言で道を開ける…冷やかさもヤジもない
なぜか

『ゴゴゴゴゴゴ…』

と効果音まで聞こえて来る

テラス席まで来ると

「…どう…だ？」

照れている春香

「……………」

小刻みに震えるセキエン、
まるで怯えたブンブジナ

一同固唾を飲んで見る

ナニコレ？何で一触即発の雰囲気なの？

「どうだ？」

顔を上げる春香

「おいセキエン、何とか言え」

フドウが言う、春香がイライラし始めて
いるのを察した

「デメエ…」

「ヒッツ!!」

春香が近付くとセキエンは小動物の様に
飛び上がり後退り

「アタシがココまでやってんだぞ！

何か言う事ねえのかよ！」

壁に追い詰めたセキエンに

「ドン!!」

壁ドン

それは二次元のイケメンに許された行為、
現実だと事案になる…

通常は男がやる…

花嫁衣装の女が？

えーと…

情報量とツツコミ所が多過ぎて

ギャラリーが思考停止しているなか

「もうミノト、もつと早く知らせて

欲しかったわw」

ヒノエが入って来て足を止めた

「あら？…：んー？」

首を傾げて

天音に小声で

「…脅迫現場？」

いや、告白現場のハズ

「きつー！」

？、セキエン？

「きつ！！」

言えるのか？がんばれ！！セキエン！！

「キレイです！姐さん！！」

そう言ったセキエンを誰が責められようか

「そ、そうか？へへ…」

顔を隠し身をくねらせ照れる春香、

その姿は女らしいが2メートル越えではなあ

……

「大丈夫かなセキエンさん」

影の打ち込みを捌く天音

タタラ場前で訓練

「自分次第だよなあ、ちええい!!」

「よっ!!」

「ガシッ!」

木刀が削れる

「天音は早いな、次は俺がやる」

盾も持つ風月、あの防衛戦から何か

考えが変わったらしい

セキエンは春香に

「今日からアタシとペアだ」

と言われクエストへ

(断れないわなあ)

一応フドウさんから作戦を与えられた、

それは『弱くなれ』

情けない姿を見せて春香さんの評価を

落とせ、つて事である

上手く行けば良いが：

ギルドに戻ると丁度クエストから帰った

セキエンと春香

開口一番

「コイツダメだ！」

おお！フドウさんの作戦大成功！！

「ビシユテンゴ程度で何にも出来ねえよ、

情けネエ」

よし！良かったなセキエン！

しかし

「アタシが支えてやらねえとダメだコイツW」

笑いながらセキエンの頭を撫でる

セキエンはフドウを見ると

アイコンタクトで

『違うじゃん！話が違うじゃん!!』

フドウは拝み手で

『すまねえ！www』

「団子屋行くぞ」

春香に手を引かれ出ていくセキエン

全員が無言で見送る

「フドウさん、何か逆効果じゃないですか？」

「ああ、予想外だったぜ影…なあ？」

ラージャンに攻撃されると求愛されるの

どっちが怖い？w」

「ひっでえwww!!」

「そんな風に思ってたのかよw！」

「モノの例えだw」

ギルド中が大笑い

「うむ、様子を見に行こう」

風月を先頭に若手も出ていく

「なあ天音」

「ん？」

二人でテラス席へ

「やっぱり…あの二人みたいな行動って…」

カッコイイよな」

「また照さん思い出したの？」

「ん、俺も…やっぱり」

英雄になりたい自分もいる

「うん、私もカッコイイと思うし、女なら…ね」

「なあ、何でカッコ良く見えるんだらう？」

「んー、損得なしで命を掛けるから

カッコイイんじゃないかな」

「じゃあ…」

「待って、影はダメだよ？」

キッと見つめる

「何で？」

「たしかにカツコイイけどさ、

私は生きて帰って来る方が大事だと思うよ？」

「生きて…か…」

「うん、そりゃあヒーローに比べたら

地味だし人によつてはカツコ悪いかも

しれないよ？」

「けどいつ死ぬか分からない人とは…さ」

「そうだよな」

天音を悲しませる…か

「それに…影は十分カツコイいんだからね？」

「そうなのか？」

「私が居なかつたら里中の娘が寄って

来たと思う、だつて指揮してゐるんだもん」

「そ、そうか？」

里中の娘…

「…ムカつく！」

自分で言つて怒るなよ

拾い物

パーティーが三人になった

セキエンは春香さんとペアに

「風月、お前はモテないのか？」

大社跡のキャンプで聞いてみる、

セキエンと違い見た目もカッコイイし

「うむ、俺はドコへ行っても女性から声を

掛けられるぞ？」

「だろうな」

黙っていれば良い男だもんな、羨ましい

「だが不思議なのだ、少し話すと

離れて行くぞ？」

…だよなあ

今日はアオアシラを狩りに来た、目的は

風月の盾の練習

「もしも合わなかつたら私が双剣教えても

良いよ?」

「うむ、宜しく頼む」

風月は軽いが素早い攻撃が得意、

反面防御は不得意だしモノ覚えも悪い様だ、

一度付いたクセを取らないと

「片手剣の指導出来る人って誰か居たか?」

「そうね、ベテランはケガしてるし…」

今なら神部さんとか?」

「む?あの顔を隠している人だな?」

アオアシラ程度なら通用するが、

レイア辺りはどうなんだろうか

里に戻ると

「影、お帰り」

包帯だらけのウツシ

「教官、どうしました?」

「砦に行ってくれるかい？ハモンさんが
見に行ったんだよ」

…俺が行ったところであの惨状は…

でもハモンさん倒れたりしたら

「じゃあ俺行ってくるよ」

俺が行っても…気休め位だろう

「私も行く」

「うむ、俺は神部殿に会ってみよう」

団子屋の方をチラッと見ると

春香さんの大きな背中とセキエンの

小さな背中が見える

セキエン…がんばれよw

いつか本心が言えるその日までwww

生暖かい目で見る影

………

立ち尽くすハモン

50年、少しずつ積み上げ造り上げた砦の

無残な光景

この無力感

俺達の50年は…こんなに容易く…

「ハモンさんー！」

「…来たか」

「ん？影達か」

ゲンジさんも来ていた

前方部と中央部は一面瓦礫になってしまった

「どこから手を付けるか…」

まだ包帯だらけで寂しそうに眺めるハモン

「人数集めて片付ける所からですね」

「あと使えそうな物探さないと」

見回す天音

「建屋の予備資材とバリスタの予備機…

全部出せば何とかならないか？」

ゲンジの答えに

「それでも5基が限界だ、部品が足りない…」

「あ、それなら竜宮砦に行つて来ましょうか？」

「天音？」

「しかしなあ、何度も行つてバラして

しまったからな、何も残つて無いだろう」

「何か新しいモノ見付かるかも知れないし

…影も連れて行きたいし」

「…こうしていても物事は進まない、

何かするべきかもな」

ゲンジが頭を掻く

「行こう影！」

「あ、ああ…」

「舟漕いでね？」

「俺はそのためか」

「私下手だもん」

「二人とも何か見付けたらフクズクを
飛ばせ、動ける者を行かせる」

.....

「何か寂しい所だな……」

「こっちはね、向こうに飛ばせば色々あるよ？」

竜宮砦のキャンプ

殺風景で何も無い、翔虫で飛ぶと

「凄い……な……」

高い崖に囲まれた一面真っ平らな場所、
所々に埋まったバリスタの一部が見える、
見上げれば撃龍槍、更に上には不思議な
色の建物まで……

さらに……あのデカイの大砲か？

「昔の技術って凄いよね、あんな高い

ところに家があるんだもん」

「!!、そう言えば大社跡もそうだよな？」

「だから同じ年代の人が建てたんじゃない？」

「よし、探して見よう」

「うん」

二人で地面を見ながら歩く、気になるモノを

見つけると拾ってみるが

「ダメだなあ、みんな錆びてボロボロだ」

赤錆の鉄製の歯車、指に力を入れると

簡単に崩れる

「あ、これ鋼線（ワイヤー）だ！」

天音が引つ張るとズルズル地面を走るが

「短っ！」

バリスタに使うには足りないし錆びている

「地面掘るしかないな」

「でも適当に掘ってもさ…」

「そうだよなあ……」

この広さを当てもなく掘って……ムリがある
ひゆるひゆると風が吹く

少し塩混じりだが心地好い、見上げると

「天音！」

「何？えっ？何で！」

青い体、魚の様な下半身、キラキラと

日の光を反射して空を泳ぐ、

イブシマキヒコ！

「ヤバイ戻るぞー！」

「やっぱりここアイツが来る場所なんだ！」

キャンプまで戻って眺める、さっきの場所に
降りたイブシマキヒコ、

幸い気付かれなかった様だが

「ここから少し見えるんだな」

岩の間から青い巨体が見える

「どうしよう、これじゃ何も出来ないよ？」

「何でアレが…とにかく荷物纏めて逃げよう」

「うん、…あれ？」

テントの中を見廻す天音

「どうした？」

「しっ！」

人差し指を口に当てると、天音は足音を

消して…少しずつ動く

タダゴトではない雰囲気、影は固唾を

飲んで見る…と小声で

「影、太刀貸して」

太刀を渡すと本体を抜いて置き、鞘を

両手で握り締める

「……………そこっ!!」

思い切りテントの壁を突く

「うぐうっ!」

「えっ?!誰かいるのか?!」

外に出て裏にまわると

汚い女の子? 気絶している、

携帯食料が散らばっている

「泥棒だね」

「天音、良く気付いたな」

「モノの配置が変わってたからね」

天音って素手でも強いかもしれない

…気を付けよう

「どうしたら良いんだ? こういう場合」

実の所竜宮砦はカムラの管轄と言う訳ではない

「イブヒコいるし置いて行く訳にも

行かないよね…」

体を調べる天音、武器も無いし酷く痩せて

汚れている

「連れて帰るしかないな」

「置き去りにしたら…何か嫌だね」

キャンプを調べると乗って来た舟の近くに

小さな舟、これに乗って来たのか

フクズクを飛ばしてから急いで舟を漕ぐ

………

「孤児なんぞ面倒見る義理は無いゲコ」

仕方なく連れて帰ると非情な言葉を投げられる

何とか椅子に座ったゴコク

「影君、天音、あなた達は両親が里を

守るために亡くなった、だから里中で

育ててきたのよ？」

ヒノエも笑わず言う

ギルドの一階、皆に囲まれている、

例の女の子は椅子を並べて寝かせてある

「影、気持ちは解るけどよ、カムラの子供

じゃなければ追放するしかねえぜ？」

フドウも冷たい

「……」

「……」

項垂れる二人、そうなのだ、放置して

戻るべきだった、

誰も養ってやる人が居ないのだから…

でも…それが出来なかった

二人とも13で家族を亡くし、

里に支えられて生きてきた

前にセキエンが言った事を思い返すと

確かに『恵まれて』いた

この娘にはその環境が無かつただけ

影と天音もこの娘のように孤児に

なっていたかもしれない

置き去りにすることに

罪悪感が出てしまったのだ

「うむ、とにかく明日には追放だ、良いな？」

里長も恐い顔

実際孤児どころではない、

イブシマキヒコが近くにいるのだ、砦を

何とかしないと

ヒノエとミノトに支えられて二階へ

上がるゴコク、里長も出て行った

「まだ10才位か？」

「痩せてんな」

「可哀想だけど仕方ないぜ？」

ハネナガ達にも言われる

「助けて…やりたいな…」

「私達だって…こうなつてたかも知れないよね…」

「せめて一晩だけでも腹一杯

食わせてやりたい…」

「お団子買って…」

そこへ

「だからガードは最終手段だと何度も」

「うむう、防ぐと後が続かない訳ですな」

神部と風月が戻つて来た

「む？コイツ花梨ではないか？」

「カリン?!知ってるのか風月！」

「教えて、この娘何なの？」

風月の話を要約すると、ニシノの周辺に

あつた小さな里の一つ、そこの住人らしい

「あつた？」

「うむ、モンスター襲撃に会つて

滅んでしまった」

その後引き取り手も無く孤児となり

コソ泥として生きていた

「たまに干物とか盗まれるが、少し位は

目を瞑っていたのだ、使わない小舟もな」

風月が近付いた瞬間！

「…っ！」

「あ、気が付」

「やああっ!!」

突然飛び起きて叫び、風月に蹴りを放つ

とは言っても、ここにいるのは仮にもハンター

風月にとって子供の蹴りなど天音の双剣に

比べたら止まって見える、難なくかわすと

「やめろ！」

あっけなく影に押さえられる

「はなせえ！」

「暴れるなよ」

「このお!!」

影の手甲を爪でガリガリ引つ搔くが
歯が立つハズもなく

「天音、この娘縛れ、逆にケガさせる」
押さえる影、爪剥がれそう

「うん!」

縛ると大人しくなった

「むううう……」

威嚇する小動物

「じゃあこのガキの面倒はお前らで見ろ」

「俺達は関係無いぜ?」

皆離れて行く

………

「ほら、食べるか? 団子」

影の家、とりあえず与えてみると奪い取り

ガツガツ喰う、数本食べさせると

大人しくなった

「影、この娘お風呂入れよう」

ひどい臭いだし

「良いのか？天音？」

「影がお風呂入れる気い？」

ジト目、オーラが黒い

「あ、ああ、頼む」

逆らわないでおこう

「でも服はどうしよう」

ボロボロだし…

「ああ、俺の子供の時のが…」

「ギイイ…」

「ん？」

床の間の回転扉に隙間？動かすと

何かの包み、広げると

「なあ、この着物つて」

「私が前に着てた：姉さん達だ！」

慌てて外に出る天音

「姉さん!!」

振り返る双子

「ありがとうございます！」

「あああ？何の事かしら？」

「姉様、何か落としました？」

「さあ？忘れましたw」

.....

風呂から出てきた花梨と天音

「びっくりした……」

啞然とする影

風呂に入る前とは全然違う

ボサボサで固まっていた髪は綺麗な黒髪
汚れていた肌は天音並みに白い

鳶色の目がミノトの様に少しキツめ：

と言うか…この娘美人だぞ？

「私もびつくりしたよ、洗ったら

可愛い娘出て来るんだもん」

「えーと…花梨だったな、明日は…」

「分かっています、出て行きます」

キチンと正座して頭を下げる青い着物を

着た美人

その空気は小さいながら理性と知性を

感じるし、礼儀も態度もしっかりしてる

話を聞くと花梨は読み書きや礼儀は

キチンと教育されたそうだ、それが

四年前に花梨を残し、里は全滅したそうだ

「なあ、今何歳なんだ？」

おかしいよな

「二人になったのは9才でした、今は13です」

二人とも絶句する、そのわりに小さいし

痩せている、食べるものに苦勞して

来たんだらう

「…影、私ここで寝るからね」

「？」

「泊まるって言ってるの」

あー…そうだよなあ…えっ？

布団は二組しか無い…

天音の目が

『察してよ！』と睨んでいる

仕方なく囲炉裏の横で雑魚寝する影

………

翌朝

「じゃあ…」

「分かっていきます、お世話になりました」

キチンと礼を言う花梨

「待つて影、せめてニシノの

近くまで送つて行こう」

三人で船着き場に行こうと家を出ると

「おい！誰だその娘！」

「あ、ミハバお早う」

「聞いてない？昨日連れて来た…」

「聞いてたのと全然違うじゃねえかよ！」

こっちだつて驚いたよ

ギルドへ入る、一応ゴコクに報告しなければ

「誰だ?!この娘！」

「昨日のアイツかよ！」

「可愛いじゃねえか！」

昨日はまるでボロボロの捨て猫

今はヨモギより小柄な美人

ゴコクに向かい

「一晩お世話になりました」

キチンと礼をする

「む？う、うむ」

その態度に違和感を持つゴコク

ギルド中が面食らう、一晩で余りにも変わった

「これからどうするゴコ？」

「はい、影様に相応しい女性と

なるべく精進致します」

「はああ?!」

「おい影!!」

「お前何した?!」

「天音が居ながらテメエ!!」

取り囲まれる影

「影！お前ってやつは！」

松葉づえのミハバまで入って来た

「ちよつと！影は何もしてないよ！」

天音がフオローするが

「花梨ちゃん！相応しいってどういう事?!」

「影に何されたんだ！」

詰め寄るミハバ

「衆人環視の中で押し倒され……」

花梨は顔を隠す

???

それって昨日取り押さえられた時か？

皆は止まるが

見ていなかったミハバの頭の中は

未成年閲覧禁止状態

「更には鷺掴みにされ……もう影様に……」

真っ赤で顔を隠すが……

どこを？

ミハバ以外は首を傾げる、花梨には驚掴みに出来る場所なんて…（ツルペタ）

しかしミハバの中では…

「影！テメエ子供にまで手え出したのか！」

松葉づえを振り上げる

「落ち着けミハバ!!何もしてない!!」

拾い物2

「ミハバ！」

「うっ？ 師匠!？」

ハモンがギルドへ入って来た

「何を遊んでいる!？ 作業を始めろ！」

「うっ、ぐぐぐ……」

怨めしそうに

「まったく……鉄部品が足りない時に……」

タタラ場も止まっているからだ、

バリスタの留め金を持っている

「鉄?……それが必要なのですか?」

花梨が留め金を見ながら聞く

「……まさか……持ってるのか花梨?」

「拾い集めたモノで良ければ」

「何だと？」

話に食い付くハモン

とにかく確認するため花梨の話に従い舟を出す

乗ったのはハモン、影、天音、花梨

「どうして鉄を持つてるんだ？」

「話すと長いですが……」

……

まだ平和だった頃には里に行商人が立ち寄った、

その時の口振りからこの土地の鉄が高価で

あることを知った

「カムラの鉄だからなあ……」

腕組みするハモン

里が全滅したあと里に残っていた鉄製品を

集めて、行商人に売ろうとしたら

……子供だから

泣きそうな花梨

「なにかあったの？」

「騙されて…殴られて…全部…」

下を向くと涙が零れる

「酷い目にあつたんだな…」

カムラにも出入りしている行商人だろう…

その時にもつと、もう少しだけ世間が

花梨に優しかつたら…可愛いしマシな

四年になつただろう

「花梨ちゃん…」

抱き締める天音

「…うむ…そういう事か…」

理解した、それがトラウマで大人が

怖くなり人を信用しなかった、

一晩で変わったのは影と天音の優しさに

触れたからだ

それから大人になってから売ろうと

拾い集めたモノがあります、なかには
モンスターに襲われた行商人の落としたモノも

……

川沿い、少し先にニシノの里が見える

「ここです」

言われて岸に舟を着ける、

獣道を歩き続けると

「ほう……」

「里……だ……」

「……ひどい」

人の背丈程もある雑草とススキの中に、

数件のボロボロな家が並ぶ

その内の一軒、半分崩れた大きめの家に

入ると床板を外す

「花梨、もしかして…この家は…」

「はい、花梨の生まれた家です」

床下からズルズルとワイヤーを引っ張り出す

「！なんと！鋼線まであるのか!？」

ハモンが目を見開く

「…影様達に捕らえられた所とか…」

他にも歯車、留め金、釘まで出てくる

「凄いよ花梨ちゃん!」

「これ全部集めたのか!」

「…花梨と言ったな、

ここにがあるモノで全部か?」

「……」

その沈黙で全て解る、全部では無い、

花梨は過去の経験から全部は見せてない

大人が…人が信用出来なくなっていたんだ

「…条件があります」

………

「こんなに早く復旧の目処が立つとはな…」

感慨深く見る里長

「後は木材だけでバリスタは全部完成だ」

監督するハモン

砦でバリスタを組み立てるナカゴ達

「あとは建屋の鉄板と…」

「関門の修理で何とかなる」

花梨の出した条件はカムラへの移住、

見返りは鉄部品全ての提供

いま夜行が起こればカムラは全滅の危機に

あつたが、これで砦の復旧が大幅に短縮できる

天秤にかければ当然の答え

正式に花梨は『カムラの娘』として迎えられた

「この娘隠密の才能あるかも」

ウツシによると、隠れながら生きて来たため

気配を殺すのが上手く、狩場で役に立つ

モノを集める（つまり採取）方法や調査を

既に知っている

生きて行くために必死だった事がうかがえる

そしてゴコクからは

「今日から正式にカムラの里の一員ゲコ、

立場に甘えずキチンと自活するゲコ、

いずれ住む場所も作るゲコ」

家も用意する運びになった

しかし：問題が2つ

影の家

「花梨はここに住みたいです」

キチンと正座する、髪を切り黒髪シヨートのカムラ一式

ちんまりとして可愛い

「ちよつと！それダメ!!」

「天音様、花梨は邪魔しませんよ？」

「わ！私は正式に同棲の許可

出てるんだからね!!」

「分かっています、

花梨は2番目で良いのです」

深々と頭を下げる

「良くないわよ!!影！

ちよつとドコ行ったのよ！」

もう一つの問題が

集会所

「風月っ！」

飛び掛かる花梨、しかし難なく避ける

「落ち着け花梨！何で風月を敵視するんだ？」

影が抑える

花梨の話では里の田畑を奪われたと言う

しかし花梨の里はそもそもニシノが

実効支配している地域

「耕す者のいない田畑を貰つても

差し支えなからう」

それでニシノの里を敵視している、それに

「一応見付けたら折檻しろと言われていた

のでな、捕まえて頬を平手打ちしていた」

風月は足が速い、だから泥棒に真つ先に

追いつく、つまり風月に叩かれてばかりだった

風月の言い分は正しいが

花梨にとつては天敵だろう

「花梨よ、ここでは仲良くするゲコ、

それとな？今日からヒノエとミノトの家に

暫く泊まるゲコ」

「いいえゴコク殿、花梨は影様の家に」

「だから何で?!」

天音が叫ぶ

「花梨は聞いていました、影様と天音様

だけが花梨を助けようとしてくれました、

お二人のお役に立つには影様の家に…」

「影!? また逃げた! ちょっと影!!」

団子屋

「羨ましい問題だな…」

「何でこんな事に…」

セキエンと話す影、春香が珍しく居ない

「本妻と愛人がモメてんだろ?」

「おい、言い方w」

愛人ってなんだよ

「うわぁ…」

ドン引きのヨモギ
いや、引かないで

「羨ましいな…二人とも美人だし」

「セキエン…断る勇気無いのか？」

「お前だったら断れるか？」

「…恐いな…春香さんどうしたんだ？」

「許可貰いに行った」

うつ向く青い顔のセキエン

「里長のところか？何の許可だ？」

「二人でトガシに行く許可だ…」

「…それは…」

「幸せにな…影」

遠い目になるセキエン

無言で敬礼したくなる

友よ…君に幸あれ!!

「影!!逃げないでよ!!」

「う、天音……」

タジタジ

天音を説得出来ないし、花梨に言っても聞かない
贅沢な悩みだが……

「花梨ちゃんに何とか言つてよ！」

「おお！お前達丁度良い！」

里長と春香が来た

「里長！」

………

砦の状態から百竜夜行に備える為、

セキエンと春香のトガシ訪問（結納？）は

一月延期

執行猶予が付いたセキエンw

そして

「花梨よ、ヒノエの家に逗留、

後に用意する家へ住め」

子供なのに里長の威圧をモノともせず

「里長殿、それでは影様と天音様に

恩義を返せません」

「お前の里への貢献、これをもって

返せば良いのだ」

無言で何度も頷く天音

「…分かりました、カムラの里のため…」

その通りに致します」

一礼する花梨

カムラは花梨を『一人の大人』として条件

を飲み契約した、以前の行商人の様に

子供扱いで蔑ろにしなかった

その辺りは分かっているらしい

花梨はウツシ教官に預けられ、午後から

基本を習うそうだ

.....

翌朝

「お早うございます」

「ああ、天音お早う……」

布団からモソモソ起き上がると

「花梨!?!」

「はい、お早うございます」

ニコツツと笑う

「えっ?! あ?! 天音は?!」

「ギィィ……」

足音を殺して入って来る天音

「つて花梨ちゃん?! 何でいるの?!」

「今来たところですよ、ね! 影様♪」

「これが天音の独占欲を刺激した

「バアン!!」

引き戸が勢い良く開くと家から飛び出す二人
「待ちなさい!!」

走る天音

「影様は天音様だけのモノではありません!」

風月から逃げ回った花梨の足は恐ろしく早い

「このお!!」

翔虫で低空を飛ぶ、と

「甘いです!」

花梨も覚えたばかりの翔虫を使い飛ぶ

二人とも反射神経が良くて素早いために、

タタラ場前で縦横無尽の追いかけっこが

始まり屋根から屋根へ飛び回る

その騒ぎに里中の者が外に出て眺める

「姉様…」

困り顔のミノト、

花梨を行かせた犯人はもちろん

「うふふwまた暫く二人をイジれるわw」

ニッコニコのヒノエ

「うむ、流石ヒノエだ、これなら花梨を

差別する者も出ないだろう」

「花梨の実力を里中に見せる訳ですね」

満足そうに見る里長とウツシ

「こっつー……このお……」

道の真ん中でゼイゼイと息を切らす美人

「もう終わりですか?」

余裕で翔虫にブラ下がる子供

「はあ、ようやく終わったか……」

影が家に戻ろうとすると

「チツ…ロリコンメモリコンメモリコンメ…」

工房から顔を半分出して睨むミハバ、

血走った目で呪詛を吐いている

.....

大社跡 キャンプ

「半日で俺より翔虫の扱い上手く

なっていないか？」

「基礎授業は必要無い程だって教官言ってた」

疲れた顔の天音

「む？俺も追い付けないか？」

三人で話す、今日はオサイズチ

ガードの練習のためにランスを借りて来た風月

「出来るのか？」

「恐らくハンマーより楽ではないか？」

「何で？重いんだよ？」

ミノトの槍で踊った天音は知っている

「神部殿に言われたのだ、モンスターのは

攻撃を理解していないと」

???

モンスターのスキに攻撃を差し込む、
これが大前提、

威力は勿論、範囲、リーチ、連撃まで
覚えなくてはならないハズだが？

「今までどうやってたんだ？」

「イケると思ったら斬りに行くだけだ」
得意げに言うが

「よくそれで今まで無事だったね……」

呆れる天音

………

「攻撃の前には予備動作が……」

「何書いてるの？」

天音が覗き込む、小さい紙に書く風月、

今更こんな基本を覚えようとしている

狩りは当然成功、風月にガードばかりさせ

覚えさせた…が

「風月…もしかして師匠居ないんじゃないか？」

「む？俺はほとんど一人だ、十分だからな」

「フルフル辺りで苦勞とかしなかったの？」

「反撃が来る前に走り抜けければ当たらんぞ？」

そういう事か、納得する二人

足の早さに頼り一撃離脱だけで何も

考えずにハンターを続けたのだ

カムラのように教官から基礎さえ教わってない

才能だけで来た為に壁にぶち当たったのだ

「教官に頼んでみるか？」

「なんと！ウツシ先生に皆習うのか！」

先生って呼ぶから知っているとはかり思ってた…

………

次の日 集会所

「良く来たな風月！」

ふんぞり返る花梨

…ちっちゃいけど

「花梨、何で偉そうにするんだい？」

ウツシの質問に

「例え一日の差とは言っても花梨が先輩です」

絵ツラ的には長身のイケメンの前で

威張る子供だが

「むう、お願いします」

頭を下げる風月、今日から基礎を学ぶ

どうやら風月は根は素直らしい、しかし

一度決めたら人の意見を聞かないし話も下手

そのためにコントロール出来ないバカだと

印象が残るだけかも

「さて、俺はナルガに行つて来る」

新しい太刀も強化したいし

「うん、またソロで鍛えよう」

邪魔者が居なくなり笑顔の天音

「何やるんだ？」

「ん？レウスだよ？」

「追い付くの大変だなあ」

「影が走れば私も走るよ？」

「…追い付けないか？」

距離が縮まらないじゃん

「追い付いてよ？私より強くないと

カッコつかないよ？w」

黄色

「やっぱりヤクシさんの訓練って凄いな」

ナルガを難なく倒して来た影、確かに

強くなった自分を実感出来る

「ヒノエ姉さんの教え方もね」

こっちは苦戦しながらもレウスを倒した、

明らかに腕力が上がりムダな動きが減った

「新しい技も覚ええないとな」

「掛け声もねwちええいw」

「笑うなよw」

久しぶりに二人だけの時間、

天音は嬉しい

時雨だった頃は毎日こうしてダベってた

「うむ、順調に行っておるゲコ」

「ゴコク様」

「もう立てるの?」

何とか杖を突き一人で立っている

「ようやく一人で歩く練習ゲコ、ベテランの

居ないなかご苦労だったゲコ」

フラつきながら若手に礼を言う

「安心して寝てて良いんだぜゴコク様」

春香が支えようとするが

「春香、お前にも苦労をかけたな」

「へへっ、今はアタシにも頼れるヤツが居るしな」

セキエンを見る

「…は…はは…」

感情無く笑うセキエン

からくり人形かよw

………

水没林、サブキャンブ

「オサイズチ：アオアシラ：ヨツミワドウ：」

モンスターの特徴と名前を覚える花梨

「影とか他の連中ヨツワミドウって言うぞ？」

トウジが教えている

「なぜ影様はそのように？」

「間違つて覚えるヤツ多いんだ、

天音なんか今でも適当に言うしな」

「間違つてもよろしいのですか？」

「ハンターはともかく俺達隠密はダメだ、

情報は『正確』じゃないと里の危機に繋がる」

「分かりました、なるべく正確に覚えませう」

「ん、花梨は物覚え良いな：それに比べて：」

「ホラ！懐に入れ！」

ウツシの指示で動く風月、

ナルガの脇腹に位置取る

尻尾を振り回すと

「ぬっ!?!」

反射的に横に飛ぶ、と思い切り尻尾をくらう

「中心に居た方が安全だ!」

ウツシの指示通りに出来ない風月、

反射神経が良いがモンスターへの攻撃に対応

した方向へ回避出来ない

「ぬううっ!」

もう一度飛び込む風月

「風月はヘンな癖の矯正しなきゃダメだな」

二人で見下ろす

「風月め…頭悪かったのか…」

「お前は風月恨んでるって?」

風月だけ呼び捨てするし

「はい…でも命令でやらされていた

だけかも知れません」

「お前は歳の割に考え深いな」

「考える時間はイツパイありました」

.....

「春香！お前はパーティーぬけるんだな？」

「おう！セキエン居るしな」

「フドウさん復活ですか？」

「おう影、鈍った体戻さねえとな」

「あの…ちよつと聞きたい事が…」

ギルドの隅に行くくと小声になり

「なんで春香さんがあそこまでセキエンに

ゾツコンなのか分かります？」

フドウは見ていなかったが影達から

何があつたか聞いている

バリスタを二人で守った事

避難させるためイブシマキヒコに

立ち塞がった事

「春香は『守られる』つてのがなあ」

頭を掻く

「？」

ニヤリと笑うと

「春香は守られ慣れてネエし、誉められ

慣れてネエ、女扱いしてくれるのが

嬉しかったんだらうよ」

「ああ……」

納得する『キレイです』か

「影、お前気をつけるよ？」

「何をですか？」

「女なら誰にでも優しいのは良いけどよ、

女の嫉妬は怖いぜえ？」

「？」

「影様！」

「花梨お帰り、訓練どうだった？」

「翔虫の扱いとか移動方法は卒業だそうで、

明日から武器の訓練です」

「凄いなあ花梨は」

「えへへ」

照れる花梨

離れて聞いている天音の湯飲みに

ヒビが入りそう

（このバカ、今言った意味分かってネエW

まあ面白エから良いけどなw）

「花梨は影様と天音様のパーティーに

入りたいです」

「そのためには何か得意な武器

…って言ってもなあ」

花梨に扱える重さ…俺は片手剣を両手で…

「天音、双剣片方貸し…」

天音から黒いオーラ…
(やっぱり面白エｗｗｗｗ)

「皆、見て貰いたいモノがあるゲコ」

ゴコクが巻いた紙を持って来た

皆集まる

？

テーブルに広げると

「おお!!」

「この前の!」

「スゲー!」

広げた大きな紙、その中心に50年前の絵、

そして上にイブシマキヒコが描かれている

「あんまり暇だったから描いたゲコ」

なるほど雲も描いて百竜夜行を見下ろす構図

こうして後の時代に情報を伝達するのか

「ゴコク殿、これは何ですか?」

最前列で見る花梨、夜行の奥に顔だけ描かれたモンスターを指差す

「マガイマガド…そうじゃな…」

懐から紙を取り出すと

「ミノト、筆をくれい」

ものの1分でサラサラ描く

「こういうヤツゲコ」

「見たことあります、体から火が

出ているヤツですね？」

「知ってるゲコ?!」

「見たことあんのか!」

「もつと居るのかよ!」

「花梨よ、どこで見たゲコ?」

「最近高い場所で良く見ます、

平地や川辺にはあまり来ません」

「そーいや俺も見つけたの奥の岩場だった」

ハネナガも同意

「うむ、花梨、助かるゲコ」

ニコツとして照れる花梨、人と

関われるのが嬉しいらしい、人の役に立つ、

誉められる事が無かったからだ

「影様、天音様、この青いデツカイのは

この前のですね？」

「ああ、イブシマキヒコって名前だ」

「……………」

「?、どうした？」

「あの…黄色いのは描かないんですか？」

屈託なく見上げる花梨

……………
????!

「今何と言ったゲコ?!」

目を見開くゴコク

「花梨！どういう事だ?!」

「えっ?.....?」

ビクツとする花梨

「他にも居るのかよ?!」

「何だ?!黄色?!」

「マジかよ?!」

「誰か！里長を呼ぶゲコ!!」

.....

「黄色い……同じ形のモンスターが居るのだな？」

只でさえ恐い里長の顔が更に

「……は……は……はいっ……」

雰囲気に含まれる花梨、

カタカタ震えながら影の腕にしがみつく

のんびりとした集会所の雰囲気は無くなり

張り詰めた空気が、

それが全て花梨に向かっている

周りの大人が怒っているのが怖い

天音は察すると

「花梨ちゃん、

皆怒ってる訳じゃあないのよ？

真剣なだけだからね（怒）」

なぜ影の腕に…ピキピキ

「…それは…いつ頃見たのだ？」

「はいっ！…3ヶ月位前…かと」

「……………」

考え込む里長

「どうしたゲコ？」

「百竜夜行の頻発時期と…いや、偶然か？

…調べてみよう、ギルドは通常運営を」

「了解したゲコ」

「誰か竜宮砦へ行かせろ、

全員常に鍛えておけ！」

………

「花梨ちゃん、何で居るの？（怒）」

笑顔の天音、顔がひきつる

大社跡の河原を歩く三人

「トウジさん達が任務で行って

しまいました、ウツシ殿は風月ばかりで

花梨に教えてくれる人が居ません」

「教えるって言ってもなあ」

武器…持てるか？とりあえず

「花梨、とりあえずコレ背負ったまま

走ってみな？」

花梨の背中に片手剣と盾を固定する

すると難なく走れる

13と言えば天音は防具を着けて歩く

事から始めた

花梨は既に来るようだ

「花梨！そのまま外周一回走って見ろ！」

花梨スゴいかも

「はい！」

.....

「里長、何かあるゲコ？」

二階の座敷

「ゴコク殿、恐らくは……」

里長は巻物を広げて見せる

「かつて大社跡にあった文明を脅かした

『ひゆるりと』これが風、つまり

イブシマキヒコとするならば……」

指で文章をなぞる

「文明を崩壊させた『ゴロリと』

これが同型の黄色だと…つまりは雷」
さらに別の巻物を広げる、

モンスターの特徴が文章で書かれている

「イブシマキヒコと同型、黄色、そして

『ゴロリと』の雷、ならばこの

『ナルハタタヒメ』になるかと…」

「ふむ、暫くはミノトの様子にも注意

した方が良いゲコ」

「では…」

苦い顔になる里長

「あの二人が昔からココに住んでいる理由、

『住まわされて』いる理由は知らないゲコ、

しかしヒノエがイブシマキヒコの接近を

知らせる『装置』とするなら…ミノトにも

何かあると見るべきゲコ」

「先人達はそれを知って里に住まわせた…か」

「ミノトはいつも通りゲコ、

今のところ心配ないゲコ」

.....

「うっ……うぐう……ひぐっ……」

泣きながら帰って来た花梨

「どうしたんだ！」

「あぶっ……あぐうう……」

「花梨ちゃん、落ち着いて、何があったの？」

落ち着いた花梨に話を聞くとタママツネに

追いかけられたそうさ

「森に逃げても良かったのに」

「だっ……だっでっ……外っ……はじれっでっ……」

また泣き出す

「どうやら影と天音の言った事は絶対らしい、

臨機応変が出来ないタイプ

「ゴメンな、言葉が足りなかった……」

頭を撫でる影

ピキピキ…

私だってまだ頭ポンポンしてもらった
事無いの!!

とにかく基本的な体力はあるらしいが、
片手剣を片手で振れる力はないし盾で
ガードなんて全然出来そうにない、
両手で片手剣を振る花梨

「!」

「!」

「気付いたか天音?」

「うん、分かった」

足が早くて片手剣を両手…

風月と同じタイプだ…つまり

………

「なるほど、じゃあ今の内から正確な

訓練してみよう、トウジが調査行ってるしね」

風月のように変な癖がついたら勿体ない

「お願いします」

三人で一礼する

「風月も基本の素振りまで戻したし

丁度良いよw」

笑うウツシ、結局風月は自分より速い

モンスターには何も出来ない事が分かった

「コミツちゃんみたいにスゴいと良いですが」

「?、天音? コミツがどうした?」

「あれ? 影は知らなかったのかい?」

「コミツは天才で僕は驚いちゃってね」

「言われた事いきなり全部出来ちゃって、

教官腰抜かしたんだよw」

「あの娘はそんなにスゴいんですか…」

花梨は歳上だが体格は同じくらい

「頑張ります！」

問合い

「ナルハタタヒメ？」

「何だソレ？ 言いづらいな」

フクズクの手紙を読むアヤメとトウジ

「雷だつてさ、例の黄色」

「花梨はココで見たのか？」

竜宮砦

カムラから川を下りニシノを通過、

河口から僅かな距離にある

イブシマキヒコをキャンプから観察する

「アイツ全然動かないね」

「寝転がつてるだけだな…」

死期が来た動物みたいだ」

「死期…か…この前の砦の戦いで？」

「そのダメージかもな」

.....

「ガキン！」

「てえっ!!」

弾かれて痺れる両手

砂漠と岩場の中でバサルモスと戦う影、

これが成功すれば火山地帯の狩りを許可

すると言われた

「やりづらい！」

天音に言われた事を思い出す

『最初は様子見でいいから周りで動くの、

そうすればプレス撃つからね、そのあと

頭が赤くなると斬れるんだよ?』

「プレス撃てよおお!!」

「ガキイイン!!」

「なるほどね、これは戦い辛いわ…」

こちらは大社跡でタマミツネと戦う天音、

レウスはレイアと動きが似てて何とか

なつたがミツネは初めて見る動きが多い

「夜行とは違うわね…」

建屋があつた砦は動きが制限されるが

広いと距離を離される

「もう！滑って行かないでよ!!」

水飛沫を上げて走る天音

「…そうか、クセが強いだけでスキだらけだ」

夜行では柵に向かうだけだからバサルモスを

理解出来てなかった、

けど今なら理解出来る

適当に振っただけではダメなんだ、
正確に一点を斬らないと
その勉強のクエストか！

「なるほどね」

全身ズブ濡れの天音、装備も濡れて
重くてスタミナが…
双剣にとってスタミナ管理は生命線、
その勉強か

………

「おお、二人とも戻ったゲコ！」

笑顔のゴコク、と対照的な

疲れた影とズブ濡れの天音

「さて、今回のクエストの意味…

理解出来てるゲコ？」

影は弱点の攻撃、天音はスタミナ管理の話をする

「うむ！クエストの段階、その本当の

意味を理解してるゲコ」

満足そうなゴコク様

「影、お風呂沸かして、気持ち悪い」

「ん、お前の装備干さなきゃな」

まだ真昼だが家に帰り風呂を沸かす

天音を先に行かせて土間に巫女装備を干す影

水を吸ってズッシリ重い、これ着たままで

走り回れる天音ってスゴいな…

まだまだ追い付けそうにない

「お先でした」

恥ずかしそうにうつむき加減で家に入る

天音、青い浴衣を着て…良い匂いがする…

肌が桜色に…

ヤバイヤバイ

つてか自然な流れで気が付かなかったけど…

当然のように家の風呂に…

これは…

この状況は…

「?、どうしたの? ついでに入っちゃえば?」

キョトンとする

「あ、ああ、そうだな…」

………

風呂を出ると天音が影の防具を繕っている

「自分でやるから良いぞ?」

「いい加減新しいの揃えたら?」

「武器も新調したんだし」

「そうは言つてもなあ」

「お金はあるでしょ？」

「そうだなあ…次は…」

隣に胡座で座る影

あつちこつち確かにボロボロだし…

ふと影は気付く、

何だコノ夫婦みたいな会話は？

…あれ？

俺達同棲認められてるよな…

それって夫婦として認められてるよな…

『夫婦喧嘩しな—い！』

ヨモギに言われた頃から…

だとしたら

だとするならば

この雰囲気は…

天音を見ると手が止まっている

天音もわかっている？

これは…

同意か…

ここは…

男なら…

距離を詰める

「花梨ちゃんの事、どう思ってる？」

うつむいたまま聞く天音

「えっ!? かつかか! 花梨がどうしたっ?!」

焦った!! あービックリした!!

予想外の質問に気持ちを折られた

「花梨ちゃん…好きなの？」

「……………」

好きではある、しかし女性としてではない
子供だから可愛いという認識…

孤児に対する同情…

何だろうか？

影にも自分の気持ちが分からない

沈黙が続く…

「ギイツ!!」

「もう! じれったいわ!」

「ヒノエ様?!」

「ヒノエ姉さん?! いつからそこに!」

「二人が帰った時からよ? 真つ昼間から

お風呂入るんだもの、期待したのにw」

…何の期待でしょうか?

「天音、ムードってモノがあるでしょう?」

花梨ちゃんに嫉妬するなら影君をしつかり

「捕まえなさい」

「捕まえるとは？」

「……！、ね！姉さん！何で覗いてるのよ！」

顔を真っ赤にする

「そっ、そっ、天音よ、今の問題はそつちだぞ

「んー、これは失敗だったかしらねえw」

「どういう事？」

「影君が花梨ちゃんを女として見てる訳

無いでしょ？」

正座して話すヒノエ

影と天音も姿勢を直す

「じゃあ何で影は答えられないのよ？」

「天音、貴女だったら影君のタイプが

気になったり行動を知ろうとするでしょ？」

「そうだけど……？」

「影君と花梨ちゃんはお互いのタイプとか

行動を気にしないでしょ？」

頷く影

「うん…でも花梨ちゃんは影にベツタリで…」

眉間にシワ

「分かってないわねえ、花梨ちゃんは

1日何があつたか自分から影君に

報告してるのよ?」

「だから?」

「分からない?まるで子供が親に

誉められたいだけよ?」

「!!!」

「だけど影に相応しい女性に成るって!」

「まだ子供の好き嫌いの段階なのよ?

それにね?」

少し横座りになると

「花梨ちゃんは貴女達に両親重ねて

見てるのねw影君が答えられないのは父性が

理解出来ないからよw」

笑うヒノエ

「だ！だけど朝影を起こしたり！」

神經逆撫でするようなこと

「私がやらせたのw」

最高の笑顔のヒノエ

後光が見える…

「なんで?!」

「貴女達が奥手で全然進展しないんだものw

花梨ちゃんに嫉妬して一気に…

って思っただけどねw」

そういう事か、最初から…いや、

ずっと前から俺達はヒノエ様に転がされて

居たわけだ

「嫉妬で逆に止まると思わなかったわw

あんまり時間掛けてると花梨ちゃんが

追い付いちやうわよ?」

立ち上がる

「四歳しか違わないんだし、花梨ちゃん

だっていつまでも子供じゃないのよ？」

「それは……」

考える天音

今は私達を両親の様に思ってる

だけど影を男として見る時が来るかも

知れないのか…

それに影だって浮気しないとは言いきれない

「じゃあ私は行くわね、続きどうぞw」

ヒノエは回転扉に入って行く

何の続きですか？

「あ、天音、えーと…」

どうしようこの空気…

天音はソノ気なんて無かった訳で…

何か俺一人で盛り上がったた

バカだなあ俺

「続き……………する？」

上目遣いに見てくる

…え？

それは…

良いのか？

このまま…

見つめ合う…

顔が近くなる…

このまま…押し倒して…

「!」

「?、どうした?」

天音は静かに立ち上がり足音を殺して歩く

回転扉に手を掛けて

「ギイツ!!」

「あらあ…(汗)」

困り顔のヒノエ

「やっぱり!!」

「天音の鋭い所、姉さん好きじゃないなあw」

決めた、回転扉塞ごう

………

ギルドの二階の座敷

大量の巻物と書物を読む里長とゴコク

「トウジからの報告では死期が近付いた
様に動かないと」

「…ワシは見てなかったが…」

イブシマキヒコはダメージを負って

逃げた様に見えたゲコ？」

「…いえ、余力は十分、単に煩わしいから
避けて行つた…と言つた所でしようか」

「他に記述は見つからないゲコ？」

「まったく見当たりませんなあ」

紙の束を畳む

「竜宮砦はニシノの方が近いゲコ、

慈海殿なら何か…」

「見返りを…要求されるでしょうなあ」

「風月を上手く使えると良いが…

アレでは不安がのお」

首を捻るゴコク

「その線で考えますか」

………

「風月、なんで両手使うんだい？

片手で振るんだ」

指導するウツシ

「ぬうつ、最初からこうだったの」

「ウツシ殿！辛いです！」

素振りする風月と花梨、風月は片手剣だが

花梨は短い木刀

「花梨、一回の狩りで剣を何回振ると

思う？この程度で音を上げたらハンターにはなれないよ？」

「何回位振るのでしよう?!」

何度も斬り下ろす

「ぎゅと500かな」

ニッコリ笑うが、その言葉だけで貧血になりそうな花梨

「風月、盾の位置が違う！剣は振り

ながらも体を守る様にするんだ！」

「はい先生！」

「花梨は出来ていますか?!」

「うん、出来てる、花梨は100回振ったら

休みなさい、風月は後200」

「だっ！だっしたら花梨も！」

既にへろへろだが

「ダメだよ、体が出来上がって無い内から

無理するとケガの元だ、休むのも

訓練の内だからね」

風月にライバル心を持つてゐるせいで

怠ける事が無い、が、

先ずはしっかり体を作らないと

「終わったらシツカリ食べよう」

肉を焼き始める

.....

団子屋

「やあやあ！お二人とも！」

「ヨモギ？どうした？」

いつもと話し方が…

「そりやあ二人とも浴衣で日の高い

内から歩いてれば、仲の良い夫婦にしか

見えないよっ！」

天音は反応しないで、うつ向いたまま
影の腕を掴んでいる

「あれ？いつもの反応じゃないなあ？

ケンカしました？」

ニヤニヤ見ってくる

そこへ

「影様、天音様」

「おう、花梨」

へ口へ口の花梨が来た、

途端に天音が腕にしがみつく

!!!

いつもは気が付かなかった、

防具着てたから

腕に当たってるんだが…

「花梨、団子食べる…か？」

ギョツと腕に力が入る

「影様、無理です、もう食べられません」

へろへろに見えるんだが

「ウツシ殿に『食べるのも訓練だ』

と言われまして…」

「そうだよねえ、花梨ちゃん細いもんねえ」

隣に並ぶヨモギ

あらためて並んで見るとヨモギより

五センチ以上低い

「それに『胸が大きくなるよ』って肉ばかり…」

「あはっ！ウツシさんらしいわw」

笑うヨモギ、

とは対照的に怒りが込み上げる天音

『おのれ教官！余計な事を！』

「おお影、丁度良い」

「どうしましたゴコク様」

「少し相談したい事があるゲコ」

ニシノの里

「着いたぞ、ここがニシノだ」

広い川幅で満潮の時は海水が遡上する

気水域、常に多くの魚が捕れ川辺には漁師の家があり棧橋から舟で入る、

だから漁師町かと思っていたら奥は商家が並びカムラよりも大都会

貿易？とやらで裕福らしい

「これ干物の匂いだな」

「独特の匂いだね」

キヨロキヨロする影と天音

カムラよりも色彩豊かで活気がある、

多くの商人が商談しているし露天も多い

「兄さん！食べてきな！」

干物を串に刺して焼きながら売る店や

「お嬢ちゃんにどうだい!？」

風車などオモチャを見せてくる

「うむ、俺はカムラに行った時は焦げ臭く

感じたぞで？」

タタラ場の匂いか

何か俺達って…田舎者じゃね？

「……………」

そして緊張しっぱなしの花梨

……………

「ニシノへ？」

「うむ」

ギルドの二階の座敷、話すゴコクと里長、

そして影と天音

「俺が行っても良いんですか？」

「うむ、ゴコク殿はまだ遠出は無理だ、

それにワシも病み上がり、何より夜行が

起れば指揮する者が居なくなる」

「でも自信ありませんよ？」

交渉なんて出来るわけ無い、大体交渉とは

同格の人間がやること、

若手の狩人と里長では…

「そこは影だから可能なのだ」

ニヤリとする里長

「！、そうか、照さんの貸しですね？」

「察しが良いのお天音、その通りゲコ」

「照の身内である影には話す可能性が高い、

ナルハタタヒメの情報を少しでも

集めたいのだ」

「でも他の里…自信無いです」

「風月はお前に恩義を感じておるし

悪くはならないゲコ」

「うむ、それと花梨も連れて行け」

「何で花梨ちゃん?!」

「まあその方が色々と都合が良いかも

知れんゲコ」

.....

「ここが集会所、あれが里長の家だ」

風月に付いて歩くと

「風月あんちゃん!この人達だれ?」

「うわあ!キレイ!」

「可愛い!!」

子供達が寄って来る

「うむ、カムラからの客人だ、

失礼の無いようにな」

「分かったー！」

風月は子供達に好かれるようだ：

精神年齢が近いだけかも知れないが

大きな家に入る、太い柱、梁、高い天井、

土間から上がりズラリと並んだ襖の前へ

「風月です、客人をお連れしました！」

「うむ、入れ！」

襖が開くと30畳程の座敷に並んで座る10人

程の老人達、中央に白く長い髭に白い長髪、

良く日焼けした細身の老人が発する

「ニシノの里長、慈海じゃ」

シワだらけの顔でニンマリ笑うが、

他の老人達は無表情

三人は並んで一礼すると

「カムラから参りました影、天音、花梨です」

落ち着け、落ち着け俺、呑まれるな、

ナルガより恐くない

内心ガクガクである

「まあ座られよ」

影を前に、後ろに二人が正座する

「ゴコク殿から手紙が来てな、

忌み島の事を聞きたいそうじゃな？」

「イミジマ？」

「カムラでは竜宮砦だったな、

して何が聞きたい？」

影は話す、イブシマキヒコの襲来、

別の個体の存在、そしてイブシマキヒコ

が今竜宮砦に居る事

「うむ、こちらとしてもイブシマキヒコ…

だったか、あれが今居るのは知っている」

「何かの記録がニシノに残っているなら

教えていただきたく」

頭を下げる

「…他ならぬ照殿の弟の頼みであるしなあ」

「照殿の！」

「おお！そうでしたか！」

明らかに反応が良くなつた老人達

兄貴の名前でこうなるのか：

でも死んだらなあ：

「命を助けて頂いた恩義を返せなくては

義理を欠くと言うもの」

慈海は話す、数十年に一度竜宮砦の周辺の

海が大荒れになり漁が出来なくなる事、

最後は50年前になる事

その時二匹の巨大な影が島の上空に現れた事

3ヶ月程前に一匹現れたために

漁師は近付かない事

ついでにカムラの舟が通行、上陸する事に

口出ししないのは魚を取らない事を条件と

していること

「ニシノで記録されているのはこんな

所じゃな…して影殿」

「?、なんでしよう?」

「後ろの方は…嫁御かな?」

ニンマリと笑う慈海

「は、はい!」

反射的に言う影、そして真っ赤になる二人

「そうであつたか、では里を見て回られよ、

夕食の仕度をさせようw」

影達は出て行くと

「あんな美人とはなあ…」

「やられましたな…」

「あれでは目移りするかどうか…」

老人達は話し込む

本当のところは影自身をニシノへ引き抜く

ために里の娘を何人か見繕っていた、

風月の報告で美人の婚約者が居ることは

知っていたが、まさか山奥の田舎のカムラ
にあんな美人が居るとは

「女を使えないとなれば…」

「金か地位じゃの…」

「ところで風月よ、もう一人の子供は

嫁御の妹か何かか？」

「花梨ですが？」

正座で首を傾げるイケメン

「だからその花梨とは何者だ？」

「ですから花梨ですが？」

「ええい！だから誰だと聞いとるんじゃ！」

一通り説明すると

「……………っ!!!」

「まさか！」

「何だと?！」

「あの花梨じゃと?!」

「あの孤児のか?!」

「全然違うではないか!!」

「しまった……やられた……」

目頭を掴まむ慈海

「どうされた里長？」

「慈海殿？」

「そういう事か……」

ニシノが支配していた里、つまり税を

取っていた里、税を取るならば守るのは

当然でありニシノにはギルドまである

にも関わらず花梨の里を守れなかった

そこまでは仕方ないにしても、生き残りを

保護するどころか除け者に

ついさつき『恩義』や『義理を欠く』など

と言っておきながらだ

カムラは

『ニシノが『義』を欠いた証人がカムラの

手の内にある』と言って来たのだ

周辺の里に知られればニシノの体制が揺らぐ

「手土産一つ無く来た理由はこれか…」

「いや、今からでも遅くはあるまい！」

「花梨を迎え入れるならば汚点には

なりますまい」

「風月！なぜこんな大事な事を報告せなんだ！」

「大事？なのですか？」

不思議そうにするイケメン

そうなのだ、風月は複雑な事など考えない、

だからバカに見られる

だからこそ他の里に入っても皆油断し

平然と過ごせる、次期里長と見られる

ウツシから直接手ほどきまで受けている

その風月の個性が裏目に出た

………

露店で焼き魚を食べる影と天音

「へえ、サバってこうやって喰うと旨いな」

「ちよつと！一口頂戴よ！」

サンマを齧る天音

「自分の喰えよw」

しかし花梨はうつ向いたまま

「どしたい！お嬢ちゃん！サバが嫌なら

サンマはどうだ?!鮎もヤマメも

何でも良いぜ?!」

焼き魚を売っているオジサンに話し掛けられた

花梨は天音の手を握ると歩き出す

「ちよつと、何……!」

「どうした？」

三人で歩くが天音は気付いた、花梨が

震えているのだ

川沿いまで来ると

「…怖かったのね」

天音が言うとう無言で抱き付く花梨

しまった、珍しいニシノに気を取られた、

普通の子供ならハシヤいで走り回るだろう、

だけど花梨にとつては逃げ回った里だった

さつきのオジサンとかにも

追い回されたんだろう

ギョツと天音にしがみつく

「大丈夫、怖くないからね」

頭を撫でる天音

私こんな子供に嫉妬したのか

なぜゴコク様は花梨も一緒に来させたんだ？

影にはまだ駆け引きなど分からない

.....

「さあさあ、ニシノは海の幸に

恵まれてますぞ！」

さつきの座敷で夕食が振る舞われた

お膳が並べられ金細銀細の食器や漆器が並ぶ
知識があるものならそれだけで

ニシノの力が解るが

「天音、コレって」

「うん、生海苔だよ、良い香り」

カムラでは魚は行商人から手に入るが、

刺し身や生海苔、海藻類など生のものは

滅多に食べられない、

だから食器は目に入っていない

「ほう、海苔が気に入られたかな？」

「はい、生海苔は行商人も余り持って来て

くれません」

「こつちはいつものパリパリしたやつだ」

喜ぶ影と天音

老人達は内心笑う

『ぬるい』

ただの子供と油断し酒を飲み始める
しかし慈海だけは

『本当に子供の使いではないか、

コイツらは自分が脅していることさえ
解らんだろうな』

里の若い娘が次々に料理を持って来る、

本来ならこの娘達で影を籠絡する算段だった

「おや？花梨殿は食が進みませんか？」

一切料理に手を付けず下を向いている

「！、……………ですか……」

「？」

「花梨ちゃん？」

「なぜ里を……助けてくれなかったのですかっ！」

泣きながら慈海を睨む花梨

!!!

二人とも今更気付く、最初からその話に

なっていないとおかしい、

花梨が変わったからニシノは

気付かなかったのか？

「…」

慈海は箸を置く、落ち着いて花梨を見据える

慈海は花梨の正体を知った、

そしてその態度から花梨は自分が誰なのか

知られたのを感じた

暫し見合うと

「あの時 間に合わなかった事は…」

「花梨は…人が噂していたのを…聞いてます」

グシャグシャの顔で

明らかに老人達の顔色が変わる

その空気に少し身構える二人、

ニシノは何かを隠している

「外国の…大きな商船が来るから…

儲かるから…」

「！」

「！」

影と天音の空気も変わる

これだけ聞けば十分、ニシノは支配下の
里の守りよりも金儲けに走ったのだ

「本当なの？」

慈海を睨む天音

「それは理由が」

「本当なのかって聞いてんのよ!!」

立ち上がる天音！

「天音っ!!」

「まあ座られよ…」

慈海は話す、それは事実ではあるが
続きがある

その商船が近くに来た時、忌み島の周辺
に落雷が頻発、しかも漁師から忌み島の
辺りで大きなモンスターの影を見た

多数の報告があり、ハンター全員を警戒、

護衛のため川下や河口に配置、川上に

あつた花梨の里まで手が回らなかつた

「それで？」

天音は睨んだまま

「天音、おちつ」

「影は黙つてて、今の話は分かつた、けど

花梨ちゃんを保護しなかつたのは何故よ？」

老人達が

「こんなに可愛らしくなるとは思つて

おらんかつた！」

「そうそう！これなら貰い手も

見付かるじやろう！」

「我々ニシノの里で喜んで引き取ろう！」

笑いながら言うが

貰い手？

貰い手だと？

「花梨は…モノじゃない」

立ち上がる影

「花梨はカムラの花梨だ！」

「見た目が良くなつたから引き取ろう

なんて凶々しいわよ！」

立ち上がると

「花梨ちゃん！『帰る』よ！」

天音は花梨の手を取る

「竜宮砦の話、ありがとうございました、

では失礼します」

影は一礼すると出て行く、天音と花梨も続く

………

帰りの舟を漕ぐ影、月と星が写る穏やか

な流れを遡上する

「怒らせちゃったか？」

今更影は怖じ気付く

やべえよなあ、里長とゴコク様にも怒られる

「怒らせとけば良いのよ!!」

花梨を抱いている天音

「可愛くなつたから寄越せなんて冗談じゃない！」

私達と同じ四年、花梨はどれだけ悔しい

思いをしたのか、

なのに今更貰うなんて侮辱だ

「あの…」

花梨が顔を上げて

「花梨はお腹が空きました」

!!!

そういえば花梨だけ朝から何も食べていない

爆笑！

「そ！そうだな！速く帰って

何か食べような!!」

「アハハハハハッ!!な！何食べたい?!

「ウサ団子!」

鉄と型

怒られると思いながら帰ったカムラで
言われたのは

里長「はっはっはあ！良くやった!!」

ゴコク「予想以上の収穫ゲコ!!」

今日はもう寝ろ！明日話すゲコ!!」

どういう事だ？

翌朝、家の前、

インナー一枚でボンヤリと里を見る影

タタラ場の前で凄まじい反射速度で

追いかけてつこをする二人

「待ちなさい！」

「花梨も影様に触れたいです！」

呪詛を吐くミハバ

ああ…落ち着く…日常だなあ

夕べは報告と花梨に団子を喰わせた後、影の家で三人共にすぐ寝てしまった、初めての他の里で神経が疲れていたのかも
しれない

影は囲炉裏の部屋、天音と花梨は座敷に寝ていたはずだが、

起きたら花梨が影の布団に居たのだ

「はいはいそこまでー」

手を叩きながらヒノエが出てくる

ああ、終わった…やれやれ

………

「うまく行きましたな」

笑う里長

「風月は気が回らないゲコウ」

事前に風月はカムラの使いが行く事は伝えた

普通の頭があれば花梨の正体も書くが、やはり風月はそんな事気にしなかった。事前に知られたら対策されたろう、しかし出来なかつたために花梨は有効な手段になつた

「お呼びですか？」

影、天音が座敷に入る

「うむ、よくぞ我等の知りたかつた

情報を引き出した」

頷く里長

「？」

「四年前、この意味解るゲコ？」

「…あれ？」

「…四年…そう…みんな四年前なのよね」

「つまりな」

影と天音の両親も亡くなつた四年前の

大規模な夜行

それはイブシマキヒコの移動を恐れた
モンスターが起こしていたと思われる
そのまま川下に向かい逃げ出すモンスターも
居たのだ

その時花梨の里が襲撃を受けた

だがニシノには50年前の記述しか無く

四年前には何の記録もない

支配下である花梨の里が襲撃を受けた事
にも関わらずだ

ここに何かあると踏んだ

「花梨の話の後、四年前に竜宮砦でって」

多分ナル…ヒメ?だよな

「そうだ、だがそれをも隠すしか無かったのだ」

「花梨が知って居たのは意外だったゲコ」

「分かった、里長達の知りたかった事って

外国の商船の話だ」

天音は頷く

「もちろんナルハタタヒメもあるが…

二人とも見てきただろう？」

あのニシノの里を、大きく都会に見えただろう」

「あれはな、カムラの鉄を外国に高値で

輸出したゲコ、そして急に裕福になったゲコ」

「なによそれ！腹立つ!!」

「カムラからは通常の値段で買って

高く売ってる訳か」

「実のところ外国人も質は良いが値段が

高すぎると不審に思ったらしくてな、

このカムラまで密かに来ていてな」

「えっ!?!」

「外国人って居るんですか?!」

「直接取引の交渉に来てるゲコ、

じゃから裏が取りたかったゲコ」

「四年前のナルハタタヒメの出現を隠して

いたのは大きな取引とセットだったからだ」

ニヤリと笑う里長

「それを暴くために行つた訳か」

「でも花梨ちゃんから聞けば…：そうか…」

「そう、花梨が言つたところでニシノが

知らぬふりをすればそれまでだ、だが今回は

慈海殿の口から言わせたのだ、

コレほどの収穫はあるまい」

笑う里長

「これでニシノに負い目が出来たゲコ」

慈海から言質を取つたのだ

「その外国人はどこに居るんですか？」

「ガルクの島に出入りしている」

「でもニシノに気付かれないで

カムラに来る方法？」

不思議そうな二人

「行つてみるか？」

立ち上がる里長

……

「おおフゲン殿、今日は知らない顔がいるな」

この辺りの服装とは全然ちがう女性が振り返る

「紹介しよう、海の遙か向こうから来られた

ロンディーネ殿だ」

胸に手を当て一礼する

「ロンディーネだ」

ビシツとして…何だか空気の違う人だ

「俺は影、こっちは天音です」

一礼するがロンディーネの後ろにある

不思議なモノに目が行く

それに気が付くと

「気になるかな？これは潜水艇だよ」

「センスイ…テイ？」

初めて聞く言葉だ、里長を見ると

「うむ、信じたいが水の中を走る舟なのだ」
腕組みして見る

「水の中？」

「どういう事だ？」

「溺れない？」

「実演してみせよう！つとその前に」

里長を見ると

「フゲン殿、例の話は成功しそうか？」

「うむ、細かい調整などには必要だが、

これで堂々と乗り入れられますぞ」

「それは何より、早速母船ごと来よう」

潜水艇に向かうと

「ではニシノへ行つて来る、さあ実演だ！」

そう言うとき変な舟？に乗り込み蓋をする、

ゆつくりと湖面を移動していくと

「沈んでる!!」

「里長！ 溺れちゃうよ!!」

「心配無い、あれで正常らしいのだ」

「毎回びつくりしますよね」

「イオリ!!」

「知ってたの?!」

「イオリは口が固くてな、

お前達が一番良く解っているだろう?」

笑う里長

そうでした

集会所に戻ると

「おお影!」

「風月! あれからどうだった?」

怒らせたと思つたが慈海は手紙を一通

持たせたただけだった

「花梨の処遇について書かれているゲコ…」

ゴコクが手紙を読んでいく

花梨を呼ぶと

「花梨、ニシノの里の人になるゲコ？」

「イヤです、カムラが花梨の帰る場所です、

天音様もそう言ってくれました」

「…うむ、分かったゲコ、それに天音から

聞いたがニシノで辛い思いをさせて

しまったゲコ、すまんゲコ」

「いいえ気にしません、花梨はカムラの人です」

その場合は花梨が嫁に行く時、嫁入り道具

はニシノが最高の物を用意すると

記載されている

「里長は『せめてもの詫びだ』と言っていたぞ
詫びとは何の事だか解っていない風月

………

「風月！連続で斬る事を意識するな！

いつでも即回避に移れるように！」

「はい！先生！」

ウツシに打ち込む風月

「ウツシ殿！花梨もやりたいです！」

「花梨は一回休め！」

「やってるな」

「影様！天音様！」

稼働を始めたタタラ場前で訓練している

団子屋へ移動すると

「はい！ご注文のこんがり肉！」

ヨモギが食事を持って来る

「先生、型通りに振ると遅いように感じますか？」

「ダメだよ？自己流は必ず挫折するからね」

「型かあ、最初は面倒だったな」

団子を齧る影

「私も苦手だったわw」

同じく天音

「あの、型とは何なのでしょうか？」

大きな肉を目の前に置かれ、

ウンザリしている花梨

「型とは先人が残した一番大事な…」

正道に通じる…」

ウツシが説明するが解らない、決して

ウツシが口下手な訳ではないのだが

「教官、あなたのレベルじゃあ通じないぜ？」

今日はレウス装備の春香

「春香、旦那さんはどうしたんだいw？」

「セキエンはナカゴと相談してる、

それよりもさ、コイツらにはハネナガとか

神部に説明させた方が良いぜ？」

おおう、『旦那』で『セキエン』が自然とw

春香は花梨をヒヨイと抱き上げると

イスに座り、膝の上に花梨を乗せる

「僕では無理かい？」

「教官は今の立場、目線からしか説明

出来ないだろ？教官はコイツら位の歳で

言われた事覚えてるか？」

「それは……うーん……どうだろう、できるだけ

言うようにしてるつもりだけどね」

「うむう？話が見えないのだが？」

不思議そうな風月

「あー……アタシも説明苦手だけだよ」

この世にレベルがあるとして、例えば

教官はレベルが50とすると、

アタシは40位、天音や影は20とする

だから教官の教える理屈はレベル50目線

の理屈な訳だ

アタシなら近いから理解出来なくはないが、

影と天音にとつては離れ過ぎてて何を
言つてるのか解らない

「武道の達人が言つてる事を素人が

理解出来る筈がないだろ？」

「では花梨はどうすれば良いのでしょうか？」

真上を見る花梨

「だから型なんだ」

真下を見る春香、まるで親子…

似てないけど

「型はな、レベル50だろうがレベル1

だろうが同じ動きを繰り返す、

その繰り返しの中で気付く事がある、

そうすると達人が言つてる事が少しづつ

理解出来る様になる」

「うむ、となると今は理解できなくとも、

繰り返しせば先生の言うことが？」

「ああ、理解出来る様になる、それにな？」

「アタシお前よりも早いだろ？これは型の
繰り返しから出来たんだぜ？」

「なんと！」

「そう言えば春香も型をバカにしてたねw」

「アタシは生まれつきの力に

頼ってるだけだったw」

「ずいぶんと成長したなあ春香w」

「セキエンに教えるのに苦労してさ、

色々考えたんだよwアタシより強くなつて

貰わないとなw」

「セキエン…俺よりハードじゃん、大変だな…

「足の早さは型の前では無力なのか…」

「それでは花梨も何も…」

「風月と花梨にとって足の早さは

絶対のモノだったが

「そうじゃない、型の中で足の速さを

生かす様にするんだぜ？」

大剣を持ち上げると

「アタシは最初力任せに何でもブン回して斬って自分が強いと思いついてた」

片手で水平に

「だけども、型をやる内に重心とか角度

とかの『正確』な所と、戦う時の『効率』の良さに気が付いた訳だ」

まだ水平のまままでいられる

「アタシもまだ上手くは言えないけどな、

早くて強くて疲れないんだw」

「ああ！そう言えば！」

天音はピンと来たようだ

「私、半日ランス持って居られるようになってる」

「うんそうか、今の天音なら理解出来るね、腕は太くなってるのにランスを正確に扱う型をやってた、だから平気なんだよ」

嬉しいウツシ

「風月だったな、お前は昔のアタシと同じだ、自分の力、お前は早さに頼って変なクセばっかりじゃないか？」

大剣を納める

「まったくその通りだよ、助かったよ春香、僕も教え方をもっと考えなきゃね」

団子の串を丁寧皿に並べると

「春香は最初ムダばかりでヒドかったけど、よくぞ駆け上がったね」

「あーそう言や影、照のヤツはさ、

アタシより全然弱くてな？」

「え？兄貴が？」

「照殿が？」

「だけどアイツは最初から型を真面目に

「やったんだ、そしたらアタシがクセを直して
る間に追い越しちゃった、だから

「追い付きたくて必死でやったんだ」

「うむ、となれば型をもっとやらねば!!」

「花梨も!!」

「うん、その意気だよ!」

「さて、セキエンのヤツ、装備終わったか?」

花梨を下ろし立ち上がる

「春香さん、ありがとうございます」

頭を下げる影と天音

「少しだけ『頭の霞み』が晴れた気がする

「お前らもしっかりやっつけよ?」

「この二人強くなるぜ?」

色々な意味で走らなければ

.....

夕方

「うわあ……」

イオリが目を丸くする

「派手だわ……」

「何か……すげえ……」

影と天音も驚く

「コレが母船ですな？」

まじまじ見る里長

「いや、そんなに驚かないでくれ、

これでも小型なんだ」

コレが……小型？

カムラやニシノの舟に比べて桁違いの

大きさと派手さ、手漕ぎではなく帆船

……あれ？これって寒冷群島の船と同じ形……

昔近くまで来てたのか？

「コレでようやく鉄が運べる、さあ取り引きだ」

成長？

「マカライトなど鉍石類はあまり無いのか？」

毅然としたロンディーネの問に

「それならトガシに話を通しましょう、

あちらの里は鉍石が豊富です」

にこやかに話す里長

大きな船のお陰で大量の物資を取り引き

出来るロンディーネ、潜水艇では

手に持てる程度だった

「本国ではカムラの鉄は評判が良い、

この辺りの鉄鉍石は質が良いのだな！」

ハキハキと喋る美人、姿勢も良いし

かっこいい…

ちよつとオーバーアクションな気がするが

「そう言って貰えるとありがたい、

是非とも末永く良く有りたいものですな」

猫族が次々に運び込む…

っていうか外国にも猫族が居るんだな

「もちろん！ではフゲン殿、また来るぞ!!」

ロンディーネが指揮を取るとニャアニャア

言いながら帆を張る

「ぜひ来られよ!!」

里長は手を振る

しばらく出港を見送ると

「よし…喋って良いぞ」

里長の言葉に

「何で黙る必要がある？」

「重かったあ…」

影と天音は鉄を運ばされた後、

黙る様に言われた

「お前達が余計な事を言わないためだ」
「？」

「分かりますよ」

イオリも出て来た

「ロンディーネ…さんでしたか、あの人は

『鉄鉱石』って言いました、つまりカムラの

鉄の正体を知らない」

「イオリ、それって？」

「そっか！カムラの鉄は

砂鉄から作るんだもん！」

「その通り、今は買い付けだが必ず製法を

奪うために知ろうとするだろう」

腕組みすると

「取り引きとはな

『睨み合いながら飯を喰う』ということだ

「？」

「その内解るwそれにな…」

遠くなった船を見ると

「ロンドンディーネ殿は…商人には見えん…」

………

次の日

「以上、何の変化もありませんでした」

「手ぶらで帰って来てしまい…すみません」

「ご苦労だったトウジ、アヤメ、

先ずは無事でなによりだ」

タタラ場前、笑顔の里長

一旦補給に戻った

イブシマキヒコが動かないなら夜行が

起きる心配も少ない、

それだけでも十分な情報

「気になる事が」

トウジが小声で

「ニシノへ立ち寄った際、商人達の

私達を見る目が…何やら不穏でした」

「それはな…」

ロンディーネとの直接取り引きを説明する

「では遂に！」

「外国船が！」

「うむ、昨日は母船で来た」

「だから商人達が…」

「ニシノが敵対視しないででしょうか？」

困り顔のアヤメ

「心配ない、ニシノは今なにも言えんw」

……………

「なあ天音、寒冷群島行ってみないか？」

「あれ？溶岩洞に行くはずでしょ？」

「ちよつとな…」

「?、じゃあカウンターに聞いてくる」

「よう、二人で狩りか?」

集会所にセキエンがいる

「何だか久しぶりだなセキエンw」

「笑うなよw」

春香がベツタリだったから

話す機会が減っていたし

「それ着てるって事はw」

「ああ、俺もソロで倒せたからな」

春香に鍛えられ強くなっているセキエン、

着てるのはナルガ一式、精悍な見た目に…

なるはずが、やはりぼっちゃり

「春香さんはセキエンの体格全部筋肉に

見えてんのか?w」

「そもそもサイズ合ってるのかなコレ?」

自分を見るセキエン、ピッチリ…

肉がはみ出てるんだがw

「あ！セキエンさん！久しぶっ!!」

吹き出す天音

「失礼だな！w 姐さんが着ろって言って

着るしか無かったんだw」

網目に肉…

何だろう、どこかで見たことありそうな

ハム…

「おうセキエン、準備出来たか？」

今日はイソネミクニ教えてやる」

「あ、姐さん、準備できました」

「……春香って呼べよ……」

横を向きテレる春香…

「そっ！それはまだ早いかなって！」

セキエンも…前ほど緊張していない

お…おうん?…おおう?!…まさか…

こんなに態度が変わるとは…

二人が出て行くと

「フドウさん、何だか…」

ニヤける影

「面白くなつて来たよなw」

団子を齧る小肥り無精髭

「あの感じって、セキエンさんは

受け入れた…とか?」

首を傾げる天音

「まあ、あそこまでホレられて

悪い気はしないだろうよ、それより

春香がトガシ行くのが楽しみでな?」

「?」

「トガシの里長は春香を見たこと無いだろう

からな、実際見たらどんな反応するかw」

「セキエンの親ってどんな感じですか?」

「俺もあんまり見てねえけどな？何か

荒っぽい感じだぜ？大柄で黒い着流しに
煙管啜えてるぜ」

「見たことあるんですね？怖い感じか…」

想像する、大柄なチンピラ…

「何言ってるんだ？ココの里長とかヤクシ

さんなんかも大概だろ？w」

確かに見慣れていないとパンチが効いた

見た目かも、ゴツい筋肉質だし

「俺がどうしたあブドウ」

後ろに居たハンマーを担いだ恐い人

「げっ！ヤクシさん復帰かよ！」

「何だそのイヤそうなツラあ!!」

「か、寒冷群島行つて来ます！」

「行つてきまーす！」

逃げる二人

……

寒冷群島 船の上

「こんなにデカかったのか……」

「ロンディーネさんの船の二倍あるかな」

凍った甲板に壊れた部屋？

「私上に行つて見る」

マストに簡単に登る天音、影は壊れた

甲板の隙間から中を覗き込む

「暗いな……」

朽ちた木造の骨組みが見える、船底は抜けて

冷たい水が反射する

本当なら人が生活出来るスペースや

積み荷を入れる部屋もあつたはず

……フドウさんも里を出た時季があつたのか……

俺は…

「かげりーっ！景色良いよお！おいでよ!!」

メインマストの天辺ではしやぐ天音

いや、二人は狭くて無理じゃね？

これだけの大型船が過去に往来していた
訳だ、どのくらい古いモノなんだろうか

「なあ…この船ロンドンディーネさんに

見せたら何か解るんじゃないか?!」

「なんかさ！完全に

信用してないらしいよー?!」

「は？何で？」

そんな相手と取り引き？

「ほら、正面の船着き場には

来させないじゃない？」

降りてきた

「？」

「ガルクの島に来させた理由がさ、

行商人に知られない様に用心してたのと…」

ブルツと震える、上は風が更に冷たかった

「タタラ場に近付けさせないためらしいよ?」

「あ、じゃあイオリは見張りなのか?」

「だろうね」

影は自分がウズウズ、ワクワク

している事に気付く

外を見たい

この船が動いてる所を見たい、

乗ってみたい!!

ニシノに行けば…

「影、何考えてる?」

「うおっ！」

目の前に天音の顔

「今変な事考えたでしょ？」

「ほ…他の里…行ってみたくないか？」

「…！、カムラから出る気？」

「ニシノに行ったら船見られるよな…」

「絶対反対！あの慈海って人嫌い！」

「見るだけ…」

「里長に許可貰わないとダメだよ？それに」

影の手を握る

「…遠くに行っちゃ…ヤダよ？」

その『遠く』の意味は…

………

「影がそんな事を言ったゲコ？」

「はい、船を見たいと」

ギルドの二階、ゴコクと話す天音

「…当然ゲコ」

「当然？」

「天音よ、セキエンや風月を見れば解る

ゲコ、誰でも他の土地を見たいと思うゲコ」

「でも影は今まで…」

「照もやつぱり外へ行きたがり結果

死んだゲコ、じゃから影は外に抵抗が

あつたんじゃろうなあ…」

茶を啜ると

「男なら当然の欲求であるし、いずれ里を

支えるなら外での経験も必要ゲコ」

「私は…」

「…そうなくても影の帰る場所をカムラに

するため、お前達を同棲させるつもり

だったゲコ…どうじゃろう天音？」

「？」

「影と正式に同棲始めるか？」

「でも中止にしたじゃないですか」

若手がヒガミで統率出来なく

なりそうだったから

「状況が変わりつつあるゲコwwww」

「変わる？」

一階

「影、花梨ちゃんは今何処だ？」

神部が団子の包みを持ってキョロキョロする

「？、教官に聞けばわか…あれ？」

ウツシも風月もない

どこかで訓練しているんだろう

「お前なら知ってるんじゃないのか？」

詰め寄る仮面、圧が凄い

「解りませんよw保護者じゃないしw」

「いつもお前にくつついてるだろ？」

「そう見られてたのか…」

「お？何だよ神部、まさか花梨狙ってんのか？」

ハネナガもこっちへ

「…旧ミノト派は今は

花梨派になりつつあるんだ」

「痩せ過ぎだった花梨は少しふつくらとしてきた

ら

『ミノトの子供時代ってコレじゃね？』

な感じになった

つまり将来凄いい美人になりそうなのが解る

「なんか皆『子供のうちに手懐ける』みたい

になってませんか？」

ギルドがロリコン化してないか？

大丈夫かカムラは？

「お前が始めたんだらうw」

神部に指をさされる

「そーいやそーうだw」

笑うハネナガ

「天音だつて子供の時に手懐けただろ？」

「この手法はお前が元祖だぞ？w」

「してないですよ！w」

俺も子供じゃん！それは合法じゃん！

聞いたことがある、こういうのを

ヒカル源氏計画と言うらしい

∴知らんけど

「皆、聞いて貰いたいゲコ」

ゴコクと天音が階段を下りて来た

「今日より影、天音は正式に同棲、

意見のあるものは居るゲコ？」

は？今更？な空気

「のう天音、問題点ないじゃろ？」

皆認めているゲコ」

………

「荷物これだけか？」

「うん、姉さんの所に居ると

家財道具要らないからね」

タンスを開けて少ない着物を仕舞う

何度も出入りして既に勝手を知っている天音

「さて、布団はあるし…煮炊きも出来るし

包丁もあるし…あと必要なのは…」

考えるが思い付かない

「よし、とりあえず」

「始める？」

サービス

二人の最初の共同作業、

もちろんキーキ入刀ではない

静かに回転扉の前へ…

無言で見詰め合う、

手を掛けて呼吸を合わせると

「せいっ！」

「えいっ！」

思い切り扉を回す！

「きやあっ！」

やっぱり飛び出て来るヒノエ、
転びそうに

なるが何とか耐えて…

…無言で見詰める二人

「あらあ…(汗)」

苦笑い

「…ヒノエ様、この扉は塞ぎます」

「良いわよね？姉さん」

「…そ、そうよね、喜ぶべきよねw」

微笑むと

「お邪魔しました♪」

出ていくヒノエ

「あとはハモンさんに道具借りて…」

「…変ね…」

「どうした天音？」

「ちよつと諦めが良すぎて…気のせいかな？」

………

あらためて外から見てみようとタタラ場の壁
と家の壁の間に体を滑り込ませる

「こうなつてたのか……」

外壁が引戸になつていて横に開く、と、

小さな足場があり軽い力で反転する

何のために作つたんだ？

釘一本で引戸は止められそうだ

色々な場面を思い出すが……

小さな釘を打つただけで開閉出来なくなつた……

同棲は嬉しい、けど現実と向き合わなければ

生きて行けない、もつと強くならないと

隙間から出ると

「どう？うまく出来た？」

「ああ、あれなら入れない」

「……」

それはつまり……

二人で向かい合つたままうつ向く、耳まで赤い

『これで邪魔は入らない』

…が

「か…稼ぐか…」

テレる

「か…家事は分担ね？料理は私がやる…」

こつちもテレる

「じゃ掃除は俺が」

人としての責任、男としての責任が出来たんだ、

これからもつと成長して強くならないと、

稼がないと

何より天音を守らないとならないのに、

俺の方が弱いんじゃない話にならない

………

「あつちいな…」

火山地帯を歩く影、クエスト対象は
バサルモス、それと鉱石も掘りに来た
取り引きに使われるために必要であり
少しでも余計に稼ぎたい

溶岩洞

名前の通りの溶岩だらけ、そこに地下水が
入り込み所々が冷やされ複雑な地形に
なっている

「うげ……」

地図を良く見ると苦手な水没林より複雑で
多層らしい

「皆はどうやって覚えたんだコレ?……」

とにかく歩いて採掘や採取、地形を覚える
には地味な作業の積み重ねしかない

……

「うむ? 天音よ、少し急ぎ過ぎゲコ」

「ダメですか?」

「天音にはゴシヤハギ辺りが丁度良いわね」
集会所で相談する天音、

レウスより上のクエストへ行ききたがるのを
ゴコクとミノトに止められた

「天音よ、影が追い付いて来るのがイヤゲコ？」

「うー…何かこう…」

ムカムカイライラする、なんだろう？

この煮え切らない感じ

「それがハンターつてもんだらうよ？」

ヤクシが会話に入る

「天音は旦那が強くなるのは嬉しいがハンター

としては追い付かれるのが悔しいんだ、

それが当たり前だろ？プライドってヤツだ」

「私は…影に追い付いて…欲しいし…」

納得行かないが

…そうか、同時に悔しくもあるのか…

私今…悔しいのか

ニヤケるヤクシ

「俺も色々教えたがよ、あのバカ（フドウ）

と春香に追い付かれたのは悔しくもある」

天音に向き直ると

「だけどな？この里全体のレベルが

上がるんだ、それは喜ぶべきだろ？個人の

感情なんざ仕舞っておけよ？」

ハンマーを担いでクエストへ

「ヤクシの言う通りゲコ」

「楽にレウス狩れたわけでは無いでしょう？」

ミノトにも諭される

…確かに影を鍛えちやった…

私は師匠でもあるのか…

………

「おっ……ヤベ……」

溶岩に挟まれた一本の道にヤツカダキがいる

自分の糸をドレスの様に纏う巨大な蜘蛛、

その不気味な姿で炎を吐く

兄貴はあれを17歳でソロで倒したんだよな…

今の俺と同じ歳で…

岩壁に背を着けて隠れて見る

功名心、出世、名声、英雄になりたいなら

立ち向かう所だ…

兄貴はそういうのが好きだったんだろう…

と言うか男の子供は皆そうだな…

「俺は…兄貴じゃない…」

その場から離れて別のエリアへ

賭けに勝つのはカッコいいだろう

でも負けたら死ぬかもしれない

生活するためには死ぬ訳にはいかない、

たとえ臆病に見られても天音を悲しませ
たくはない

それに事実として俺が勝てるモンスターではない
自分が逃げ腰であるとは思いたくないが…

ああ…

ああ…そうか、いつの間にか兄貴は俺の中で
憧れの人から軽蔑する人になり

今は…『過去の人』になったのか…

……………

溶岩洞のバサルモス、討伐成功

「ミノト様、天音は？」

「レウス狩りに行ったから少し遅くなるかと」

外に出ると

「あれ？今日は一人ニヤ？」

「ケンカしたのか？」

「影あんちゃん！天音さんは？」

「チツ…」

…俺が一人ってそんなに変か？

「あらあ、天音は？」

タタラ場前にヒノエと

「お久しぶりですね」

旅商人のカゲロウ

ヒノエ、ミノトと同じ耳をした、竜人？

とか言われる商人

スタイルが良く声も良いのだが、何故か顔に変な布を被り素顔を見せない

しかし誠実な商売をするので信用されている

「カゲロウさん、一年振り位ですか？」

「見違えましたよ影君、少年っぽさは影を

潜めて立派に男になったようですね？」

「影君にも責任ができたからかしらねw」

「おや？責任とは？もしかして夜行の

指揮の話でしょうか？」

「え？知ってるんですか？」

俺有名人？

「もちろんですよ？この辺りで

『カムラの影』は有名ですw」

おそらく笑顔のカゲロウ：

って言うか邪魔な布だ

「それだけじゃないんですよおw」

いたずらっぽく笑うヒノエ

「おや、なんででしょう？」

首を傾げるカゲロウ

ヒノエが説明する

.....

「それはまた…時雨君は仮の姿だったん

ですねえ、ヒノエさんは知ってたんですね？」

「はい、私がやらせましたからw」

「なるほど、それほど一途に思われ

添い遂げる事になった…と…」

カゲロウは派手な荷車を開けて中を探ると

「では影君、お祝いとしまして無料でコレを

進呈します」

差し出して来たのは小さな紙の包み…粉薬？

「なんですコレ？」

「あら？何かしら？」

「ヒノエさんはそちらに…」

ヒノエをいつもの場所に促して

「男同士の話です」

影と荷車の裏へ

「何ですか？」

小声になると

「ユクモの里で調合された品です、

若い君には必要無いかと思いますが…」

「……………」

「……………」

「……………ですから…で…ケルビの角を…………すると……………」

「……………!!!」

「い！いらぬですよ！」

「おや、自信があると？それは結構w」

「そ、そういう事じゃなくて！（汗）」

「何してるの？」

ひよいつと覗き込んでくる天音

「！あ！天音!!」

「おや…そうですか、貴女が時雨君改め

天音さんですね」

（布で分からないが）まじまじと見ると

「なるほど、確かに美人です、ニシノで噂になっていましたよ？」

（良かった！カゲロウさんが話題

逸らしてくれてる！）

「な、なんかニシノで有名らしいぞ?!」

「…ふーん…そんな話ならコソコソ

しなくても良いんじゃない？」

ジト目

「そうそう、最近行商人仲間の動きが

変わって来ましてね」

いつもの場所に戻る

「何でも外国船が直接こちらへ来たそうじゃないですか」

「あ、来ましたよ、ロンディーネさん」

表情が戻る天音

「そ、そういやそうだな」

（カゲロウさん上手い！）

「ニシノの鉄相場が荒れる、または

崩壊するのではと……」

天音の顔を見ると

「ちよつと難しかったですか？」

煙に巻いた、すげえよカゲロウさん！

「影様！」

飛んで来る花梨

「お、花梨、どうした？」

「……………」

天音の表情が一瞬変わる、

それを見逃さないカゲロウ

「オサイズチ倒せました！」

「早いぞ?! 凄いな花梨！」

頭を撫でる影と

「えへへへ」

くすぐったそうにテレる花梨

ピキピキ…

天音の髪が逆立ちそう

(おや、これはw)

音もなくヒノエの横へ行くと小声で

「面白いですね、貴女の仕業ですか？w」

「違いますよ？花梨ちゃんにとつて影君と

天音は命の恩人なんですw」

「どう見ても恋敵のようですがw」

「少し弄ったら面白くてw」

「やっぱり貴女の仕業でしょうw」

「早く花梨も強くなって影様と一緒に

狩りに行きたいです」

「そうだな、じゃあ傘鳥倒せたら…」

「ちよつと！何勝手に決めてんのよ！」

(おやおや、この様子では…両方…)

「影君、少々こちらへ」

カゲロウが荷車の裏へ

「何ですか？」

（助かった）

「さ、もう一つサービスです」

「だから要らないですって!!」

バカの優しさ

「風月！いけるか?!」

「飛ぶと面倒だ!」

リオレウスが上空からブレスを吐く

「回避っ!」

叫びながら転がる影、風月も転がるが

「熱っつ!!」

溶岩洞、

左右を溶岩に挟まれた一本道で戦う二人

「大丈夫か!？」

「地面で髪が焦げたぞ!」

回避の方向まで考えなきやならない

「やりづらい!!」

「まったく面倒だ!!」

.....

「どう？感触は？」

隣のエリアで待機していた天音

「うむ、決して戦えない相手ではないな」

強がつて余裕がある振りをする風月、

長い髪が...

「天音、ここって本当の敵は地形じゃないか？」

汗を拭う影、段差で何度も落ちて疲れた

「そう！大社跡の方が楽なのよ！」

ちゃんと理解してる！

「じゃあ次は私も参加するよ？」

.....

「討伐成功ですね」

ミノトがサインする

「ほっほお！リオレウスを共同撃破か、なら

今日から影も中堅として働くゲコ！」

「中堅…実感ないですね…」

ソロではないし、天音がほとんど攻撃

してるし、何より閃光玉を大量に…

「む、実感？影は出世が速すぎるからか？」

「風月？、俺早いのか？」

「早いだろう？俺はハンター四年目だ、

影はまだ半年経ってないのだろう？」

「思い返してみるゲコ」

ウツシ教官に基礎教わって…

正式にハンターになってから…

合わせても半年と少し？

「早い…？」

兄貴は13からハンターやって…

四年でヤツカダキ…

「あ、早いのか!!」

「今更気付いたゲコ?」

首を傾げるゴコク

「何の話?」

天音が団子を持って来た:

つてクエスト前も食ってたような

「影の出世の話だ、早いだろう?」

「あー、あれ?そっか、

正式にハンター初めてから:」

ゴコクに向き直ると

「もしかして歴代最速とかですか?」

「いやいや、最速はウツシがおるゲコ」

さすが教官

「リオレウスまで教官はどのくらいですか?」

「そうじゃなあ:」

過去の記憶をたどるゴコク、

何年(何十年?w)前なんだろうか

「…基礎を含めても一月位ゲコ」

「ぬを！さすが先生！」

「速すぎるわ」

「やっぱり天才って言われたんだらうな…」

フザケてるように見えても…

俺はまだまだ

「風月うつつ!!」

花梨が集会所に飛び込んで来る

「何でお前が先に卒業なんだ!!」

相変わらず風月にだけは口が悪い

「フン、仕方なかろう、俺は基礎無しでも

ハンターをやっていたしな」

子供の威嚇で動じるハズもない

威張る風月

「しかも影様と一緒にいい！」

怒りながら悔し涙を浮かべる花梨、

その頭を後ろから撫でるウツシ

「花梨、君は今アオアシラが目標だよ？」

それに体をしっかり造る事も必要だよ？」

「うぐうう…」

「花梨ちゃん、風月さんは前から

組んでるのよ？w」

笑顔の天音、しかし内心は

（悔しいか？悔しいだろうw）

「なあなあ花梨ちゃん、卒業したら

僕と組まないか？」

「そうそう、俺達は色々教えられるぜ？」

「影よりも俺達のほうがハンター長いんだぜ？」

神部達、旧ミノト派が団子を持って来る

「花梨は影様と組みたいですっ!!」

ムカムカしている

（おのれ影!!花梨ちゃんまで!!）

（ううむ、影は自分に鈍感ゲコ、自分が

照以上の存在になりつつあるのにお

もしも天音が居なかつたら里中の

女子にモテたはず

まあそれはともかく

「タイシも基礎やつとるし、そろそろ

ヨモギとイオリもどうじゃろうウツシよ？」

「そうですね、先に武器を使ってしまい、

移動方法さえ……」

話し込む二人

「風月、今日はこれからどうする？」

「む？レウスは狩れたが道具が減ったのでな」

ウツシが横から

「じゃあ風月、一緒に採取に行くかい？」

「先生のお誘い、ありがたくお受けします」

……

「花梨ってすげえな！」

見習いのタイシ

「ホントに言った所にある！」

アオキノコを採るヨモギ

「何か法則とかあるとか？」

イオリも含めて三人が採取する、

武器防具は無い

「道の真ん中はモンスターとか人が

歩くから素材が無いの」

大社跡、

花梨がリーダーになって教えながら歩き、

最後尾をモンスターに警戒しながら歩く

ウツシと風月

「だから崖の下とか日陰、エリアの端っこ、

見逃しやすい所に素材が多いんだよ？」

地面を指差すと

「逆に道の真ん中に何か生えてる場合は、

最近モンスターも人も来てない場合なの」

「おお!!」

感心する三人

「僕が教える事が無いや」

「採取に関しては先生より上ですか？」

「生きるタメに必死で見付けてきたからね、

感覚的に分かっているレベルだよ」

「むう、まああれだけでは足りないでしょうな」

「?、風月？」

「?、なんです先生？」

「アレって何だい？」

「盗んだモノですか？」

「?、君は花梨を叩いてきたんだよね？」

「そうですか？」

.....

ハモンの工房

「良い値段で売れるしなあ」

「だけど防具のタメには残しておかないと」

「影よ、レウス装備を作ってみたらどうだ？」

さすがにアシラ装備に限界を感じて

ハモンに相談する二人、余った鉱石を

売って資金にして…

「レウス装備…」

「良いんじゃない？」

「うん…」

前に比べて一回のクエストの報酬が上がってるし

正直高いけど

「うん、お願いします」

「分かった、明日の夜までに作っておく」

相変わらず表情が少ないが、

決して機嫌が悪い訳ではないハモン

世の中には天音のように感情が顔に

出やすい人と、

ハモンさんのように出にくい人がいる

(さらに里長の様に周囲の状況に合わせ

感情を変える人がいる、が、影にはまだ

理解出来ない)

俺はどう見られてるんだろ？

どのタイプが正解なんだろ？

兄貴は感情出てるタイプだよなあ

まだ無意識に照と自分を比べてしまう影

「影君、見ていきませんか？」

向かいから声を掛けてくるカゲロウ

……この人は例外……

自分の表情を隠そうとしてるとか？

一通り終えて集会所に戻ると雰囲気がおかしい

全員が花梨を凝視している

「……………」

黙っている花梨、その手には皿に団子が三本
問題は差し出した団子の相手
それは風月

なんだコレ？

思わず天音を見ると首を振る

花梨派の人達は齒軋りをするように

凝視してるし…

小声で

「…フドウさん…なんですかアレ？」

こっちも小声で

「俺も分からねえ、影、お前聞いて来いw」

「イヤですよw」

アレは何かしらの地雷では？

花梨が

「借りを作つたままだと気分悪い」

皿を突き出す

「フン、俺は貸しだと思っていない」

拒否する風月

少女が背の高いイケメンと揉めているが、

花梨がなぜ恨んでいる風月に？

ほぼ全員が影を見てくる

『お前が聞けよ』

無言の圧力が凄い

ええー？（汗）……仕方ない

「花梨？どうして風月に団子を？」

「影様、…その…風月は花梨を叩いて…

庇ってくれていたらしいのです」

「???」

全員の思考が止まる、

えーと、何言ってるんだ？

叩いて庇う???

「僕が説明するよ」

ウツシが戻って来た

「風月は確かにコソ泥の花梨を叩いていたんだ」

「折檻しろと言われましたから」

椅子をウツシに勧めて

「だけど叩くだけで食べ物を取り返した

事は一度も無かったそうなんだ」

「取り返せとは言われませんでした」

惘然としている風月

…え？泥棒を追いかけてるのに

取り返して無い？

「風月、なんでだ？」

思わず影が聞くが

「？だから取り返せとは言われておらんぞ？」

…そうだ、風月はこういうヤツだ

叩けと言われたから叩いていたんだ、
その先の捕まえるとか取り返す

発想が無いんだ…

いや…そうして庇っていた？

「それにな」

呆れた様に話す風月

「腹が減っているから干物を取るのだ、

取り上げたら飢えて死んでしまうかも

しれんだろう？」

「ああ、少しは見逃してやったってそれか」

納得する影と天音

こっ…この男につ！『気を使う』などという

高尚な感覚があつたのかっ!!

ゴコクをはじめ全員が内心驚く

…なるほど、風月なりの優しさでは

あつた訳だ

それを花梨は知ったのか

「だから…借りを…」

うつむく花梨

「分からんヤツだ」

拒否する風月

「俺が叩いた代わりにお前は

喰えたのだろう、貸し借りなどなかるう」

ピンと来た天音

「ねえ風月さん、もしかして露店の

焼き魚の店から…」

「む？花梨はその店からも盗っていたぞ？」

「ならあのオジサンに返せば

良いんじゃない？」

「あ、それ良いかもな」

影が言う

「影様、それが良いのですか？」

団子を置く

「ニシノの里は許せません」

「花梨、許せないのは花梨の里を見捨てた

ニシノの『偉い人』だろ？ 風月や他の

人達まで恨む事はないだろ？」

考える花梨

花梨派は胸を撫で下ろす、風月に

気がある訳ではないようだ

「勝手に盗って食べたなら店の人は困っただろ？」

膝を曲げて話す影

「代金を払わないと…ダメ…」

うつむく花梨

キッチンと躰をされているため、自分の罪と

罪悪感を理解している

「ではニシノへ行つて代金を支払います、が…」

花梨は駆け出しのために金はほとんど

持っていない

「それならウサ団子を持って行くゲコ、

後はキチンと『ごめんなさい』と言うゲコ」

「じゃあ…風月、団子あげない」

「うむ、それで良い」

少し笑顔の風月

花梨が風月を見る目は前ほどキツく

無くなったようだ

え?…むしろ見つめあつてね?

花梨の立場だったら惚れるぞコレ?

え?なにこのイケメン?

腹立つんですけど?

風月は素直で真面目ではある、しかし

必ずしも命令に従っている訳ではない、

自分の思考がそのまま行動になっている

天然で自分勝手に動くクセに妙に

カッコイイのだ、

健康的に日焼けした長身、長髪イケメン、
強さもそこそこ、行動はヒーロー的

これで金持ちならモテる属性フルコンボ

それを言葉1つでそれら全てをブチ壊している

花梨派が風月を睨む、悔しくて歯軋りしながら…

しかし神部だけは表情が分からない

(なるほど、ここのういう時表情が

分からないって便利なのか)

妙に納得する影

家族

「何をしているのか分からんな…」

「はい、しかもヤツは雲ほどの高さを飛ぶ

ため行動を追いかけられません」

里長へ報告するトウジとアヤメ、

再び補給へ戻った

「しかし竜宮砦から居なくなつたなら、

逆に夜行の危険がある…か？」

顎へ手をやり考える里長

「こちらの砦の復旧はどうなんでしょうか？」

「ハモン達里守の尽力と花梨の

部品提供のお陰でな…」

考える

「どうしました？」

「復旧は出来たが『強化』には至らん、

大砲を増やせれば良いが…」

「時間もか…」

「竜宮砦にあるけど輸送が大変そうよね…」

「ふむ…」

………

「うおお…」

レウス装備を身に着けた影、

自分を見ながら目をキラキラさせる

「どうだ？サイズは？」

「ピッタリです！ありがとうハモンさん！」

「ほら影」

天音が背中にナルガの太刀を取り付けると

「…ツハア…」

着ただけで…何？w…何この満足感w

「顔がだらしがないよ?w」

誰も見ていなかったら

「うへへへ!!俺最強!!」

とか叫ぶ所だが抑えている影

早く試したい!!

「仕方なからう、レウス装備を着ると言う

事はハンターとして一目置かれると

言う事だからな…それと…」

ハモンはミハバの方を見ると

「チツ…武器貸せ、強化してやる」

不満な顔

「あ、ああ…」

「金はいらねえ」

「は?」

「祝儀代わりだ」

顔や態度は悪いが…やはり付き合いの長い幼なじみ

「ありがとうミハバ!」

「いって…」

「ふーん、ミハバって良い人ね！」

天音が笑い掛ける

「そ、そんな事ねえって！」

「照れてるーw」

「おお!!影もそれなりの格好になったな」

「里長？」

「一つ頼みがあるのだが」

……………

「変な話だよな」

「今度はトガシの里かあ」

ガルクで森を走る影と天音

「鉱石の買い付けなんてな」

「でも春香さんの様子見られるし楽しみw」

「いつ春香さんトガシに行つたんだ？」

「私も聞いてなかつたよ？」

ガルクで走ること二時間、

大きな鳥居の様な門にズラリと続く柵がある

「これがトガシの里か」

「大木だらけ……」

緊張しながら中に入ると、ガルクの島を

大きくして家を建てたように見える、

カムラに比べて瓦の屋根より藁葺き屋根が多い

「何者か！」

弓を構えた女の子が近付いて来る、

コミツ位の歳だろうか？

どう見てもオモチャの弓

「こら、おきやくじんかも知れないだろ？」

兄らしき男の子に小突かれる

何とも可愛らしい出迎えである、

門番のつもりなのだろう

「セキエン居るかい？」

「春香さんでも良いんだけど」

「え？若様？」

「春香お姉ちゃん？」

ブホッ!!わw若様w

顔を逸らして顔を隠す影

あとでイジるw

「カムラの影と天音が来たって

伝えてくれるかなw」

ニコツと笑う天音の笑顔に真っ赤になる男の子

「こっつ、こちらです！」

ストライク！天音の笑顔にフラフラ歩く

小学生位の男子にとって高校生くらいの

美人の女子は……その破壊力たるや

天音の笑顔は武器だ

「あらあ、どこから来たの？」

「まあカムラから？」

「疲れたでしょ！焼き餅食べな！」

「うおっ！どこの娘だ!？」

カムラに比べると森の中で田舎に見えるが、

行商人も多いし露店もある

大きな家の前に：

「よく来たな！」

紺色の着物のセキエン

「セキエン！いつカムラから出たんだよ?!」

「いつの間にか居なくなってるんだもん！」

「早く春香さん連れて来いって親が煩くってな」

頬つぺたを搔くポツチャリ

まだ『さん』なのかw

立派な屋敷、土間から上がり座敷に通される、

新しい畳の良い香りがする

「親父殿！影と天音が来ました！」

奥の襖が開くと

「よく来られた！こちらへ！」

もう一つ奥の広い座敷へ、

里の責任者だろろう役職達の中央、

胡座で座る大きな体、黒い着流し、啞えた

キセルにオールバックの長髪、なるほど

フドウさんの言うとおりに恐い感じだ

「お前が影か、セキエンが世話になったな」

「申し遅れました、こっちは天音です」

レウス装備の兜を脱ぎ、脇に置き正座する、

今なら分かる、セキエンがカムラに来たとき

『嘗められないように』と実力に見合わない

装備を着ていた理由、

自分に余裕を持たせるためなのか

影の斜め後ろに正座した天音が一礼する

「ガハハハ!!緊張するな！」

豪快に笑う里長カイエン

「話通りの美人だな！影がイヤになったら

トガシに来い！」

「親父殿!!」

セキエンが諫める

「冗談だw」

ひとしきり笑うと

「して、何用だ？」

よそ者、しかも初めての人物に対する

当然の威嚇、いきなり雰囲気が変わる

カイエン、前の影なら萎縮しただろう、

しかしヤクシより怖い人なんて滅多に

居ないし（二人は見た事が無い）、ニシノの

里長の前で感情剥き出しにした二人には

今更通じない

度胸がついている

「はい、鉾石を更に増やせないかと」

「ふむ、カムラに送る量を増やせ？」

思案する

そもそもトガシは鉱石類、鉄鉱石も採れる
がカムラに比べると質は良くない、

それに製鉄技術が無いため加工はカムラへ
送っている、そうして出来た鉄を

ユクモ方面へ送っているだけ、

トガシの主な産業は木材と農業である

つまりトガシの鉄は副収入程度、

そこまで重要視していない

その鉄も増やせ？考えられるのは…

「砦の強化でもするの？」

「それは聞かされていません」

本当に何も聞いてない

「うむ、安く買い叩く訳ではないの

だろうから…」

天音が

「はい…それに」

顔を上げると

「私達本当は春香さんに会いたくてw」

ニコツと笑う

実際こつちが本心だし

「ガハハハ！春香殿か！最初は面食らったぞ！」

初めて屋敷に来た時、入り口を『くぐって』

入る大女、家族全員唾然とした

「俺よりデカイからな！」

笑うしか無かったわ!!」

豪快に笑うカイエン

「集会所の辺りにいるハズだ！」

会いに行ってみろ！」

………

レウス装備で太刀を背負った大女、
を探していた二人は面食らう

里の広場らしき場所、丸太の椅子を並べた
所に薄紅色の着物を着た春香

……まあデカくて見間違えることは無いが

「これやってー」

子供達に竹トンプボを渡され

「おっ、これはな」

「ブウウウウウン……」

春香の大きな手で回された竹トンプボは

唸りを上げて上空へ

「うわああっ!!」

歓声を上げる子供達

他にも綾取りやお手玉を教える春香

「……春香さんって……子供に人気あるんだな……」

「あれ？影知らなかった？春香さんって

面倒見良いんだよ？」

花梨に型の話をした時の話をする

「ああ…前は俺嫌われてたっけ」

関係が改善してからは何かと声を掛けてもらった

「おう！来てたのか！」

春香が気がつき手を上げる

「春香さん、いつこつちに？」

天音が近付くと子供の輪が開く

「二日になるか、顔見せに来ただけで

気にいられてなw影！一人前だな！」

レウス装備の事である

「何かテレますw」

「だれ？」

「びじんー！」

「春香ねえちゃんのもだち？」

うおう、会話中でも遠慮なく質問攻めだよ

十人程の子供に囲まれる

「春香ちゃん！」

薄緑の着物を着た：おば様

「お料理手伝って頂戴な」

：もしかしてセキエンの母親？

「はい、すぐに」

立ち上がると

「また後でな」

「ええー？」

「おわりー？」

抗議の声を上げる子供

「おう、また明日な！」

「えー！」

「もつとあそんでー！」

子供に人気あるんだ：

.....

「本当は顔を見せに來ただけなのにさ、

「人が凄くてなw」

「アタシも居心地良くてさ、

帰るのが延びちまったw」

串に刺した餅を頬張るセキエンと

鍋の具を盛り付ける春香、本日は当日に

カムラへ戻る予定だった様だ

延びた理由は到着と同時に事件が起こった、

トガシは山の中だから時折ファンゴが

平気で入り込む、だから子供はすぐ近くの

木に登る訓練をするらしい

春香が到着した時もファンゴが入ってしまった、

初めてのトガシ、しかも嫁に来る事に

なるかも知れない里、太刀を振り回して

狩る姿を見せるのは

『ちよつとなー』

と思つた春香は、ファンゴに素手で立ち

向かい数回殴り気絶させてしまったそうだ

デカイ体、強い力、あつという間に

子供達のヒーローになつてしまひ

引き留められたそうだ

いや、素手つてどうよ？

太刀より殴る方が恐くね？

晩御飯を屋敷でご馳走になるがニシノと

比べると全然違う、ニシノでは座敷に

お膳を並べて役職も一緒だったが、トガシ

はデカイ囲炉裏の部屋で鍋を囲むスタイル

「もうすっかり若奥様で御座いますなあ」

茶色の着物で痩せた老人がカイエンに酒を勧める

「まったく！良い嫁を見付けたもんだ！」

「気が早いよ親父殿！」

「そうです父上、私の義姉にふさわしいか……」

「あら、私は春香ちゃん気に入ったわよ？」

「……えーと……」

「ああ、二人とも知らないよな」

セキエンが紹介してくれる

「この人は権爺、トガシの長老だ」

痩せた老人が少し頭を下げる、

カムラと同じで長老と里長が居る訳だ、

ニシノは慈海が里長で長老だった

…ゴコクとは対照的で地味で痩せて腰が低い

「んでコイツが弟の」

「シキエンと申します」

礼儀正しく挨拶する少年、兄と違い

シユツとしているwその態度から

賢そうなのが分かる、

似てないwこっちは母親に似たのかも

「で、私はこの子達の母親よ？」

『おかみさん』って呼んでね？w」

…フレンドリーなおおば様だ…

「影よ！一杯どうだ?!」

カイエンが徳利を向ける

「あの、俺呑んだことないんですが…」

「「「ええっ!?!」」」

一同が影を見る、意外な事に天音まで

「そーいやあ一緒に呑んだこと無かったよな」

思いつくすセキエン

「アタシも見た事ないな…」

春香も

「天音、呑んだことあるのかよ?」

「私は姉さん達に呑まされたよ?」

加減と限界知っておけてw」

「何で?」

「酔わされて変な事されないように

『用心だ』ってさw」

「影よ!嫁御に負けてはイカンな!さあ一杯!」

何だか距離感が近い、久しぶりに

家族みたいな雰囲気

そーだよ晩飯ってこんなんだったよなあ、

家族四人でワイワイしてた…

その日にあつた事話して…それで…

ああ、楽しかったんだなあ…

用心は必要だけど…

良いかな？

「じゃあ…」

「うむ」

カイエンが注いでくれる

里長クラスの間人に酒を勧められる意味、

その重さなど影達はまるで解っていない

初めて酒を飲む影、全員が注目する…

「っほおお…」

熱い…喉が…

何か腹まで行っても熱い…けど…

「…何か…不思議だ…」

「おお！イケるくちだな！」

更に酒を注がれる

………

「ぐ……寒い……」

微睡む影、薄目を開けると知らない天井に……

布団の感触

どうやら酔い潰れたらしい……

掛け布団は……あつた……

あつたかい……

……や……べえ……

泊まるはずじゃ……ないの……に……

………

「!!!」

影は目を覚ます、

と同時に目の前に髪の毛???

え？これまさか？

……………どっどどどどうしよう！

夕べの僅かな記憶…布団だと思って

しがみついたのは…そうです天音です！

う、動けん……

動いたら色々触ってしまう……

……ここは……そーつと……

「んんっ……ぐうーっ！」

突然天音が伸びをすると

「んー……あー……起きな……きや？………!!!」

二人同時に飛び退く！突っ込んで来た

モンスターを避けるように

「な！何で一緒に寝てるのよ！」

「おおお俺も分からないんだ！」

お互いインナーだけで

「な！何かしてないでしょうね?!」

「し！してない！と思う！…多分…」

初めて一つ布団で寝たが、

他の里長の屋敷、お互い酔ってて記憶無し

という最低の思い出になってしまった

そっち？

「すまん！影！天音！w」

　　拝み手だが顔が笑うセキエン

「お前から公認だし良いんだと思ってた！w」

「アタシが運んで防具脱がしたから、

　　そこは安心しなw」

　　春香も笑う

「ガハハハ！余計な気遣いだったか！」

　　笑いながら朝食を頂くが影と天音は

　　照れっぱなし

「夕べは良い酒でしたからなあ、影殿も

　　初めてでしたし仕方無いでしょう」

　　権爺もニコニコ笑う

　　晩飯は居心地の良かったこの場所が、今は…

『やらかした!!』

ああああ! 恥かいた! もう呑まない!

一生呑まない!

他の里でこんな事になるなんて!

真つ赤で後悔する影

何で? 何で私、加減間違えたの?

影がいたから?

疑問が渦巻く天音

カムラに比べて米がとにかく旨く、

山菜や漬物、なによりキノコがウマイ

なのにその味を楽しむ余裕も無く…

「気にすんなってw」

いや、帰った後で笑うだろ絶対!

顔がニヤケてんだよ!

結局土産に酒を渡され送り出された、

春香は残るそうだ

.....

「という訳で……」

「はっはっはあ！」

それは災難だったな影！天音！」

タタラ場前で報告するが、申し訳なさと

恥ずかしさで……

真っ赤で口ごもる

「あ、あのこれ渡されたので……」

徳利を渡すと

「うむ、コレを呑まされたな？」

「はい」

「潰れただろう」

「？」

「カイエン殿の常套手段でな？相手の本心や

裏を知るために強い酒を呑ませるのだw」

「知ってて行かせたんですか?!」

怒る天音

「すまんwまさかお前達がw…

同棲してるのに…なあwww」

笑いつばなしの里長

「はあー…」

疲れた、恥かきに行ったようなもんだ

………

「親父殿、俺の言った通りだろ？w」

「あんな裏表の無い男とはな、

逆に心配になるぞw」

酒を飲むカイエン

「ニシノの情報通りでしたな、外国船と

直接取り引きが始まったとは」

頷く権爺

「この手紙の通りならトガシに損はありません」

シキエンが今朝届いた文をヒラヒラさせる

カムラからの取り引きの条件が書いてある

「鉱石類を全部1割増しで買うとはな」

「外国には2割増しで売る…」

と言った所でしようかなあ…」

「こつちはセキエンのへたれを直して貰い、

春香殿まで来てくれた、

この上儲け話まで…」

何やら上手く行きすぎているな」

腕組みするカイエン

「へたれて…」

「いえ父上、あの影という戦力を引き抜か

なければ百竜夜行によるカムラの自滅は

遠退くかと」

「シキエン！

カムラの砦と戦力のお陰でトガシが

「今まであつたのかもしれないだぞ!!」
睨むセキエン

「まあまあ若様、シキエン様も抑えなされよ」

ニコリと笑う権爺

「春香殿を教官としてトガシのハンター

全体の強化の見込み、もちろん若様の

次期里長としての実力も付けて貰った、

この上儲け話…」

指を立てると

「一つの利益には一つのリスクが付きモノ

ですからなあ、

ここは欲張る所ではありません、なあ里長」

「その通り、取り引きについては落とし穴が

どこにあるか…見極めようではないか

…なあシキエン」

「…はい父上、相場とカムラの買値の変化を

見極めます」

「親父殿、俺は行って百竜夜行を実際に見て

言っただぜ? カムラの支配なんて

諦めた方が良い!」

しかめっ面のセキエン

「分かっている、何故か知らんがニシノも

手を引いたしな、流れに任せよう」

.....

「記憶の無い間に変な事言ったり…」

影と天音は顔を見合わせる

「何を言っている? お前達はカムラの不利に

なることなど何も知らんだろう?」

…そういえば

「それにお前達は腹黒くないからなw

カムラが隠し事をしてない様に見せたのだw

毎回だからこの手は当たり前だからな」

「じゃあ今回のコレは…」

「うむ、少なくとも失敗はしていないw」

むしろ大成功かもしれないw」

いや…その笑いはどつちを笑って…

報告を終えたが二人とも顔が暗い、階段を降りると

「あら、どうしたの？ダメだった？」

ヒノエが立ち上がる

この人に知られたら大喜びでイジってくる

「ね、姉さん、何でもないわ」

しどろもどろ

「お二人とも暗いですよ？何かありましたか？」

カゲロウも来る

この人に吞ませたら…すごい何か

聞けそう…こわいこわい

明日…いや今日中には里長からゴコクへ、

そしてミノトからヒノエへ伝わるだろう

「忘れない」

「俺もだ」

集会所に入ると

「おお、影、セキエンはどうしていたゲコ?」

「ゴコク様! 急ぎのクエストありませんか?!」

物凄い真剣な二人

「ふ、二人ともどうしたゲコ?」

何でも良いから無心に武器を振り回したい!

クタクタになって全てを忘れない!

.....

「はあ...はあ...」

「げほっ!...ふう...」

数時間後、息を切らす二人の前に、ズタボロになるまで斬られたアオアシラが転がる

恐らく過去最速、五分も掛かっていない

こんなストレス解消でモンスターに

向かつてはダメだ、ハンターはもつと命に

対する敬意が無ければいけない、

頭では分かっている…

これでは…単純に八つ当たりだ

「どんな顔して帰ったら…」

「帰りたくない…」

男女が二人きり、女性が帰りたくないなんて

言ったらそれはアレ、普通はアレなんだ

けども今はそれどころじゃない

とぼとぼと歩く

暗い顔でギルドに帰ると

「おおーお帰り（ニヤニヤ）」

ハネナガ達が迎える

「はっはっは、そうかそうか……」

乾いた笑いの神部、ラングロ仮面の下で
どんな顔をしてるのやら

「ぶっ！w……くつくつく！www!!」

涙目で笑いを堪えるフドウ

もう？広がった？今朝の話?!

「ボンボン」

肩を叩くウツシ教官、いつも通り口元は

見えないが、涙目で困った顔

いや何!?何なのその顔!

何か言ってくれ!

いっそ大笑いしてくれ!!

「天音はこっちおいでw」

アヤメに手招きされる

「影はこっちだw」

男女グループに別れアレコレと質問の嵐になる

.....

「天音、影君は何もしてこないの？」

「それはそれで問題じゃない？」

「私が影君貰っちゃうわよ？」

「人気あるんだからね？」

「まさか影君って『そっち』じゃ

ないわよねwww」

アヤメやヒナミをはじめとする女性達に

質問される

「影は普通です！」

普通だもん！ノーマルだもん！

「お前さ、逆に失礼だぞ？」

「隣にあんな美人が寝てるのにw」

「勿体ないと思わないのか？」

「…つつーかよ」

フドウが団子をカジリながら

「お前から同棲始めてから距離離れたる？」

「？」

「お互いに遠慮してるって言ってるんだ、

前はもつとジャレてたぜ？」

「そういえば…時雨の時の方が自然と

接していたような…」

「どうだったっけ？」

「!!!まさか！」

「お前！」

「まさか『そっち』か?!」

男性陣が後退る

待って、ちよつと待って、何?!

『そっち』って何?!

「皆さん何の話をしてるんでしょう?」

集会所に来た花梨、ハッキリ言つて

花梨には倫理的に：

「花梨ちゃん、ヨモギのお店に

行きましょうかw」

ミノトが笑いを堪えながら花梨を連れ出す

聞いていて頭を抱えるゴコク

(まさかなあ)

その後カムラに

『俺がそつち説』が流れ、更に一部女性陣から

影×風月　なんて良くね？

だったら風月×カゲロウが最高じゃね？

という流れが起きた

何の事は……知らんけど

.....

「ふーん、カムラねえ……」

ニシノの里

里長の屋敷の座敷、役職の老人達と慈海が並ぶ

その前に一人の女性ハンター

「どうじゃ? 行つてみんなか?」

慈海がニンマリ笑う

「風月じゃダメなの? アイツ顔だけは

イイじゃん? 女引つ掛けるくらい……」

レイア装備で日焼けした顔、

髪はポニテでスラリとした女性

「あやつは無理じゃろ」

「バカだからなあ」

困り顔の老人達

「まあ、風月じゃナンパ無理だよねー」

慈海の前で胡座で座る

ニシノの里に入った情報、

それはカムラとトガシ間の婚姻、

只の結婚ではない、男はトガシの跡取りでカムラから嫁を貰うという

婚姻とは古くから縁を結ぶ事になり、

トガシとカムラが縁を深めればカムラの

鉄の流通が陸路の方へ片寄るかも知れないそれはニシノが貧しくなる道、ただでさえ

外国船が直接カムラへ行つてしまい、

このままでは…

「だからってカムラで男引つ掛ける、って

何考えてんのよジイチャン？」

慈海を睨む

「我らニシノのためじゃ、出来れば

次期里長のウツシ、その辺りを…」

「ふざけないでよ！あの人アタシが子供の

頃から姿変わらないのよ?!何歳なのよ！」

「ならば…他の有力な者を…影は無理だが…」

「影って、」

若いのにカメラの指揮したっていう？」

「既に嫁もおるしなあ、しかも美人でなあ」

「ふーん、まあとりあえず行くだけ行くわ、」

報酬よろしく、宝石かお金で良いよ？」

「ガメついのお」

「ジイチャンに似たからねーw」

ブランド

「お早う」

「お早う」

布団に座りお互いに正座で挨拶する、

そしてようやく気付く、明らかに緊張が

解けて居なかった

同棲前はイジられてギャーギャー

言いながら起きていた、それに比べたら

他人行儀になっている

「……何か変だよな」

テレる

「……ん……おかしいよね？」

こっちもテレる

距離……離れてた

「これ変えた方が良いよな」

『そつち』説まで流れたしねw」

「じゃあ…」

………

「ちよつと…良い?」

家を出ると同時に影の腕を掴み…引き寄せる天音

真っ赤になる

「あ、ああ」

緊張する、正式に同棲前は自然に出来た

ハズの事が

浴衣の時なんて…なあ

こつちも赤い

そうだよ、『今日から全OK!』になつて

正直戸惑つてたんだよ

「じゃあこの際…」

二人で深呼吸して歩き出す

「あれ？お前ら雰囲気違うな」

ミハバに呼び止められた

「そお？」

影の腕にくっついた天音、

もうこの際、思い切りベタベタして影の

疑惑を晴らす事にした

「歩きにくいんだけどなw」

浴衣ならともかく装備着てては

「なら軽い装備造るか？今度は有料だぜ？」

「普通友達価格で安くしないかw」

「バカ言うな！寂しい一人者だぜw」

逆に何かくれよw」

三人で笑い合う

この空気、そうだよ、いつもこうだったんだよ

「あらあwうふふw」

ニコニコしているヒノエ

「何？姉さん？」

「んー、…なんでもwうふふw」

何か勘違いしてないか？

ギルドに入ると…

誰？

「あ、よろしくー」

入り口でいきなり声を掛けられた

健康的に日焼けした細身、背が高く

モデル体型、割りと美人かも

…胸が…

「おお影、天音、良いところ」

「アタシさ、ニシノから来たんだ、よろしくー」

ゴコクの声に被せて遠慮なく喋る

「あの？誰で」

「アタシ七海ー（ナナミ）」

また被せる、遠慮とか緊張とかが無い、

他の人にも挨拶して廻る

初めて来るだろう場所なのに遠慮も

緊張も感じられない

「ニシノの里長、慈海殿の孫の一人でな…

なんと言うか…見た通りゲコ」

「大雑把…みたいな感じが…」

「と言うかなあ」

手紙をヒラヒラさせる、

ニシノの慈海の手紙だそうだが、内容は

孫娘に勉強させるため、近い内にそちらへ

行かせるとの文章

「近い内に？」

天音は耳を疑う、本人がソコに居るが？

「この手紙を持って本人が来たゲコ」

疲れた顔のゴコク、

どうやらマイペースな女性らしい

「七海ではないか！」

「お、風月、久しぶりー」

手をヒラヒラさせる

「なぜお前がここに居るのだ？」

「何よ？ダメだったの？」

「長老がよく許したな？箱入りだろう？」

「何よ？文句あんのー？」

.....

「困ったヤツなのだ、

誰にでも偉そうに喋るのだ」

お前が言うな

「長老の直系だからあまり強く言えないのだ、セキエンのようにな」

お前は関係無くしゃべるのな

今日はイズチ狩り、里の周辺で増えている

メンバーは影、天音、風月、そして

「何でアタシが雑魚狩りー？」

七海がいる

理由はゴコクから

「影、一緒に行って様子を見るゲコ」

と言われてしまった

「ねーつままない、他にやることないのー？」

「あの、七海…さんの事…」

天音が言い掛けると、また途中で

「アンタ可愛いよねー、

ジジイ達の言った通りだー」

「えっ？」

突然天音の手を捕ると

「ニシノにファン多いよ？あんなら

夫婦なんだって？」

ニコニコよく笑う

「いや…夫婦って言うか…」

テレる影

「そうです、夫婦です！」

これ見よがしに腕を掴む天音

これ以上『そっち』だと思われてたまるか

「ふーん…」

その様子を不思議そうに見る

「大体なぜカムラに来たのだ？」

「ジイチャンが行けって言うからさ」

二人で並んで歩くと、二人とも背が

高くてお似合いだが

「男探しに来たんだー」

ニツと笑う

「男?!」

影と天音がハモると

「ニシノつてき、ろくな男居ないんだー、

コイツみたいに」

親指で指す

「お前の性格が災いしているのだ」

いや、お前が言うなよ

素早く最後の一頭を斬り伏せる、

と、手早く剥ぎ取る

間違いなく狩りの腕は良いようだ

片手剣がキチンと型通りに出来ている

「凄いですね、返り血がぜ」

天音に被せて

「アタシ返り血嫌いなんだー」

天音の双剣、風月の片手剣はリーチが短い

ためどうしても装備についてしまう

しかし

七海のレイアシリーズにはあまり付いていない
これだけでも解る、手練れだ

「…強いですね」

装備を見ながら影が言う

「えー？わかるうー？」

ニヤリと笑う、

今までの軽い笑いと違い含みがある

「風月、お前より七海さん強いだろ？」

「む？半年位でレイアを狩った強者

なのだがな、その時の歳は確か…」

「14、そのあとジイチャンが強いクエスト

行かせるなって言ってるさー、ドスフロギイ

とかアオアシラばかりで、ほとんど

引退状態だったんだー」

ニヘラと笑う

「なのにそれだけの腕を？」

天音には鈍っているようには見えなかった

数年もハンターから離れていて鈍らないのか？

「あれ？ Wなにー？ アタシ誉められてんの？ W」

………

「なるほど、男と…自由と言った所かのお？」

考えるゴコク

「慈海殿は春香とセキエンの婚姻に

危機感…といった所か…やはり密命を帯びて

来ているとしか…」

同じく里長

「でもそれなら『男』とハッキリ

言ってしまいますか？」

政略結婚狙うなら普通隠すよな？

タタラ場前で報告する二人

「あの自由な性格が演技かどうか

解ると良いが……」

「風月の反応で解るゲコ？」

「風月は特に何も」

「いつもと違うとか言わなかったよね？」

「うむう、風月は当てにならないゲコ」

「まあ報告待ちだな」

その頃カムラから下流、少し離れた山の中
「ピィィィー！」

「大人しくしろー！」

木の天辺から飛び一羽のフクズクを

捕まえるトウジとアヤメ、このフクズクは

狩りの最中に七海が飛ばした

実はトウジとアヤメが七海を監視していた

「ちよっ！暴れるな！」

「ハイハイ、ちよっと見せてねー」

脚から文を取る、封もせずに縛つてあるだけ

「まったくセコいマネしやがつて」

優しくフクズクを抱くが、しかめっ面のトウジ、

見え透いたスパイ行為だ

「どれどれ」

どうせギルドで調べた事が…

手紙を開くとそこには

『着いた、イイ男居ない』

二人ともヘナヘナと力が抜け樹から

滑り落ちそうになる

「ね、ねえ、炙り出しとかじゃないのコレ？」

「たて読みもできないしな…」

「なにか、なにかないのコレ？」

裏返したり色々やってみるが

「まさか本当に気まぐれで来たのか？」

首を傾げるトウジ

………

「へー、やっぱりアンタ凄いだー」

ギルドのテラス席、影と天音から

百竜夜行の話を聞く七海

「影は出世も早くてな、中堅と認められたぞ？」

「風月さー、悔しいとか無いワケ？」

「年下なのに凄いいじゃん影ってー」

「む？仲間が強くなるのがなぜ悔しいのだ？」

「アンタ見てると色々不安になるわー、

イケメンなのに勿体ない……」

首を振る

内心同意の二人

そこにギルドの男ハンター達が寄って来る

「なあ、七海さんの事教えてくれよ」

ハネナガ達が輪を作る

質問に答える七海

歳は19

慈海の数多くの孫の一人

直系の中でも女が少なかったために

可愛がられた

「だからってさー、恋愛禁止とか

ウザイじゃん？だから逃げて来たんだー」

確かに箱入りらしい

「どんな男がタイプ？」

「とりあえず団子喰いな」

「スタイル良いよなw」

「ありがとー！」

悪意や裏は無いようだが…

セクハラまがいな質問も笑いながら答えている

組織や集団に入り込む典型ではあるが…

「やあ、君は確か…えーと…」

「あーウツシさんだー、ジイちゃんの

家で見た事あるー」

「そうそう、確か七海ちゃんだね!」

「ねえねえ、ウツシさんて何歳なのー?」

「永遠の17歳だよ!」

キメ顔

「うけるーw!!」

手を叩いて笑う

もはやヤリ過ぎてだれもリアクション

しないウツシの答えに反応する

そんな人最近見た事無かったから新鮮に見える

ウツシも嬉しそうだ

「まーウツシさんは無いかなー」

「何の事だい?」

「付き合う男としてw」

「僕にはヒノエちゃんとミノトちゃんが

居るからね！」

「ミノトちゃんて…あの人？」

ミノトを見るとカウンターへ歩いて行く

「何でしょうか？」

無表情で首を傾げるミノト

「んー、噂の双子の人だよね？」

ウツシさんと付き合ってるの？」

「ナンノコトデシヨウカ？」

無表情が更に能面になった気がする

爆笑するギルド！

「ふーん、ウツシさんの片思いじゃん

カワイソーwwww」

ケラケラ笑う

「なあ！男探しに来たんだろ？」

俺とかはどうよ?!」

ハネナガ達男性陣がワイワイ聞くが

「うーん…やっぱり男は付加価値がねー…」

要するに…ブランド?」

首を傾げる

「ブランド?」

同じように傾げる一同

「顔はイマイチだし背もアタシより低いけどさ」

振り返ると

「出世早いし強いし、」

指揮まで出来るんですよ?」

ツカツカと影の前へ来て止まる

「え?」

固まる影

「鈍いなー、」

合格ラインはアンタだって言ってるの」

指を指す

「はあああつ?!」

ハネナガ達

「ちよつと！どいう事よ！」

天音が立ち塞がる

「そのまんまの意味だけど？」

見せ付けるように胸を張る、

確かに天音より大きいが…

大きいが…

「私達は正式に！」

「実質夫婦なんでしょー？知ってるよ？」

「だったら！」

「だって気に入ったんだもーん！」

またメンドクサイ事になった

耳

「ちよつと！離れなさいよ！」

「イイじゃーん！」

「……」

朝、家の前で待っていた七海、

いきなり腕を組んで来る

すると、負けじと天音が反対側へ

両手に花ではあるが……

視線が刺さる……

つらい……

俺が『そつち』説は消えたが……

この視線は耐え難い、ミハバは白い目で

見てくるし、

カゲロウさんとヒノエ様さえ無言

…つらい

「やあやあ！影さんモテるねえ！」

ヨモギは冷やかすが

「ずるい！花梨も腕組みみたいです！」

やめて！これ以上敵作りたくない！

「アレえ？チビツ子、

アンタもコイツ好きなのー？」

「私は…私はず！影様のっ！！」

真っ赤になる

「え？それともアンタ、

コツチの趣味もあんのー？」

俺の顔をまじまじと見る

「ナンノコトデシヨウカ？」

やばい、言葉一つ間違えただけで

『そっち』や『あっち』になりそうだ

あれだ、こんな時は無だ、無になるんだ

.....

「何でアタシはダメなのよ？」

「男を探しに来たのではないのか？」

ゴコクと話す七海

「アタシはアイツ（影）が良いのー！」

「じゃから影には天音がな……」

「その何が問題なのよ！」

何だか話が噛み合わない

「……もしかしてじゃが……妻が複数居て

当たり前とか思つとらんゲコ？」

「そうじゃないわよ？欲しいモノは奪い取ってナンボでしょー？」

「それほど影が気に入ったか…」

「あれで顔が良くて背が高かったら

完璧だけどねーw」

「略奪するつもりか…」

「自由すぎるのな…」

「やっぱり他の里の育ちだ、価値観が解らねえ」

ヒソヒソ話す若手達

「何で影ばっかり…」

苦い顔のハネナガ

「僕も指揮が出来ればな…」

神部も居る

「泥棒猫…」

天音

「……………（色即是空）」

無になる…

俺は空気だ…

「花梨ちゃんだけでも腹立つつてのに…」

ムカムカしている天音の眉間にシワが…

花梨は命の恩人である影と天音の言う

ことは基本的に聞くが、影に関する事だけ

がコントロールできないタイプ

そして七海は自由過ぎて誰も抑えられそうにない

「天音、影が裏切ったら俺の所においでw」

「いや俺の所に…」

そんな言葉は意に介さず

「泥棒猫になんて絶対に盗られないんだから」

「ガシツ!!」

影の腕を掴むとクエストへ

「泥棒猫…か…」

神部が考え込む

.....

「あのさあ……」

ジト目

「待て、言いたい事は解る」

水没林のキャンプ

明らかにムカついている天音を宥める

「何でハッキリ言えないのよ？」

「い、いやお前と夫婦だって知ってれば

普通諦めるだろ？」

これ以上の説得があるか？

「天音にも俺が居るから誰も手を

出さないわけだろ？」

「んー（濁点）！むかつくー！」

力一杯双剣を研ぐ

いや、ケガしそう……

「影はモテるんだからね！気を付けてよね！」

いや、どうしろと？

男としては…ね？

アレですよ？

ある意味理想だったりしますよ？

こんなハーレムな流れは……

ねえ…

その後ナルガクルガを狩ってみるが

「ホラー！そこで蹴って！上から突き刺す！」

なぜか兜割を教えられる

「相手良く見て！」

「タイミング遅い！」

「弱点狙わないでどうするのよ！」

あれ？見透かされてる？

凄いやましいんだけど？

「顔がユルんでる！」

嘘だろ？女ってドコ見てんだ？

「今笑ったでしょ！」

鬼嫁w…

………

「やっと帰って来たー」

「影様！」

ギルドに戻った途端に二人に腕を掴まれる

「ちよっとチビツ子ー、邪魔しないで」

見下ろす

「貴女こそ！影様は花梨と天音様のモノです！」

反対側から見上げる

「二人とも離れなさいよ!!」

「？、チビツ子、この娘（天音）と自分のモノ？」

「はい、花梨は二番目で良いのです」

「良くないわよ！」

影を中心に三人が…

「……チビツ子、意味解ってる？」

解るハズもない

ギヤイギヤイ言う三人から逃れると

「影！」

神部達に呼び止められ取り囲まれる

「なんですか？」

「これを見ろ」

神部が変なモノを持っている

黒い三角の…何だコレ？

「?、布??」

手渡されると竹の細い棒が不自然に丸まり、

三角の黒い布が二枚付いている

「何ですコレ?」

神部達は腕組みすると

「猫耳だ!」

「……………は?」

今何て?

「だから猫耳だ」

「……………えーと…」

なに言ってるんだ?

確かに猫族の耳を模しているようだが…

「花梨ちゃんに着けてくれ」

みんな真剣な顔

「え?自分で頼んだ」

「俺達が頼んだら変態だろう?」

食いぎみで詰め寄るラングロ仮面

じゃあ俺は何なんだ？ w

「頼む影！」

「この通りだ！」

「団子奢る！」

「マカライトやるから！」

十人ほどに頭を下げられる

ソコまでするか？

するほどのことか？

「花梨」

影が呼ぶと素直に来る

「何ですか？」

普段は大人、特に男には距離を取るが

影にだけは近付く

「ちよつと動かないでくれ」

「はい」

これまた素直に聞く花梨

「装備取らなくても着きそうだな…」

カチューシャ状の猫耳を何とかしてみる

『うらやましい』

花梨派にとつてこの光景は…

花梨は人に触れられる距離まで絶対に

近付かないが、影とウツシ達には気を

許している

影が頭を触り捲っているのに

警戒もせずに目を瞑る

「コレでいいのかな…?」

やっべー！ 似合う！

「何ですかコレ？」

猫耳を触る花梨

無言で何度も頷く神部達

「影、これもだ」

黒いモフモフな尻尾まで

「花梨、着けてみな？」

「はい」

素直に腰の後ろに着ける、

ワイヤーが入っているため床に付かず

絶妙に曲がり揺れる

「尻尾ですねこれ？」

尻尾を見ようとクルクル廻る花梨

その姿、その可愛らしさは…

「おお……」

「完璧だ……」

「神々しい……」

「尊い……」

「後光が見える……」

「カムラの宝だ……」

「俺の理想を形にした様だ……」

感動の声を漏らす花梨派

まるで最初から体の一部であったかの

ような自然さに涙を滲ませる良い大人
大丈夫かこの人達？

いやね、俺も自分の中で何かに
目覚めそうだけど

知らん性癖が芽生えそうだけど

「ちよつと影」

天音に引つ張られる

「なにコノ世界、ヤバくないのー？」

七海にも

確かに

現代で言えば13才（体格10才）の美少女

猫耳コスプレを取り囲むオッサン達である、

若い女性には恐怖であろう

なぜ男は集まるとバカな事を考えるのだろう

新たな世界が広がりつつある

「どうであつた神部？」

ギルドに入って来たハモン

「完璧です！流石ですハモンさん！

方針が決まりました！」

つまり？

「ハモンさんが作ったんですか？」

「新しいモノは取り入れる、

そうせねば退化するからな」

いやハモンさんの考え方は良いと思うよ？

けどね、方向性がね？

ハモンさんは止める立場じゃないの？

なぜかその後神部達は、

誰もやりたがらないオロミドロの

クエストを受けて出て行った

ギルドとしては助かる結果になったらしい

「オロミドロって長いヤツだよな？」

夜行で見てる

「私はまだ行かせてもらえないから

強いハズだよ？」

「ニシノでも嫌われてたかもー」

「上手くやつてくれたゲゴウ」

小声でニヤケるゴゴク

「渡りに船だったなw」

同じくハモン、二人で笑い合う

「停滞していたクエストが一気に

処理できそうです」

クエストの書類を持つミノト

どうやらオロミドロのクエストは人氣が

無いために、どうやってやらせるか考えていた

そんな時、花梨に猫耳を作ってくれと

神部から言われ、『しめた!!』となった

ゴゴクとハモン、

女性用のオロミドロ一式を猫っぽい

デザインにして神部に見せたそうだ

「お二人共に流石ですね」

ニコツと笑うミノト

「こうでなければな…」

「ギルドの運営は出来んゲコ」

男が自分の趣味に走る時の力、人から

見れば実に下らない事に使うエネルギーは、

男である二人は良く知っている

.....

「ヤツカダキですか…」

「私は構わないよ？ やつてみたいし」

「どうした影？ 浮かない顔ゲコ」

二人でならチャレンジしても良いと言われた

「俺…ヤツカダキだけはソロでやりたいんです」

「なぜゲコ？」

「一人じゃ私も無理だよ？多分」

「何て言うか、ヤツカダキが…えーと…」

ヤツカダキにソロで勝てたら…

兄貴を越える？…的なの？」

考えながら喋るが、

気持ちを上手く言葉に出来ない

「うむ、お前の中で目標になっているゲコ」

目標…なのか？

「…うん、影のやりたい事は

邪魔したくないよ？じゃあ止めよう」

ゴコクに向き直ると

「二人で許可貰えるクエストはどれですか？」

「そうじゃなあ…」

ラージャン、ティガレックス、

ディアブロス以外なら許可が出た

「やってみたいクエストあるんだ」

「？」

「ジンオウガやってみないか？」

見習う人

「お手っ!!」

「おう!!」

ジンオウガの鋭い爪がすぐ横で空を切り
地面を叩く

「ドスン!!、ドスン!!」

ナルガクルガは素早く鋭い攻撃、

こっちは重さを感じる

「回数覚えて!」

「怒ると三回位だな!」

体を横に向けコチラを見るジンオウガ

「何か来るよ!」

「ああ!」

尻尾を振り回し軽快に上から振り下ろす

「ガシイッ！」

「痛えっ！つてか重おっ！」

「大丈夫!？」

「ああ！大した事無い！」

回避失敗した！

天音はもう覚えたのかよ！

真っ直ぐ影に突っ込むジンオウガ、

影が横回避すると素通りして振り返る、

動きが止まると

「ウオオオーーン!!」

周囲から帯電した虫達が集まる、と、

「これだっ！」

素早く走り込むと乱舞する天音

「グガアウ！」

のけ反るオウガ、そして散らばる虫達

「コイツ隙デカイな！」

「聞いてた通りね！」

.....

「ジンオウガあ？」

フドウ達に話を聞くと

「帯電させなきゃ大したヤツじゃあ

ないぜ？」

どうやらナルガクルガの溜めのように

動きが止まるらしい

「怖いのは帯電状態の攻撃食らうとな、

気絶しやすくてよw」

それ笑い事か？

「まあナルガクルガに勝てるんだ、

何とかなんだろ、

ああ、シビレ罨は使うなよ？」

.....

隣のエリアで回復と砥石を使う

「天音が戦った事無かったのは意外だった」

息を整える

「誰でもこんなこと割とあるのよ？」

影もビシユテング無いでしょ？」

夜行で見てるから戦った気になってるが、

言われてみれば

「帯電してないと光らないみたいね？」

双剣を研ぐ

「…派手な状態も見たいなよな？」

フドウさん言ってたし

…アイツも…

「…影、調子に乗ってるよ？」

真剣な目

「え？そ、そうか？」

身に覚えがないが？

「前はさ、細かい攻撃も全部避けてたよ？

今は適当になつてる、レウス装備に

頼つてるよ？」

「……そうだったのか」

ウツシや他の先輩達が言う『下手なヤツ』

になるところだったかも知れない、武器と

防具の性能に頼つて適当になる所だったかも

「…そうだよな、全部避けるのが正解だよな」

「うん！」

影つて、こういう所は素直なんだよね

「じゃ慎重にね？」

ジンオウガを追いかけ落とし穴と閃光も使い

慎重に攻める

「ダメだ！頭に兜割り当たらねえ！」

目を廻しても暴れる

「先ずは当てるだけでも良いよ！」

頭から尻尾まで回転しながら斬る天音、

袖が翻り舞う様に攻撃する

………

「落とし穴全部に閃光まで使ったか……」

金掛かるなあ

「一回勝てたら次は楽になるからw」

天音に従い慎重に戦い勝ったが、

懐は負けた気がする

ヨモギの団子屋でダベっている

「強い人だって最初は

大変な思いしてるんだよ？

最初はみんなそうじゃん、

アオアシラに罠使ったり」

「少し気を引き締めるか」

レウス装備が嬉しくて緩んでたかもしれない

そうだよな、俺の理想は神部さんの臆病な所だ

家庭を持つなら生き残る、あの人を見習わないと

「ねえ…何で突然ジンオウガになったの？」

「んん、あー、思い出してな」

「何を？」

「家族でな」

四人で晩飯の時だ、兄貴が言ってたんだ

「影！夜のジンオウガはキレイなんだぜ?!」

お椀を持ち、箸でこちらを指す照

「へー！どんなの?!」

「吠えるとな、虫が集まって来て

ギラギラ光るんだ！」

ナルガ一式で両手を広げる

「虫い???」

「お前もハンターになったら見られるぞ？」

「まあ俺位強くなればな？」

得意顔

「俺もハンターになって直ぐに追い付いてやる！」

「おう！やってみなw」

昔話を嬉しそうに話す影

「ふーん、じゃあ今度は夜に行ってみる？」

「でも帯電状態はマズイんだろ？」

「あ、そうだよね」

影の中では『私に追い付く』から

『お兄さんを越える』になってきたような

色々変化するんだなあ、男って

……………あれ？…

それにしても遅いな、

いつもなら元気な声が飛んできて…

ヨモギは後ろを向いて後片付けをしている

「ねえ、ヨモギ」

天音が呼ぶとこちらへ

「…いらつしやいませ」

天音にお茶を出す…顔が暗い

え？俺のは？

戸惑う影

「あ、あのヨモギ？俺には？」

振り返ると

「ツタアアアーン!!!」

「ビシヤツ!!」

湯呑みが凄い勢いで置かれ影にお茶が…

「あの…飛び散つ…て…」

ビクビクする二人

キッ！と影を見る

「いや…あの…いいです（汗）…」

ヨモギって怒ると恐いんだよ、

いっつも笑顔だから…

何で俺に怒ってんの？

「ヨモギ、どうしたの？」

「天音さん！聞いて下さいよー！」

例の花梨の猫モード、花梨自身は

『影が着けてくれた』ために常に

あの格好をしているそうだ

問題は猫花梨（仮）をイオリが見た瞬間、

『ズキウウウン!!』となり

オカシくなってしまったらしい

元々動物好きでガルクの世話をするし、

猫族と仲の良かったイオリにとって、

あの猫花梨はもう…

それはもう口ではとても言い表せない、

思春期の少年には最終兵器のソレだったらしい

「話し掛けてもボンヤリしてるし、ボーツ

としてニヤニヤしてる事あるんですよ！」

天音に力説するヨモギ

……………いやヨモギ？それは嫉妬でわ？

「あの格好させたの影さんだそうじゃ

ないですかっ!!

自分の趣味で女の子にあんな格好

させるの変態だよ!!」

その声に行商人や里の人々が振り返る

「いや！誤解！聞いてくれヨモギ！」

「ヨモギ！落ち着いて！」

みんな見てるから!!

凄い目で見てるから!!

……………

「…じゃあ影さんの趣味じゃないの？」

「そう、俺は神部さんに頼まれただけなんだよw」

趣味じゃない、趣味じゃないよ……………

多分www

「わざわざハモンさんに頼んで作って

貰ったら嬉しいのよw」

「神部さん…最低…」

珍しくヨモギが顔をしかめる

良かった、解って貰えた

二人で集会所に入ると外から

「神部さん最低っ!!」

「いや！何?!僕何かした?!」

通りに響く声

神部さん…自業自得です

貴方のその趣味だけは見習いません

…多分

「あー、なによ？アタシ置いて

二人で行つてさー」

文句を言いながら自然に腕を組んでくる七海
負けじと腕を組む天音

(まったく面倒ゲコ)

「七海よ、リオレイアの復習を

したらどうゲコ？」

「えー、今更あー？」

「ブランクがあるじゃろ？ハネナガと

組んで行くゲコ」

「影がイイのー」

「！」

影の頭に横から自分の頭を擦り付ける

そつ！そんな事天音にもされたこと無いっ！

髪が良い匂いっ！

影が固まると反対側で天音の髪が逆立つ

「影には頼みたい事があるゲコw」

これ見てると楽しいゲコ…イカンイカン

「えーそうなのー？ちえー」

口を尖らす七海

二階の座敷

「なんですか？」

「頼みって？」

「ああでも言わんと離れないゲコw」

姿勢を直すゴコク、思わず二人も座り直す

「して、どうゲコ？七海は？」

「…変な所は」

「ありますね」

二人で話す、明らかに強すぎる、帰り血を

避けながら攻撃なんて並みのハンターではない

「では実際はリオレイア程度ではないのお」

「14の時には狩ったそうです」

「…やはり隠密…かの？」

「それに…」

不穏な表情の天音

「どうしたゲコ？」

「気のせいかもしれませんが、無理に

明るく振る舞っているように見えます」

「フム…」

………

昨日、ニシノの里

「やはり怪しまれとるな」

「まあ当然の警戒じゃろ？」

「フム……」

老人達は手紙を見るが、実は内容など
どうでも良い

七海は手紙と一緒に、自分の髪を一本
結んでいたので、

それが無くなっている

つまり一度手紙は開かれた

「もしも婚姻とならずとも」

「花梨の件の負い目……消せると良いが」

「こんな行き当たりばったりが通用するか？」

「何もせんよりはな、

少しでも確率を上げんとなあ」

考える慈海

……

「ふーん……」

ハネナガ達とレイア狩りに来たが

「七海は久しぶりにやるんだろ？少し見てな」

と言われ距離を取っている

ハネナガ達の気合いも女性が

見ているため当然高い

（なるほどねえ、カムラのハンターは

レベル高いわ、風月の報告通り）

ハネナガ達にとってリオレイアなど

ソロでも余裕

（けど強いハンターと、里の有力なヤツ

ってのは別なんだよねえ…）

里長とゴコク

有力者だけどジジイ

ヤクシやゲンジ

ハンターとしては化け物だけど、

有力者かと問われたら…

ウツシ

有力者だけど論外w

「やっぱり影は無しか」

小さく呟くと

「アタシも参加するー!!」

レイアに斬りかかる

カメラの価値観

「どのモンスターもそうだがよ、何度も

戦って経験積むんだ、その結果次の

モンスターに通用する技術が出来るんだ」

フドウが花梨に説明している、花梨は

アオアシラに挑戦させて貰えないらしい

「ではもつとオサイズチを倒すと？」

見上げる猫花梨

「そうだぜ？オサイズチに余裕あったか？」

首を振る花梨

「罨と閃光と毒蛙と

…回復薬グレートもいっぱい」

環境まで使っている

「だろう？体一つで勝てるまでやってみな？」

そしたらアオアシラも苦戦しねえぜw」
笑いながら団子を齧る

「おう？どっかで聞いた話だなあコラア？」

ヤクシが聞いていた

「つてヤクシさんが言ってたぞ!! (汗)」

慌てるフドウ

ふーん、なんかあのフドウって人、

皆にアドバイスしてるし集会所の中では

重要な人っぽいよね…

笑いながら話すフドウを隅の方で見る七海

無精髭で小太り、身長は影位のオツサン…

なるほどねえ、有力者ってイコール

オツサンだよ、若いやつは無理じゃん

そこ考えたら影って有力者？

…だから早々に結婚させて里に

定着させようとした…か

『有力者を狙え』つて『ジジイを狙え』

になるじゃん、冗談じゃないわ

適当に誤魔化して報酬だけ……

慈海のニンマリ笑う顔を思い出す

ダメだわ、くれる訳無い

心の中で首を振る

本気で好きな人みつけようかなあ……

アタシ恋って分からないんだよねえ

「おう？どうだったよ？久しぶりの

レイアだったんだろ？」

フドウが来た

「えっ？あ、あー、皆が凄く強くて

楽だったわよ？」

「ソロで出来そうか？」

「そうね……もうちよつと肩慣らしかなーw」

わざとらしく腕を回す

「困った事があつたら言えよ？」

笑うと離れて行く

このヌルさと人の良さ、カムラはパツと見、
簡単にどうにでも出来そうだけど…

「ふう…」

「おうゲンジ、浮かねえ顔だな」

「歳だな…ラージヤンに5分掛かつちまった」

「しょうがねえさ、もう50手前だぜ！」

笑うヤクシ

これって桁違いに強いからこそその余裕じゃん
影なんか他の里なら第一線になれそうなのに、

カムラだから中堅なだけじゃん

だから敵対するより政略結婚かあ

…どうしよっかなー

結婚に憧れる連中いたなー、

どこに憧れるんだ？

七海は外に出ると船着き場へ

ニシノからの舟へ近付く

「あー、ニシノの人？アタシもニシノ

なんだけどさ、海の魚ってあるのー？」

「すいませんねえ！今日は干物と燻製だ！」

威勢の良い船頭

「えー？やっぱりカムラって生の海産物は

来ないのかー」

干物を数枚買う、その時支払う金に小さく

畳んだ紙を一緒に

「これからも宜しく頼むよお嬢さん！」

「あれー、お嬢様なんて照れるー」

「そこまで言ってねえよw」

見た目は和やか

(さて、どうかな？)

干物に挟んである紙を見ると小さく

『見』と書かれている

(やっぱり監視されてるか)

クシヤツと丸める

どうしよ、初めは面白そうだと思っただけど…

ジジイばつかでダメじゃん

ギルドに戻る七海

………

「七海からの文です」

船頭、実はニシノの隠密

「うむ」

受け取る慈海

そこには有力な者の名前と年齢、

そして今は影に気があるフリをしているとある

「うむ、よく調べたな」

満足そうな慈海

「そうですか？名前だけなら他の里にも

知れ渡っているものばかりでは？

それに良かったのですか？」

「何がじゃ？」

「その…七海にも自分の意志とか…」

「アレは損得勘定でしか男を見とらん、

だから情に流されんのだ、普通の娘なら

恋の一つもする歳じゃがなあ」

「そう教育して来ましたから…ねえ」

苦い顔

「まあ有力な者なら誰でも良い、ニシノに

連れて来ればカムラの弱体化、そして

トガシに負けない縁となる」

「例の若手最強の女が…」

「トガシへ…よりによつて次期里長の嫁に

なった様だしな、トガシは上手くやりおつた」

「七海自身の幸せも考えてやりたいですが…」

「ニシノのためじゃ、仕方あるまい」

………

「ねえねえ、あのフドウって人、

どんな人ー？」

影にしがみつく

「フドウさん？色々アドバイスしてくれる

先輩ですよ？」

胸が…いや、防具の胸の所が…

平常心平常心…

「…最強レベルだけど威張らないし…」

反対側でジト目の天音

やっぱり胸が大きい方が良いのかオイ

「威張らないー？」

そんな強くて？

「それにヤクシさんが居ると

ビクビクしてますw」

「怖がるもんね、昔指導されたみたいだし」

「ふーん…あれでカツコ良かったら

最高かもー」

だが影と天音は知っている、フドウの頭が

アレな事を

フドウは人前で兜を取らないが、

怪我をした時タタラ場で見ている

ちよつと…後退…というか、寂しい感じの…ねえ

言わない方が良さだろう、

密かにアイコンタクトする二人、そして照れる

「!、なにー?何かあった?」

「い、いや、何にも」

「何も無いよ?」

「フドウさんが気になります?」

俺にくつついてるのに

「何かさー気遣いが出る…」

大人って言うか、余裕？かなー？」

「フドウさんと狩りに行って見たらどう？w」

そして影から離れる、

フドウさんとくつついちゃえ！

「うーん、どうしよつかなー」

考える七海、将来有望な人物か…？

ジジイじゃなくて…

まあ30ならギリ候補になるか？

これならニシノの為になるか？

これなら任務に背かないか？

………

「七海はどこ行ったゲコ？」

「フドウさんと狩りにいきましたよ？」

「♪」

腕にしがみつく天音、邪魔がいなくなつた

(まさか見抜いたか？フドウこそワシの)

立場を継ぐ人材であることを)

「ゴコク様？」

「なんでもないゲコ」

……

「何で俺と組んだ？」

「えー、影に勧められたしきー、

アンタつて誰にでも気遣い出来るじゃーん」

ニヤケる

大社跡の森を歩く

(コイツ言葉遣いできねえな、風月と同じだ)

「気遣い？してるか？」

「だつてさー、アンタ位のレベルなら

素人と話したりー、教えたりしないよ？」

花梨に説明していた場面を話す、

確かに素人の子供に最強レベルが教えるのは
変に見えるかもしれない

「あー、そうだなあ、

そこがカムラの良さかもな」

「良さ？」

「俺は若い時、他の里のギルドも見てるがよ」

強いヤツは確かに強い、それは良いがよ、

教えたら相対的に自分が弱くなる、

まあ追い越されると思う訳だな

だから煙に巻いたり嘘教えるヤツまでいる

「あー、ニシノにもいるー、そんなヤツ」

小石を蹴る

「俺には、いや、カムラにはそれが

無いんだなあ」

「だからソレが解んないのー」

「…そもそもだ、俺は自分が強いと

思ってねえんだぜ？」

笑う

「えー何で？ ラージャンのソロとか

出来るって聞いたよー？」

驚く、これは本心から

「他の里なら最強って言われるかもなw」

大剣を抜くと

「けどカムラだとな…『だから何だ？』の

レベルだぜ？」

フドウの雰囲気が変わる、

そこに居るのは気の良いオッサンではなく、

一流のハンターになる

（恐っ！何?!）

突風！

空から降りてくるリオレイアに

斬りかかるフドウ！

（嘘っ！気付かなかった！）

「あ！アタシどうすれば良いの?!」

(どうやって接近に気付いた?!)

「好きに動け！こつちで合わせる！」

.....

「ぜい...ぜい...」

息を切らす七海

「な、何て早さ...」

実は七海は裏で訓練を積んでいる、

表向きは箱入りだが、里の隠密の教育を

長い間受けて来た、

本当はリオレイア程度ならソロでも余裕、

なのにフードウは別次元

「アタシ居なかつたらもつと早いよね...」

「あ？早さなんざ自慢にもならねえよ？」

余裕で携帯食料を齧るフドウ、

気の良いオツサンに戻っている

「理解できたか？」

「？」

「さっきの質問だ」

倒れているレイアに腰掛ける

「…なんか、アタシの知ってる強さと違う…」

七海は前に立つ

「そうだ、他の里で『強さ』って言えば

ハンターとしての強さだろ？」

無精髭をザリザリ擦ると

「カムラはよ、夜行があるからな、

モンスター一頭ていどじゃあな」

「まさか…二頭同時とか…」

「甘えよ、今の狩りで解らねえか？」

「たしかに…」

七海の攻撃や回避にフドウはブツかかっていない、

それどころか七海に合わせながら溜め斬りを出していた、

更に言えばフドウはノーダメージ

「夜行になるとよ、狭い場所で複数頭が

当然だ、その上仲間との連携、援護との連携、

陣形まである、どれ程頭使うか解るか？」

「複数頭……」

想像も出来ない

「里長とかベテランはよ、ソレ全部考えて

戦う訳だ、俺なんざまだまだよw」

そういう事か

強さの基準が別次元なんだ

少しうつつ向く七海、自分の認識の甘さが解る

「じゃあ影なんて……なんていうか……」

理解出来た、ジジイ達が引き抜こうとした訳だ、

影はハンターとしての強さとは

別の方の『強さ』があるんだ

「間違いなく天才の類いだ、

まあ努力の上のな」

カムラでは子供の時から夜行で働く、

だけど影だけは各ハンターの動き、

モンスターの動き、位置取り、

援護のタイミング、

全部流れを自然に読んで対応出来る

「だから影はカムラに必要なヤツなんだw」

立ち上がると向かい合い

「だからよ…どういうつもりで影に

近付いたか知らねえが…」

「半端な覚悟なら帰れや嬢ちゃん…」

眼を真っ直ぐに睨まれる、と

ビリビリと空気が震える！

「影はな、カムラの大事な戦力だ、

引き抜こうってんならこの場で……」
大剣をゆつくり構える

リオレイアと戦った時とは違う殺気の塊！

甘かった！

ここは敵地

認識不足

覚悟なんて無い

全部見透かされてる！

面白半分で来て良い場所じゃない

気の良いオッサン？冗談じゃない！

こんなのがゴロゴロ居るのかカムラは！

気圧されて尻餅をつく七海

ガタガタ震える

「あ、アタシ、ああ、あ」

言葉さえ出て来ない自分に驚く

恐怖

アタシが来て良い場所じゃなかった！

「どうしたあ？何か言うことねえのか？」

睨んだまま見下ろし、一歩前へ

「ひっ!!」

怖い怖いコワイっ！

その辺のモンスターより恐いつ！

座ったままズリズリ後退り

どうしよう！

どうしよう！

どうしよう！

自然と涙が溢れてくる

勝手に体が泣き出す

本能で理解する

化け物だ

恐いよ！

誰か！

助けて！

「帰るぞで？」

空気が元に戻り…納刀

「へう、えっ？」

何？…え？…何？

涙を溢しながら

「？、帰るぞって言ったんだ、立て！」

雛鳥

「どうであつたフドウ？」

「まあ、軽く脅しておいたぜ？」

小声で話すゴコクとフドウ

「狙いは影ゲコ？」

「いや、よく解らねえから軽く睨んだけどよ、

やっぱり小娘だなあw」

あの程度でガクブルとはな

しかしフドウには自覚が無いだけ、

本気になつたら恐いのだ、

ヤクシが居るため自分は優しいと思つている

ギルドに帰つて来たが暗い七海

「あの様子なら変な気は起こさないゲコw

もしかしたらお前を狙った、かもしれんと
ヒヤヒヤしたゲコウ

「?、何で俺なんだ?」

フドウは、あくまでも影とカムラを守った
つもり、ゴコクに期待されていることは
知らない

「どうしたよ? 暗いな?」

ハネナガ達が七海を中心に輪を作る

「え? あー、アタシ弱いなあって…」

笑顔を作るが、前より不自然

「?、フドウさんと狩りに行ったんだろ?」

「当たり前じゃね?」

「最強レベルだぜ?」

「ベテランと変わらないよな?」

これだ、アタシの認識が甘かった、

若手が言う『強さ』とその先にある

『強さ』が別次元だった

「何か七海さん変だな」

「ちよつと影イ？」

七海を気にする影を怒る天音

「もしかしたらフドウさんと何かあった

んじゃないか？」

「影の気にする事じゃないじゃない？」

でも確かに変だな、あれだけ邪魔してきた

のに……って暗いな

フドウさんとくつついてくれたら良かったのに

「で？今日もジンオウガやる？」

「ああ、でも夜まで待たないか？」

「………光ってるの見たいんだ……」

「だ、ダメか？」

「………良いけど……そこからは私の指示聞く？」

真剣な顔

「ああ、もちろん」

いや、普段からそうじゃね？

「じゃ晩御飯何作る？食べてから行こ？」

二人は必要な道具を買って、ウツシにも

コツを聞く

「うん？ジンオウガをわざわざ帯電

させたいのかい？」

「だったら三回目辺りのチャージの時に

落とし穴かな」

「光ってるのを見たい？」

「ああ、照君の話で……」

丁寧に教えてくれる、けど解った、

ウツシ教官がモテない理由、

話がしつこいんだ、いや、生徒の事を考えて

るのは解るんだけどね

「チャージ？って言ってたな」

団子を食べながらブラブラする

「ジンオウガって自分で電気起こして

ないんだってさ」

空いてる手を繋ぐ、自然に出来る様に

なつたが、まだ少しテレる

「そうなのか？」

なんと発電器官が無いらしい

「だから雷光虫を呼んで帯電して、んーと、

強くなるっぼいよ？」

「凄いな、虫で……」

周りにあるもの全部使う、ハンターと

変わらないな

「ん？そうか、俺達が戦った状態って弱いのか」

「そうだよ？強くなるの黙って見過ごす？w」

なんだか昼にこうしているのも久しぶり

…強くなっていくなあ

…前は同じ様に歩いてたけど

…気付いてないなあ

…影が三步で歩くところを私は四歩に
なってること

「ん？少し歩くの早かったか？」

「！、！！！」

気付いた！

しっかりと腕を組む

「？、どうした？」

「何でもー！」

嬉しくてしょうがない

「あれ？」

「どうした天音？」

いつもの場所を見ると七海がヒノエと話している、そこへ行くと

「貴女が政略結婚目当てで来たのは皆知つてる事よ？」

座ったままニコニコ話すヒノエ

「はい……」

アタシのやつてた事なんて、所詮

『ごっこ遊び』だった……

「どうしたんですか？」

「姉さん、何かあった？」

「ほら、正直に言いなさい」

「あ、あの、ごめんなさい」

天音に頭を下げる七海

「？」

何が？

「フドウさんに言われたみたいなのよねw」

カムラに偵察に来る人間は多い、しかし最低限の警戒だけで追い出す事はしない

(セキエンや風月が良い例)

しかし今回ばかりは一応夫婦である影に

近付いた、花梨は既にカムラの住人である

ため自由だが、七海はそうは行かない、

だからフドウは怒った：

そしてフドウから言われたのだ

「ヒノエ様、すまねえけど七海のフォロー

してやってくれ、あんな小娘に

…つい怒っちゃまった」

「あらあ、じゃあウサ団子で

手を打ちましょうw」

というわけだ

「本当は影君に気があるフリしてた

「だけなのよね? w」

「そうなのおっ?!」

驚く天音

「えええつつ?!」

つとりアクションしたい影だが、

天音が怒りそうに抑える

あぶないあぶない

「相変わらず鈍い娘ねえ、本気で奪うなら、

影君に防具なしで腕組んでるわよ? w」

清々しい顔でエグい事を…

このモデル体型で…

幼さなど微塵も無く…

更に立派な二つの柔らかい例のアレが直に…

ゴクリ…

イカンイカン…

無表情になるんだ俺！

「あ、あのー、少しは影って良いなーとは思ってたんだよ？」

「いきなり有力な人に近付いたら

疑われるからよねw」

全部見抜いているヒノエ

ホツ：

自信を失うところだ：

「影ー」

睨む

ビクッ！

いやその、全く興味がなかったか？

と問われたらねえ

俺だって男ですよ？

天音に比べて大きい例のアレには期待
してしまっても居るわけですよ？

色々な想像が出来るじゃないですか

「今『残念』とか思ったでしょ!!」

胸ぐらを掴む

「思っていない！思っていないって！」

今解った、世の中の男が嫁に勝てない理由、

女は鋭いんだな

「天音、面白いけどそこまでにしなさいw」

七海に向き直ると

「影君と天音の邪魔をしないなら居ても

構わないし、政略結婚でも

良いんじゃないかしら？カムラとニシノが

争いになりにくいもの」

一歩踏み込む

「でもね？自分の意志はどうなの？

「誰でも良いの?」

真剣なヒノエ

「アタシ……………」

考える七海

「アタシ恋つて分からないんだ…」

「「ええっ?!」」

三人共に驚く

まさか19で人を好きになつた事が無い?

「だから報酬さえ貰えたら良かった

ハズなんだ…」

何だか別人のように暗い顔

「言い寄ってくる人居なかつたの?…」

ヒノエは困り顔

慈海の孫だからか?

原因は慈海の教育によるもの、女としての

幸せよりも損得勘定で考えるように

してしまった

「誰か気になる人は居ないの？」

「気になるー…てのが何だか分からない

んだけど、カッコ良いかなーってのなら…」

「それは誰？」

「あの…フドウって人…かな」

手をもじもじさせる

「「!!」」

「ふ、フドウさんのどの辺が?!」

「小太りだし髭も適当だし！」

オツサンだよ?!

「あらあ、フドウさん？」

これは困ったわねえ、いずれギルドマスター

になって貰いたいのに

早速噂になる

ギルド

取り囲まれる七海

「フドウさんのどこだよ?!」

「どこがカツコイイんだよ!」

「腹が出たオッサンだぜ!」

「オメエらが考えてる事が良く解ったぜ

バカヤローども!!」

凄い騒ぎとなる

若手にとっては羨ましくも腹立たしくもある

考えてみてほしい

年下、19歳、現代で言えば元陸上部辺りの

健康的な長身美人、しかも胸には

大きな夢が二つ：

そんな娘が入社直後に30過ぎのオッサンに

持つていかれた、

しかも、しかもだ、

七海の方からとくれば当然

「フドウさん！何言っただんだ！」

「どうしてモテんだよ！」

「こんなアレなオッサンが！」

「オメエら!!一回黙れ!!」

しかし誰も口には出さない、こんな状態でも気を使っている、

フドウの頭がアレな事を

小声で

「なあ、フドウさんの頭の事……」

「皆触れないようにしてるよね」

「誰がバラすんだろw」

「ヤクシさんとか?w」

コソコソ話す影と天音

「あ、あのさ……」

七海の言葉に全員が一斉に黙る

「何か……カッコイイなって思っただけでさ、

そ、そう思ってる自分に気が付いたらさ、
な、何て言うの?…ここ、こんな感じ初めてで…」

真つ赤でうつむき、手をモジモジさせる

そう、世間一般ではそれを恋というが、

七海には分らないらしい

「何でこんなオツサンに…」

「どこを見習えば…」

「腹か? 腹なのか?」

頭を抱える若手達

「だからどの辺がカツコ良いんだ?」

ハネナガが聞くが

「え…その…」

顔を両手で隠し

「見たら解るじゃん…」

(いや、見て解らねえから聞いてんだが?)

「完全に恋だな…」

「乙女ファイルターってやつか…」

「欠点がみえなくなるってやつだな」

「そういえば二人で狩りに行ったよな?!」

「まさかその時?!」

「無理矢理かよ! 見損なつたぜフドウさん!!」

「何もしてネエ!!俺が一番驚いてんだぞ」

「バカヤローども!!」

「七海よ」

「ゴコクが来た」

「フドウが好きならそれで良い、

しかしお前は自分の意志でカムラに来た

訳じゃないゲコ」

うなづく七海

「そつちを片付けるゲコ、この意味解るな?」

真剣な顔

「…はい」

七海も真剣な顔になる

「あー、スパイの事か?」

「！」

ハネナガの言葉にギョツとする七海

「他の里のヤツだしなあ」

「ま、当然だわな」

「セキエンと風月よりは考えてたなw」

「いや、あの二人は何も考えて無かつたぜw」

「フクズクは囷だつてなw」

「なんだー、全部バレてんじゃん…」

「七海よ、良ければ内容を話すゲコ」

慈海に言われた事を話す七海

一つ、政略結婚目当てであること

二つ、有力者をニシノ引き抜くこと

「アタシ裏方として育てられたけどさ、

こんなこと話したらもう終わりだねー」

苦笑いの七海

「なあに、どうせ慈海殿の思惑の内ゲコ、

政略結婚についてはカムラとしても歓迎ゲコw」

「引き抜きについてはどうなんです？」

「最悪フドウさんがニシノに行く事になつたりしてw」

影と天音が口を挟む

「ふむ…それはなあ」

困るゴコク

口に出して良いものか？

次期ギルドマスターに据えるつもりを…

「話の最中か？…入るぞで？」

里長がギルドに入る、

皆が道を開ける

「七海よ、お前は どうしたい？

有力者を引き抜きたいか？」

「アタシが…どうしたいか…？」

「…なら慈海殿の目も届くまい？」

好きに決められる」

「好きに……」

首を傾げる

「引き抜きは容認しかねる、

だがお前の意志はどうなのだ？」

アタシの意志……

「うむ……ヒノエの睨んだ通りか……」

腕組みする里長

「……なるほどゲコ」

うなづきながら

「躰も行き過ぎると自我を無くしてしまう

からののお、恐らく長い間訓練漬けたな？」

「！、それじゃあ今まで全部演技だったのか？」

「嘘だろ！それって出来るモノなのか！」

ざわつくギルド

「教育も行き過ぎるとな、何が自分か分からなくなるらしいゲコ」

フドウの背中を叩くと

「お前が怒ってやった事で、自分を

取り戻したようゲコw」

ニヤリと笑う

皆が不思議そうにしているが

「皆、分からないか？」

里長の言葉に注目する

「七海の表情が変わっただろう？」

言われてみれば

明るくて笑っていた七海は…

言い方は悪いが暗くなつた

「こちらが本当の顔のようだな」

いや、前の方が好感が持てた

皆が黙る、色々な思いがあるが

「まさか…そうか…表情さえも

教えられた事だったのか…」

フドウが七海を見る

「…常に笑って、質問には答えて…」

そうすれば、どこに行っても怪しまれずに

組織に潜れるって…」

うつ向く

他にも歩き方とか体のラインの強調の仕方、

話し方、仕草、目線の置き方、

男性への触れ方、食器の持ち方、

暗号の出し方、セクハラには冗談で答える…

等々

「そんなにかよ…」

「何か逆に可哀想だぜ…」

「今まで自分を押さえつけてたのか…?」

「いや、自分を出すつてのが分からないんじゃないや…」

「自由が無かったのか…」

「そこにフドウが現れたのだ」

里長がフドウの肩に手を置く

「俺ですか？」

「七海は殻から生まれたばかりの

雛鳥のようなものだ」

里長はニヤリと笑うと

「お前の色に染めるのもアリだろうw」

そう言うと言って行く

「……………」

え？なんだ？どういう意味？

数秒遅れてフドウが真っ赤になる

「あ？どういう意味だったんだ?!今の!!」

「七海はお前に任せると言ったゲコw」

フドウの春

「夜つてのは……」

「なんか久しぶり……」

あのデート以来、夜の大神跡へ来た

思い出がありすぎる

「荷物も多いな……」

罨と閃光の素材を持てるだけ持って

「何が『も』？」

荷物をテントに並べる

「あー、いやホラ、

ココは思い出が多いだろ（汗）」

なんか……なんか良い雰囲気だ

「そうだね……」

星空に虫の声…

二人きりのキャンプ…

…そうか、ハンター同士で
付き合うつて事は…

テントがあり…ベッドもある…

誰も邪魔しない時間だ

皆そうして…

天音を見ると上目遣いでこっちを見てくる

以心伝心

これは…

二人でベッドに座る

距離が近付く

「何か…さ…」

「ああ」

キスくらい良いよね

「アオオオオーン!!」

「!」

「えっ?!近っ?!」

「ビックリしたあ…」

二人で顔を見合わせると

「ブフツ!!」

笑いが込み上げる、

何処に行っても邪魔が入るものらしい

あのデートの時もヒノエが現れた

「ジンオウガ近いなw」

「はあw…じゃ行ってみようかw」

……………

奥の門の近くにいるジンオウガを見つける

川原に居ると思ってたのに

「またアレだよ!」

「もう慣れた!」

尻尾を上から振り下ろす

「ビターン!!」

「ひゅっ!」

息を吐きながら横に転がる、と、

「ブオン!」

尻尾を軽く振る

「てえっ!!」

転びそうになる影

「何今の?!」

まだ見ていない攻撃があつた

ジンオウガはその場で跳ね回ると

電撃がブレスの様に飛ぶ

「夜見るとキレイだな!!」

弧を描く

「油断しないで!来るよ!!」

今までの多彩な攻撃から見ると非常に

地味な突進、そして振り向くと

「ウオォーン!!」

辺りから雷光虫が集まりキラキラ光る

「うわ、夜だとキレイだな!」

「むー、何か腹立つ!」

天音のスピードからすれば、

身動きしないチャンスの時間なのだ

これを数回やると

「ウオオオオオーン!!!」

ジンオウガが落雷の様に光る!!

「影!逃げよ!!」

「おう!」

全力で逃げる

.....

「スゲエ...」

廃墟の壁の陰から覗き見る、ギラギラした

オウガは辺りを警戒しながら歩く

あの躍動感がある体を縁取るように光る、

舞浜の某。パレードのように

「キレイだけどさ、アレ狩るんだよ?」

月明かりなんて比にならない

兄貴はこれを言ってたんだなあ、

確かに一度は夜に見ておくべきだ

「…で？アレはいつ終わるんだ？」

「え？私知らないよ？」

「怒状態じゃないのか？」

「そこまで聞いてないもん」

あれ？俺バカで無謀な事やってんのか？

ひよつとして『慎重』や『臆病』と

逆の事やったか？

………

飛び上がるジンオウガ！背中から落下！

「ビシャーン!!」

「ぐあっ!!」

「影っ!!」

電撃とボディプレスによる大ダメージ！

まるでジンオウガ自体が落雷の様な攻撃、

まともに食らった

「影っ！下がって！」

「ゴメン天音！」

「いいから逃げて回復!!」

天音が囧になつて誘導する

「落ち着け！落ち着け！」

自分に言い聞かせる、

震える手で回復薬を飲む、

少し痺れているのだ

ヤバい！ナメた！

モンスターにナメて掛かった！

スピードが違う！

隙も少なくなつた！

コレが本当のジンオウガか!!

バカな事やった！ソロならともかく

天音を危険に晒してる！

俺が天音を守らなきゃならないのに！

「回復終わった！」

走り込む

「じゃ罫使うよ！」

頭から空舞で連続斬り！

後ろに回り込んだ

二人で挟む形になり

「そら……こっちだ！……こっち向け！」

一発も食らっちゃだめだ！

影が前足を斬る間に天音が落とし穴を設置

「影！」

「おう！」

落とし穴へ誘導

「グガアウ！」

落ちてガリガリと地面を引っ掻く

「よしっ！」

「乱舞!!」

「兜割り!!」

オウガの頭に無数の連撃

「バキンッ！」

「グガアウツ!!」

角が折れると雷光虫が飛散する

「地味になつたぞ!!」

「コレで楽だよ！」

ジンオウガは落とし穴を出ると別の

エリアへ走って行く

「よし！追うぞ！」

さっきの分を取り返す！

「待って！油断しない！」

天音に回復と研ぎを指示される

「やっぱり少し適当になつてるよう！」

そう、仕切り直した途端に切れ味が

落ちる事は良くある、

只でさえ回復薬グレートも減つたのだ、

「ここは慎重に……」

落ち着け、焦ってる…

「ふうっ！」

息を全部吐ききり深呼吸

道具もまだある、今度は帯電させずに…

天音に頼らず…やってやる

「アオオオオオーン!!」

「ウオオオオオーン!!」

「え？」

二人で首を傾げ…顔を見合わせる

「何か…ケンカしてないか？」

「あれ？別のジンオウガ？」

良く聞けば咆哮が二種類

「ゆっくり行くぞ？」

「うん」

二人で足音を抑えゆっくり歩く
ケンカに巻き込まれると、

最悪二頭が向かって来る

小声で

「もう光らせないよ?」

「ああ、懲りたよ、バカなことした」

自分の興味を優先した結果がコレだ

モンスターの強化なんて見過ごして

良いモノじゃあない

森の中、蜂の巣の辺りを歩くオウガ…

相手は…いない

小声で

「行くぞ天音」

「…ちよつと待つて、何か変だよ?」

良く見ると、俺達と戦った時より疲れてる?

いや…脚を引き摺って…

「なんで？」

私達あそこまで追い込んだの？

「罨仕掛けてみるか？」

何か弱ってるよな？

……

あつさり捕獲出来てしまう

スヤスヤ眠るオウガ、何でだ？

「エリア移動したとき引き摺って

無かったよな？」

「うん、なんだか……っ！」

「どうした？」

天音は地面がジャリジャリしているのに

気がついた

触ってみると

「冷たっ！」

「はあ？そんなわけ……」

触ると地面の表面に……薄い氷？

「どういう事だ？」

フクズクを口笛で呼ぶと、上空を旋回するだけ、既に他の大型は居ないようだ

氷は直ぐに溶けてしまった

………

疑問を持ったままギルドへ入る

「ミノト姉さん、

ジンオウガ狩ったんだけどさ……」

「どうしたの？」

もう夜中なのに、なぜか大勢が残っている

影はフドウの所へ

氷を使うモンスターの事を聞こうとしたが

静かに団子を食うフドウ、

の横で静かにお茶を啜る七海

一切会話が無い

え？ナニコレ？どういう空気？

周囲も黙っている…

聞きづらい…

何があつた？

「あの、フドウさん…」

「…何だ？」

氷を使うモンスターの話を聞くが

「まさかクシャルダオラってことはねえなあ」

しかし話が入って来ない、

この雰囲気はなんだ？

ハネナガ達がまだ居るので聞いてみる

小声で

「この空気なんですか？」

「ああ、フドウさんが帰ろうとしたらな」

『アタシも一緒に行く』

「つて始まってよ、フドウさん

動けなくなつてなw」

「待ってれば諦めると思ってたら

ベツタリだよ…」

「こんな時間だぜw」

親鳥を見た雛鳥…自分で決める事が不得手…

そうなるかもな

「30過ぎて突然コレじゃあ戸惑うわなw」

「どう接して良いか分からないんじゃないかね？」

「何歳違いだよ…」

「俺ならこんなチャンス逃さないけどなあ」

ひそひそ話す

「準備出来たわw」

ヒノエが入って来た

「助かりますヒノエ様」

フドウは頭を下げると

「七海、ヒノエ様の所に泊まれ」

「え…」

ジト目

「命令だ」

「はい…」

シユンとうつ向く七海

基本言うことは聞くようだ

つて言うか素の七海って暗い娘なのか？

………

翌朝

「おはよう」

「んーおはよ」

布団の中で起きる影と天音

昨日は遅かったせいでもまだ眠い

「なんか…今日は…こうしていたいな…」

ぼんやりと…

「ん…」

天音がこつちの布団に入ってくる

「んー、あつたかい」

天音が抱き付く寸前

「コンコン」

ビクウツ!!

「え?」

「誰だ?」

慌てて布団を直し天音が出ると

「七海さん?!」

……………

「いい? 山菜はアク抜き時間が大事なの、

抜き過ぎてても味が落ちるからクセを残して…」

天音の言葉を書き留める七海、

料理を教わりに来たのだ

昨晚ヒノエとミノトの家に泊まった際に

ヒノエから

「男を捕まえるなら胃袋を掴みなさいw」

と言われてミノトに習おうとしたところ

「天音に教わりなさい」

と言われたらしい

「あの、天音さん、刃物は引いて

切るモノでは？」

「ちよつと！天音で良いってば、

なんかくすぐったいw」

「だって…」

自分らしい話し方など知らない

「柔らかい物は引き切り、野菜や

固いものは押し切りが基本だよ？」

「アタシってそんな事も知らないんだね」

「料理もハンターと一緒、

基本から積み上げないと」

二人が並んで料理するのを見る影

なんだか不思議な気分

「なんで突然料理？」

「だってあの人、ダンゴと肉とお酒しか…」

腹が出る訳だ…

「なあ、掃除始めても良いか？」

「埃立つから後にして、

その辺で時間潰して来て」

………

ニシノの里

「七海からの文が来ましたが…」

ニシノの隠密

「どうした？」

寝起きの慈海

「それが指定した方法ではなく…」

困り顔

フクズクで来たらしいが、

「こっちは本来囿のはず

「髪の毛も付いておりまして…」

「とにかく中を」

開くとそこには

『好きな人できた』

とだけ書かれている

二人で首を傾げる

「上手く行つとる…という意味か？」

「分かりにくいので、カムラへ向かいます」

「うむ」

……………

「カゲロウさんって元はハンター

だったんですか」

「そうですよ？その際重傷を負いましたね、

そこをゼンチ殿に助けられたのです」

屋根の上で寝惚けているゼンチ、

夜行などで怪我人が出ている時はビシツと
しているのだが、普段は緩みきっている

「それからカムラへは恩返しのもりで
商売をしているのです」

もしかしたら顔に傷痕があるために
布を被っているのかもしれない

「お早う影君、七海はそっちに？」

ヒノエが出てきた

「天音に料理教わってて、俺の居場所が
なくなりましたw」

「あらあゴメンね、邪魔しちゃったわねw」
まさかこの人の差し金か？

「中身はまだ子供みたくて素直なのよw」

そうだ、竜人って寿命が長い、つまり

ヒノエ様達は見えた目より長い年月生きてきた、
人を見抜く力が高くても当然か

「ほら、傾けないで、気を付けて運んでね」

竹籠に弁当らしきモノを持ち、歩いて来る二人

「ありがとう天音さん」

頭を下げる七海

「天音で良いってば、年下なんだしw」

「どうやら何かが出来たらしい」

「影、朝ご飯食べよ」

二つの決着

「面白かったなw」

「照れてたねw」

天音に手伝って貰い弁当を作った七海、

ギルドでフドウに食べさせる事に成功した

「あ、あの、コレ…」

ギルドのテラス席、うつむき、

オドオドしながら差し出す七海

周りには冷やかされたが

拒む事も無く黙って受け取り食べるフドウ、

それを黙って見ている七海

朝っぱらから緊張感みなぎる状態

誰一人声を上げないし…

「ごっそさん…旨かった」

そう言うと立ち上がるフドウ

「…」

悲しそうな七海

何かリアクションがあっても良いのに、

他に何も言わない

「…ダメだわ、我慢出来ない」

天音が

「フドウさん、七海さんは一生懸命

作ったんだよ？それだけなの？」

「あ、あー、その…なんだ…」

顎を掻くと離れて行く

「もう！信じられない！」

「いいの…」

「良くないわよー！」

キレイに食べ終わった竹箆の器を見るハネナガ

正直羨ましいが

「おい、これって梅干しの種じゃねーか？」
「？、それが？」

「フドウさん梅干し大嫌いだぜ？」

「フキの煮物も嫌いだぞ？」

「つてか漬物もほとんど食べないんだぜ？」

それって…

「……………」

赤くなる七海

全部食べてくれた

「…フドウさんらしいやw」

苦笑いの影

「ゴメン七海さん、私知らなかった」

こつちも苦笑いの天音

弁当を片付けて

「…いいのよ」

満足そうな七海、

フドウの優しきは伝わっている

二人は少しだけヒノエの気持ち解った

不器用な男女

初々しくてチョツカイを出したくなる訳だ

「ハッキリ言えないのよね男って」

「良く分かっているなw」

「四年も男やってたしw」

笑いながら溶岩洞に到着…と

「影様！」

飛び出て来る猫花梨

ちっ！

心の中で舌打ちする天音

まだこっちが居たよ…

「あれ？採取の途中だったのか？」

「はい、ニシノへ持つていく

ダンゴ代にしませんと」

「このモンスター強いだろ？」

「はい、雑魚と戦う事もダメだと

言われましたw」

ああ、普通なら溶岩洞は許可しないからなあ
でもおかしい、

普通クエストは重複しない、

なぜ花梨の採取と俺達のクエストが？

「ミノト様のミスか？」

「恐らく…花梨に時間イッパイ

くれたんだとおもいます」

詳しく聞くと、花梨はまだまだピツケルが

扱えなくて鉱石を掘れない、

だから落ちている鉱石を拾うしかない

隈無く歩き回れるように限界まで時間を

伸ばして貰えた様だ

話す二人を見る天音

あれ…背が伸びて来てる…

子供から…女になっていく…

「影！行くよ！」

なんかムカつく！

「おう！じゃあ花梨、気を付けて帰るんだぞ？」

「はい！」

翔虫で飛んで行く

「虫の扱い上手いよな」

「んー、でももうすぐ並みになっちゃうわよ」

「？、何で？」

「体重軽かったから虫の消耗が少なかった

らしいのよ、大きくなったら…」

「そうか、お前に追いかけてここで勝ってたのは」
「そういうこと」

.....

「すげえっ!!」

思わず声を上げる、飛んでいる

リオレウスの尻尾を蹴り、駆け上がった

空舞した天音

「出来たあ!!」

尻尾からレウスの背中を斬り上がり、

頭までキツチリ入れた

「ビダーン!!」

地面に墜落するレウス、ジタバタもがく

その横にヒラリと着地する天音、

無駄な動きが無く流麗

「おおらあ!!」

兜割りを頭に当てると吹き飛ぶ甲殻

「グガルルル…」

よろけながら立ち上がる、

と飛んで行ってしまった

「あんなこと出来るんだな!」

「上手く出来たよ、尻尾が近くだったしw」

研ぎながら

「もしかしたら太刀も届くか?」

「でも一回斬れる程度かもよ?」

「双剣つてすげえな…」

空中に対応出来るなら閃光玉の消費が少ない

「やりたいなら教えてあげるよー?」

ニヤリ

「う…考えとく」

天音が師匠になるのはどうだろう

「…なあ？リオレウス何回目だ？」

「私は今回で六回目だよ？」

「やっぱり慣れなんだよな」

「それが一番大事だしw」

何とか倒し里へ帰ると

「ちよつと、いくらなんでも…」

「ダメですか？」

ヨモギと花梨が話している

「どうしたんだ？」

「影様」

ニシノへ謝罪に行くためにダンゴを買いお
うとしているのだが

「いくらなんでもウサ団子100本は
多すぎるし、時間掛かるよ？」

困り顔のヨモギ

シラタマとキナコも落ち着かない、

いくら毎日餅を衝いても一度に100本は…

想像する…100本？

重くね？

「なあ花梨、どうやって運ぶんだ？」

「風月に運ばせようと…」

いや、どうやって？こんなデカイダンゴを？

というか風月との仲は改善した訳じゃないのか？

ほんとに風月にだけはキツイよな

「ねえ影、一つ思い付いたんだけどさ」

「？、なにを？」

「上手く行ったら…」

………

「ありがとうございます」

お礼を言う猫花梨

「なあに、お安い御用だ」

相変わらずビシツとしたロンディーネ

天音の思い付きはロンディーネの船に

乗せて貰う事、

里長に話すとロンディーネに相談して

貰えた、すると二つ返事で引き受けてくれた

手漕ぎの舟とは段違いの速度で進む帆船、

まさか本当に乗せて貰えるとは

「すっげえ速い!!」

喜ぶ影

「うむ、高さも全然違うな!」

船の造りに感心する風月

いつもの舟に比べたら天と地ほどの差がある

「遠くまで見える——!」

望遠鏡を貸してもらった天音

「……………」

そして緊張している七海、

話を聞いてついでに乗る事にした、

慈海に報告とケジメをつけるためだ

「花梨殿、その格好は猫族を模しているな？」

「影様が着けてくれたんです」

耳を触る

ロンディーネは此方を見ると

「ハツハツハツ！なるほど、影殿は

自分の性癖を隠さないと見えるな！」

毅然としたいつもの口調で

「ちー違いますよ！頼まれただけなんですw」

あぶない、また誤解される

「花梨、嫌なら取っても良いんだぞ？」

何で外すの？という顔で

「花梨はコレ気に入ってますよ？なぜか

神部さん達が色々お世話してくれるんですよ？」
「…それって絶対下心あるよね？」

『あっち』の方の

天音が

「花梨ちゃん、あのね？神部さんには…

距離を置く…ってどうか…」

説明しづらい、花梨にどうやって説明したら…

「なぜですか？この前は装備一式まで

花梨にプレゼントしてくれましたよ？」

まさかオロミドロ一式？

「ウツシ殿にまだ使うには早いと言われて、

仕舞ってあります」

「神部殿がか?!」

風月が声を上げる

「…なるほど、童女趣味の者が居るのか」

ストレートだなロンディーネさん

「花梨殿、そういった輩には愛嬌を

振り撒いておけば、無限に搾取することが…」

子供に何て事教えるんだこの人w

「……………あの」

久しぶりに七海が口を開く

「私も…その…耳を着けたらフドウさんに…」

「大丈夫！そんなことしなくても！

ちゃんと伝わってるから！」

苦笑いの天音

長身、細身、モデル体型、

しなやかな動き、大きなアレ…

そこに猫耳と尻尾か…

ほほう、これはまた…

「影っ！」

「ギクッ！」

「何か考えたでしょ！」
想像するくらい良いじゃん

.....

ニシノの里

「ごめんなさい、これお詫びです」

頭を下げる猫花梨

「このお嬢ちゃんがあのコソ泥なのかよ！」

驚く露店のオジサンや、その他の住人達

汚い浮浪児が……こんなに可愛らしく

大風呂敷の大皿に大量のウサ団子

「.....」

影達は顔を見合わせる、

ニシノの人達の反応が薄い、

ダメか？

「…こつちこそすまなかつたな」

オジサンは頭を搔く

「こんな子供にここまでさせるとはな…」

「俺達も大人気無かつたな…」

「団子は有り難く貰つておこうぜ？」

「ありがとよ、お嬢ちゃん！」

「カムラの名物だつて？」

「食おうぜ？」

集まってくる

「うまいよ嬢ちゃん！」

「おい！一人で一本食うな！」

「一つにしろ一つに！」

「ちよっ！俺にもくれよ！」

「お前は何か盗られたのかよ！」

ワイワイと食べるオジサン達、

皆笑顔で花梨に笑い掛ける

伝わった!!

「うぐ…うぶう…うぶえ…グスツ」

辛かった四年の思い

「花梨ちゃん、良かったね」

天音が抱き締める、天音にしがみつき泣く花梨

「良かったな花梨」

頭を撫でる影

「うむ、この件は落着いたな」

腕組みする風月、振り返ると

「あとは…」

「…うん」

顔を上げる七海

自分の在り方にケジメを付ける

……

慈海の屋敷

「手紙の報告の通り、好きな人が出来ました」

正座で頭を下げる七海

影達は外で待機、風月だけが後ろに控える

老人達は面食らう、

この前は無礼で馴れ馴れしく遠慮が無かった、

今は礼儀正しく清楚な態度、まるで別人

「そうか…それで任務はどうするのだ？」

表情が変わらない慈海

「あの、任務…任務より…その…」

少し震える七海、怖いのだ

任務に背く処分だけではない、

言葉一つ、

あと一步で過去の自分と決別してしまう、

今まで学び、鍛えられたニシノの

七海が消えてしまう

本当にそれで良いのか揺れている

「その好きになった者の名は？」

「はい…フドウと」

「うむ、まだ30辺りでありながら

最強レベルと聞いておる」

満足そうに頷く慈海

上手く運んでいる事に安心する老人達

「…で？いつ頃ニシノに連れて来れる？」

「……………」

「どうした？」

「…………それは…」

任務に背いてはいない、しかし…

裏切る事になるだろうか

考える七海

どうする…当たり障りの無い答えなら、

またニシノに（過去の自分に）戻れるだろう

だけど今は…

全部捨ててフドウに…

一歩

たった一言が重い

静まり返る

「？、フドウ殿の意見もあるのでは？」

風月が沈黙を破る

「風月、お前は黙っておれ、七海？どうなのだ？」

感情無く聞く慈海

「私は…」

震えている

どうする？

どうする？

選択は天秤に！

どちらがニシノに有利になるか考えろ！
最後に勝つ方を選べ！

過去の自分に言われる
だけど！

「これからは…あの…自分で決めたいです」
震えながら土下座する七海

もう…戻れない…

「それでは何のためにカムラへ行かせたか…」

「任務を放り出すのか！」

「七海よ、どうした？」

「お前らしくもない！」

騒ぎ出す老人達

お前らしくもない？

私らしさとは何だ？

カムラで言われた自分の意志とは？

今それが…分かった

暗くて臆病で震えながら土下座してる

コレがアタシだ

本当のアタシだ

「なるほど、本当に恋をしてしまった

…そうじゃな？」

慈海は淡々と言う

「はい…」

「良いだろう」

「慈海殿！」

「それでは目的が！」

「目的の半分は達成出来るかも知れんしな、

ワシらは急ぎ過ぎたかも知れんな」

ニンマリ笑うと

「七海よ、お前の行動はニシノにとって、

今の所は損にはなっていない：続行せよ」

立ち上がり七海の目の前に座ると

「ここまでは里を預かる者としての意見、

今からはお前のじいちゃんとしての意見じゃ」

顔を上げる七海

「惚れたなら逃がすなw絶対に捕まえろw」

尾ひれ

ニシノの大通りの真ん中、

縁台が置かれ座る二人

ニシノの人々に囲まれている

「また来てくれるとはなあ!」

「え?! 夫婦なのかよ!」

「なんだよ! 前に来た時から気になってたんだぜえ?!」

「あははっ! そういう事だから」

アイドル状態の天音

男達に囲まれる

「ほらお嬢ちゃん! コレも食いな!」

「馬鹿! 花梨ちゃんだろ!」

「こっちは刺し身だよ?」

「そんなに食べられませんよw」

こつちもアイドル状態の花梨、
老若男女に囲まれる

そして少し離れた影の周りには数人の若い男達

「どうやってあんな美人落としたんだ？」

「あんな美人を嫁にしたんだ、

何かコツ的なモノがあるんだろ？」

「是非とも教えてくれ」

「ここそこ集まり聞いてくる

「い、いや、俺の方から何か言った訳じゃ…」

「どうやって説明出来る？」

男に化けて四年も隣にいた事を

「じゃあつちから言つて来たのかよ！」

「なんでだ？」

「顔は風月が良いし…」

「背も低いよな…」

「もしかして金持ち…には見えないな？」

首を傾げる

フドウさん、今俺はニシノで

貴方の気持ちを理解しています

「でもよ、確かカムラの影ってあんただよな？」

「あ！この人なのか！」

「カムラ指揮したっていう有名人！」

「里長より権力あるって聞いたぜ？」

「化け物みてえに強いってな！」

いや後半オカシクない？

俺の噂ってどうなってんの？

尾ひれが付いてるよ？

「花梨ちゃん、カムラがイヤになったら

ニシノにおいで」

魚屋のおばちゃんに言われると

「花梨は…ングッ、カムラの人ですよ？」

影様のモノですし」

モグモグ串焼きを食べる黒猫、
何でそんな当たり前の事聞くの？
といった表情で

「……………え？」

その言葉に一斉に引くニシノの方々

「ちよ、ちよつと花梨ちゃん？（怒）」

ピキピキ

「か、花梨、それは…」

新たな誤解を…

「ウソだろ！こつちもなのかよ！」

「こんな子供にまで手エ出したのかよ！」

「なんでもありか?!」

「なんでモテるんだ?!」

「カムラの影は女たらしか」

「是非ともその方法を！」

「教えてくれ！どうやったらモテるんだ?!」

「アナタガカミカ？」

違う意味で騒ぎとなる

男はモテる方法を聞くが、

女性は遠巻きにヒソヒソ始める

女の敵にされそう：

女の子達を母親らしき人が引つ張って

遠ざけていく

ヤバイ！俺の噂が勝手に独り歩きしていく！

どうやって誤解を解いたら：

「いや、何か色々誤解が…」

オロオロする影

花梨ちゃんって天然で言ってるのが更に

タチ悪いのよね

イライラする天音

…けどこれなら影に女が寄って来ないかも

「影！」

「風月!!」

助かった!!

輪の中に入る風月と七海

「どうだった？」

「やっぱり七海さん……」

あの慈海の事だ、

もうカムラへ行かせて貰えないだろう

「あ、あの、カムラへ行つて……」

真つ赤でうつ向き、

何かゴニョゴニョ言っている

声ちっさ……

「？」

「むう？七海？どうした？」

空気の読めないイケメン、

だが逆に助かる

「里長にフドウ殿を捕まえろと

言われていたぞ？」

ボン！と頭から湯気が上がる七海

自己主張の激しい体型なのに、

こういう仕草が可愛らしい

「良かったね！七海さん！」

手を取り跳ねる天音、まさかあの慈海が

「あ、ありがとう、また料理の指導、

お願いしますね？」

「フドウさんの好き嫌い調べないとね！」

「…あの、キレイな野菜を食べさせないと…」

「あ！そうか！」

うっわ！そこまで考えてる！

「…七海？」

「七海って…あの七海ちゃんかい？」

ギャラリーが不思議そうにする

「何でハンターのカツコしてるんだ？」

「確か滅多に外に出て無かったよな？」

「すつかり大きくなつて」

「箱入りだよな？」

「カムラに？」

「どうやら表向きはそういう事らしい

無事に花梨の謝罪も出来たし、

七海の方も何とかなつた

「じゃあ帰るか、もう暗くなるし」

「そうだね、七海さん、晩御飯一緒に作る？」

「はい、あの、献立などは…」

「それによつては此処で買つても…」

「それならイツパイありますよ？」

花梨が指差す

ダンゴを持つて来た風呂敷に大量の干物と燻製

…明らかに持つて来た量より多くね？

「これ…影、持てるの？」

「影様にはさせません、出来るよね風月」

だから風月にはキッツイな

素直にチャレンジする風月だが

「うむ！これは無理だ！」

そもそも筋力自体は影より弱い

結局二人で持つ事に

「また来いよ！」

「花梨ちゃん！またおいで！」

「影と別れたら嫁においで！」

「影！モテる方法を！」

もういいや、なるようになれ：

諦めて栈橋へ向かい船に乗る影

「ロンディーネさん、お願いします」

.....

再びカムラへ戻って来た影達

「ありがとうございますロンディーネさん」

「なあと、お役に立てて良かったよ」

ガルクの島に接岸する

「今後も何かあつたら言ってくれ」

本心は貸しを作りたかつたのだろう

吊り橋へ向かうが…あれ？

ガルクは？

「風月、七海さんが裏方って

知らなかつたのか？」

「うむ、悔しいぞ？俺がなりたかつたのだ」

『そりや無理でしょ』

四人の思いがシンクロする

隠密は狩りの腕はともかく、頭が必要だ

ウツシ教官だつてフザケているだけで、

次期里長に選ばれる程の頭がある

「俺だつて一応孫なのだぞ？」

「えっ?!」

どうやら慈海には複数の妻が居たらしい、
その中でも七海は直系、

風月は序列の低い方だった様だ

吊り橋を渡り家へ…あれ?

「むう? 誰も居ないようだぞ?」

「!」

人の気配が無い!

篝火がタタラ場の前に!

「影!」

「ああ! 夜行だ!」

ガルクが居ないわけだ

「うむ! 急ぐぞ!」

「花梨は初めてです!」

「モンスターの襲撃…ですよね」

五人は走り出す

.....

「大丈夫だ、俺の言う通りにやりなw」

笑うミハバ

「は、はい！」

直立で緊張しているイオリ

「うーん、俺が教えられる事あるかなあ…君に」

自信無さげなナカゴ

「やっちやうよーっ！」

はしやぐヨモギ

今回二人はそれぞれの隊に入って、

経験を積ませる事になった

中間部、四機の昇降機の島、そこには

「緊張するな、お前達子供は必ず守る、

皆を信じろ」

出来るだけ優しく言うハモン

「は、はい…」

ガチガチのコミツ、影が居ないので

上空警戒に抜擢された

撃竜槍の上には

「どうであつたウツシ？」

「はい、ディアブロスやティガも

混じっています…」

「どうしたゲコ？」

「最後尾にマガイマガドが数頭…」

苦い顔

「うむ、と言うことは…」

「最悪イブシマキヒコがまた来る…ゲコ」

「うむ、覚悟をしておこう」

振り返ると里長

「全員配置につけえい！守り抜くぞ！

「気炎万丈!!」

「気炎万丈!!」

「ぶおおーっ!」

物見の法螺貝

第一の柵を飛び越えるモンスタ―

「ヨツミワドウ2! ナルガクルガー!」

「影が居なくてもよお!」

「俺達だって強くなってるんだぜ!」

「報奨取ってやる!」

一斉にハネナガや神部達が斬りかかる

「あ!…う、上!…:リオレイア!」

自信無さげなコミツが指差す

「えー、と、こんな時は後退弾を」

「イオリ! コレだ!」

ミハバが装填してやる

「ナカゴさん！何でこっちは撃たないの?!」
近いのに！

「ヨモギ！真上では最大仰角まで

上げても無理だ！」

ナルガクルガに向かって撃つと

「それに一旦真上に向けたら

下に向けるまで時間が…！」

ナカゴは気づく、影の指示は凄かった、
ハンターだけではない、バリスタも

無駄な動きをさせていなかったのか！

納得出来る、里長が指揮させるわけだ

リオレイアが墜落する、

もちろんモンスタ―に当たらない…が

「僕達も弱くはないんでね！」

リオレイアを撃退する神部

「前だけで片付けてやるぜ！」

ナルガを撃退したハネナガ

それを見る中間部の30代

「前だけで片付きそうだなあ」

アクビをするフドウ

「嫁さんに良いところ見せる

チャンスだったのになあw」

「ニシノへ行ってるって？」

「このヤロウ！上手くやりやがって!!」

皆でフドウの背中をバシバシ

「いででで！嫁は早いだろ！

また来るかも分からネエんだぜ?!」

照れている、明らかにテレている、

それがまたムカつく！

「よおフドウ、もしも結婚するならよ？

二人の間にウソがあつちやあイケネエよな？」

ニヤニヤ

「！、おお！そうだよな！」

「全部知らなきやな！」

「隠し事はダメだぜ！」

全員がニヤニヤ

「あ、ああっ?!どつどつどういう意味だ?!」

しらばつくれるが、自然と兜を抑えるフドウ

「よし!皆で賭けようぜ！」

「フドウの頭を見ても付き合う方は

倍率何倍だ?!」

「付き合わねエに全員賭けるんじゃネエの?」

「それじゃあ賭けになんねえや!!」

爆笑している中間部の30代

それを更に後方で見るベテラン達

「おいおい?土気が乱れてるぜ?w」

「どうするよヤクシ?w」

「あのヤロウ、浮かれてんのか?」

イライラする歴戦のツワモノ

「許してやれヤクシ、あれは決してバカ

じゃない、少し浮かれるのも仕方ないだろうW」

ゲンジもニヤニヤしている

「おい！バサルモスだ！」

「足止めしろ！」

榴弾を撃つ里守、バサルモスの動きが止まる

「こいつも何度も狩ってるからね！」

足元に走り込む神部、

「任せたぞ！神部！」

神部は大樽爆弾を置くと

「ヨモギ！頼んだ！」

そのまま横っ飛び

「まかして！」

正確に撃ち抜き

「ドオオン!!」

バサルモスの腹が壊れる

「でも名前呼ばないで!!」

「どうしてそんなに嫌うんだよお!!」

士気が高いし連携も何とか維持している

「影ヘフクズクは飛ばしましたが…」

間に合うか…」

腕組みする里長

「避難民の受け入れ要請はしたゲコ、

影の耳に入ればあるいは…」

「ロンディーネ殿の船は

早い様ですからなあ、間に合うでしょう」

合流

「うおお！ティガ来やがった！」

第一の柵を乗り越えナカゴ達の方を向いた

「ヨモギ！ガードっ！」

「はいっ！」

ナカゴ隊3名がバリスタにしがみつく

(ううーっ！怖いっ!!)

ヨモギは初めての体験

鋭い爪とキバ、

何より躍動する筋肉のうねりと殺気！

そんな巨大な塊が自分の足元に突っ込んで来る！

地響きを上げながら

「ドガアツツ!!!」

「きゃあっ!!」

凄い衝撃に後ろに倒れるヨモギ

「大丈夫か?!」

助け起こす

「だ!大丈夫です!」

怖い!モンスターが近い!

こつちまで攻撃してくる!

今まで守られてたんだ!

これが守人の仕事か!

「こつ!こつ!のお!」

恐がる自分を押し殺し、反撃しようと構える、

と逆方向へ走るティガ

「あ、あれ?どど、

どれを撃つたら良いですか!?!」

指示して貰わないと混乱するヨモギ

「ふむ…若手には手に余るか?」

衝撃をヒザだけで受け流し、

平然としている里長

「あれは縦横無尽に走るゲコ、

事故になりやすいゲコ」

この程度で撃竜槍を使うべきではない…

まだ経験を積ませる

「うー上っ！またリオレイア！」

コミツはまだ自信が無い

「よし！今度は！」

ナカゴが撃ち落とすと

「よおーしー！」

ヨモギが正確に頭を撃つ

そこへ

「ヨモギ！お前はティガ狙え!!」

その叫びに振り返る前方部隊

コミツの隣、中間部の島に上がる影

「影だ!!」

「遅えぞ！w」

「来たか!!」

安心感なのか士気が上がる

皆の心にあつた一抹の不安が消えた

「こっちは私がやる！」

前方部の島から飛び出し、レイアの頭から

尻尾まで空舞で駆け抜ける天音

「来たか天音！」

「ウツシ先生！偵察は？」

影の後ろに上がる風月

「やあ風月、トウジと一緒に夜行の

最後尾を見てきてくれ」

「承知！」

キャンプ

「はい、重いわよ？」

ヒノエからバリスタの弾を受け取る花梨、

抱えると

「ん…しょっと、案内してください！」

初参加で何も分からない花梨

「しっかり付いて来な！」

セイハクの後を走る

「あの、私は何を…」

七海も初参加、だがカムラの人ではないし

「そうね…貴女は救護に入って貰いましょう、

ゼンチに従ってください」

ミノトに言われるが

「ヒマだにやああ…」

まだ誰も居ないためゴロゴロしているゼンチ

「ゼンチ、新味食べる？」

団子を食べているヒノエ

この二人の周りだけお花畑が見える…

「あの、良いのですかコレで…」

戸惑う七海

何なんだ、この平和な空気は？

「良いのです」

笑うミノト

「傘鳥！ミハバ！後退弾！……てえっ！」

「おう！」

傘鳥がティガの上に正確に落ちる

この指示のタイミング！やはり影の指揮は凄い

「ヨモギ！榴弾！ティガ！」

「はい！」

走り回るティガにはヨモギの射撃が

正解だった、遠くても一発も外さない

気絶するティガ

「ハネナガさん！」

「おうよ！」

ハネナガ隊が斬りかかる

「神部さん！後ろ！タマミツネ来てる！」

「うわ！危な！」

滑って来るミツネを紙一重で避ける

「こっちは任せて！」

天音が斬りかかる

「ふむ、影が来た途端にコレゲコウ」

「我らの立つ瀬がありませんなw」

急に上手く回り始めた

「報告します！」

トウジと風月

「ディアブロスが数頭、大物も確認しました！」

「あの化け物（イブシマキヒコ）は

見えなかったぞ？」

さて、このままで終わってくれると良いが…

全体を眺める里長

「ディアブロス!!」

第一柵をメリメリと壊し入って来て威嚇する

考える影、ディアブロスは若手には手に余る、

中間部まで下がるのもアリ

ガンナーとバリスタで安全に包囲出来る

そこへ

「大物だ!!」

通常個体が二頭に大物、今までに無かった編成、

大物、アイツは建屋を破壊する…どうする

里長とゴコクを見るが、二人ともこちらを

見ている

(教官と二人で何とかして見せろ、

って事か…)

後ろから

「イオリ！ヨモギ！こつちへ来なさい！」

ウツシが呼ぶ

そうだ、若い人を優先で守るのがカムラだ、

なら教官の次の指示は配置転換

正直なところ若手はディアブロスの

経験が少ない

「影！神部隊とハネナガ隊を下げるんだ！」

「了解！」

若手を下げて中間部の前に、問題はその

スキをバリスタでどう埋めて…

「おうらああああ!!」

「!!」?

「誰だ?!」

「何だ?!この雄叫び?!」

大物の後ろから夜行に混じり、ハンターが

四人ガルクで飛び込んで来る！

そのまま3名がディアブロスを攻撃する

「！」

「おい！アイツら！」

「春香だ!!」

「トガシの連中だ！」

「セキエンも居るぜ！」

「これは嬉しい誤算！」

配置転換のスキが減る！

「教官！前方と中間部を！」

「よし！配置転換！中間部前へ！」

「おっしやあ！」

「行くぜえ！」

「ディアブロスじゃモノ足らねえな！」

「下がれガキどもお!!」

走り出すフドウ達30代、両岸から飛び込む

「おう春香！鈍ってねえか?!w」

「嘗めんなよフドウ!!w」

笑いながら久しぶりに組む二人、

大物に斬りかかる

「影!背中は任せたぞ!」

「おいおい!モノ足りねえ!」

「もつと齒応えある奴来ねえのか?!」

元氣過ぎる30代

「よお影!」

下から呼ぶセキエン

「セキエン!来て良いのかよ?!」

次期里長なのに

「春香さんが行くなって聞かなくてなw」

(まだ『さん』なのかw)

「次期里長だろ?!」

「勉強して来いって親父が煩くてよw」

「だったら春香さんと一緒に…」

いや、トガシの次期里長がカムラの砦でケガでもしたら面倒か？

セキエンは前を見ると

「ディアブロスだけ？俺に何が出来る？」

真顔で

「確かに……」

こっちも

自分を冷静に分析出来る二人

ウツシは全体を見る

「うん、全体のバランスは取れてるし

大丈夫みたいだね」

横を見ると

「コミツ、怖かったら下に行きなさい」

「影さんのやり方見たい、

ギリギリまで居て良い？」

「良いとも、だったら良く見ておきなさい、
だけど避難は迅速にね？」

墜落するリオレウス、

ダイアブロスの上に正確に落ちる

「いよおし！」

「完璧だな！」

「さすが影だ！」

考える影、前方部だけで四頭、しかも大型…

事故になる

「教官！前方部預かります！」

「…うん、やってみなさい」

頷くウツシ

「ガンナー！全員岸へ！」

「ミハバ！ナカゴ！榴弾！時間稼ぎだ！」

「おうよ！」

「了解！榴弾装填！」

「春香！俺達は！」

「囹だな!!」

フドウ達は影の考えを読んだ

安全に岸へガンナーを上がらせた

「セイハク！ガンナーの弾もだ！」

「両岸に送れ!!」

階下に叫ぶ

「だから子供使いが荒いつて!!」

「忙しくなって来ましたね」

バリスターの弾丸を次々運ぶ七海

「怪我人が出たら大変になるからね、

休む時は休む、これは鉄則よ？」

笑うヒノエ

「ガンナー用の弾丸下さい！」

花梨や猫族が地下から首を出す

「…なるほど、ガンナーの包囲戦を

始めた様ですね…」

ミノトが渡す

「影君の指揮だと怪我人が少ないのよね…

でも悪手にならなきゃ良いけど」

ようやく団子を食べるのを止めて

作業するヒノエ

「…それは笑い事ではないぞ?」

弾丸を大量に調査するハモン

「失敗するかも知れんな…」

「蜂の巣だぜえ!!」

「貫通弾足らねえぞ!!」

「こんな楽な防衛初めてだぜ!!」

リオレウスがボロボロにされ逃げて行く

「どおらあつ!!」

「よいさあ!!」

「バキイツ!!」

フドウと春香の溜め斬りで角を折られる大物

「影、俺は後ろで見てるわ」

こんなレベルに参加なんて無理

セキエンが下がって行く

「ああ、そうして…」

「影さん！あれ！」

コミツが指差す

上空に黒い塊

「ラージャンだ!!」

里守りとガンナー達が反射的に上を向く

「ドオオン!!」

前方部に地響きを起こして着地、威嚇する

「さて、ここからですなあ」

腕組みしている里長

「さつきは春香の登場でスキは

無くなったゲコ、今度はどうするか…」

「ガンナーを岸へ配置した包囲戦は

一見正しく、高効率に見えるが…」

「ディアとティガでは『上』は直接攻撃

出来んゲコ、しかしラージャンは『縦』の

攻撃が出来るゲコ」

「裏目に出た事に気付けるかどうか」

眺める里長

「そしてどう対処するか…」

「あとはワシらが始末をするゲコw」

「良い経験になるでしょうw」

「ヨモギ！後退弾装填！ラージャンが

飛び上がったら狙え！」

「イオリ！榴弾でディアの頭だ！」

「は！はい！」

中間部の島の編成を変える

前の2基にヨモギとイオリ
そして影は前方部の島へ走る

「うむ、悪手だ…」

しかめっ面の里長

「この状況で指揮者が最前線に…」

「解っておらんゲコ、

自分も『守られる』立場であることを」

「おいフゲン…」

ハモンが後ろから

「ハモン、準備しておくぞ」

閑話2

「ついに…」

真剣な顔の神部

(仮面で分らないが)

「ああ、出来ている」

相変わらず機嫌の分らないハモン

神部達数人がハモンの工房へ集まった、

数日前からオロミドロを狩猟しまくり

必要素材をかき集めた、

そう、目的はアレである

そして遂に完成したのだ

「これだ」

ハモンは完成したオロミドロの兜を見せる

「おおおっ！…お、…おうん？」

その兜に半数程が怪訝な顔

「どうしたのだ？」

「これは…」

「なぜに…」

「いや、これはこれでアリだろう？」

「いやいや、やはり鉢金と

カチューシャタイプが至高では？」

「いやいや…」

モメている

「神部、何か違うのか？」

「はい…この兜のイメージが現在の

状態と違いすぎると」

確かに今はカムラの装備の鉢金に

カチューシャの猫耳である、

フード型に納得出来ない者が半数いる

「ハモンさん、もうちよい…」

「花梨ちゃんのイメージが…」

兜を手にとると耳を撫でながら

「あの娘の柔らかさかきつて言うか…なあ…」

確かにメカメカしい

花梨のイメージとは少し…なあ

しかし一方では

「これはこれでアリだろう?」

「このメカっぽさの良さが解らんか?」

「カッコ良さつてのもアリだな…」

花梨派の中でも意見が別れる所の様だ

「ま、まあ一旦置いておきましょう、

ちなみに他の部位などは…」

こそこそ話すラングロ仮面、

通りの行商人や住人が不審な目で見てくる

「うむ、これだ」

ハモンが後ろから出して来たのは脚の

…これは!!

「おおおおお!!!」

手に取り眺める

「これは至高!!」

「この面積!!」

「解っていらつしやる!!」

「流石です!ハモンさん!」

通りを気にせず大声を上げる不審者達
単純に花梨が成長期のため調整可能な
部分を増やしたら、

結果面積が減っただけだが、

神部達の反応は良好

全員が満足気である

「ふむ…お前達は単に面積が少なければ

良いのか?」

流石に困り顔のハモン

急に冷静になり

「何をおっしゃいますか」

「花梨ちゃんにそんな事させません」

「花梨ちゃんに恥ずかしい思いをさせるなど…」

「我々の本意ではありません」

首を振る

「どうもお前達の考えが良く解らんな…」

腕の装備を出すと

「うわあああ…」

「無い！これは無い！」

「ハモンさん、これは違うよ」

出てきたのは大型の手甲に爪が付いたモノ

「うむ、猫らしいはと思わんか？」

「いや猫だけど！」

「猫っぽいけど！」

「確かに猫の手かもしれません！」

「無いわあ！花梨ちゃんにこの爪は無いわあ！」

「ハモンさん、我々の花梨ちゃんに対する

イメージとは…どこかでズレています」

神部が力説する

「やっぱり年齢の差か…」

「感性が…」

「…しかし…脚は良いのだろうか？」

「はい！もちろん！」

(即答)

ハモンだって男である、女性のキワドイ

装備の魅力などは当然解っている、

それに対して熱く語るバカヤロー共を

散々見てきた

しかし

『カワイイ』の概念が若者とは違うし、

範囲が広すぎる

単に面積の問題ではない

先ほどのメカっぽさが許せる派、
許せない派など、現在は多様性の時代なのだ
そしてハモンは口〇コンではない
そう、

『紳士』なるものを理解出来ないのだ

距離を置いて愛でる

決して触れてはならない

不快にさせるなんて論外

(周囲はその限りではない)

などの神部達の暗黙のルールなど知らない

「…お前達は…この先花梨を嫁にしたいとは…

思っておらんのか？」

「…嫁？」

「なぜです？」

「あの尊い花梨ちゃんを嫁にするなど…」

「畏れ多い…」

真顔で答える

カムラは少子高齢化になるかもしれない

「お前達は花梨が好きではないのか？」

「見るのが好きなのです」

「好きですが…俺なんて…」

「花梨ちゃんに告白など…」

「…むう、なるほど、お前達は単に

度胸が無いだけではないか」

グサツと刺さる！

その言葉一つでヨロける者までいる

(ナレーション)

一つ断っておくが、花梨は食料不足による成長障害で10才位に見えるだけである、実際は13才であり、この世界なら将来を誓い合う相手が居ても決しておかしくはない、現に影と天音は17で夫婦である、とにかくこの話は合法であるモノとする!

「あの尊さを失う行為など…」

頭を抱える神部

「あのお前達、花梨が誰かと付き合い

始めたらどうするのだ?」

「かっかか花梨ちゃんが付き合う?!」

「男などに花梨ちゃんが!!」

「あの神聖な花梨ちゃんを!!」

「許せん!その男が許せん!!」

重症である、色々と

「花梨だって今の所は影になついている

子供だ、だがな」

しかめっ面になるハモン

「あの娘だって歳を取るし恋もする、

女だから当然だ、いつまでもあのままでは

ないのだぞ？」

「それは……」

「自分の中で『妄想の花梨』を作って

いないか？『現実の花梨』を見ているか？」

鋭い指摘に大人しくなる不審者達

「じいちゃん」

イオリが珍しく来た

「おお、イオリ、どうした？」

「頼んだモノ出来てる?」

「うむ、お前が使うのか? コレを」

後ろからゴソゴソと出して来る

フワフワしたもの

「か、花梨ちゃんに使用して欲しくて…」

うつむき真つ赤のイオリ

「イオリ君、これは何だい?」

神部達が食い付く

「一応双剣ですが、

僕がデザインしてみました…」

丸いモフモフに見えたモノは二つに別れる、

と、小さな爪と肉球のデザイン

現れたのはキャッツネイル

「こっ! これは!!」

「この丸み!」

「このカワイさ!!」

「イオリ君! 素晴らしいぞ!!」

「解っていらつしやる!!」

「アナタガカミカ?」

溜め息のハモン

「そうか…イオリは花梨の

気を引きたいのだな?」

「そつそそそんなこと無い」

真つ赤で慌てる、分かりやすい

神部達を見ると

「それに引き換えお前達は何だ?

見てるだけか?そんな事ではイオリに

さえ遅れを取るぞ」

「それは…」

「男らしく告白なりすれば良いだろう、

もう行け!」

………

ギルド

「花梨ちゃん」

「何ですか？」

振り返る猫耳、それだけで溜め息が出る神部達

「花梨ちゃん、コレを受け取ってくれないか？」

出して来たのはオロミドロ一式

「もらっても良いモノか花梨には

分かりません、あとでウツシ殿に聞いてみます」

とりあえず受けとる花梨

(どうする神部)

(誰から切り出す?)

(俺は嫌だぞ?)

(俺だって恥ずかしい)

後ろを向いてコソコソしている神部達

「花梨ちゃん」

「あ、イオリさん」

イオリ君!!?

「コレを受け取って貰えるかな」

「なんですかコレ？」

「一応双剣なんだけど…重そうだね、

持ってあげる」

オロミドロ一式を抱えると

「ヨモギちゃんの店で説明するよ」

二人で出て行く

「……………」

「何で？」

「俺達って…」

「俺達って何なん？」

「何であんな自然に連れて行けるんだ？」

「誰から誘い方教わったんだ？」

呆然とする良い大人

トンビに油揚げを拐われた

「あの、みなさん」

ミノトが立ち上がると

「考えすぎなんですよ…」

「うむ、拗らせてる、とも言うゲコ」

脆さ

影は前方部の島へ着地、

と同時に

ドオオン!!

「ぐわあっ!!」

「ミハバあ!」

ラージャンの空中ブレスが直撃、

バラバラになるバリスタ

「もう一頭だ!」

「くそっ!こつち来やがった!」

里長のすぐ横、ラージャンの回転

しながらの飛び込み

「ぎゃあっ!!」

「いってえ!!」

数名のガンナーが巻き込まれた
くそっ！失敗した！

後悔する影

ガンナーによる包囲戦は一見正しく見える、
しかしモンスターを見下ろす状態である事、
地面から離れないモンスターであることが条件
身軽で空中から攻撃するラージャンに
とっては、狙いやすいが固まっているだけ
楽に狩るとは『特化する』こと、逆に言えば
状況の変化に『対応』できなくなる
気付くべきだった！

ガンナーの包囲戦を里長達はやらなかった！
一見効率良く見えるけど、これは悪手なんだ！

「影！」

「！」

中間部から柵越しに天音が叫ぶ

「どうしたの!? 指揮が止まってるよ！」

そうだ、俺が…俺がやらないと…
だが今になって震える

指揮をするという事

それが何を意味するか

単に勝つか負けるかだけじゃない

人の命を預かってるんだ

モンスターへの恐さではなく、

その意味の方で震える

ヒザがガクガクいつている

立っているのもやつとだ

全身が震えている

こわい

こわい

カムラを指揮した有名人

いつの間にかそれが当たり前

なっていないなかったか？

浮かれて無かったか？

『指揮』の意味、

『責任』を理解していたか？

何が『前方部を預かる』だ!!

「どうした影！失敗したか?!」

フドウが下から怒鳴ると

「ガンナー！全員降りろ！」

全体に叫ぶ

「む……これは……」

里長とゴコクが動きを止めた、

加勢しようとしていたが

「おお？里長」

「ああ、フドウが上手くやってくれましたなw」

笑う

「ワシら年寄りの出番は無くなりそうゲコw」

「あれ？何だよ？せっかく前まで来たのによ」

ゲンジがキャンプから出てきた

「ゲンジ、どうしたゲコ？」

「ウツシさんに

『前行って影の悪手をフォローしろ』って

言われてな」

眺めると

「状況が戻ってるが？」

「ゲンジ、まあここで見ていれば良いゲコ」

「む？フゲン、影は包囲戦を

やったんじゃなかったか？」

ライトボウガンを装備してハモンが戻って来た

「はっはっはあ！」

「皆考える事は同じゲコ！」

「オラ!!泣いてんじゃねえ!!」

下から春香が激を飛ばす

いつの間にか涙が出ていた影

「お前の仕事は何だ!？」

ラージャン撃ち落とせ!!」

涙を拭うと

「はい！」

後悔するのは後だ!!

後退弾を装填

「ナカゴ隊!ディアに榴弾！」

「ヨモギ!小さい方のラージャン!

飛んだら後退弾！」

「イオリー！同じヤツに通常弾！」

飛び上がる度にラージヤンは落とされる

残りは大物ディア一頭とラージヤン二頭

「うむ、何とかなっているゲコ」

「ケガ人はミハバ隊とガンナーが数名だな…」

「影！俺達は軽傷だ！気にすんな！」

中間部、右岸に上がるミハバ隊、

包帯を巻いている

「ケガ人は俺が何とかするぞ！」

安心して指揮しろ！」

どうやら風月が救護に走っている

生きてた！！

良かった！

「はああーっ…」

呼吸さえまともに出来ていなかった

「うむ、この失敗をどうやって自分の中で消化するか…」

「それ次第で影の成長が決まるゲコウ」

実は影に挫折の経験させたかった二人

勝つてゐる時などは誰が指揮しても勝てるのだ、

問題は失敗した後のリカバリ、

作戦、陣形、士気の建て直し

それこそが『指揮官』の本当の義務なのだ

「…一つ不安があるな…」

「何だハモン？」

「影は人を頼ろうとしない」

じつと影を見るハモン

「うむ、だから世話好きなフドウや春香と

相性が良いのかも知れんな」

「甘え下手でゲコ…」

「バキイツ!!」

「グオオオ……」

大物の角が両方折れた、

逃げ出す大物ディアブロス

よし後はラージャン二頭

「グウルル……」

蒼い炎を揺らし、入ってくる黒いモンスター

「来たぞ！マガドだあ!!」

「更に配置転換!!ベテラン!!前へ！

若手は最後尾へ下がれ!!」

ウツシの声が響く

「影！下がれ！ナカゴもだ!!」

里長も指示を出す

……

「コイツで終いだ！」

ヤクシが最後のマガドを叩き潰す

「あっけねえ…」

「ラージャンに比べたら弱いな、

丁度良い練習になる」

ゲンジは残弾を確認する

ベテラン等はあると言う間にラージャン

二頭とマガド三頭を片付けてしまった

「おお…」

「流石だぜ」

「絶対ケンカ売りたくねえわ…」

中間部から見えていた中堅

「その内俺達もアレになるんだよなあ…

なれんのか？」

無精髭を擦るフドウ

更に後方の若手達

「おっかねえ……」

「モンスターよりモンスターだぜ……」

「なんだあ？まだアタシに追い付いてる

ヤツ居ねえのか？w」

春香が半笑いで見回すが

「あいな……」

「お前が強すぎんだよw」

神部とハネナガ

「影、大丈夫？」

「……………」

青い顔の影、自分のせいで中堅のガンナー

にケガをさせてしまった

本来ならしなくても良いケガだったろう

後悔に押し潰される

「うっ……ちよつと……」

口を抑えて地下道へ

「影、どこいくの？」

天音が引き留めるが

「一人にしてくれ…」

「っ……」

手を振り払われた天音、

こんなことは初めて

キャンプを通過し

「うげえっ！」

ガルクの待機場所で吐く影、

地面に這いつくばる

胃の中全部吐いても吐き気が止まらない

失敗した、失敗してしまった

天音に言われていた、

調子に乗ってる

自惚れてたかもしれない

涙を浮かべて吐き続ける

「んー…ウフフ」

「？」

後ろを見るとヒノエがしゃがんで見ている

恥ずかしさに慌てて口元を拭うと青い顔で

「な、なんですか？」

「昔を思い出しちゃってね、里長も

こうして何度も吐いてたわ」

ニコニコ楽しそうに

「何度もねw」

「里長が…？」

あの人か？

「カムフラが全滅しかけた後、

フゲンさんが里長になって指揮もしたの、

まだ15才だったのよ？」

「!!」

「15?!俺より若い時から?!」

「頼る先輩も居ない中で押し潰されそうになりながら、何とか今日までカムラを

繋いで来たの」

「……………」

強い訳だ、色々と

「指揮の……恐さが分かったのね?」

「はい……」

青い顔で立ち上がる影、

ヒノエも立つと

「影君、貴方には頼れる人が

大勢居るわよ?全部一人で

背負わなくて良いのよ?」

「だけど……それじゃあ責任が……」

「責任感が強いのは良いわ、でも」

影の鼻に人差し指を付ける

「もつと皆を頼りなさいね？」

一人じゃないのよ？w」

その言葉一つ一つが優しく響く

ヒノエ様はやっぱり太陽だ

「影！」

天音が来た

「何してたの天音？」

「一応教官に許可を…」

「何やってるの、

貴女は何よりも影君を優先しなさい」

すれ違う瞬間

「ちゃんと胸で泣かせてあげなさいw」

囁く

「へ？」

.....

結局待機しても

イブシマキヒコは来なかった、が

「んだよ？何で止まってんだあ？」

「おい、何で先にいかねえ？」

最後尾のベテラン

「あれ？動かねえな」

「先が詰まってんぜ？」

中堅

「おい、どうしたんだ？」

「いや、里長達が動かねえし」

「待機しろってよ」

若手

地下道からキャンプに入れない

キャンプ

「出るに出られないゲコ…」

外を覗くゴコク達

「ヒノエ、フオローしろとは言ったがな…」

困り顔の里長

「あそこまで馬鹿正直にやるとは

思わなかったわw」

クスクス笑うヒノエ

「姉様、『家でやりなさい』

って言った方が…w」

同じくミノト

外では天音が影の頭を無理矢理抱いている

天音は背伸びしているし、影は中腰

(ここからどうすれば良いのよ姉さん！)

真っ赤な顔で

「えーと…あのさ…落ち着いた…かな？」

「……………」

「失敗したこと気にしてるんでしょ？」

「……………」

「…苦しいよね？」

「……………」

「皆が怖い？会わせる顔がない？」

「……………」

「私がいるから…大丈夫だから…ね？」

頭を撫でる

「……………」

「皆味方だよ？仲間だよ？」

「……………」

「俺もいるよう」

（時雨口調）

「ブホッ!!」

胸で笑うと顔を上げた影

「お前それ反則w」

涙の跡があるが

「もう！やっとな笑った！」

「ようやく帰れそうゲコW」

思い付きの利点と欠点

明け方

「失敗しました…すいませんでした」

夜行から戻り、ギルドで頭を下げる影

「ガキはゴチャゴチャ考えるんじゃないぞ！」

バシッとヤクシが頭を叩く

「半人前はな、ケツ拭いてもらうもんだ！」

「多少のケガなら覚悟の上だ、

里を守るんだ当たり前だろう」

ゲンジはグリグリ撫でる

「気にすることあねえさ、お前の指揮で

死人は居ねえだろ？」

笑うフドウ

「あれはダメだったな！」

「次に生かせば良いだろ？」

ケガをしたガンナー達にもフォローされる

正直申し訳無さで居づらい影

かと言って黙って帰ったら無責任だし

皆に声を掛けて貰える、

これがどれほど有難い事か、まだ若い

影には良く理解出来てはいない

「セキエン、良く来てくれたな」

里長が笑う

「いやあ、俺にはそんな勇氣

無かったんですが、春香さんが」

「アタシはまだ正式にはカムラの者だしなw」

「うむ、いずれ正式に礼に伺うと

カイエン殿へ伝えられよ」

一礼する里長

「は、はいっ！」

緊張しながら礼をするセキエン

明け方の集会所、和やかに話している中に

「フゲン殿」

ロンディーネが入ってくる

違和感に静まり返るギルド

里ノ内にロンディーネは来ない、来させない、

というかロンディーネ側にも『弁える』

という態度があつたし、取引相手を不快に

させない気遣いがあつた

それなのに今になって

「何事でしょうロンディーネ殿？」

里長が前に出る

「先ずは…非礼をお詫びする」

ロンディーネも解っている、カムラの一員

ではない自分が居るべきではない事を

胸に手を当て一礼すると

「緊急になると困るからな、知らせて

おいた方が良いかと」

ロンディーネの話によるとカメラの上空を

巨大な何かが通過したと言う

「もしや大風が吹きましましたかな？」

「ああ、突風が吹いた、お陰で船が

乗り上げてしまいそうだったよ」

全員が押し黙る

やはりヤツは来ている

だから夜行が起きている

「ふむ…ウツシ、すまんが半日警戒を頼む」

「はっ！」

「全員とにかく休め！即座に

対応出来る様にしておけ！」

………

「ん?…んん?!」

起きる影、外から漏れる光の角度がおかしい、隣を見ると天音も居ない

何事?! 寝過ごした?!

緊急事態?!

「ガラッ!!」

飛び起き戸を開けると

「あー、やっと起きた」

向かいの店で買い物をしている天音

「あ、天音…」

ホツとする、里に何かあった訳では…あれ?

「え?…夕方?」

「そうだよ? 良く寝てたからさw」

「何で起こさなかつたんだ?」

ちよつとムカツとする、今朝は謝る時間が

無くて、起きて直ぐにギルドへ

行こうと思ってた

「ゴコク様に言われたんだよ？今日は影は
良く寝るはずだった」

「??？」

何で解る？

「起きたらギルドに来なさいだつてさw」

家に入るとオニギリが作つてあつた

「はい、これ食べてね」

「あ、ああ」

そういえば何時間食つてないんだ？

「ウマイな」

「当たり前じゃん！w」

.....

「良く寝たゲコ？w」

「はい」

ギルドのテラス席へ移動する

「では今回の反省点を言うゲコ」

「…………ガンナーで包囲したのはダメでした」

「ふむ、それはなぜゲコ？」

「その…限られたモンスターに特化…すると

…ええと…広く？大きく

対応出来ない…と言うか…」

「それだけではない、限られた足場に

ガード出来ないガンナーを配置したゲコ、

これでは回避が出来ないゲコ」

（俺はそんな簡単な事さえ見逃したのか）

うつ向く

「自分の思い付きの利点だけ見て欠点を

見えていないゲコ、さてもう一つはどうゲコ？」

「もう一つ？」

答えられない影

「指揮官が最前線に出た事ゲコ」

「でもさ、最初は影って前の島で指揮したよ？」

横から口を挟む天音

「うむ、最初は指揮官を

『やらせてみた』ただだからゲコ」

「？」

「適正があるか解らんゲコ、まあ結果

として里守とハンター両方を理解している

から、指揮官にしたゲコ」

「前方部に居たらダメだったんですか？」

「この前も前方で…」

「うむ…気付いておらんなあ」

首を傾げるゴコク

「？」

「何で最後にベテランが前で若手が最後尾に

なつたか気付かんゲコ？」

「あれ？それって又シとか

危険な時じゃなかった？」

「確か若手を守るための…？」

「考えろ、マガドが来る以上、

イブシマキヒコも警戒しなければならんゲコ」

「あ……………そうか……………順番に

…三つのグループで対応…」

考える影、

夜行の最後尾にマガドとウツシに

言われていた、

そのあとでイブシマキヒコが来る事は

前回から想像出来る

ならばそれに合わせてベテランを最前線へ

向かわせ、若手を最後尾へ…………

「俺……………まだ全体の流れが

解ってないんですね？」

「うむ、理解出来たか？お前は目の前に

しか対応していないゲコ、まあ今それが

出来るなら天才ゲコw」

「なんか……………考える事が多いな…………」

うつ向く

「今回は色々学んだゲコ？」

「はい、先輩をケガさせたし、責任が…」

「うむ、まだ全部考えられる歳でも

ないゲコ、そこでな？里長から

アドバイスを二つ預かってるゲコ」

二本の指を立てる

「アドバイス？」

「一つ目は『功遅は拙速に如かず』ゲコ」

「こうちはせっそくにしかず？」

二人でハモる、もちろん意味など理解出来ない

「うむ、遅くて成功するより、多少

失敗しても速ければ良い、という意味ゲコ」

「…夜行は失敗したらダメなんじゃ？」

「じゃから失敗したなら即座に

作戦変更ゲコ、あの時お前はどうしたゲコ」

何も出来なかった…失敗したことで頭が一杯で…

「もう一つは『指揮官が不安になるな』ゲコ」

なつてた、不安で怖くて

「指揮している者が不安になれば、皆が

不安になってしまう、士気が下がるゲコ」

そうだ…一体どれだけの失敗したんだろう

また吐き気がしてきた影

「影、大丈夫？」

青い顔の影を見ると

「ゴコク様、もう許してあげて、影が…」

また吐きそう

「うむ、帰って今言った意味を良く考えるゲコ」

……

通りを戻る、待機命令が出ていた様で、

フドウが七海と団子屋に居た

「だからよ、ウツシさんが『やってみる』

って言ったんだろ？その時点で

『カムラ全員の決定』な訳だ」

団子を齧るフドウ

「お前一人の責任じゃねえさ、

里全員の責任な訳だ」

「じゃあもつと気軽に考えても良いんですか？」

吐き気で何も食べられそうにない影

「ま、だからってヘラヘラしてたらヤクシ

さん辺りにボコボコにされるだろうよw」

「あの…余計な事かもしれないませんが」

フドウの横の七海が手を上げる

「混乱しているなら問題点を書いて

見るのはどうでしょう？」

「書く?」

「頭の中が整理できますよ? そうすると新しい事も学ぶ余裕が出来ますよ?」

家に帰り書いてみる

久しぶりに筆なんて持った

硯で墨を作る

「先ずは…」

「包围した事よね?」

下手な字で包围と書く

「次は…そうか、若手を下げたのに俺が前に行った事だ」

「私達も若手だからねw」

「それと…何だ?」

「不安になって止まった事じゃない?」

「そうだ、作戦変更を直ぐに出来なかった事」

「後はベテランを前にする…何て言うのアレ」

「そうだ、イブシマキヒコが来る可能性に

対応するための配置転換を予想出来てなかった」

以上四点

「何か…全部ダメだったな…」

「最初だけだったねw」

ゴロリと横になると天井を見る

「俺…これからどうなるんだろう…」

一緒に寝転がり天井を見る天音

「んー、どうなるかより、どうなりたいか、

じゃない？」

「どうなりたいか…か…」

………

翌日

「イブシマキヒコの現在位置が分かった」

ギルド、全員が里長の話を聞く

「どうやら竜宮砦に居る」

「この前と同じゲコ？」

「うむ、ヤツが移動しない限り、今は

大きな夜行は起こらないと考えられる、

ギルドは通常運営を」

「了解ゲコ」

解散すると

「影、どうする？何かやりたいクエストある？」

「…いや…ちよつと砦に行つて来る」

暗い顔で

「……………うん、行つてらっしゃい」

そう簡単に割り切れるハズもないよね、

今は一人にした方が良いかな

今は…そつとしておこう…

思いと賭け

ミハバ達がバリスタを直していた

「…ミハバ」

「おう！影！」

元氣そうで安心する

「ケガは…良いのか？」

「打撲と擦り傷程度だけ？」

あの七海つて人が大袈裟なんだよw」

七海が包帯を巻いたららしい腕を振り上げる

「まあ代わりにコイツが重症だ」

バリスタをポンポン叩く

「基礎まではイッてないから旋回出来るし、

木材部品の交換だけで元通りだぜw」

「…ゴメンな…」

「何がよ?」

振り返るミハバ

「俺のせいで…」

「ああ、建屋の上に攻撃集中させた事か?」

「!、いつ気がついた?アレの失敗!」

「ラージャンのプレス食らった後だw」

「俺…」

うつ向く

「お前さ、完璧に守るなんて

考えてんじゃねえの?」

「?」

「ガキの頃から見てるだろ?完璧なんて

無いんだ、どっかに穴が出来るもんだ」

「穴…か…」

「お前の役目は、次々に開く桶の穴を

塞いで行く事なんじゃね?w」

笑うと

「こんな例えで良いか分からないけどなw」

「ありがとうな」

救われる

にやつと笑うと

「んじゃ仕事するわw」

中間部の島に登る影、あの時を頭で再現する

「どうしたら…正解だった…?」

……………

「影君は皆かしら?」

いつもの場所で団子を食べるヒノエ

「うん、色々悩んでるみたい」

横に座る天音

「悩むわよねえwでも仕方ないけどね」

「期待されてるからよね？」

「そうよ？才能があるからこそね」

「…私勘違いしてたかも、

天才とかって楽なんだと思ってた」

うつ向く

「才能があるからこそその悩みもあるのよ？」

申を並べると

「本当は17才なんて考えが浅くて

良いんだけどねえw」

「姉さん、それはなんかバカにしてない？」

「普通は浅くて当然よ？抱えきれなく

なるんだからw

難しい事なんて大人に

丸投げして当然なのよw」

「何か…他にも自信付けてあげる方法って…」

「あらあ、奥さんらしい事

言うようになったわねえw」

「!!!」

はっとして真っ赤になる天音

「うふふふ」

ニッコニコのヒノエ

「さー里長がさー何か一言

言ってくれたら影も元気に…」

しどころもどろ

「あら、それはダメよ?」

「何で?」

「里長がフオローしたら

考えるのやめちゃうでしょ?」

「?」

「考える事が必要なのw

里長が『それで良い』って言ったら

考えるの止めちゃうでしょ?」

天音の鼻を指で押すと

「天音もね?いつまでも影君が好きなだけの

女の子じゃないでしょ？」

………

「師匠？」

「アヤメか……」

船着き場近くの屋根の上

「怒られました？w」

「ああ、絞られたよw」

笑うウツシ、里長が指導やフォローを

するのは影ではない、

当然次期里長のウツシである

「影が前に行つちやたのは僕の落ち度だからね」

「指揮する人って辛いですね」

「正解は無い、けど限りなく正解に近い

結果を出す、それを目指せ……ってね」

「それって謎かけ？」

不思議そうなアヤメ

「歳取ったら解るよ？w」

「あれえ？何歳でしたっけえ？」

ニヤニヤ

「あ、白髪」

「えっ（濁点）!？」

頭を抑えるウツシ

「簡単に引っ掛かるーw」

ひとしきり笑うと

「四年前みたいな状態になったら、

僕に何が出来るか…」

遠くを見るウツシ

「あの決断はキツイですよね、

少数数を犠牲にしても…」

「ああ、里の存続の為には若い者を、

少数より多数を生かす、これが正解なのは

解ってるつもりだけどね」

「…割り切れませんよね…」

里を眺める、その苦しい決断と犠牲の上に
この里は立っている

「僕でも出来る気がしないよ、ましてや

影はケガさせただけで落ち込んでるしね」

「子供で繊細みたいね、影…これからも

指揮出来ますか？」

「17才の肩に重責載せたからには…

僕も成長してなきやいけない」

ウツシは空を見上げる

「やらせるさ、僕は支える」

………

ギルド

「元氣付ける？」

首を傾げる風月

「う、うん」

(しまった…)

風月に言ってから『相談する相手』を

間違えた事に気が付く天音

セキエンと春香はトガシへ引き揚げてしまった

「好きな料理を作ってやればよかろう？」

得意だろう？」

「それは…そうなんだけど…」

この人じゃダメだよなあ、フドウさんは…

キヨロキヨロする

「それならロンディーネ殿の船ではないか？」

「！、あー！」

この前珍しく喜んでた!!

「じゃ里長に聞いてみる！」

「しかしだ、ロンディーネ殿を都合良く

使っている気がするのだが？」

違和感を持っている風月

「…そうだね、団子とか持って行って…」

「いや、それだけではない、

ロンディーネ殿の目的は交易だけか？」

腕組みして首を傾げるイケメン

（里長も商人には見えないって言ってた）

「それは分からないけど…」

「お？何だ？何の話だ？」

フドウが七海とギルドへ来た

………

湖に浮かぶ船

「さて、出してはみたものの…」

毅然としているロンディーネ、

とりあえず船には乗せて貰えたが

「どこへ向かう？ 目的地が無いのは困るのだが？」

操船する猫族も指示を待っている

この大きさの船が入れる川はカムラまで、

ニシノへ行く位しかないが

「じゃニシノへ向かって下さいw」

笑顔の天音、

マカライト10個で交渉したところ、

あっさり了解してくれた

乗り込んだのは影と天音、そして

「おおっ！ 速いぞこの船！」

フドウも乗り込んだ

「ほら影、望遠鏡」

「あ、ああ」

受け取る影、リアクションが薄い

「これをもつとあつたら夜行で……」

ブツブツ言う、夜行の失敗が忘れられないようだ

「もう…元氣出しなさいよ！」

背中をバシッと叩く天音

「影殿はその若さで重責を背負っているのか？」

腕組みしたままのロンディーネ

「影は指揮できんだよw

元々はバリスタやっててな、ハンターも

理解してるからなw

フドウの方が喜んでいる、水面を見ながら

「ふむ、指揮官か、辛い立場にもなるだろうな…」

「辛い…ですか？」

顔を上げる影

「話に聞くと複数のモンスターに

対応するらしいじゃないか？当然犠牲の

覚悟もあるのだろうか？」

「犠牲？」

キョトンとする

犠牲…考えた事無かった

「そうだ、覚悟なんて…」

「影はよ、犠牲を一人も出してねえし、

ケガ人さえ最小限にしてるぜ? W」

「今度は望遠鏡を覗くフドウ

「ほう、影殿は優秀なんだな」

「河を下る、ニシノの里が見えて来ると

「フドウさん、七海さんと一緒に

来たら良かったんじゃない? W」

「ニヤニヤする天音

「それじゃまるで結婚の報告だろうよ (汗)」

「フドウさんはソノ気が無いの?」

「七海さんはゾツコンだよ? W」

「あ? あー、その、なあ…」

「後ろを向きテレるオッサン

「頭見られても大丈夫だったのに W」

「笑う天音

「?!天音、何だ? ソノ話?!」

顔を上げる影

「昨日の午後…影が寝てる時にさw」

………

昨日、午後、ギルド

「七海、良くやったな」

テレるフドウ

「何も…怪我の手当てと

補給のお手伝い程度ですよ…」

赤くなっている七海

「ニシノから戻って来れるとは思わなかったぜ…」

「だって…」

うつむき赤い二人

そんな二人を遠目に見ながら熱い勝負が始まる

テラス席に人ばかり

皆小声で

「さあ賭ける賭ける！」

「別れる方は何倍だ?！」

「今なら別れる1・1付き合うは5倍つてとこだ」

中年ハンターが主導で賭けが始まった

「やーねー男って」

「そう言うヒナミはどっちだよ？」

「もちろん別れるに賭けるw」

「ひっでえ!!」

「うむ、ワシも参加するゲコ」

皮の袋：財布丸ごと賭けるゴコク

「マ、マジっすか?！」

「いくら入ってるんだコレ?！」

「どっちですか?」

「もちろん付き合おうに賭けるゲコ」

胸を張る

「おおお!!」

「すげえ度胸!!」

「比率が変わるぞ!!」

金額で比率が変わる

急いで計算する

「別れる1・3付き合う4倍になったぞ?」

「大金賭けたなゴコク様」

「ふむ、勝負事はこうでなければ、

真剣になれんゲコウ

「さあて…」

「では…」

「勝負ゲコ…」

二人をカムラの全ハンターが取り囲む

「な、なんだ?」

「?」

キョロキョロする二人

「よおフドウ、七海を嫁にするならよ、

隠し事はイケネエよなあ？」

ヤクシがニヤニヤしながら言葉で制する

ビクツと体を震わせ油汗をかくフドウ

マズイ…逃げ道がない…

「？、何ですか？」

不思議そうな七海

「なあ、七海、フドウが好きだよなあ？」

中年ハンターに質問されると

頭から湯気が上がっている

実に分かり安い

「フドウさんの頭を見ても気持ちちは

変わらない自信あるか？」

ハネナガに質問されると

「頭？」

首を傾げる

「よせ！やめろ！」

「暴れんなよ！」

「おい！そっち抑えろ！」

フドウが取り押さえられる

「大人しくしろやフドウw」

ヤクシがレウスヘルムに手を掛ける

「ヤクシさん！止めてくれ！！

はなせオメエら！！」

必死のオツサン

「ウソつかれたまま付き合うなんて

出来ないよな七海？」

ゲンジに言われると

「嘘？ウソがあるんですか？フドウさんに？」

「うおおお！！止めろおお！！」

涙目のフドウが吠えるが

「そおらっ！」

ヤクシが兜を取った

現れたのは

密林から大社跡の森へ、

そして水没林になりかけた前頭部
最前線の辺りは河原のススキの様に…
項垂れるフドウ

終わった

終わってしまった

やっと来た春が過ぎ去り

寒冷群島の冷たい風が吹く

楽しかったこの数日

もう帰って来ない

「……………？」

全員が七海の顔を見る

表情に変化が無い

「な、なあ七海、どう思うよ？」

恐る恐る聞くハネナガ

「どう…？」

「ほ、ホラ、フドウさんの頭…」

「頭…？」

じつと頭を見る七海

「ホラ、な、何かさ…」

「あるだろ？」

「見えてるよな？」

「なんでリアクションねえの？」

ザワザワするギャラリ―

「少し…キテますね…」

まじまじ見る七海

その言葉がフドウの胸に刺さる、

寒冷群島が永久凍土に…氷の軋む音がする

「だろ?!」

「どうだよ?!」

「ハゲてるだろ?!」

「はい…それで…何ですか?」

首を傾げる

「!!!」

「おい!」

「まさか?!」

「付き合うのか?!」

「これでも?!」

「フドウさんと?!」

「あの…私何か変な事言いました?」

キョトンとする七海

そして一斉に脱力するギャラリィ

七海って…

オッサン好きなのか?

「大勝^グゲーコー!!」

兆候

がっかりする一同

「ハゲてるやん……」

「ハゲてますやん……」

「何でだよ……？」

「な、なあ七海、平気なのか？」

フドウさんの頭

「？、ですから質問の意味が分かりません」

「……え……あのさ、イヤじゃ無いのか？……この先……」

（今でこの段階だよ？その内天辺まで……）

まるで必死で弁解するように、身振り手振り

をしながらハネナガは言う

口には出さないが後数年には

砂原になるかもしれない

「…それが…どうかしました？」

相変わらず不思議そうな七海

そして座り込み呆然と七海を見上げるフドウ、

こんな反応するとはフドウ自身も

思わなかった

二人を残し離れていくハンター達

「フツ……」

「ああ……」

「もう何をおいてもフドウさんに

勝てる気がしねえよ……」

「何でフラれないんだ？」

「俺らつて…何なん？」

「何で…何でよ……」

「コレハユメダ…オレハマダネテルンダ…

キットオキタラ…」

テラス席に戻り項垂れる若手と中年達
賭け金ともう一つ、男として負けた気がする

「こりや本物みてえだなあw」

「蓼食う虫も好きずきっていうからなw」

ヤクシやゲンジ達は眺める

165の身長、小太り無精髭、

ぶっちゃけファンタジー系のドワーフ

そこに新しい要素が加わり

『三大非モテ』になった

なのに七海に拒絶の反応は見られない

「何である人がモテんだよ…」

「野獣じゃん？美女と野獣じゃん？」

「ああ…呑むか」

「もう呑まなきややってられん」

「昼から呑むな！準備待機ゲコ!!w」

パンパンになった財布を抱えるゴコク

.....

「うわあ、見たかったw」

元気が出た影

それで二人で団子屋に居た訳だ、

平気で目立つ場所に

「皆俺がフラれると思ってたらしいぜ？w」

得意顔、確かにちよつと腹が立つ

「でも泣き出しそうだったって

ヒナミさんが言ってたよお？w」

「言うなよ！……まあ、俺自信が一番驚いたぜw」

「ふむ、人間は中身とは言っても

先ずは外見だからな」

ロンディーネは上から下までフドウを見ると

「髭を整える事から始めてみてはどうだろう？」

「俺は身形に気を使わねえしなあ」

自分を解っているフドウ

「清潔感は必須だよ？何より連れが

恥をかく、七海と言うのはこの前の

背が高い女性だろう？」

影と天音に振る、頷くと

「あの女性に恥ずかしい思いをさせたいか？」

「そうか…そうだな！髭くらい剃るか」

納得する

話しているうちにニシノを過ぎてしまった

「どうする？すぐに海に出てしまうぞ？」

「引き返すのも勿体ねえなあ、

ついでに竜宮砦見てみるか？」

「でもイブヒコ居るって言ってたよね…」

「俺は竜宮砦見たこと無いからな」

「大丈夫なのか分かりませんよ？」

アレが暴れたら三人で…無理無理

「トウジの話じゃ全然動かないらしいからな…」

話している内に海に出てしまい

「リュウグウトリデ?とはあの島だろうか?

ニシノでは忌み島と呼ばれていたぞ?」

ロンディーネが指差す

穏やかな海に浮かぶ島

聞いていた話ではイブシマキヒコは

動かないらしい

「じゃあロンディーネさん、お願いできますか?」

.....

影達が船で出た直後

ギルド

「七海、お前は行かなくて良いゲコ?」

昨日の大勝でホクホクのゴコク

「はい、クエスト行かない時は

お料理やお裁縫の勉強がしたいので」

「天音は行つてしまったゲコ」

「でもミノトさんがおられますし、

教えていただきます」

「そうか…」

女らしい勉強がしたいか…

七海は勤勉な娘かもしれないな

花嫁修業、良いかも知れん、

これでフドウが身を固めれば、

ワシも安心してギルドマスターの指導を…

「しかしミノトは機嫌が分かりにくいからなあ」

「？」

「無表情でも怒っている訳ではないから

安心するゲコ」

「？、あの、どういう意味ですか？」

首を傾げる

「?、じゃからミノトは機嫌が

分かりにくいゲコ」

「え?…いつも笑ってますが…?」

「……………いつもゲコ?」

ゴコクも首を傾げる

「はい、双子で良く笑うので、

最初は見分けがつきませんでした?」

ヒノエとミノトの見分けがつかない…

何だ?この違和感は?

ミノトのカウンターへ行くゴコク

「どうしましたゴコク様?」

見上げるミノト、確かに口元には笑みが…

「……………ミノト…ヌシは…いつから笑ってるゲコ?」

なんだ?この違和感は?

何か…何か大事な事を見落としてないか？

………

「あらためて見ると長えな…」

キャンプ、背伸びしながら見るフドウ

尻尾の先まで含めたら50メートル越える巨体

イブシマキヒコが寝転んでいる

「何してるんだろう、アレ」

「トウジさんの話だともうすぐ

寿命じゃないか？って言ってたよ？」

寿命…なあ…死にかけてんにカムラの

岩を全壊させるのか？

「……って…もしかしてアレの墓場だったり…」

考える影

「ほう、アレが例の」

ロンディーネもキャンプに入る

船が大きく座礁の危険があるため距離を

置いて停泊、そこから小舟で来た四人

………

二人が接近を知らせる『装置』とするならば…
前に里長と話した事を思い出す

ヒノエはいつも笑っている…

イブシマキヒコが来た時は…

いつも以上に楽しそうな…

ミノトは…無表情こそが魅力だと
神部達が話していた事がある

笑っている…

いつだ？何時から笑っている？

ミノトの初対面の印象は『無表情』になるはず…

「誰かウツシを呼ぶゲコ！」

タタラ場前へ集まる里長、ゴコク、ウツシ

「ミノトちゃんが笑っている？」

考えるウツシ

「そう言えばそうですね」

あれ？いつからだ？

「ワシらは違和感に気付かなかったゲコ」

「接近を知らせる装置とするなら…

近くに居る…と言うことに」

苦い顔の里長

「先人達の名付けた『禍群』の意味を

考えたなら……これが……」

こちらも苦い顔のゴコク

「この里はヤツらの通り道……か？」

タタラ場を見る里長、

見えているのは50年前の惨状

「50年前は……目障りだった……と言った所か……」

「とにかくミノトちゃんに変化してるのは

事実、問題は……位置です」

「うむ、何処に居て何処に行くか……」

それによってどんな危機が起こるかだ」

今度は空を見回す、天気が悪くなってきた

「あら、何のお話ですか？」

ヒノエが階段を上がって来た

「ヒノエよ、ミノトがいつから

笑っているか解るか？」

「あの娘が笑う？……あら？雨？」

急に曇り雨が降り始める、と

「里長！ゴコク様！」

神部やハネナガ、七海が走って来る

「どうした?!」

「ミノトさんがおかしいです！」

「目が光ってるぜ!?!」

「なんかツイヨ、ツイヨって!!」

「何だって?!」

あの時のヒノエと同じ！

ウツシが振り返った瞬間！

「ゴアアアアーツ!!!」

その咆哮に全員が真上を見る、

雲間から金色の何か

「ヤツがそうか!!」

身構える里長

「あれがナルハタタヒメ!!」

同じくウツシ

黒い雲から金色の体が現れた、

身をくねらせ上下を関係無く泳ぐように

住人達が一斉に外に出る！

「何だ今の?!」

「何だあれ!?!」

「でけえぞ!」

「え? モンスター?!」

「避難させないと!」

「待つゲコヒノエ…通り過ぎるだけのようゲコ…」

通過すると、すぐに雨も止んだ

「むう…何処へ行くのだ?」

太刀を納める里長

「!、そうだミノトちゃん!!」

ウツシが飛んでいく

「里長…どうやらワシらは兆候を

見逃していたゲコ…」

「迂闊だった…先代達の知恵…

思いを継承してきたつもりが…」

「後悔するのは後ゲゴ！あの方向…

ヤツは下流に！」

「まさか…竜宮砦…！」

顔を上げる里長

「下流には影達が乗った

ロンディーネ殿の船が！」

………

ギルド

「………？」

「ミノトちゃん？」

恐る恐るウツシが聞く、

ギルドの中で立ち尽くすミノト

「…？、失礼しました、少しボートと

していたようです…?」

振り返ると…いつもの無表情

「驚いたぜ」

「突然歩きだしたんだぜ？」

「何だ？ ツイヨツイヨって？」

「?、私がそう言いましたか？」

「風月はおるゲコ?!」

飛び込んで来る一同

「む? 居るが?」

立ち上がる

「緊急事態ゲコ！」

「直ぐに下流へ向かい影達を探すのだ！」

「影を？」

「七海はニシノヘフクズクを飛ばすゲコ！」

「はい！ 内容は?!」

「慈海殿に『貸しを作れる』と書け！」
里長の号令が掛かる

織姫

「ここ危なくないですか？」

小声の影

「良く見えるぜw」

フドウも小声

キャンプから翔虫で飛んで来た四人

イブシマキヒコの居る場所の隅に伏せる

「なあ？何なんだこの場所？」

真つ平らで不自然だぜ？」

地面を撫でる

「ふむ、これは…人の手で

…埋めてあるのではないか？」

ロンディーネも

「人の？作ったモノ？」

この面積を？

そう言えばそうなんだよ、周りは岩場なのに

「私も不思議だと思ってた」

だけどそれなら、

何でバリスタとか大砲が埋まってるの？

四人で伏せて観察する

奥の撃竜槍の下に横たわる巨体、

表情の無い顔…魚に腕が生えたような…

まさか魚類？

目も開けっ放し…目痛くないのか？

「もしかしたらな？夜行の原因が此処に

あるかも知れねえぜ…」

「フドウさん戻ろうよ、危ないよ…っ！」

イブシマキヒコが突然首を動かす

「ヤベエ…見つかったか？」

この距離で

「いや…どこかを見ているぞ？」

伏せたまま空を見るロンディーネ

「何だ？黒い雲…こちらへ来るぞ」

「ゴアアアーツ!!」

雲の中から金色の長い巨体が降りて来る!

するとイブシマキヒコも答えるように咆哮する

「あれつてまさか花梨が言つてた黄色…」

「まずい、立ち上がったら…」

「見つかつたら…」

「あんなのが二匹かよ…ヤベエな、」

「出るに出られねえ…」

「伏せたまま話す」

「この音…波が荒く…天候が変わつたようだぞ」

「鋭い目で周囲を観察するロンディーネ」

「気付かれずに、やり過ぎすしかないだろう」

「何とかキャンプに飛べたら」

「逃げられるよね…」

「こつちに飛んだのは俺が言い出したんだ、
いざとなつたら俺が囿になるぜ？」

ニヤリと笑うフドウ

「ダメですよ…」

「七海さん悲しむよ？」

その先は言わなくても…解る

「何だよ、俺が死ぬみてえじゃねえかw」

そうは言っても解っている、あんなモノを

二体も相手出来る人間などいない

今四人は間違いなく『死地』に居る

……………

「細かい事はどうでも良い!!

船と人が必要なのだ!!」

慈海の屋敷で怒鳴る風月

数組の船でカムラを出発、

風月は元漁師、最速で着いた

里で聞いた限りでは影達は来ていない、

それどころかあの船が海に出たと聞いた

「うむ…だが風月、忌み島にはまた風が…」

思案する慈海

老人達は

「慈海殿、七海からの文を考えれば…」

「花梨の汚点、あるいは消せるやも」

「ふむ…」

手紙を読み返す

照の借り、花梨の汚点

影の捜索一つで…

影は期待されている…

もしも影が将来カムラの役職になったなら、

帳消しにした上に恩を売れるかもしれない

また交易でニシノが潤う

「よかろう風月！お前が先陣じゃ！

舟を率いて探せ！なんとしても『ニシノ』

で影を見付けよ！」

「？、ニシノで？」

「そうじゃ！手柄はニシノで挙げよ！」

………

「何してんだアレ？」

巨大な二頭の魚は絡み合う様に浮いている

お互いに体を擦り付けている

…どうやって浮いてるんだ？

「まさか…」

「ここはアレの繁殖場所じゃないのか？」

商人のはずのロンディーネ、

動揺しないどころか冷静

「繁殖？」

言われてみれば

「影、見て、黄色の方のお腹」

確かにイブシマキヒコには無いモノがある、

後ろ足のヒレで大事そうに抱えている…卵？

「コレ…雄と雌なのか…？」

考えるフドウ

「もしかしたらよ？50年に一度周期で

繁殖があつたりしてな？」

「その時カムラが襲われるとかですか？」

「それで夜行が？迷惑だよ…」

「ここんところ夜行が多かつたら？」

繁殖時期なんじゃねえか？」

二頭の顔に表情は無いが、

もしかしてコレ…デートみたいな状態？

男女でジャレているのかもしれない…

ここは待ち合わせの場所？

そしてそれを覗いている俺達…

ヒノエの笑顔が一瞬過る…と

「ガブウツ！」

「なっ?!」

ナルハタタヒメがイブシマキヒコの腹に

食い付いた！

「がフツ！ゴツ！グゴツ！」

突然ケンカ？

苦しそうな声

え？突然険悪になった？

身に覚えがある影

「…蜘蛛なんかは雌に喰われるらしいけどなあ…」

無表情で見るフドウ、複雑な思い

「カマキリもですよね…」

同じく影

男としては、なんともやるせない光景…と

「何だ？雌の腹が光っているぞ？」

ロンディーネが言った瞬間！

「ズダアアアン!!」

地面に落ちるイブシマキヒコ、

地面にヒビが入る

「死んだ…のか？」

ピクリともしない…そして

「ゴアアアアーツ!!」

こつちを見て咆哮するナルハタタヒメ

「ヤベエー！見付かってるぜー！」

立ち上がり大剣を構えるフドウ

「キャンプまで…っ！」

天音は立ち上がり周囲を見る、

島の周りは嵐になっているようだ

「ふむ、キャンプに戻れた所で脱出は…無理か？」

落ち着きのあるロンディーネ

「逃げ回るしかないですよー！」

あの時のセキエンが頭を過る

「こっち来るぜ!!」

ちっ! ようやく春が来たのによ!

俺の責任だ、コイツら守ってやらねえと!

俺の無責任な意見で巻き込んだしまった!

「フドウさん、納刀です」

影の冷静な声

「?!」

「逃げ回りましたよう」

「…その先に何かがあるよ…」

救援など期待出来ない、なら自分が囮に

なつて影達が助かる確率を

「今出来るのはそれだけです!」

「ゴアアアアーツ!!」

デカイ咆哮!

とブレス!?

金色の球体?!

「何だコレ！避けずれえ!!」

転がるフドウ

ブレスは大きくなりながら飛ぶ

「見たところ電気の様だぞ!」

ロンディーネは難なく避ける

その態度と冷静さから解る、

ロンディーネは商人ではない、ハンターに

近いモノを感じる、と

「シャキッ!」

マントの下から細身の剣と盾が出て来た

「あんた何者だ?!」

「ロンディーネさんってハンター?!」

「話は後だ!指示をくれ!」

考える影

イブシマキヒコと戦った経験があれば解る

勝てる相手ではない

だがこっちは今、守る里が無い

守るのは自分の命だけ、つまり：

「戦う必要がありません!!!」

「!、そうか!」

理解したフドウが納刀する

「え?!: そうなの?!」

同じく天音、双剣を構える

「ほう…」

感心するロンディーネ

モンスターと戦う、

そればかりやっていると当たり前になって行くが、この状況で何が最善なのかを影は導き出した

「今は逃げ回りながら」

キャンプを指差す

「あつちに飛ぶ事が最優先です!」

キャンプに行けば見逃して貰えるかも

知れない、諦めるかも知れない

………

「ロンディーネ殿はどこだ?!」

小舟で下から呼び掛ける風月

「にゃー主はあの中にゃー!」

島を指す猫族、島の周りだけ極地的な嵐、

風と雷

そして今見える…あれは尾ひれ?!

あんな高さに?

荒れる海の中で停泊している船

この荒れ方では…

「カムラの衆はここまでだ!

ここからはニシノが行く!」

風月が号令を掛ける

正直な話荒れた海に不馴れなカムラの船頭、
浮いているだけで精一杯

「風月、あつちは潮目、

渦があるから向こうから！」

「うむー！」

この島の周りは花梨の方が詳しい、

二人の舟を先頭に嵐に突入する

.....

「ロンディーネさん！回復薬とかありますか?!」

「常備している、気にするな！」

影の後を残像の様に付いて動くロンディーネ

間違いない戦闘を仕事にしている人だ

「また腕来るよ!!」

腕を突き出すナルハタタヒメ、

電撃の輪が飛んで来る！

「あのお嬢さんは賢いな、もう覚えたか」

影と同時に回避する、しかも喋りながら

「せめて閃光玉がありやあな!!」

尻尾の叩きつけを回避するフドウ

「フドウさん！危ない！」

天音の叫び

「バチイッ！」

「いつでえ!!」

追い討ちの様に小さな落雷

「大丈夫ですか!?!」

「俺に構うな！」

回復薬を飲むフドウ

考える天音

イブヒコの腕の叩きつけ、

追い討ちに竜巻だった、ならナルヒメも？

「攻撃全部！多段だと思っただ方が良い！」

「素晴らしいな、君の奥方は」

「お、オクガタ？」

紫の光線の隙間に入る影、

その後ろをピツタリ付いて来るロンディーネ

ナルハタタヒメの攻撃はともかく、

影の動きを理解して付いてくる

三人とも理解する

少なくとも並のハンターレベル以上の人間

「これいつまで続けりや良いんだ?!」

いい加減腹も減ってきた

「なんとかスキを！」

疲れてきた影

天音の動きにもキレが無くなってきている

「ナルヒメ全然休まないよ?!」

普通のモンスターならエリア移動したり

回復しようとする、

ナルハタタヒメは…移動しない？

だったら決着を付けるしかない？

何で移動しないんだ？

何か…何か方法は…

「影殿、アレは『この場所』に

執着していないか？」

ロンディーネの言葉でピンと来た

産卵する親、子を守る母親、

それは危険から遠ざかるため静かに逃げる

逃げない場合は…

死ぬまで戦う…

まさかここが…産卵場所？

まずい…

ナルハタタヒメに移動する理由がない

全力で排除しようとする…

中央で浮き上がり丸くなる

「何してんだありやあ?」

「今なら!」

天音がキャンプを指差す、

と紫の光線が全方位に降って来る!

「バチイツ!」

「うぎいつ!」

「天音えつ!」

「回避に徹してこれかよ畜生!」

無様に転げ回るフドウ

「天音!大丈夫かつ?!」

「だ大丈夫!」

回復薬を飲むが体が軽く痺れる

「これ…多分連続で食らったらヤバイ!

気絶するよ!」

隙じゃない!丸くなるアレも予備動作か!

「ジンオウガと同じかよ!」

ジリ貧、こちらの命が削り取られる

どうぞする…

織姫2

「俺がやるしかねえわな！」

抜刀するフドウ、走り込み斬りかかるが

「くそっ！狙った所斬れねえ！」

イブシマキヒコで分かった弱点、

腕を狙うが当たり難い

それに

「ブレス！」

一例に雷撃を吐き出す！

回避する三人

俺に向かつてこねえ、

これじゃ囷にもならねえ！

そして多分…影は俺を見殺しにできねえ…

どうする

多彩な攻撃、そのほとんどが範囲が広い

その上圏に向かわない

全員を狙っているのか？

回避する影

どうする、考えろ俺！

「ロンディーネさん！こんな状況の場合、

部下の猫族はどうしますか?!」

避け辛い！

「拠点に助けを呼ぶはずだ！」

拠点？ニシノの事か？

ニシノから救援がくるなら…

慈海の顔を思い出す

ダメだな、でもフクズク位は飛ばしてくれる、

カムラまでの時間と…それから舟を出して…

どう考えてもあと半日耐えないとならない

「影殿、動きが鈍ったぞ？

マズイ考えが出たか？」

後ろにピツタリ付いてくる

「やあああああつ!!」

「ザザザザザン!!」

頭から尻尾の先まで空舞で回転する天音

「出来る! イブヒコと同じ!」

「へっ! 天音に先越されちまったぜ!」

斬り掛かるフドウ

段々で見慣れて来た様だ

「負けてはおれんな」

ロンディーネも斬り掛かる、

片手剣でヒラヒラと舞うように

「俺もやるしかないか」

影も飛び込む、どうせ逃げられないなら

やるしかない、

ダウンでもさせれば逃げるスキも出来る

金色の輪が捻りを加えて飛んで来る!

「なるほどな! 何かを一回撃つと」

スキが出来るぜ！」

「背中はスキ多いよ！」

考える影、四方から囲めばスキがある、

頭を奥に向ければ背中側がキャンプへ行ける

先に逃がすのはロンディーネだ

しかし四人から三人へ、更に二人と

なるほど逃げるのは難しい

そして奥側は…逃げ切れる保証は無い

「影！俺は奥へ行くぜ！」

察して走るフドウ

笑っている、理解している、

そんなことはさせたくない

でも…

やるしかない！

「天音！俺達は左右だ！」

ロンディーネさん！キャンプ側へ！」

「了解した！」

これではフドウ殿は：厳しい判断もしているな、
この歳で指揮をするのも頷ける

全員散開、包囲した形に

腕を振り下ろす、と地面が光る

「電気!!」

三方向に雷撃が走る！

「腕狙えないよー！」

「腕が弱点なのか?！」

ロンディーネも狙うが当たらない

逆立ちしたり裏返ったりしながら攻撃する、

その上浮いているため狙いづらい

「ガンナーが居りゃあな！楽かも知れねえぜ！」

「でもガンナー装備じゃ！」

下手したら即死かも

再び中央、空中で体を丸める

「ロンディーネさん！今です!!」

「分かった！先に行く！」

エリアの端まで走るロンディーネ

が

「あ、あれ？」

「え？ナニコレ?!」

小石が中央へ転がって：

違う：

俺達も中央へ引っ張られてる！

エリアの中央、真下に出した金色の

プレス？に引っ張られる

「やべえ！吸い込みだ！外側に走れ!!」

「コレでは翔べんぞ!!」

「とにかく外側に!!」

「ちよつと！やだああああ！」

「天音えっ!!」

距離が近かった天音が逃げ切れない

「っ!!」

振り返り全力で駆け出す影

「よせえっ!影!」

走りながら叫ぶフドウ

「おおおおっ!!」

間に合えええっ!

吸い込みの効果で過去最高速度で走る影!

天音の手を掴む!

「影!逃げて!」

「掴まれ!」

今度は外側へ!手を引き全力で走るが進まない!

「あああああっ!くそおおお!」

空転する両足!一歩も進まない!

ヤバイ!アレにぶつかつたら多分ヤバイ!

「くそっ!!俺のせいだ畜生おおおっ!!」

絶叫するフドウ

自分より年下の者を見殺しにする、

それは恥だ!!

フドウも振り返り走ろうと

ピタツ…

「…は？」

突然吸い込みが終わる

???

「あれ？助かった！」

「今のうちに！」

走る二人

離れていたフドウとロンディーネは見る

上空に…

ナルハタタヒメが真下を向いて浮いている？

その口からキラキラした何かをゆっくり

…落とした

「?、逃げろおおおーっ!!」

指を指し叫ぶフドウ

「えっ!」

「何?」

「距離を取れ! 何かが来る!」

ロンディーネも叫ぶ

地面に落ちた紫の光

と同時に中央から地面を這う様に広がって来る光

「影! 翔虫!」

「そうか!」

吸い込みが無くなって使える!

二人で飛び上がる

「つぶねえ!!」

「何だ? これは?!」

フドウとロンディーネも

「ドオオオー！！！！」

爆発する地面！爆風と大量の砂埃！

「ぐううっ！！」

目を開けていられない！

幸い翔虫は無事の様で落下はしないが

「…ふう…大技か？」

パラパラと砂が降る中で目を開ける

「…多分食らったら即死級かも」

砂埃の中着地する、

今ならナルハタタヒメからも見えないかも

「ちっ砂埃スゲエな…全員無事か?!」

バタバタ手を扇ぐフドウ

「大丈夫だ！では私はキャンプへ飛ぶぞ!?!」

「ああ、そうしてくれ！客人死なせたと

あっちゃあカムラの恥になるからな！」
砂埃でお互いが良く見えないが、声で確認する

「次は天音だ、キャンプ側に行け」

「やだよ！影が行って！」

「お前に何かあつたら俺は後悔する！」

「私もだよ！」

「モメてんじゃねえ！天音！」

「キャンプ側へ行け！」

「フドウが叫びロンディーネが翔ぼうとした瞬間！」

「ビキビキビキ!!…ガラガラガラ!!」

「え？」

「何？」

「突然地面が崩れて大穴が開く」

「うわああああ！」

「きゃあああ!!」

「影!天音!」

「何だこれは!?!」

落下する影と天音、フドウとロンディーネは
崩落に巻き込まれなかった

と

「ゴアアアアーツ!!」

後を追うように地面の穴に飛び込む

ナルハタタヒメ、そして

グラツ…ズルズルズル…

力なくズリ落ちていくイブシマキヒコの死体

「影!…天音!」

……

「いつてえ…」

ギリギリ翔虫で助かった

「影、何ともない？」

「ああ……これ……地「下」か？」

見回すが……なんだここ？

朽ちたバリスタや大砲……一面ガラクタ……

そして……折れた撃竜槍？

壁が赤い……まるで生物の胎内……

一目で解る、人間のいるべき世界ではない

「……………！」

「ん？」

「影、上、フドウさんが何か叫んで……!!」

「ゴアアアアーツ!!」

「ナルヒメ!!」

「隠れるぞ!!」

見回すが隠れられる場所など……

と、イブシマキヒコも落ちて来る

「ズダアアアン!!」

砂埃を上げる

「これだ!!」

イブシマキヒコの陰に隠れようと走るが、

こちらに突っ込んでくるナルハタタヒメ

「うおっ!!」

「何よコレ!!」

その体からは金色の輪がいくつも発生する!

回避するが

「何とか上に!」

「無理だよ!この高さじゃ!」

フドウらしき人影が見ているのは解るが…

逃げられない…

勝てる訳もない…

打つ手立てが無い…

時間を稼ぐしか…

「天音!固まってると不利だ!」

「分かった!」

お互い逆方向に走り挟む形にする

物理的な攻撃よりもブレスの様な飛び道具ばかり、しかも口からばかりでは無く、良くわからない場所からも出てくる

「腕！叩きつけ！」

「おう！」

横に走る影

振り下ろした腕の辺りから落雷が発生、

三方向に広がるが、天音は素早く隙間に

入りやり過ぎす

しかし

「え？え？何コレえ！」

「天音！」

更に発生する竜巻！

何でイブシマキヒコの攻撃が?!

「天音！ケガは！」

「大丈夫！」

回復薬を飲む天音

攻撃が変わった、なぜ？

もしかしてイブヒコの能力を？

ナルハタタヒメの腹が光っている、

変化…いや進化か？

攻撃が強力になつてる、なのにこっちは

道具も減つてきた

上には距離があつて登れない、何か、

何か無いか？

中央で丸くなるナルハタタヒメ

「マズイー！何かやるぞー！」

「とにかく外側に！」

中央の地面に金色の球体が現れる

「また吸い込みだ！」

しかし

ギギギギ…ガラガラガラ…

動き出す大砲やバリスタ、そして折れた撃竜槍

何かが違う、明らかに違う

瓦礫が球体を中心に回転を始める、

これは…デカイ竜巻か!!

マキヒコの攻撃だ!!

「天音えっ!!」

走り寄ると

「えっ?!何?!」

天音を背中から抱きしめる!!覆い被さる

「ちよつと!何?!痛い!」

思いつきり力を入れる

直後、瓦礫混じりの暴風になる

「うがあああつ!!」

「きやあああ!!」

抱き合ったまま吹き飛ばされる二人

.....

「影いーっ！天音えーっ!!」

上から叫ぶフドウ

地下が嵐になっている

俺の責任だ！

俺も降りて戦うしかねえ！

「フドウ殿！」

大穴の淵まで走る黒猫

「影様と天音様は?!」

「ああ?!花梨?!」

「影と天音は?!」

同じく走るイケメン

「風月?!」

見ると次々に上がってくる漁師達、そして

「おいフドウ！影と天音は?!」

「ヤクシさん!?!」

カムラのベテランハンターが数人

島の周り…嵐が…いつの間にか止んでいる？

「この中だ！この嵐の中に二人がいる！」

指差すフドウ

「ちつ良く見えねえ、翔虫じゃあ危ねえな

…誰か！ロープ持ってねえか?!」

呼び掛ける

誰も持っていない

海で搜索するために浮きと網は持って来た、

まさか地下から救出することなど予想出来ない

「我々が持っているぞ！」

「ああ?! ロンディー…！」

振り返るヤクシ、そして一同

「…誰だアンタ？」

天音

「痛ったあ…ぺっぺっ…」

うつ伏せのまま何とか上体を起こす、

口の中まで砂だらけ

壊れたバリスタや大砲が辺りに散らばる

全身埃と細かい切り傷の天音

「あれ…影は？」

少し気絶してた？

右手の先、瓦礫の中に

「影っ?!」

そこには兜は脱げ、レウス防具が所々

砕けた影、右足と右手が…あらぬ方向に…

「え…え…う…いやああああーっ!!」

叫び這い寄る！

「影！影いつ！ねえっ！起きてよ！」

体を揺さぶるが

「起きてつてばあ…ねええ…」

反応が…ない

「起きてよお…目え開けてよお…」

座ると影の顔を両手で擦り

「…」

顔の砂埃を払う

瓦礫から庇つたのだろう

「起きてよお…ねえ…」

影の顔に涙が落ちる

「やだよお…一人にしないでよお…」

「ぐ…」

「影っ！」

生きてる!!

「あ…助かった…のか？」

薄目を開けるが

「待って影！今回復…」

今になって気付く、

ポーチも武器も吹き飛ばされて…

「いつてえ…あれ…どこだ天音

…見え…ねえ…ごっつ!!」

目が虚ろに泳ぎ

口から血が流れる

「待って！動かないで！何とか！

何とかするから！」

見回す

そして漸く気付く

砂埃が落ち着くと

ナルハタタヒメがこちらを見たまま…

中央で静かに浮いている

悟る天音

影はもう動けない

もう助かる道は無い
絶望的だ…

けど…なんか…不思議…

恐怖も沸いて来ない

「今…何とか…するから…」

涙を擦る

ナルハタタヒメより影が死ぬ方が怖い

(どうせ…死ぬなら…)

瓦礫の破片を持って立ち上がる

細い鉄の金具を両手に

ナルハタタヒメに向かって歩く

「へえ、待つててくれたんだ？トドメ刺すの」

言葉が通じる訳は無いが広い地下で向かい合う

自分でも不思議な位落ち着いている

一度振り返る

私達の出会い：誰も気付かないんだよね：
影も：姉さん達でさえ笑い話だと思ってる

何で皆気付かないかなあ：

咳ばかり出てさ、夜行でも働けない
病気の子供がさ

何であんな時間に狩り場に居るのか、
誰もそこ気にしないんだもん

本当はね？死ぬつもりだったんだよ？私
何にも出来ない自分がイヤだったから、
キライだったから

カササギが付いて来ちやって困ったよ
あの子だけが友達だったからかな

河原に座ってどうしようか考えてたらさ

向こう岸で剣振り始める男の子が居るんだもん
目えキラツキラさせてさ

こっちは死のうとしてるのにさ

ムカムカするじゃん？

話してみたらさ、更にムカつく事言うじゃん？

だから生きる事にしたんだよ？

見返してやりたくて

「いっつ…」

団子屋で働いている時も照さんが死んで

落ち込んでる時も

ずっと見てたよ？

両親が亡くなって大変になって、

時雨に化けて一緒に馬鹿やって、

影がハンターになって…

時雨から天音に戻って…それから…

ずっと

ずっとね？

影と話したあの時から

あの大社跡の河原から

天音は幸せでした

「ありがとね、影、ずっと一緒だからね」

涙を手の甲で拭く

ナルハタタヒメに向き直り

「ゴメン、待たせたね」

構える

影のお蔭で生きて来た

影が死ぬなら…

惜しいモノなんて何も無い

私も…一緒に逝くからね!!

「やああああっ!!!」

走り込む!!

と

シユルルル…スタツ!!

「まったく、スゴいお嬢さんだねえ？」

突然横に立つ男、ゴーグルを上げる

「!、え？」

いつの間に…誰？

黒い肌…尖った耳…竜人？

救援???

誰???

腰にロープ？おりて来た？

と同時に

ヒュルルル…

「ドドドドオン!!」

「ゴアアアーツ!!」

「ええっ?!」

爆弾?!と閃光玉?!

ナルハタタヒメに!

「え?えっ?!何?!」

「ホラ、コレ結んで?大丈夫、怖くないよ?」

ロープの一端を天音へ

「え?!、影はっ?!」

影を見ると

「心配ない!息はある!」

「ロンディー…?」

影に回復薬を飲ませて体をロープで…誰?

「説明は後だ!引き上げるぞ!!」

女性が手を上げるとロープが引かれる
「見てて良いかい？」

「こんなチャンス滅多に無いよ？」

竜人が言うのと睨むの女性

「やっぱ…ダメ？（汗）w」

ニツコリ笑う

「バハリ！いい加減にしろ!!」

「分かったよ、ジエイ！ルーチカあ！

もつと投げるんだ！」

引き揚げられる四人

………

「まったく！

偉そうに指示しないで欲しいです！」

次々に爆弾を落とす

「ジェイ！閃光足りてませんわ！

早くなさい！！」

若い知的な女性と

「人使い荒いですよね、ロンディーネさん？」

ナルハタタヒメに向かつて投げ続ける若い男

「あの二人は見込みがある、

何としても助け出すぞ！」

調査を続けるロンディーネ

「うむ！合図だ！！」

風月の合図でニシノの漁師とカムラの

ハンターが引つ張る

「地引網より簡単だ！一気に行くぞ！！」

「こんなの滅多に見られないのに、残念だよ…」

引き上げられながら首を振る竜人

四人が引き上げられると

「ケガ人一名だ！直ぐに治療に掛かれ！

出航準備!!」

「もう素材無くなります！」

「爆弾も限界ですわ！」

「全員退却だ！」

影は担架に載せられた、リーダーらしき

女性の指示で全体が動く

「影！影！ねえ！助かったよ?!」

影の傍らから離れない天音、

意識が戻らない

「大丈夫、船で治療出来るよ？」

バハリと呼ばれた竜人達が運んで行く、

いつの間にか嵐は収まり日暮の穏やかな海

そこにロンディーネの船と…更に大型の船が

「さて、ここからは俺等の仕事だなあ」

ヤクシパーティーが警戒する、

ナルハタタヒメが追ってきた場合の：囧

「小舟一艘だけ残しといてくれやw」

「使うかどうか分からねえけどなw」

大穴を覗き込む

「デケエわw」

人を押し退けフドウが

「先輩！俺のせいで影がこうなったんだ！俺が」

「ボグッ!!!」

思いつきりブン殴られ転がる

「だったら影達を無事にカムラに届ける！

そんで里長に怒られる！

それがテメエの責任だ!!」

背中を向けると大穴の縁に立つ

「テメエも『守られる若手』だろうがよ！

黙って帰れ!!ケツ拭いてやる!!」

間を置いて、無言でヤクシ達の背中に
直立で一礼するフドウ、最後に船に向かう

「どうするよヤクシ、地下に降りるかあw?」

「いや、瓦礫で足場が悪い、ここで迎え撃つ」

「デケエなあ、ここが俺等の死に場所かあw?」

「ちようど墓穴あるしなw」

笑うカメラの最強近接パーティー

ヤクシパーティーを残し全員が

船に乗り込み出発

甲板からヤクシ達を見るフドウ

「ありがとうございます」

涙を浮かべ呟く

「ん?、アレ何でしょう?」

花梨が空を指差す

紫色の光が近付いてくる、

オレンジの夕焼けに複数の紫の線
距離が詰まると正体が解る

「マガイマガドだ!!」

フドウが甲板で叫ぶ

「あれ何頭居るんだい? どうする?

「ファイオレーネ、やるかい?」

「奴らは長距離を跳べるのか?」

リーダーらしき女性は眺めると、剣を握るが

「こちらを襲う気は…無いようだな」

剣を納める

自分で爆発を起こしながら

島に向かって飛んで行く

それに気付くヤクシ達

「んだアレ?、何でこっち来んだ?」

「ヤクシ、数が多いぜ?」

「どうするよ?」

「やる事あ一緒だ、構わねえやw」

ハンマーを構える

次々に着地するマガイマガド、

その数は10頭を越える

「やりがいあるぜ!!」

「ぶった斬ってやる!!」

「これが俺等の花道だぜ!!…え?ああ?!

大穴に次々飛び込むマガイマガド

ヤクシ達に威嚇や咆哮をしない、

見向きもしない

…人間を見ていない?

「何してんだ?」

「おい!青い方喰ってるぜ?!」

「黄色は反応しねえな、動かねえ」

「おい…コレよ、もう俺等関係無くねえか?」

.....

トントントント...

ごはんの香りと包丁の音

「...ん？」

天音の後ろ姿

あれ？俺何してたっけ？

えーと...

日の光に赤く透ける天音の髪

あー、綺麗だなあ...

天音って俺には勿体ないよなあ...
振り返る天音

ガシャン!!

「影!!気付いたの?!」

気付いた？何が？鍋落としたぞ？

「影っ！」

そばに座り泣き出す

「どうした天音？何で泣いてんだあ？」

あれ？俺横になつてね？

「影！影っ！良かったああ…うあああ!!」

ボロボロ涙が出る天音

大口を開けて泣く

「そうかあ、良かったのかあ…」

なんだか知らないけど、

天音が良いならイイかあ…

ボンヤリしていた意識がハッキリしてくると

「いってえ！っ！ゴホッ!!」

「あ！動かないで!!」

「あれ？俺ん家？何で？ってイテエ!!」

あれ?!俺の手動かねえ!

「あばら骨が折れてるの！寝てて！」

「ゼンチ呼んでくる!!」

……………

「もう大丈夫にや、熱も無いし後は静養にや」

ゼンチが診てくれた

右腕に骨折が複数、右足複雑骨折、

あばらが数本

幸い首や背骨には損傷が無いが、

丸2日間眠っていたらしい

「よう！起きたって?!」

「ミハバ！ってイテエ…」

布団から出たいが

「大声出しちゃダメ！あばらに響くんだから」

「少しは動けるか？集会所に皆居るぜ、

顔見せに行こうや」

「どうやって？影は動けないよ?」

「俺を誰だと思ってる、

杖より良いもの作ってたんだぜ?」

戸を大きく開けると車輪の付いた椅子？

「俺も前に足折つたる？」

「こんなのあつたら良いと思つてよw」

木と竹で造られた車椅子

「器用だよなミハバはwイテテ…」

「天才だろ？ 師匠の仕事は

まだまだ出来ねえけどなw」

「ありがとね！ミハバ！」

「その内何かで返してくれよw」

「おお！気が付いたか！」

里長が入って来る

「里長…俺…どうなつたんですか？」

「大体は天音から聞いているがな、

お前も知りたい事があるだろう」

車椅子を見ると

「集会所へ来れるか？」

全員に聞かせたい話があるが」

「何とか行ってみます」

「そうか、無理はするなよ？」

そう言うと言って行く

二人に手伝われ、車椅子に何とか座ると

ミハバが押ししてくれる

「カラカラカラ…ギシツ!!」

「これ壊れないだろうな？w」

「お前はケガしても心配無いだろう？」

天音が全部世話してくれるんだからよ、

羨ましいぜw」

「全部………!」

ようやく気付く、寝たきりの世話

ということはもちろん、その…下の方も…

「あ…天音…ありがとうな」

顔を背け、真っ赤でテレる

「お礼なんていらないよ、影にはイッパイ
貰ってるんだからねw」

カムラの里

「英雄の帰還だぜw」

「いや、英雄か？この場合？」

ハネナガと神部に迎えられる

「影様っ!!」

抱き付こうとする黒猫

「花梨、あばらも折れているのだ、気を使え」

風月に襟首を掴まれる

車椅子でギルドに入った影達

「気が付いたのね、良かったわね天音w」

「この椅子は…良いものを作って貰いましたね」

ヒノエとミノトも声を掛けて来る

たった2日寝ていただけなのに、

久しぶりに思える

「大変な目にあつたなあ影」

ゴコクも迎えるが…笑つてはいない

「あの、フドウさんは？」

居ないよな

「フドウは謹慎してるゲコ」

「え?!」

「ナルハタタヒメに関してはワシらにも

責任があるゲコ、だから処分など考えて

無かつたがなあ」

「??、えーと?」

「自分から言い出したゲコ、

お前達を危険に晒したし、勇気が無かつた

と嘆いていたゲコ」

「勇気？」

「あのね、吸い込みの時に私を助けに

行けなかつたのと、地下に落ちた時も

飛び込む勇気が出なかつたんだってさ」

「そんな事で……」

仕方ないよな

「フドウさんの中では

自分が許せないみたいよ？」

「七海の顔がチラついたらしいゲコ、まあ

フドウも一回り大きく成長しとるゲコ」

咳払いをする里長

「さて、これで全員揃ったな、先ずは……」

テラス席から頭を下げる里長

「皆、すまなかった」

「何のマネだよ？」

「あ？何であやまるんだ？」

「あんたは頭下げちやあなんねえぜ？」

「今回の騒動、その兆候を見逃して

しまったのだ、これは里を預かる者として

詫びねばならん」

「それだけではないゲコ、夜行の増加も

予想出来たはずなのに対応出来なかったゲコ」

ゴコクも横へ行き頭を下げる

先人の残した知恵、

それを理解出来ていなかった

察して天音が耳打ちする

「ミノト姉さんが笑う様になってたでしょ？」

「ああ、それが？」

「うん、あれがナルヒメが近付いてた

証拠だったみたいよ？」

「！、そうだったのか……」

「解つていれば警戒を解かなかつたゲコ」

「そして……今回の事で全体が掴めて来た」

里長は語る

一っ目

まずは大社跡、

あれは過去にイブシマキヒコ、

ナルハタタヒメを恐れ、崇めた人々が造った物

しかしある時から恐れが薄れた、

その辺りでナルハタタヒメに崩壊

されられたと遺物に記録されていた

その伝承から先代や先代は、

接近を感じ取るヒノエとミノトを見いだし、

カムラに住まわせた

二つ目

竜宮砦は恐らく同じ年代にあの島の人々に

よって造られた

そして50年前、カムラが全滅しかけた時、

あの島では決戦が起こった

命を掛けた戦いで多くの人々を犠牲に

しながら、最後の力で大穴を埋めたようだ

その後、島の僅かに残った若者は、

近くのニシノに助けを求め、
小さな土地を借り村を造った

しかし四年前に花梨を残し全滅した

!!!

「里長殿！本当ですかっ?!」
前に出る花梨

「うむ、慈海殿から詳細を送って頂いた、

お前の里ではその時に伝承が途絶えたのだろう」

ニシノの老人達は知っていたのだ、

だから花梨は『余所者の子』でしかなかった

だから直ぐに保護しなかった

田畑も奪った訳では無い、

そもそも借り物だった

「うむう、俺は『ニシノの土地の子』

だと思っていたが…」

風月が首を傾げる

新しい世代には、そんな昔の話は理解出来ない

「風月、お前の祖母も島の者だったそうだ」

「何とー！」

だから序列が低かった、そして島の話を

聞いた慈海が『忌み島』と呼ぶようになった

「大型が来る島とは聞いていたが、

住んでいたのか…それで忌み島…」

考える風月

やはり竜宮砦はあの二頭の繁殖場所、

それに気付かずに住み着いてしまった昔の人々

「失礼するよう？」

どこか軽い雰囲気の方が入って来る

…尖った耳？ 竜人？ 黒い肌、目が大きく

無精髭を生やした笑顔

風月とは少し違うタイプのカッコ良さ
誰？

「バハリ、空気を読め」

ロンディーネみたいな空気の…誰？

凄い美人…

癖毛の黒髪ショート…スタイルが良い

???

「お？起きたんだね、気分はどう？

ちゃんと食べてる？」

影に聞いてくるが

???

「バハリ、我々の事が解るはずはないだろう」

美人は直立すると丁寧に

「王国騎士団所属、フィオレーネだ、

こっちは研究員のバハリ」

「よろしくね」

手を上げる

「影、覚えておらぬだろうが、その方々に

お前は助けられたのだ」

「??」

「重傷だったけど、処置したよ」

「頭を打っていないか心配だったが、

良かったよ」

笑顔の女性、大人の空気

「ほら、影、お礼言わないと、

地下から引き上げてくれたんだよ？」

「あ…ありがとうございます…？」

頭を下げるが…

「まあ混乱するよね？」

じっくり理解すると良いよ？」

肩を叩く

「妹の救援要請に参じ君達を助けたんだ、

間に合って良かった」

「妹？」

「この方はロンディーネさんの

お姉さんなんだって」

だから雰囲気似てるのか

振り返ると

「さて、フゲン殿、報告がある」

「む、例の調査ですな？それで？」

怖い顔になる

「間違い無い、この辺りもモンスターの

生息域が乱れ始めた」

ザワツとするギルド

「ルナガロン…と言っても解らないよね、

王国地域のモンスターが流入してるよ？

この辺り一帯が混乱しつつある」

腕を広げ全員に聞かせる様に

「逆にこの辺りのモンスターも王国周辺に

出現している、この前のマガイマガドが

我が国でも確認されている」

「ちよつと待つてくれ、

良く分からねえんだが？」

ヤクシが前に出る

「何か起ころうとしている、つて所か？」

ゲンジも

「ん、フィオレーネ」

バハリが振る

「ああ、よろしいか？フゲン殿、ゴコク殿」

二人だけは既に聞いている様だ

「では」

フィオレーネの話によると母国とその

周辺に大穴が出現、過去の記録によれば、

それは大きな災いの前兆

「大穴ってまさか」

ざわつくが

「まあ聞いてくれ」

どうやらその大穴を使いモンスター達が移動しているらしい

それらを調べる為に王国の一番端、竜宮砦の近くにある岩礁地帯、

そこにある古い砦の跡地に新たな

戦略拠点『エルガド』を現在建設中

「そこにロンディーネさんから救援の話が行ったんだってさ」

耳打ちする天音

「えーと、だからあの…なんだっけ？」

バハリがどこかを指差す

「竜宮砦だ」

フィオレーネは呆れるように

「そうそう、こつちの…」

そのリュウグウトリデ？の大穴も

調べたいんだよねw

もしかしたら過去に

開けられた穴かも知れない」

里長が前に出る

「さて、ここまでの話で分かったと思うが

こちらと王国の災いが無関係では

無いようなのだ」

「そこで協力して行くべきだ、

という結論になったゲコ」

「是非とも協力をお願いしたい」

フィオレーネは丁寧に騎士？の挨拶をする

「このカムラとしても影達を救って頂いた、

その義は返したいのだ」

全員を見渡す

「問題ねえぜ？」

「夜行の原因が分かるかもなあ」

「カムラのためにもなるんだろ？」

ざわつくギルド

「よし、ならばエルガドとカムラは今より
協力体勢とする」

右手を出す里長

「代理で申し訳ない、次は我々の団長に

正式にご挨拶させて頂きます」

フィオレーネと握手する

.....

次の日

「で？条件がお前と天音がエルガドで

協力する事だつて？」

ヨモギの団子屋で団子を食うセキエン

セキエンは誘われなかったが、

トガシとしては遅れを取りたくないため、

シキエンに流通を勉強させるため送るらしい

「ああ、完治したら来いってさ、

ロンディーネさんは俺達に目を

付けてたらしいや」

「再来月には行かないとね、はい、あーんw」

「ちよつ！天音、左手使えるんだからやめ」

「遠慮しないのw」

「何か今日あつついわねーw」

お盆で扇子ながらヨモギが離れて行く

「セキエン、我らは邪魔じゃないか？」

腕組みする風月

「風月も行くんだろ？」

結局食べさせられた

「うむ、里長から

責任を取って来いと言われてな」

「責任？」

「お前の搜索の時だ、里長からニシノで

見付けろと言われたのだが」

串をならべると

「花梨が一緒だったのが

気に入らないらしいのだ」

慈海としては『貸し』を作りたかった

のだろう、そんな事は風月に

理解出来ないだろうに

「おや、揃ってるね」

ニコニコしているウツシ

「あ、教官…それは？」

指差す天音

「ルナガロンの尻尾だよ、ようやく狩れたw」

特徴を教えてくれるが

「氷っ!!」

「あの時の!!…いてて」

脇腹を抑える影

「知っていたのかい？」

説明する、あの夜のジンオウガ

「なるほど、ルナガロンは確かに氷を

使ったよ、ジンオウガの弱点属性だから

…結構前から異変は起こっていたんだね、

バハリ殿に報告しておこう」

翔んで行くウツシ

「トガシとしても他人事じゃあないな、

モンスターの種類が増えるのか、面倒だなあ」

「うむ、次期里長としては

考える事が多くなるな」

「なあ、あの青いデツカイのは

死んだんだろ？もう夜行は

無くなるんじゃないのか？」

「セキエン、一匹な訳もなからう」

「ああ、それならまだ居るはずだ」

「姉さん達の様子がね」

………

今朝未明

協力体勢となり、王国側の五人も

集まり酒宴が開かれた

それが終わった後、

テラス席に残った影と天音

「困ったな、全然眠くならないぞw」

「そりやそうだよ、寝っぱなしだったもんw」

「…なあ、イブシマキヒコは死んだし、

ナルハタタヒメはこれから…」

「一人になっちゃうのかな……」

あの地下を思い出す、影が死んだら

…私は一人で生きて行けない…

あんな思いをナルヒメもするのか…

あれ？イブヒコ殺したのナルヒメだよな？

「……」

「ん？何か聞こえるぞ？」

「あ、姉さん達」

ニラス席から見える水辺

「対よ」

「対よ」

「子々孫々」

「大地あまねく」

「息吹け風」

「鳴れ雷」

二人が手を取り合い唄う

目が光っている

と、一陣の風

「あ、あら？」

「姉様、私達はなぜここに？」

.....

「影、それってよ……」

「うむ、まだ居るのだな」

「早くケガ治さないとな」

「あと2ヶ月でリハビリも終わらせないとねw」

.....

2ヶ月後

ガルクの島

「準備は良いかな？」

ロンディーネの声

やっぱりビシツとした態度

「はい、後はニシノで風月を

拾えば全員揃います」

レウス装備の影

「花梨も一緒に行きたいです！」

背が少し伸びた黒猫

「これからはこの船をエルガドの定期便

とするからな、いつでも言ってくれ、

風さえ良ければ半日も掛からないぞ？」

花梨に笑うロンディーネ

「あら、それなら私も行けるのかしら」

「姉様を一人には出来ません、お供します」

相変わらずな二人

「影よ、勉強してこい！」

「一回り大きくなつて帰つて来るゲコ」

「私、行けなくなつてご免なさい」

頭を下げる天音

「ハツハツハ！なあに予想はしていたさ、

天音殿は影殿への思いが尋常ではないからな

「あれ？もしかして気付いてました？」

「ああ、女の勘、というやつかなw」

猫族に出航を告げる

「じゃあ行つてくるよ天音」

乗り込もうとすると

「影」

「ん？」

「ぎゅーつてしてw」

腕を広げるが…

いつでも帰れる場所だよ？

帆船なら遠くないし

皆見てるし恥ずかしいぞ？

「むう、我等は引き上げるか」

「それが良いゲコw」

「あらあ、面白いですよ？見学しませんか？w」

「姉様…」

「花梨もして欲しいです！」

「やって!!」

腕を広げたまま睨む

「あ、ああ…」

仕方ない、抱き締める

「ちゃんと無事で帰って来てね？w」

「ああ、もうあんなケガしないようにするよ」

「たまには帰って来てよ？」

「もちろんだ、心配だしな」

「ちゃんと心配してくれるんだ？w」

「当たり前だろ？」

「ふーん…」

顔を近付け

「浮気したら…解ってるよね…」

腹を撫でながら低い声…

目が笑っていない…

「はい（汗）…行つて来ます…」

青い顔の影

「うふふ、母は強し、ねw」

「出航だ!! 乗りたまえ!!」

「行つてらっしゃい!」

「向こうのお菓子、期待してますねー! w」

「御武運を!」

「花梨もいつか行きます!」

「…さて、ワシは続きを描くゲコ」

「あの絵ですな」

「ナルハタタヒメを描き足して、

後世に伝えねばならんゲコ」

「我等の思いが…伝わって欲しいものですなあ」

「ワシらの過ちを繰り返させる訳には
行かんゲコ」